

茨城県教育財團文化財調査報告第257集

大戸下郷遺跡2

主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内
埋藏文化財調査報告書IV

大戸下郷遺跡2

平成18年3月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財團

財団法人
茨城県教育財團

おお ど しも ごう
大戸下郷遺跡 2

主要地方道内原塙崎線道路改良工事地内
埋 藏 文 化 財 調 査 報 告 書 IV

平成 18 年 3 月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団



第159号住居跡出土遺物



第86号住居跡出土遺物

序

茨城県は、保険・医療・福祉サービスや世代間交流などの機能を備えたまちづくりのモデルとして、茨城町において、やさしさのまち「桜の郷」整備事業を推進しています。その一環として、一般国道6号から桜の郷へのアクセス道路建設として主要地方道内原塙崎線道路改良事業が計画されました。

その事業予定地内には、埋蔵文化財包蔵地である大戸下郷遺跡をはじめ多くの遺跡が存在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財の発掘調査事業についての委託を受け、平成16年6月から同年11月まで発掘調査を実施しました。

本書は、大戸下郷遺跡の調査成果を収録したものです。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県水戸木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、茨城町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し感謝申し上げます。

平成18年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 稲葉節生

例　　言

1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財團が平成16年度に発掘調査を実施した、おもてなし茨城県東茨城郡茨城町大字大戸 1284 番地ほかに所在する大戸下郷遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

調　　査 平成16年6月1日～平成16年11月30日

整　　理 平成17年6月1日～平成18年3月31日

3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長 荒井 保雄

主任調査員 編引 英樹

同 杉澤 季展

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第一課長瓦吹堅のもと、以下の者が担当した。

主任調査員 編引 英樹 第1章～第3章2節、第3節2～4・6、第4節、写真図版

主任調査員 松本 直人 第3章3節1・5

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X=+34,760m, Y=+52,800mの交点を基準点（A 1a1）とした。なお、この原点は日本測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1区」、「B 2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa, b, c…j、西から東へ1, 2, 3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して、「A 1a1区」、「B 2b2区」のように呼称した。

2 抄録の北緯及び東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を（ ）を付けて併記した。

3 本文及び実測図、遺物観察表で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 SI-住居跡 SB-掘立柱建物跡 SK-土坑 SE-井戸跡 SD-溝跡

PG-ピット群 P-柱穴

遺物 P-土器 DP-土製品 Q-石器・石製品 M-金属製品 T-瓦 TP-拓本土器

土層 K-搅乱

4 土層解説と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。

6 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は500分の1、遺構実測図は60分の1・80分の1、陥れ穴配置図は150分の1に縮尺して掲載した。

(2) 遺物実測図は原則として3分の1で掲載した。種類や大きさにより異なる場合があり、それらについては個々に縮尺を表示した。

(3) 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

 燃土・火床面・赤彩・施釉

 炉

 罩部材・粘土・黒色処理

 柱痕・煤

● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品 - - - - 硬化面

7 遺物観察表及び遺構一覧表の作成方法については、次の通りである。

(1) 遺物番号は通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

(2) 計測値の単位はcm及びgで示したが、大きさにより異なる場合もありそれらについては個々に単位を表示した。

(3) 文字資料のうち、焼成前に線刻されたものを「焼書」、焼成後に線刻されたものを「刻書」と分けて記述した。

(4) 遺物観察表及び遺構一覧表とも（ ）は現存値、〔 〕は推定値であることを示している。

(5) 備考欄には、土器の現存率及び写真図版番号の他に、必要と思われる事項を記した。

8 「主軸」は、竈（炉）を持つ堅穴住居跡については竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸」及び「長軸」方向は、それぞれの軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E）。

抄 錄

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	9
1 繩文時代の遺構	9
陥し穴	9
2 弥生時代の遺構と遺物	13
(1) 堅穴住居跡	13
(2) 土坑	72
3 古墳時代の遺構と遺物	73
堅穴住居跡	73
4 奈良時代・平安時代の遺構と遺物	163
(1) 堅穴住居跡	164
(2) 掘立柱建物跡	200
5 近世の遺構と遺物	205
(1) 墓坑	205
(2) 井戸跡	207
6 その他の遺構と遺物	210
(1) 方形堅穴遺構	210
(2) 土坑	211
(3) 溝跡	215
(4) ピット群	218
(5) 遺構外出土遺物	220
第4節 まとめ	226
付章	249
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県は、東茨城郡茨城町大戸地区において、一般国道6号から「桜の郷」へのアクセス道路として、主要地方道内原塙崎線の道路改良事業を進めている。

平成8年9月17日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道内原塙崎線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。

これを受けた茨城県教育委員会は、平成12年10月10日に現地踏査、同年11月27～29日に大戸地区的試掘調査を実施し、大戸下郷遺跡の所在を確認した。平成13年1月17日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長に対して、事業地内に大戸下郷遺跡が所在する旨を回答した。

平成13年2月9日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、同年2月26日、茨城県水戸土木事務所長に対して、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成16年2月6日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道内原塙崎線道路改良事業地内に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。同年2月13日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長に対して、大戸下郷遺跡についての範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財團を紹介した。

財団法人茨城県教育財團は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成16年6月1日から11月30日まで大戸下郷遺跡の第2次発掘調査を実施することになった。

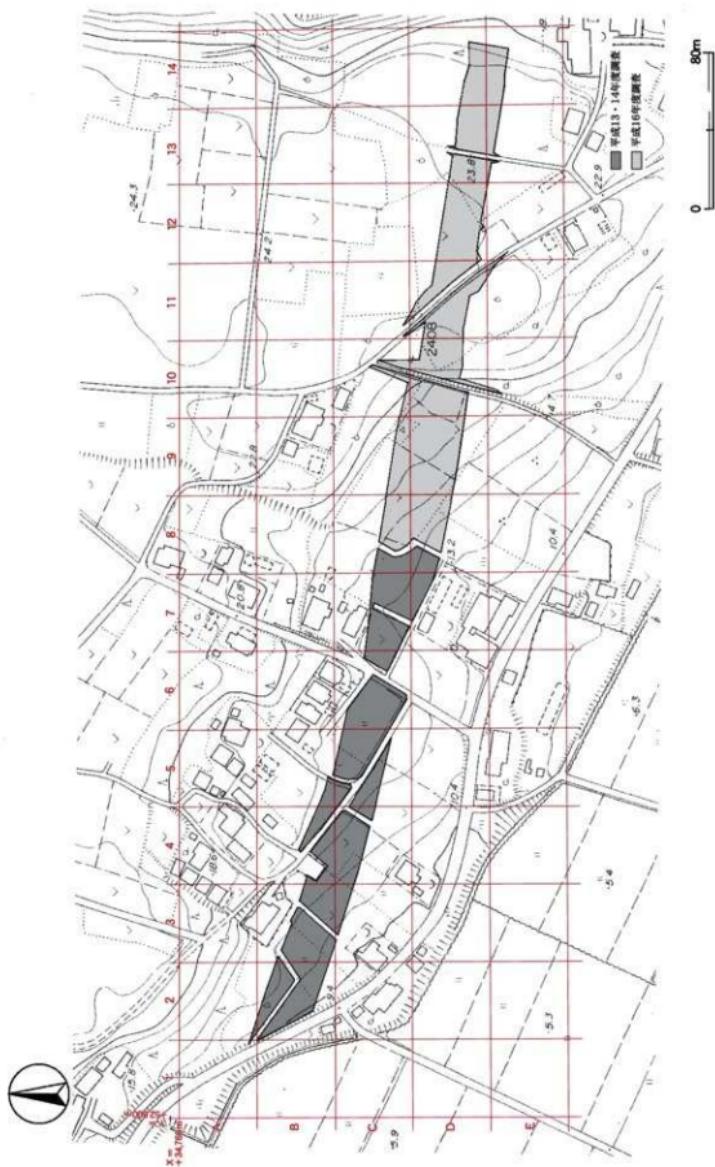
第1次調査は、平成14年1月1日から3月31日、同年5月1日から10月31日まで行われている。

第2節 調査経過

大戸下郷遺跡の調査は、平成16年6月1日から11月30日まで実施した。

以下、その概要を表で記載する。

工程 \ 期間	6月	7月	8月	9月	10月	11月
調査準備 表土構造確認						
遺構調査						
遺物洗浄 記入作業 整理						
補足調査 収撤						



第1図 大戸下郷遺跡調査区設定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

大戸下郷遺跡は、茨城県東茨城郡茨城町大字大戸1284番地ほかに所在している。

茨城町は、町のほぼ中央部を東流する涸沼川の氾濫原と、その東に展開する涸沼の低湿地によって台地が南北に二分されている。台地の北部は、標高25~30mの東茨城北部台地の先端部にあたり、南東に流れる涸沼前川を含む多くの支谷が涸沼を中心南方向に開口している。南部に発達している台地は、大谷川、寛政川が涸沼に入流し、その間に大小の支谷が台地深くまで樹枝状に侵入しており、起伏に富み、一層複雑な地勢を形成している。

地質をみると、台地を形成している最も古い地層は新生代第三紀の地層で、岩質は泥岩で水戸層と呼ばれている。水戸層の上には第四紀の地層が不整合に堆積している。さらに、粘土・砂からなる見和層、礫からなる上市層、灰褐色の常緑粘土層、関東ローム層の順にほぼ水平に堆積している。

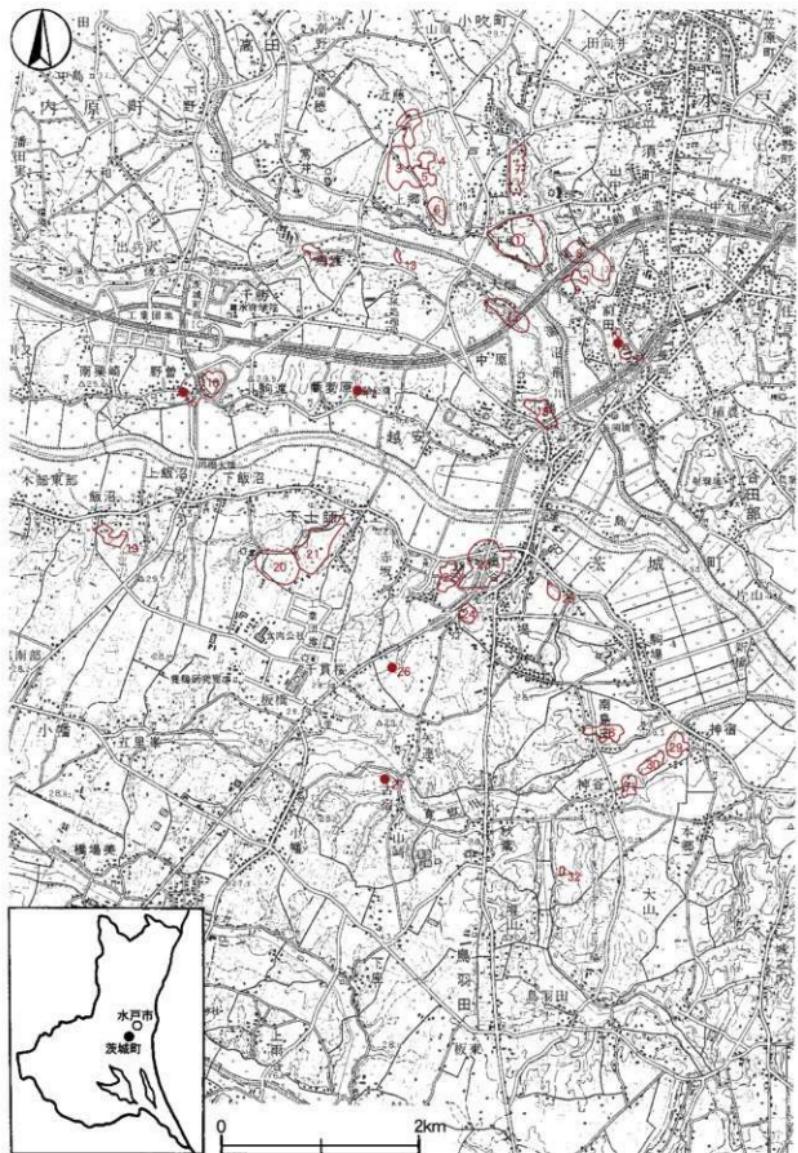
当遺跡は、茨城町北西部の大戸地区にあり、涸沼川の支流、涸沼前川左岸に位置し、標高約10mほどの低位段丘から標高24mほどの台地上に立地している。調査区の西端は涸沼前川とその支流である小橋川の合流地の沖積低地へつながり、東端は赤穂川によって開削された支谷に面している。段丘及び台地上は、主に畠地・宅地として利用され、涸沼前川流域の沖積低地は水田として利用されている。遺跡の現況は、畠地であった。

第2節 歴史的環境

当町周辺は、涸沼を中心として、涸沼川、涸沼前川など水運に恵まれ、古代から人々が生活を営む場としては絶好の舞台であり、縄文時代から中・近世にかけての遺跡が数多く存在している（第2図）。ここでは、大戸下郷遺跡に関連する主な遺跡について時代を追って述べる。

縄文時代早期の遺跡は、涸沼南岸の台地上に中落遺跡がある。前期では、涸沼川及び涸沼前川流域に宮後遺跡²¹（2）、シッペイ沢遺跡（12）、東山遺跡（13）、奥谷遺跡²³（23）などがあり、越安貝塚（17）、権現峯遺跡、南小割遺跡²⁴（16）などでは小規模な貝塚が形成されている。中期の遺跡は、塚越遺跡、赤坂南坪遺跡（22）、天古崎遺跡（28）など、町内全域にみられる。後期になると、小堤貝塚（25）が形成され、晩期では、下土師遺跡（21）、小堤貝塚、神谷遺跡（31）などがある。

弥生時代では、中期後半の土器片が神谷東遺跡（30）、西台遺跡（29）などで土器片が採集されている。また、後期前半の遺物としては、東中根式並行の土器片が大畠遺跡²⁵（14）から採集され、長岡遺跡（11）や奥谷遺跡、小鶴遺跡（18）などから出土した長岡式土器は標準土器となっている。後期後半（十王台式期）の遺跡としては、当財団によって調査された矢倉遺跡²⁶（8）、大畠遺跡、石原遺跡²⁷（5）、網山遺跡²⁸（4）、大塚遺跡²⁹（3）、宮後遺跡³⁰の他、稲荷宮遺跡（6）、台畠遺跡（19）などがあり、当遺跡でも集落跡が確認され、この時期に涸沼川流域を中心とした小文化圏の存在が想定されている。また、当遺跡と矢倉遺跡からは、群馬県を中心に分布が認められる樽式土器が出土している。その他にも、十王台式土器と異なる文様を有する二軒屋式土器や上稻吉式土器が出土しており、他地域との交流が想定される。



第2図 大戸下郷遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院5万分の1「石岡」)

表1 大戸下郷遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近
①	大戸下郷遺跡	○	○	○	○	○	17	越安貝塚	○					
2	宮後遺跡	○	○	○	○	○	18	小鶴遺跡	○	○				
3	大塚遺跡	○	○	○	○	○	19	台畑遺跡	○					
4	綱山遺跡	○	○	○	○	○	20	面山遺跡	○	○	○			
5	石原遺跡	○	○	○	○		21	下土師遺跡	○	○	○			
6	稲荷宮遺跡		○	○	○		22	赤坂南坪遺跡	○	○	○			
7	大戸神宮寺遺跡	○		○	○		23	奥谷遺跡	○	○	○	○		
8	矢倉遺跡	○	○	○	○		24	富士山遺跡	○	○	○			
9	坪戸遺跡	○	○	○		○	25	小堤貝塚	○	○	○		○	
10	上ノ山古墳		○				26	小幡北山埴輪製作遺跡			○			
11	長岡遺跡		○	○			27	小幡城跡					○	
12	シッペイ沢遺跡	○		○			28	天古崎遺跡	○	○	○			
13	東山遺跡	○	○	○	○		29	西台遺跡	○	○	○	○		
14	大畑遺跡	○	○	○	○	○	30	神谷東遺跡	○	○	○	○		
15	宝塚古墳			○			31	神谷遺跡	○	○	○			
16	南小割遺跡	○	○	○	○	○	32	大峯遺跡					○	

古墳時代では、弥生土器と土師器が共伴する住居跡が確認されている石原遺跡、綱山遺跡、大塚遺跡などがあり、当遺跡で確認された同様の共伴関係とあわせ、弥生時代から古墳時代への移行期におけるこの地域の様相を知る手がかりになると思われる。また、奥谷遺跡からは、前期の豪族居館跡や住居跡群が、南小割遺跡からも前期の小波状口縁をもつ土器や住居跡群が確認されている。古墳では、茨城町域で最も古い時期（4世紀末～5世紀初頭）に位置づけられる前方後方墳の宝塚古墳(15)をはじめ、中期から後期にかけての古墳が61基ほど確認されている。また、前方後方墳の上ノ山古墳¹¹⁾(10)からは、南へ4kmほど 小幡北山埴輪製作遺跡¹²⁾(26)で生産された埴輪（6世紀後半頃）が出土している。

奈良・平安時代の当方は、那賀郡八部郷、茨城郡嶋田郷・白川郷・安侯郷、鹿島郡宮前郷に属していた。この時期の遺跡は、町内全域で確認されており、石原遺跡、綱山遺跡、大塚遺跡、宮後遺跡、大戸神宮寺遺跡(7)、大戸下郷遺跡、矢倉遺跡、大畑遺跡、奥谷遺跡など、100遺跡を数える。奥谷遺跡では、百数十点の墨書き土器の他に、円面鏡や刀子が出土している。特に、墨書きの「曹か司」は、官衙の廈などの意味があり、奥谷遺跡が官衙的な公共施設を含む集落であったことを示している。また、面山遺跡(20)からは「土師神主」と書かれた墨書き土器が、大峯遺跡(32)でも墨書き土器や円面鏡が出土している。大塚遺跡からも墨書き土器や円面鏡、灰釉陶器なども出土しており、「コ」の字状に並ぶ掘立柱建物跡群も確認され、官衙的な様相を示すものとして注目される。さらに、綱山遺跡でも掘立柱建物跡が確認され、円面鏡・灰釉陶器、墨書き土器などが出土しており、隣接する宮後遺跡でも円面鏡や墨書き土器が出土していることから三遺跡の関連も注目されている。

中世の遺跡は、主に城館跡であり、小幡城跡(27)、宮ヶ崎城跡、海老沢館跡、奥谷館跡、飯沼城跡などが所

在している。小幡城跡は現存する町内の城館跡の中では最大規模で、初期の城主については小田一族や大塚一族などの説があるが、詳細については不明である。奥谷遺跡からは堀、地下式壇、方形堅穴状構造、井戸跡などが確認され、土師質土器や陶器が出土している。また、常陸大塚氏系の大戸氏一族の所領であった大字前田の万東山地区からは、13世紀前半と考えられる「青白磁蓮牡丹文梅瓶」が出土しており、中世においても涸沼川・涸沼前川沿岸に有力な氏族が存在していたことがうかがえる。

近世になると、町の中心部を南北に通ずる水戸街道沿いの長岡・小幡は宿駅として発展し、徳川期には水戸藩主の休憩・宿泊のために御殿が造られていた。近世中期以降になると、水戸街道は五街道に次ぐ脇往還として栄え、最盛期には23藩の大名が参勤交代のつどこの道を通過した。また、海老沢・網掛は水上交通の要衝として河岸を中心に栄え、水戸藩をはじめ、仙台藩や奥州諸藩と江戸を結ぶ輸送経路の中継基地として重要な役割を果たすようになった。

* 文中の（ ）内の番号は、第2図及び表1の該当遺跡番号と同じである。

註

- 1) 近藤恒重「大戸下郷遺跡 主要地方道内原塙崎線道路改工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第216集 茨城県教育財団 2004年3月
- 2) 川又清明・野田良直・吹野富美夫・浅野和久「宮後遺跡Ⅰ やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第188集 茨城県教育財団 2002年3月
- 3) 鶴淵和彦「一般国道6号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 奥谷遺跡・小幡遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第50集 茨城県教育財団 1989年3月
- 4) 中村敬治・江幡良夫「茨城中央工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 南小割遺跡・櫛現堂遺跡・親塚古墳・後原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第129集 茨城県教育財団 1998年3月
- 5) 長谷川聰「北関東自動車道(友部~水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大作遺跡・大畠遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第136集 茨城県教育財団 1998年3月
- 6) 飯島一生「北関東自動車道(友部~水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 矢倉遺跡・後口原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第135集 茨城県教育財団 1998年3月
- 7) 村上和彦「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 石原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第163集 茨城県教育財団 2000年3月
- 8) 荒藤克一郎・田中幸夫「綱山遺跡 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書VI」『茨城県教育財団文化財調査報告』第243集 茨城県教育財団 2005年3月
- 9) 長谷川聰・田中幸夫・小野克敏「大塚遺跡Ⅰ やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書V」『茨城県教育財団文化財調査報告』第242集 茨城県教育財団 2005年3月
- 10) 川又清明・浅野和久「宮後遺跡Ⅲ やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書IV」『茨城県教育財団文化財調査報告』第241集 茨城県教育財団 2005年3月
- 11) 茨城町史編さん委員会『茨城町上ノ山古墳』 茨城町 1994年3月
- 12) 茨城町教育委員会『小幡北山埴輪製作遺跡』 茨城町 1989年2月

参考文献

- ・ 茨城町史編さん委員会「茨城町史 地誌編」 茨城町 1995年2月

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

大戸下郷遺跡は、茨城県東茨城郡茨城町大字大戸1284番地ほかに所在し、涸沼前川左岸の標高約10mほどの低位段丘から標高約24mほどの台地上に位置している。平成13・14年度には6,418m²が調査され、堅穴住居跡62軒（縄文5、弥生8、古墳39、奈良6、平安4）、墓坑20基（古墳1、近世19）、土坑106基（弥生2、平安1、中世1、近世7、時期不明95）、近世の井戸跡6基、時期不明の溝跡3条、ピット群4か所が検出され、古墳時代後期の集落跡を主体とした縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶・磁器、土師質土器の他、土製品（球状土錐・支脚）、石器・石製品（砥石・磨石・敲石）、古錢などが出土している。また、弥生時代後期後半の十王台式土器と古墳時代前期の土師器が共存した住居内の墓坑からは、ガラス製の小玉31点が出土して注目された。

今回の調査は6,208m²で、平成13・14年度調査部分の東側に位置し、調査前の現況は山林及び畑地である。調査の結果、縄文時代の陥穴8基、弥生時代の堅穴住居跡21軒、土坑1基、古墳時代の堅穴住居跡37軒、奈良時代・平安時代の堅穴住居跡11軒、掘立柱建物跡3棟、近世の墓坑2基、井戸跡4基の他に、方形堅穴遺構2基、土坑25基、溝跡5条、ピット群2か所が確認された。遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、手捏土器、ミニチュア土器、土師質土器の他、土製品（紡錘車・球状土錐・管状土錐・支脚）、鉄製品（錐・鐵鏃・不明鉄製品）、石器・石製品（磨製石斧・石鏃・炉石・敲石・磨石・砥石・紡錘車）、金属製品（錐・不明鉄製品・帶金具・小柄・分銅）などが、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に120箱分が出土している。

第2節 基本層序

平成13・14年度の調査では、調査区中央部、中位段丘上のC 6 c2区にテストピット1を設定し、基本土層の堆積状況の観察を行っている。テストピット1の地表面の標高は15.3mで、地表から約3.5mほど掘り下げて第3図（左）のような堆積状況を確認している。

今回の調査区は、中位段丘から台地上にかけて位置しており、比高差があるため台地上のD12j5区に新たにテストピット2を設定し、基本土層の堆積状況を観察した。テストピット2の地表面の標高は24.0mで、地表から約3.3mほど掘り下げ、第3図（右）のような堆積状況を確認した。

以下、テストピット2の観察から層序を説明する。

第I層は、黒褐色の耕作土で、層厚は58cm前後である。

第II層は、明褐色のソフトローム層で、赤色粒子を少量含んでいる。粘性・締まりは共に強く、層厚は8～24cmである。

第III層は、褐色のソフトローム層で、赤色粒子を微量含んでいる。粘性・締まりは共に強く、層厚は最大で17cmほどである。

第IV層は、明褐色のハードローム層で、赤色粒子を微量含んでいる。粘性・締まりは共に強く、層厚は4～20cmである。

第V層は、褐色のハードローム層で、黒色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりはやや強い。層厚は

35~46cmで、第1黒色帯と考えられる。

第VI層は、褐色のハードローム層で、赤色粒子・黒色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりはやや強い。層厚は18~34cmである。

第VII層は、黄褐色のローム層で、鹿沼バミスを中量含むことから鹿沼層への漸移層と考えられる。粘性・締まりは共に強く、層厚は最大で11cmほどである。

第VIII層は、橙色の鹿沼層で、粘性は弱く、締まりは強い。層厚は18~33cmである。

第IX層は、褐色のハードローム層で、赤色スコリア・鹿沼バミスを微量含んでいる。粘性・締まりは共に強く、層厚は11~22cmである。

第X層は、褐色のハードローム層で、黒色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりはやや強い。層厚は25~33cmである。

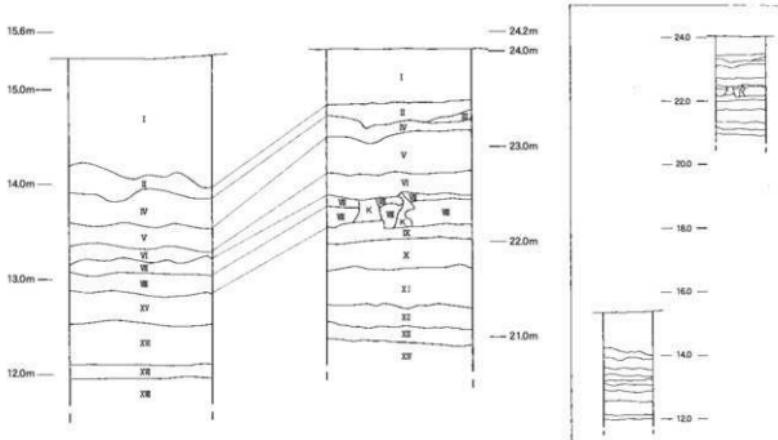
第XI層は、褐色のハードローム層で、黒色粒子を微量含んでいる。粘性・締まりは共に強く、層厚は35~44cmで、第10層と共に第2黒色帯と考えられる。

第XII層は、褐色のハードローム層で、赤色粒子・黒色粒子を微量含んでいる。粘性・締まりは共に強く、層厚は18~26cmである。

第XIII層は、淡い褐色のハードローム層で、粘土粒子を少量、赤色粒子・黒色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりはやや強い。層厚は15~21cmで、常総粘土層の漸移層と考えられる。

第XIV層は、にぶい黄褐色の粘土層で、鉄分を微量含んでおり、粘性・締まりは共に強い。層厚は未掘のため確認できなかつたが、第13層よりも粘土の含有量が多いことから常総粘土層と考えられる。

中位段丘上では第2層から、台地上では第2層及び第3層で構造が確認された。



第3図 基本土層図・高低差模式図

テストピット土層解説

XIV 灰褐色の粘土層

XVII 灰黃褐色の粘土とシルトの層

IV にぶい黄褐色のシルトと練の層

VII 明黄褐色の練層

第3節 遺構と遺物

1 繩文時代の遺構

調査区東部の台地平坦部に、8基の陥し穴が集中して確認された。第8号陥し穴が南東側にやや離れて位置しているが、その他の7基は10mほどの範囲内に分布している(第4図)。第2・3・5・6号陥し穴は、標高23.1mラインにはほぼ等間隔で直行して並んでいる。以下、遺構について記載する。

陥し穴



第4図 陥し穴配置図

第1号陥し穴 (第5図)

位置 調査区東部北寄りのD12f8区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.38m、短径1.16mの楕円形を呈している。深さは1.97mで、長径方向はN-4°-Wである。壁はいずれも直列ぎみに立ち上がり、東西の壁は上部で外傾して立ち上がっている。横断面はほぼU字状で、底面は平坦である。

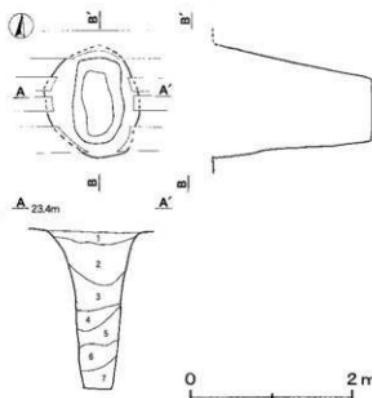
覆土 7層に分層される。ロームブロックを含んでい

るが、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 2 梅雨褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 黑褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 梅雨褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 6 梅雨褐色 ロームブロック中量、鹿沼バミス微量
- 7 黒褐色 ロームブロック少量、鹿沼バミス微量

所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。

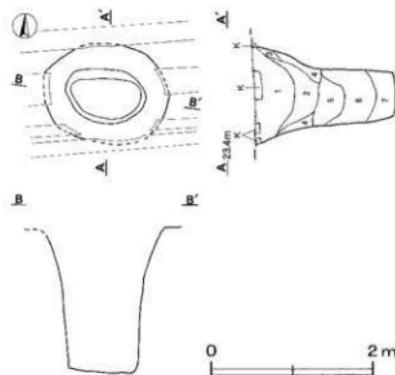


第5図 第1号陥し穴実測図

第2号陥し穴（第6図）

位置 調査区東部北寄りのD12f9区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.57m、短径1.23mの梢円形である。深さは1.78mで、長径方向はN-81°-Wである。壁は



第6図 第2号陥し穴実測図

いずれも直立ぎみに立ち上がっており、上部はやや外傾している。横断面はほぼU字状で、底面は平坦である。

覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

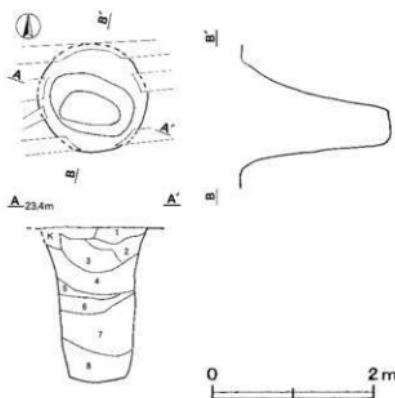
1	黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
4	極暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
5	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
6	黒褐色	ロームブロック少量、鹿沼バミス微量
7	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子・鹿沼バミス微量

所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第3号陥し穴（第7図）

位置 調査区東部北寄りのD12g9区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置し、ほぼ同じ標高ラインに第2・5・6号陥し穴が並び、第2号陥し穴の南2mほどに構築されている。

規模と形状 長径1.36m、短径1.33mの円形状を呈しているが、下部は梢円形を呈している。深さは1.89mで、



第7図 第3号陥し穴実測図

長径方向はN-75°-Wである。壁はいずれも直立ぎみに立ち上がり、上部は外傾している。横断面はほぼU字状で、底面はほぼ平坦である。

覆土 8層に分層される。中層まではレンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられ、上層はブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック少量
3	黒褐色	ロームブロック少量
4	黒褐色	ロームブロック微量
5	褐色	ロームブロック中量
6	暗褐色	ローム粒子微量
7	褐色	ロームブロック中量、鹿沼バミス微量
8	褐色	ロームブロック少量、鹿沼バミス微量

所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第4号陥し穴（第8図）

位置 調査区東部北寄りのD12g9区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置し、第3号陥し穴の東1mほどに

構築されている。

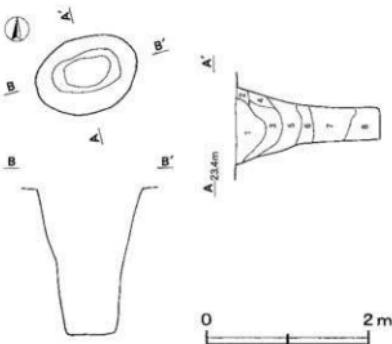
規模と形状 長径1.28m、短径0.94mの楕円形である。深さは1.79mで、長径方向はN-76°-Eである。壁は直立ぎみに立ち上がり、上部は外傾する。横断面はほぼU字状で、底面は平坦である。

覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|---|----|----|------------------------|
| 1 | 黒 | 色 | ローム粒子微量 |
| 2 | 褐色 | 色 | ローム粒子微量 |
| 3 | 黒 | 褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 | 褐色 | 色 | ロームブロック少量 |
| 5 | 黒 | 褐色 | ロームブロック少量 |
| 6 | 黒 | 褐色 | ロームブロック微量 |
| 7 | 黒 | 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 8 | 黒 | 褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック・鹿沼バミス微量 |

所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第8図 第4号陥し穴実測図

第5号陥し穴（第9図）

位置 調査区東部北寄りのD12h8区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置し、第3号陥し穴の南3mほどに構築されている。

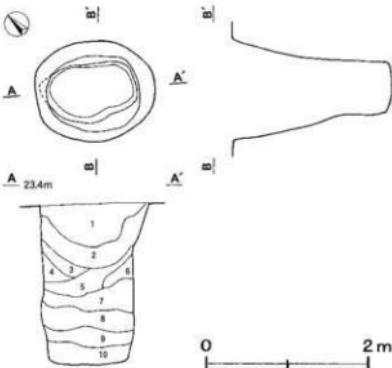
規模と形状 長径1.46m、短径1.24mの楕円形である。深さは1.98mで、長径方向はN-62°-Wである。壁は一部内傾しているが、他は直立ぎみに立ち上がっている。横断面はほぼU字状で、底面は平坦である。

覆土 10層に分層される。下層と上層はレンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられ、中層は不規則な堆積状況を呈することから人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|----|----|----------------|-------------------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子微量、炭化粒子微量 | |
| 2 | 褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | |
| 3 | 黒 | 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 4 | 黒 | 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 5 | 黒 | 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 6 | 褐色 | ロームブロック少量 | |
| 7 | 黒 | 褐色 | ロームブロック中量、鹿沼バミス微量 |
| 8 | 黒 | 褐色 | ロームブロック・鹿沼バミス微量 |
| 9 | 黒 | 褐色 | ロームブロック中量、鹿沼バミス少量 |
| 10 | 黒 | 褐色 | ローム粒子少量、鹿沼バミス微量 |

所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。



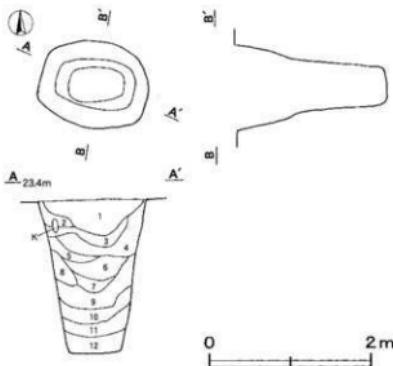
第9図 第5号陥し穴実測図

第6号陥し穴（第10図）

位置 調査区東部北寄りのD12i8区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置し、第5号陥し穴の南3mほどに構築されている。

規模と形状 長径1.33m、短径1.08mの楕円形である。深さは1.90mで、長径方向はN-89°-Wである。壁は

直立ぎみに外傾して立ち上がり、上部でやや外傾する。横断面はほぼU字状で、底面は平坦である。

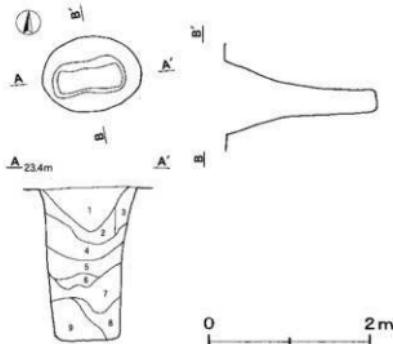


第10図 第6号陥し穴実測図

第7号陥し穴（第11図）

位置 調査区東部北寄りのD12i0区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置し、第5号陥し穴の南東6mほどに構築されている。

規模と形状 長径1.23m、短径0.94mの楕円形である。深さは1.88mで、長径方向はN-83°-Eである。壁は



第11図 第7号陥し穴実測図

第8号陥し穴（第12図）

位置 調査区東部南寄りのD13j1区で、標高23.0mほどの台地平坦部に位置し、陥し穴群の南東に構築されている。

規模と形状 長径1.25m、短径1.06mの楕円形である。深さは1.76mで、長径方向はN-74°-Eである。壁は直立ぎみに立ち上がり、横断面はほぼU字状で、底面は平坦である。

覆土 12層に分層される。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子微量
- 2 黒 暗色 ロームブロック中量
- 3 黒 色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 暗 暗色 ローム粒子少量
- 6 暗暗褐色 ロームブロック少量
- 7 暗 色 ロームブロック多量
- 8 暗 色 ロームブロック中量
- 9 暗 暗色 ロームブロック少量
- 10 暗 色 ロームブロック多量、鹿沼バミス微量
- 11 黒 暗色 ロームブロック・鹿沼バミス微量
- 12 暗 暗色 ローム粒子中量

所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。

覆土 9層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒 暗色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗 暗色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗 暗色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 5 黒 暗色 ローム粒子微量
- 6 暗 暗色 ロームブロック少量
- 7 暗 色 鹿沼バミス少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 8 暗 暗色 ローム粒子・鹿沼バミス微量
- 9 暗 色 ローム粒子中量

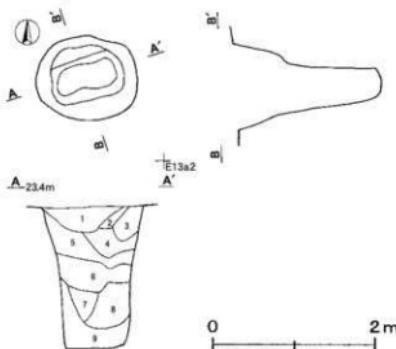
所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。

覆土 9層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 青褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 青褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 4 黑褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 5 喜褐色 ロームブロック微量
- 6 楊褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 7 喜褐色 ローム粒子少量
- 8 黑褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 9 楊褐色 ローム粒子少量

所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第12図 第8号陥し穴実測図

表2 縄文時代陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係(旧→新)
1	D128	N-4°-W	椭円形	[1.36] × 1.16	197	直立外傾	平坦	自然	—	
2	D129	N-8°-W	椭円形	[1.57] × 1.23	178	直立外傾	平坦	自然	—	
3	D129	N-75°-W	円形	[1.36] × 1.33	189	直立外傾	平坦	自然人為	—	
4	D129	N-26°-E	椭円形	1.28 × 0.94	179	直立外傾	平坦	自然	—	
5	D128	N-62°-W	椭円形	1.46 × 1.24	198	直立	平坦	自然人為	—	
6	D128	N-89°-W	椭円形	1.33 × 1.08	190	外傾	平坦	自然	—	
7	D120	N-83°-E	椭円形	1.23 × 0.94	188	直立	平坦	自然	—	
8	D131	N-74°-E	椭円形	1.25 × 1.06	176	直立	平坦	人為	—	

2 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査では、中位段丘から台地上にかけて弥生時代後期後半の住居跡21軒と土坑1基が確認された。以下、遺構と遺物について記載する。

(1) 壊穴住居跡

第88号住居跡（第13～15図）

位置 調査区西部のD 9 a5区で、標高15.1mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第167号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.53m、短軸4.12mの隅丸長方形で、主軸方向はN-29°-Wである。壁高は14～48cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北西寄りに位置している。長径82cm、短径57cmの楕円形で、床面を9cmほど掘りくぼめた地床炉であるが、熱による赤変や硬化は確認できなかった。炉石の代わりとして使われていた粘土塊が、炉の長軸に直交して炉床中央部に据えられていた。

炉土層解説

- 1 黒褐色 煙土ブロック少量、炭化粒子微量
2 墓褐色 墓土粒子・炭化粒子微量

3 黒褐色 炭化粒子微量

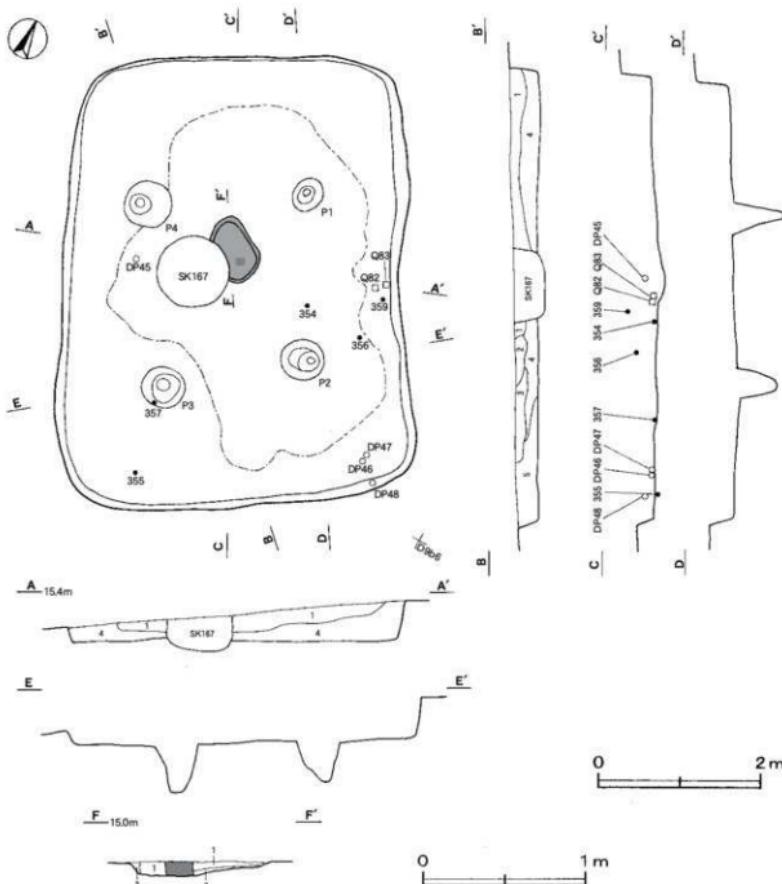
ピット 4か所。深さは48~63cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 5層に分層される。第2・3層はブロック状の堆積状況を示す人为堆積であるが、その他は自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
2 極暗褐色 ローム粒子少量、煙土ブロック微量
3 黒褐色 煙土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

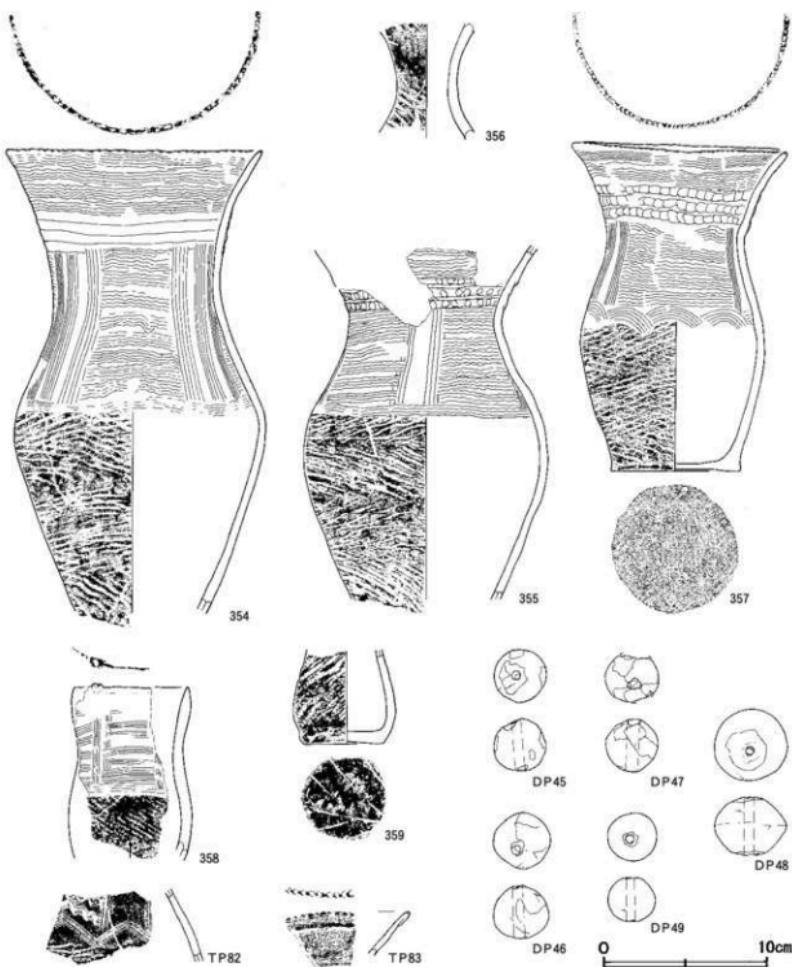
4 黒褐色 ローム粒子微量
5 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量



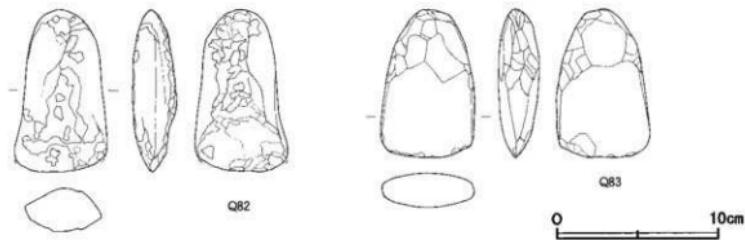
第13図 第88号住居跡実測図

遺物出土状況 弥生土器片298点（広口壺）、土師器片301点（壺2、高壺7、器台2、甌類290）、土製品5点（紡錘車1・球状土錘4）、石器2点（磨製石斧）、粘土塊の他に、混入した繩文土器片11点も出土している。354は中央部やや東寄り、355は南寄りの床面からそれぞれ出土している。土師器片は、第1層から散在した状態で出土しており、住居の廃絶後に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第14図 第88号住居跡出土遺物実測図(1)



第15図 第88号住居跡出土遺物実測図(2)

第88号住居跡出土遺物観察表(第14・15図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎 土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備 考
351	弥生土器	広口壺	15.5	(28.1)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にらむ黄緑	普通	口唇部に滑石押付、口沿部に繩文状工具(5本)による波状文様(内に波状文様の凹凸部4条)、繩文状工具による3条を1単位とする縦区画(4分割) 内に波状文様 縄文に附加条一組(頭部1本)の羽状構成	床面	70% 墓庭外側埋付着 PL17
355	弥生土器	広口壺	—	(21.6)	—	長石・石英・雲母	暗赤褐色	良好	口唇部に滑石押付(4本)による波状文様、縄文上位に押付のみの縦区画3条、繩文状工具による横区画(4分割) 内に波状文様 波状文様(頭部1本)の羽状構成	床面	40%
356	弥生土器	片口壺	—	(7.0)	—	長石・石英・雲母	にらむ黄緑	普通	縄文に附加条一種(頭加条)の織文	覆土中層	10%
357	弥生土器	広口壺	12.7	20.1	7.9	長石・石英・雲母	にらむ黄緑	普通	口唇部に滑石押付(5本)による波状文様、縄文上位に押付のみの縦区画3条、繩文状工具による横区画(3分割) 内に波状文様 縄文下位に下向きの波状文、縄文に附加条一組(頭部1本)の羽状構成	床面	100% PL22
358	弥生土器	小削壺	[6.8]	(10.6)	—	長石・石英・雲母	にらむ黄緑	普通	口唇部に滑石押付(4本)による波状文様、縄文上位に波状文(頭部1本)の羽状構成	覆土中	20%
359	弥生土器	小削壺	—	(5.7)	4.9	長石・石英・雲母・赤色粒子	淡黃褐色	普通	縄文に附加条二種(頭加条)の織文、波状文	覆土上層	20% 墓庭内表面化粧仕事
IP92	弥生土器	広口壺	—	(4.3)	—	長石・石英・雲母	にらむ赤褐色	良好	繩文状工具(5本)による縦区画内に波状文や横、縄文下位に山形文、附加条一種(頭加条)の織文	覆土中	5% PL39
IP93	弥生土器	高环彌	—	(2.2)	—	長石・石英・雲母	にらむ赤褐色	普通	口唇部に部4、口縁部に繩文状工具(5本)による波状文	覆土中	5%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材 質	特 樹	出土位置	備 考
IP45	球狀土鍬	3.2	0.6	(3.1)	(27.9)	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方孔心の穿孔	覆土中層	
IP46	球狀土鍬	3.5	0.6	3.2	32.7	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	ナゲ 一方孔心の穿孔	覆土下層	
IP47	球狀土鍬	3.3	0.8	3.2	(23.2)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	ナゲ 一方孔心の穿孔	覆土下層	
IP48	鉈鏃頭	4.5	0.6	3.5	61.1	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方孔心の穿孔	覆土中層	PL40
IP49	球狀土鍬	3.0	0.6	2.7	18.7	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方孔心の穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 樹	出土位置	備 考
Q92	磨製石斧	(10.1)	5.7	2.6	(178.5)	ホルンフェルス	定角式両刃 器面錐錐無い	覆土下層	PL42
Q93	磨製石斧	9.2	5.8	2.6	(193.4)	ホルンフェルス	定角式両刃 丁寧な研磨	覆土下層	PL42

第90号住居跡 (第16~19図)

位置 調査区西部のD 9 d9区で、標高15.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第79・80号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺構全体の確認はできなかったが、主軸方向をN - 2° - Wとする一辺が5.00mほどの隅丸方形と推定される。壁高は6~66cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

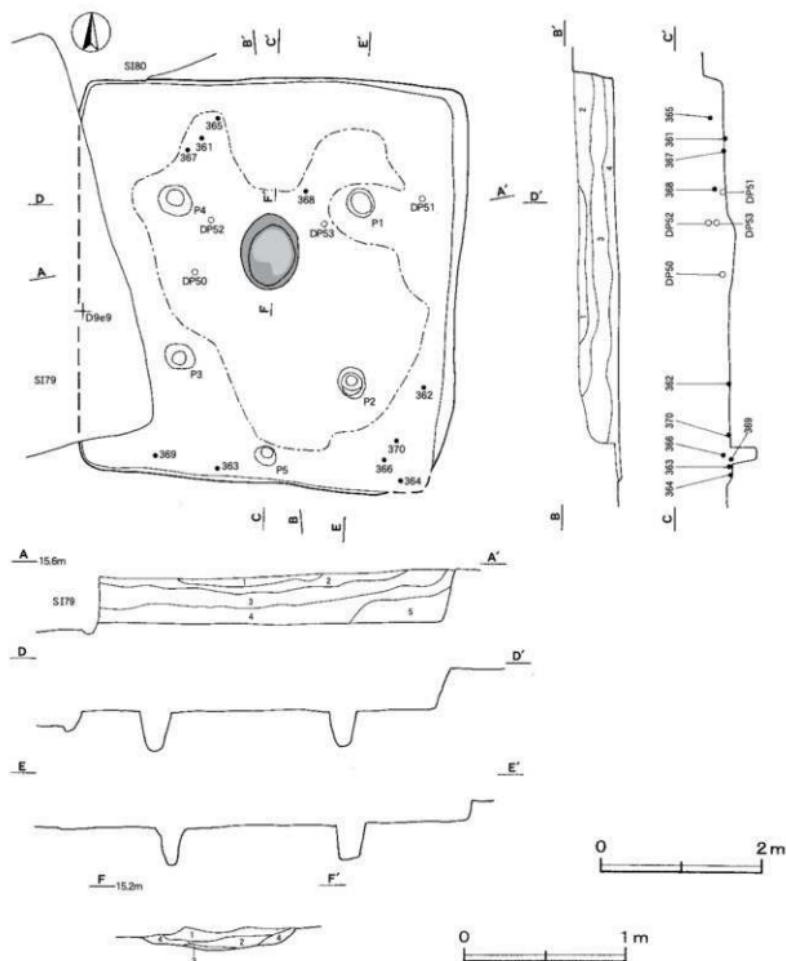
炉 中央部に位置している。長径93cm、短径71cmの楕円形で、床面を13cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 増 極 色 灰化物・焼土粒子少量、ローム粒子微量
2 雜赤褐色 烧土粒子中量、灰化粒子微量

3 増赤褐色 烧土粒子中量、灰化粒子少量
4 増 極 色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ42～50cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ31cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第16図 第90号住居跡測定図

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

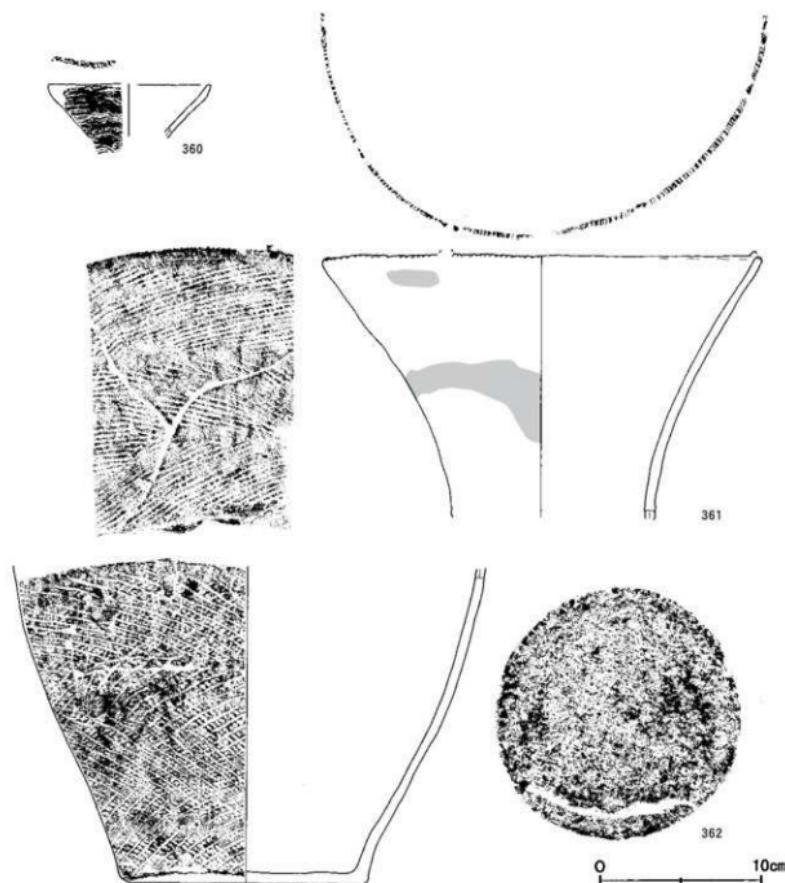
土層解説

- 1 黒 色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
2 黒 極 色 ローム粒子・炭化粒子微量
3 黒 極 色 ローム粒子・炭化粒子微量

- 4 極暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
5 黒 色 ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片496点(広口壺)、土製品5点(紡錘車1、球状土錐2、不明土製品2)の他に、土師器片32点も出土している。361・367は北西寄り、369は南西寄りの壁際、362・370は南東寄りの床面からそれぞれ出土している。土師器片は、第2層より上から出土しており、住居廃絶後の塩地に流れ込んだものである。

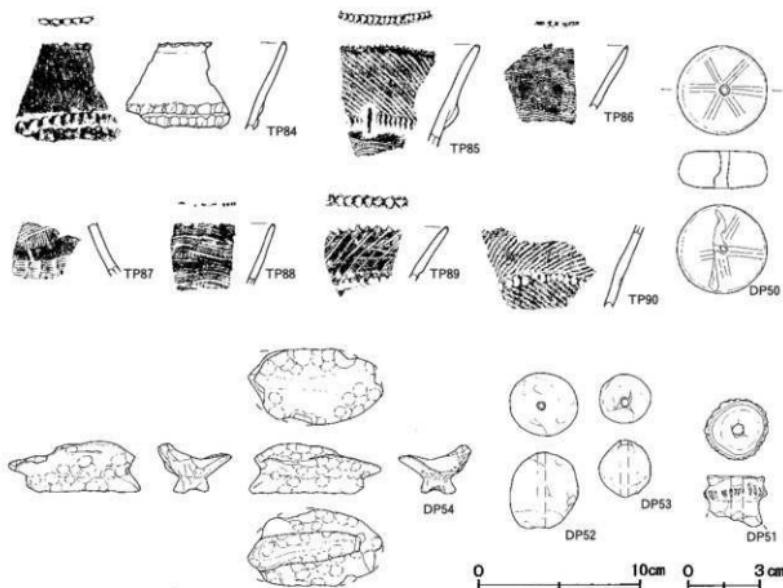
所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第17図 第90号住居跡出土遺物実測図(1)



第18図 第90号住居跡出土遺物実測図(2)



第19図 第90号住居跡出土遺物実測図(3)

第90号住居跡出土遺物観察表(第17~19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
360	弥生土器	高杯	[10.0]	(3.3)	—	長石・石英・雲母	こぶし黄	普通	口唇部に凹み 口縁部に彫痕状工具(4本)による波状文	覆土中	5%
361	弥生土器	広口盃	26.6	(16.6)	—	長石・石英・雲母	にぼし緑	普通	口唇部に凹み 小切妻5枚以上 壁口部細小 縁部に附加条二種(附加1条)	床面	20% 一部漆井 PL.21
362	弥生土器	広口盃	—	(19.5)	15.2	長石・石英・雲母・赤鉄鉢子	灰白	普通	縁部に附加条二種(附加1条)の波状模様 距部砂付瓶	床面	20% PL.21
363	弥生土器	広口盃	—	(5.2)	12.4	長石・石英・雲母	にぼし緑	普通	縁部に附加条一種(附加2条)の波文 近部砂付瓶	覆土下層	5%
364	弥生土器	広口盃	—	(11.6)	6.8	長石・石英・雲母・赤鉄鉢子	橙	普通	縁部に附加条二種(附加1条)の波状模様 距部砂付瓶	床面	20% 外曲線付帯 内面良化物付着
365	弥生土器	広口盃	—	(7.7)	8.3	長石・石英・雲母・赤鉄鉢子	浅黃	普通	縁部に附加条二種(附加1条)の波状模様 底部有目孔	覆土中層	20% 良好
366	弥生土器	広口盃	—	(3.0)	8.0	長石・石英・雲母・赤鉄鉢子	浅黃	普通	縁部に附加条二種(附加1条)の波文 近部砂付瓶 精緻	覆土下層	5%
367	弥生土器	広口盃	[13.1]	18.5	6.3	長石・石英・雲母	にぼし緑	良好	口唇部に凹み 口縁部に彫痕状工具(6本)による波状文 壁部上部に軽く、縁部にあらわな凹凸感 壁部吹き出しによる3条を一単位とする組合せ(4組)の波状文(附加1条)の波状模様 縁部に附加条二種(附加1条)の波状模様	床面	90% 縁部に小窓 頂部外側に縫合部 内面良化物付着 PL.22
368	弥生土器	広口盃	13.6	22.7	6.8	長石・石英・雲母	明黄	普通	口唇部に凹み 口縁部に彫痕状工具(5本)による波状文 壁部上部に軽く、縁部にあらわな凹凸感 壁部吹き出しによる3条を一単位とする組合せ(4組)の波状文(附加1条)の波状模様 底部有目孔	覆土下層	50% 縁部外側縫合部 内面良化物付着
369	弥生土器	片口盃	15.4	28.4	7.9	長石・石英・雲母	にぼし黄	良好	片口部を瘤状(球状)に機械工具による押付 口縁部周辺部上部に凹凸感 壁部に彫痕状工具(5本)による波状文(4分野) 内に波状文先端部 斜面部下部に下向かた連弧状の波状文(附加1条)の波状模様	床面	80% PL.17
370	弥生土器	広口盃	—	(17.1)	[6.2]	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口唇部に彫痕状工具(4本)による波状文(4分野) 内に波状文先端部 斜面部下部に下向かた連弧状の波状文(附加1条)の波状模様	床面	90% 縁部外側縫合部 内面良化物付着 PL.23
TP84	弥生土器	広口盃	—	(5.3)	—	長石・石英・雲母	にぼし黄	普通	口唇部に彫痕状工具(4本)による波状文(4分野) 内に波状文先端部 斜面部下部に下向かた連弧状の波状文(附加1条)の波状模様	覆土中	5%
TP85	弥生土器	広口盃	—	(6.3)	—	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口唇部に彫痕状工具(4本)による波状文(4分野) 内に波状文先端部 斜面部下部に下向かた連弧状の波状文(附加1条)の波状模様	覆土中	5% PL.38

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	文様及び特徴		出土位置	備考
									口部に見み 小突起	口部に櫛目状工具(4本)による波状文		
TB96	弥生土器	広口壺	-	(4.0)	-	長石・石英・雲母	白	良好	口部に見み 小突起	口部に櫛目状工具(4本)による波状文	覆土中	5%
TB97	弥生土器	広口壺	-	(3.3)	-	長石・石英・雲母	白	普通	口部に櫛目状工具(3本)による下向きの波状文	口部に櫛目状工具(3本)による波状文	覆土中	5% PL39
TB98	弥生土器	広口壺	-	(3.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	白	普通	口部に見み 小突起	口部に櫛目状工具(5本)による波状文	覆土中	5%
TB99	弥生土器	広口壺	-	(3.3)	-	長石・石英・雲母	白褐	普通	口部に見み 小突起	口部に櫛目状工具(5本)による波状文	覆土中	5%
TB100	弥生土器	広口壺	-	(5.1)	-	長石・石英・雲母	白	普通	口部に見み 小突起	口部に櫛目状工具(5本)による波状文	覆土中	5%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
							表面に櫛目状工具(3本)による波状の直状文		
BP50	輪脚車	5.5	0.6	2.3	(83.1)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	表面に櫛目状工具(3本)による波状の直状文 表面ナメ	覆土下層	PL40
BP51	不明土製品	2.7	0.5	(2.1)	(10.2)	土(長石・石英・雲母)	表面に櫛目状工具による波状文	床面	輪脚車 PL40
BP52	環狀土鍤	4.2	0.5	4.7	75.7	土(長石・石英・雲母・針状鉱物)	ナデー 一方向からのみ	覆土中層	
BP53	環狀土鍤	3.2	0.5	3.5	28.3	土(長石・石英・雲母)	ナデー 一方向からのみ	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	高さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
BP54	不明土製品	8.3	4.7	3.0	(41.7)	土(長石・石英・雲母)	全面ナデ 指掘痕	覆土中	整地具 PL41

第92号住居跡（第20～22図）

位置 調査区西部のD-9 c7区で、標高15.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第80・93・96号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺構全体の確認はできなかつたが、主軸方向をN-43°-Wとする長径8.30m、短径7.90mほど円形と推定される。壁高は20~48cmで、外傾して立ち上がつていて。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北寄りに位置している。長径79cm、短径56cmほどの楕円形で、床面を6cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|---------------------------|---------------|
| 1 線理非発色 ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 ローム粒子微量 |
| 2 増赤褐色 燃土粒子中量、炭化粒子微量 | |

ピット 6か所。P 1～P 4は深さ70~81cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ31cm、P 6は深さ42cmで、配置からいずれも出入り口施設に伴うピットと考えられるが、土層断面からP 6が新しいことが確認された。

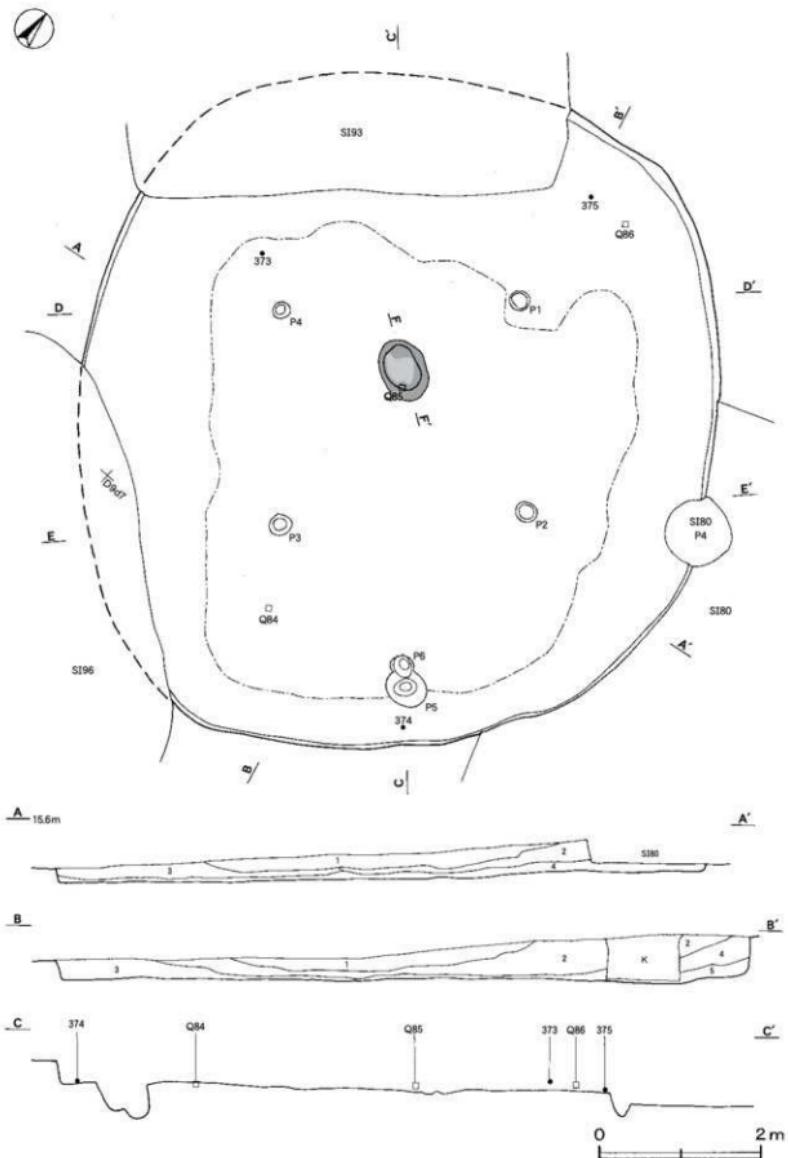
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

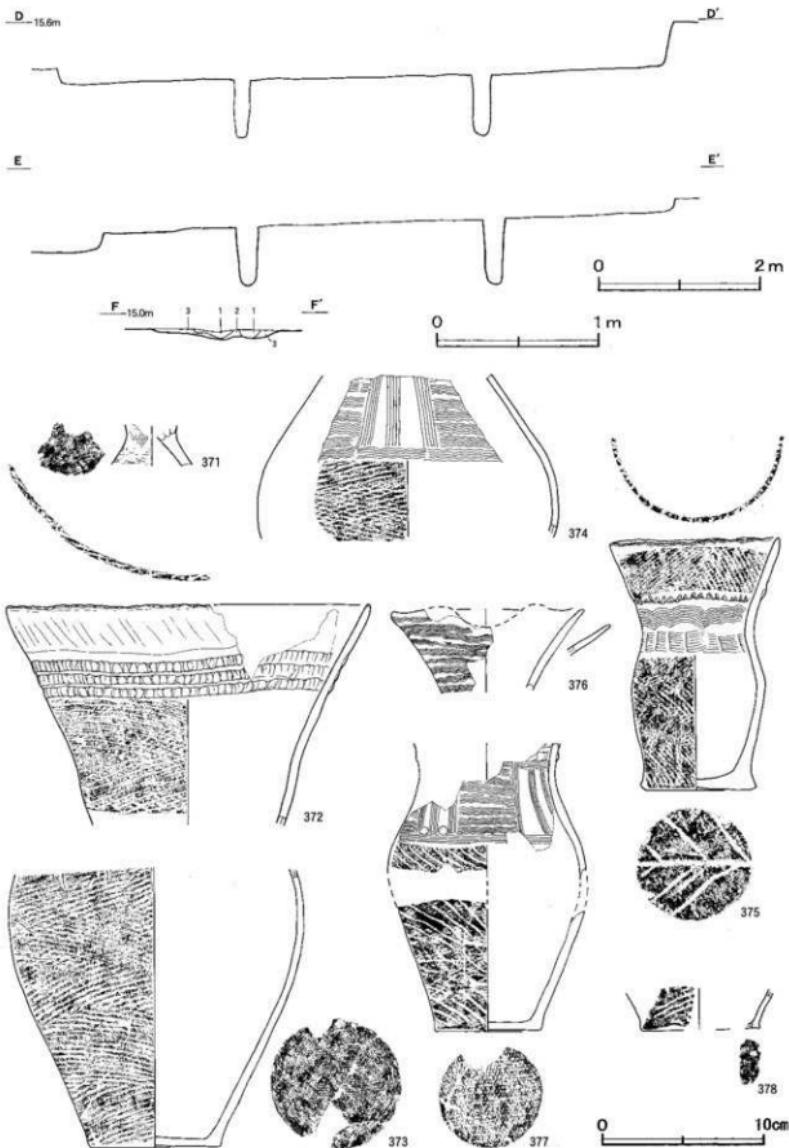
- | | |
|-------------------------|---------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 黑褐色 ローム粒子・炭化物微量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 弥生土器片1143点（高环1、広口壺1141、片口壺1）、土製品5点（球状土鍤4、管状土鍤1）、石器3点（敲石、砥石、炉石）。礫5点の他に、混入した繩文土器片12点、土師器片60点も出土している。375は、北側コーナー付近の床面から逆位で出土している。377は、東寄りの覆土中から出土しており、第96号住居跡の北東寄りの覆土上層から出土した破片と接合関係にある。遺物はほとんどが細片であり、復元できるものが少ない。また、弥生土器片や土師器片は、ほとんどが第2層より上で出土しており住居廃絶後の墓地に投棄されたものと考えられる。

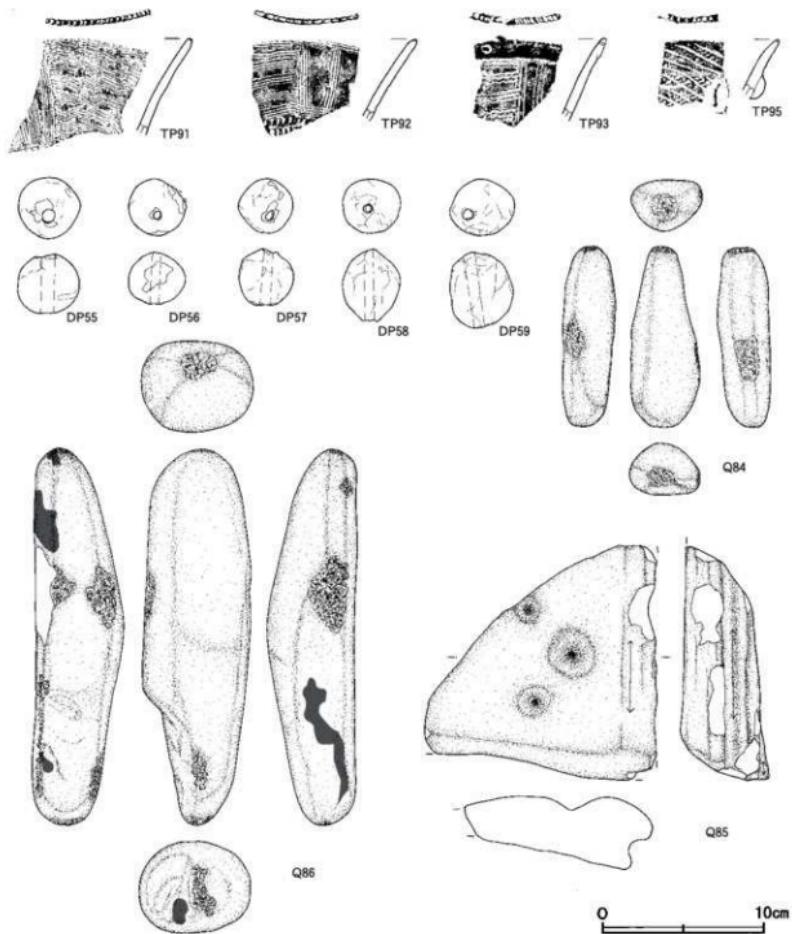
所見 当遺跡で調査された弥生時代の住居跡の中では最大規模であり、形状も他の住居跡とは異なり円形状を呈している。時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第20図 第92号住居跡実測図



第21図 第92号住居跡・出土遺物実測図



第22図 第92号住居跡出土遺物実測図

第92号住居跡出土遺物観察表(第21・22図)

番号	種別	器種	口径	器高	直徑	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
371	赤生土器	高环	—	(2.5)	—	長石・石英・雲母 に灰・褐	普通	輪郭から張間に縦横状工具(6本)による刷文	覆土中	5%	
372	赤生土器	広口壺	22.4	(13.5)	—	長石・石英・雲母 に灰・黄褐	普通	口部周囲に輪郭状工具(6本)による刷文 腹部上部に押捺のある 横筋2条、底部に2列加条(4種)(附加1条)の羽目焼成	覆土中	15%	
373	赤生土器	広口壺	—	(17.1)	8.1	長石・石英・雲母	褐	普通 文様帶の間に縦横状工具(6本)用いた刷文 腹部に 凹筋2条(附加1条)の羽目焼成、底部加条	覆土下層	30%	
374	赤生土器	広口壺	—	(9.9)	—	長石・石英・雲母	浅黃褐	普通 腹部に縦横状工具(6本)による刷文 腹部に2列加条(4種)(附加1条)の羽目焼成	覆土下層 輪郭外面部焼付	5%	

番号	器種	口径	厚さ	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴		出土位置	備考
								横	縦		
355	弥生土器	広口壺	13.0	15.5	7.1	長石・石英・雲母	均白・褐	普通	口部部に網目状押印、窓口部に縦目状印、口沿部下部に圓周形骨突によると謂ひ、頭部に彫痕式工具（8本）による文様、頭部下部に彫痕式工具による縦状文様、頭部に附加条一種（頭加2条）の羽状焼成、底部木炭痕	床面	100% PL23
356	弥生土器	広口壺	[13.5]	5.0	—	長石・石英・雲母	灰白	普通	—	—	覆土中 5%
377	弥生土器	広口壺	—	[18.4]	6.6	長石・石英・雲母	黑褐色	普通	頭部上部に斜めに刻印、中腹から下部に横目2条以上、彫痕式工具（5本）による文様、頭部に斜めに刻印する文様の上に波状文文様、底部に斜めに刻印する文様、底部に附加条二種（頭加1条）の羽状焼成	覆土中 30%	
378	弥生土器	広口壺	—	[2.5]	[7.4]	長石・石英・雲母	均白・褐	普通	頭部上部に斜めに刻印、中腹から下部に横目2条以上、彫痕式工具（5本）による文様、頭部に斜めに刻印する文様の上に波状文文様、底部に斜めに刻印する文様、底部に附加条二種（頭加2条）の羽状焼成	覆土中 5%	
391	弥生土器	広口壺	—	[5.5]	—	長石・石英・雲母	褐	均白	頭部に斜めに刻印、窓口部に彫痕式工具（4本）による網目状印、底部に斜めに刻印する文様	覆土中 5%	
TP92	弥生土器	広口壺	—	(5.6)	—	長石・石英・雲母	均白・褐	普通	頭部に斜めに刻印、窓口部に彫痕式工具（4本）による網目状印、底部に斜めに刻印する文様	覆土中 5% PL38	
TP93	弥生土器	広口壺	—	(5.0)	—	長石・石英・雲母	均白・褐	普通	頭部に斜めに刻印、窓口部に彫痕式工具（3本）による網目状印、底部に斜めに刻印する文様	覆土中 5% PL38	
TP96	弥生土器	広口壺	—	(3.6)	—	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	頭部に斜めに刻印、窓口部に彫痕式工具（3本）による網目状印、底部に斜めに刻印する文様	覆土中 5%	

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
							横	縦		
BP55	縦状土錐	3.9	0.8	3.6	(45.3)	土(長石・石英・雲母)	ナゲー	一方向に丸みの萼孔	覆土中	
BP96	縦状土錐	3.6	0.5	3.2	(31.4)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	ナゲー	一方向に丸みの萼孔	覆土中	
BP57	縦状土錐	3.4	0.5~0.7	3.5	(31.0)	土(長石・石英・雲母・黒色粒子)	ナゲー	一方向に丸みの萼孔	覆土中	
BP38	縦状土錐	3.6	0.6	4.4	43.8	土(長石・石英・雲母・黑色粒子)	ナゲー	一方向に丸みの萼孔	覆土中	
BP98	管状土錐	4.0	0.6~0.7	4.7	56.4	土(長石・石英・雲母・針状物)	ナゲー	一方向に丸みの萼孔	覆土中	

第96号住居跡（第23～26図）

位置 調査区西部のD 9 d6区で、標高15.1mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第92号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸6.08m、短軸4.89mの楕円長方形で、主軸方向はN-53°-Wである。壁高は30~44cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北西寄りに位置している。長径83cm、短径61cmの楕円形で、床面を11cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。凝灰岩の炉石が、炉の長軸に直交して炉床中央部に据えられていた。

炉土層解説

- 1 焼土赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 暗赤灰色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ34～56cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ20cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

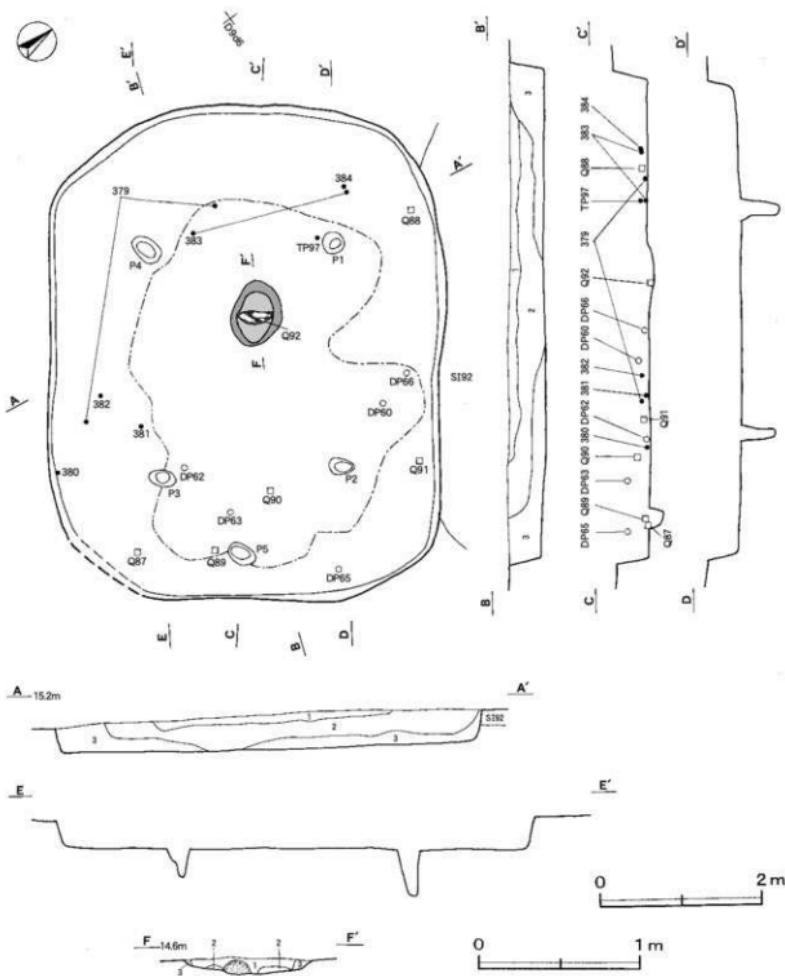
土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量 3 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黑褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

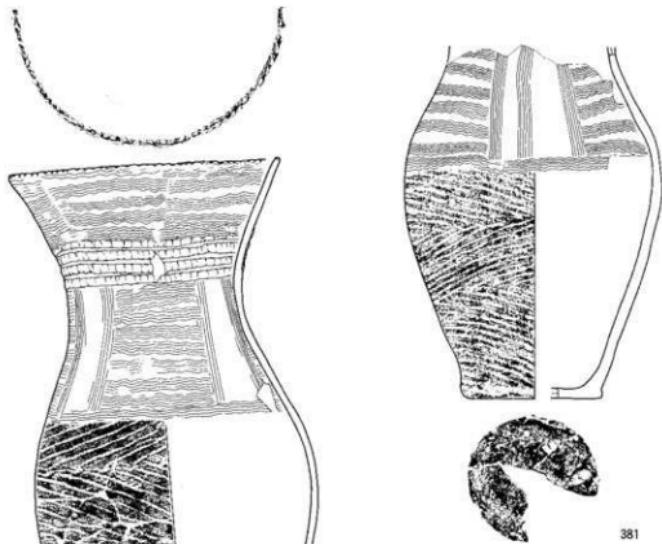
遺物出土状況 弥生土器片324点（広口壺）、土製品7点（紡績車1、球状土錐2、管状土錐4）、石器6点（磨石2、炉石4）の他に、混入した繩文土器片1点、土師器片31点も出土している。380は南西壁に倒れかかる

ようにして出土し、381はP3付近の床面から出土している。第92号住居跡の377と接合した破片は、北東寄りの覆土上層から出土しており、第92号住居跡との重複部分にあった弥生土器片が本住居構築の際に掘り起こされ、周堤帯などに紛れ込んでいたものが住居廃絶後に流れ込んだものと考えられる。土師器片は第2層上面から上で出土しており、住居廃絶後の溝地に投棄されたものと考えられる。

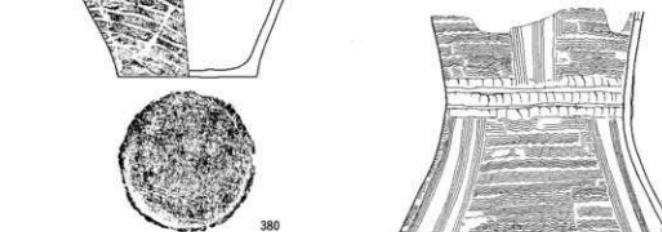
所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



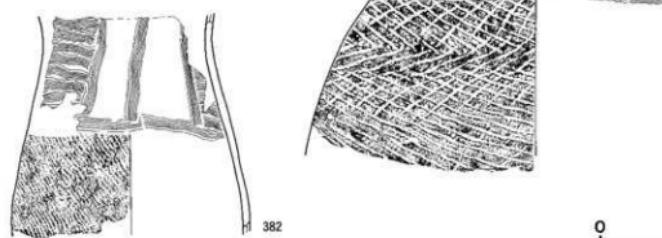
第23図 第96号住居跡実測図



381



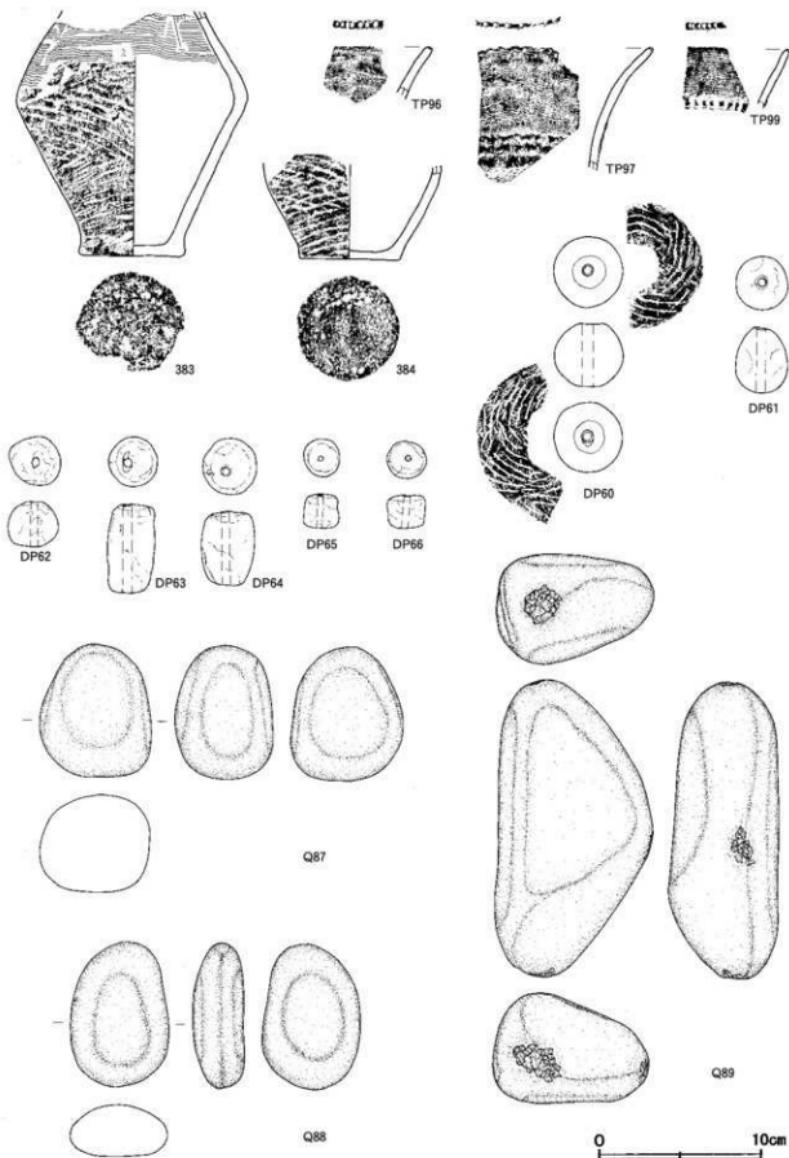
380



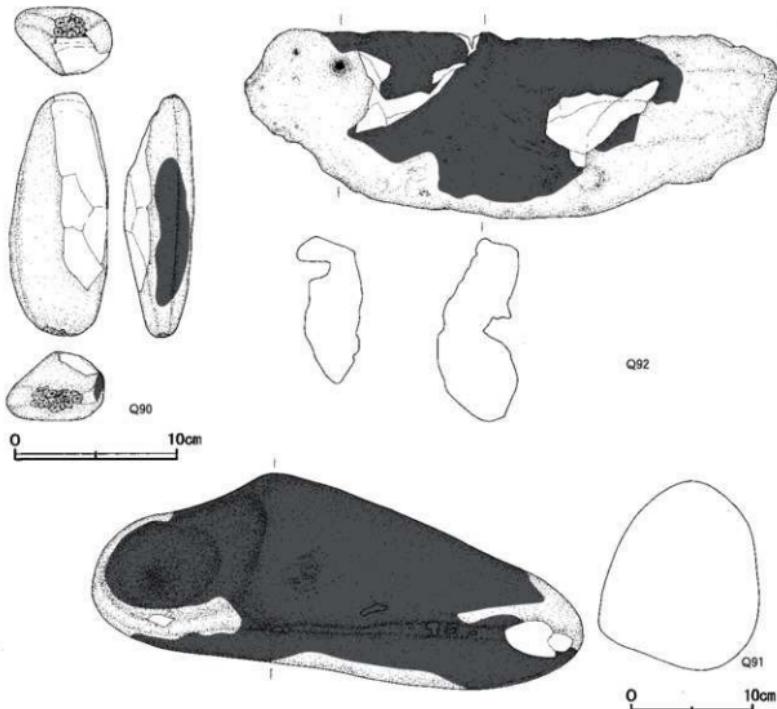
379

0 10cm

第24図 第96号住居跡出土遺物実測図(1)



第25図 第96号住居跡出土遺物実測図(2)



第26図 第96号住居跡出土遺物実測図(3)

第96号住居跡出土遺物観察表(第24~26図)

番号	種別	器種	口径	高さ	直径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
279	弥生土器	広口壺	-	(26.2)	-	長石・石英・雲母、赤色粒子	淡黄褐	普通	網目・織目焼成工具(5本)による3本ないし2本以上する縦目直(4分野) 内に波次文を含むし、頭部の内側に横孔、押出ののみの器表2条で丸形器を分割 粗面に附加条一種(附加1条)の羽状構成	擾土下層～床面	25% PL.21
280	弥生土器	広口壺	16.8	33.7	8.6	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口部間に織目、口部間に織目焼成工具(5本)による波次文 縦目上位に横孔、押出ののみの器表4条 織目焼成工具による器表5条(4分野) 内に波次文を含むし、頭部に附加条一種(附加1条)の網目	床面	95% 口切部・頭部外縁焼付部に波次文を含むし、頭部に附加条一種(附加1条)の網目
281	弥生土器	広口壺	-	(22.5)	8.0	長石・石英・雲母	に白・橙	普通	網目・織目焼成工具(5本)による3本ないし2本以上する縦目直(3分野)上位に波次文を含むし、頭部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	床面	50%
282	弥生土器	広口壺	-	(13.5)	-	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	網目・織目焼成工具(8本)による3本ないし2本以上する縦目直(4分野) 内に波次文を含むし、頭部に附加条一種(附加1条)の網目	擾土下層	10%
283	弥生土器	壺	-	(15.1)	6.6	長石・石英・雲母	に白・橙	普通	網目・織目焼成工具(5本)による波次文直(4分野) 網目附加条一種(附加1条)の網文	擾土下層～床面	65% PL.23
284	弥生土器	広口壺	-	(5.8)	6.2	長石・石英・雲母、赤色粒子	橙	普通	網目・織目附加条二種(附加1条)の羽状構成、底部を直	擾土下層	5%
285	弥生土器	広口壺	-	(3.3)	-	長石・石英・雲母	に白・橙	普通	口部織目焼成工具による網目、口部織目焼成工具(6本)による波次文	擾土中	5% PL.39
286	弥生土器	広口壺	-	(7.7)	-	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口部織目焼成工具による波次文、頭部に附加条二種(附加1条)の網文	擾土下層	5%
287	弥生土器	広口壺	-	(3.6)	-	長石・石英・雲母	褐	普通	口部織目焼成工具による網目、口部織目焼成工具(5本)による波次文、頭部上部へ斜状工具による網目のある器表	擾土中	5%

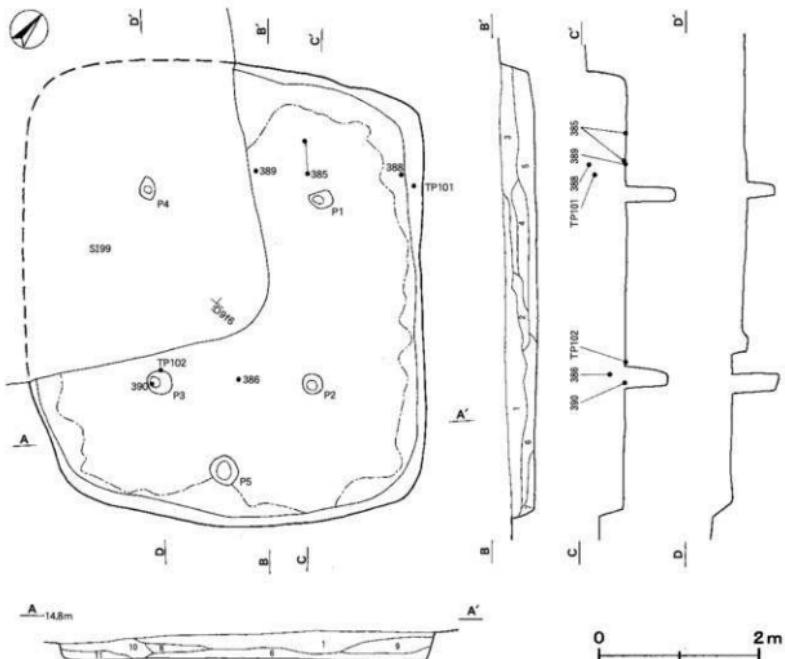
番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
IP60	粘土鉢	4.3	0.6~0.7	3.8	71.9	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方面からの穿孔 附加条二種(附加1系)	覆土下層	P1.40
IP61	環状土鉢	3.2	0.6	4.0	39.7	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方面からの穿孔	覆土中	
IP62	環状土鉢	3.1	0.4~0.5	2.8	25.9	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方面からの穿孔	覆土下層	
IP63	環状土鉢	3.1	0.6	5.5	(55.0)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	ナゲ 一方面からの穿孔	覆土中層	
IP64	管状土鉢	3.4	0.5	4.6	57.7	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	ナゲ 一方面からの穿孔	覆土中	
IP65	管状土鉢	2.3	0.3	2.0	10.7	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方面からの穿孔	覆土中層	
IP66	管状土鉢	2.4	0.4	2.0	11.6	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	ナゲ 一方面からの穿孔	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q57	磨石	8.2	7.0	6.1	513.5	花崗岩	全面に擦痕両端部に顕著な擦痕	表面	
Q58	磨石	8.9	5.6	3.3	271.5	砂岩	全面に擦痕	覆土下層	
Q59	磨石	18.1	9.8	6.8	189.8	砂岩	磨打痕35所 伊石を磨石に転用 火を受けて赤変	覆土下層	
Q60	磨石	15.0	6.1	4.3	(89.9)	砂岩	磨打痕 伊石を磨石に転用 火を受けて赤変 煤け跡	覆土下層	
Q61	伊石	41.7	17.4	13.2	(9220.0)	砂岩	底部以外の3面に埋付着	覆土下層	
Q62	伊石	44.5	15.5	6.7	(896.8)	硅灰質巖	上面、火を受けて変色	側面	

第100号住居跡 (第27~29図)

位置 調査区西部のD 9 e6区で、標高14.6mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第99号住居に掘り込まれている。



第27図 第100号住居跡実測図

規模と形状 遺構全体の確認はできなかったが、主軸方向をN-38°-Wとする長軸5.76m、短軸4.92mの隅丸長方形と推定される。壁高は20~36cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

ピット 5か所。P 1~P 4は深さ34~60cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ22cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

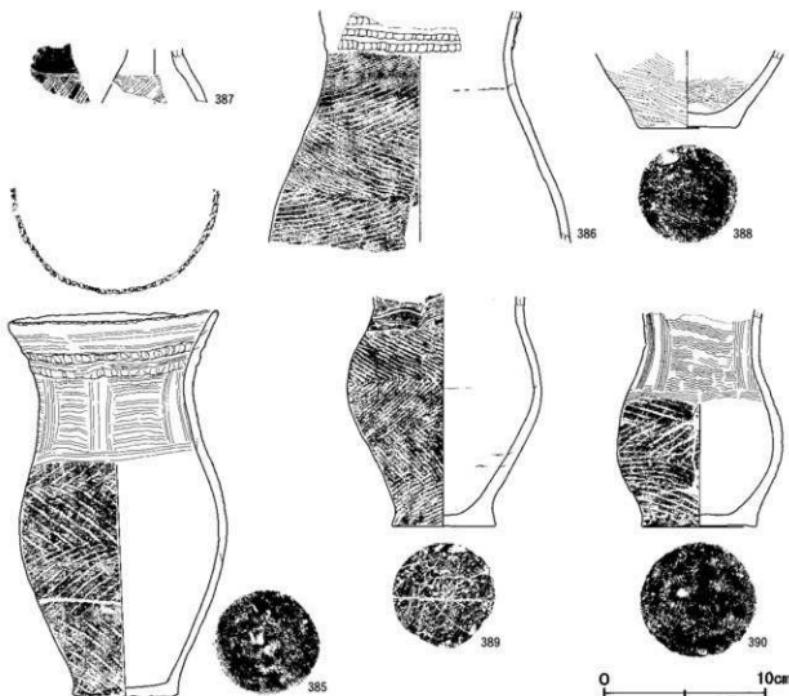
覆土 11層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられるが、第1層は自然に堆積したと考えられる。

土層解説

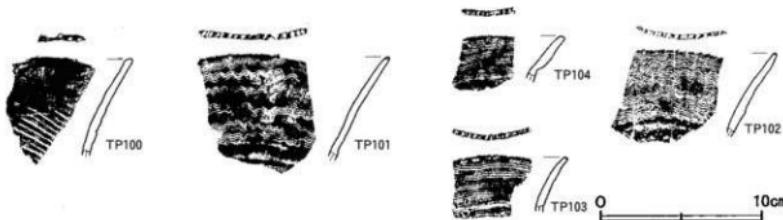
1	暗褐色	ロームブロック微量	7	極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
2	褐	ローム粒子中量	8	黒褐色	ローム粒子・炭化物微量
3	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	9	極暗褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量
4	褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	10	暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
5	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	11	暗褐色	ローム粒子少量
6	暗褐色	ロームブロック・炭化物微量			

遺物出土状況 弥生土器片216点(広口壺), 砧3点の他に、混入した土師器片8点も出土している。385・389は、北側コーナー付近の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第28図 第100号住居出土遺物実測図(1)



第29図 第100号住居跡出土遺物実測図(2)

第100号住居跡出土遺物観察表(第28・29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
385	陶生土器	広口壺	12.6	23.8	6.5	長石・石英・雲母	に点・黄斑	普通	口部附近に磨擦状斑・口沿部に櫛目状凹凸(3本)による波状文 底部上辺に平行な凹溝2条・後赤司櫛目状工具による波状文 底部・櫛目状工具による範囲(約5割)内に波状文欠損・網目状凹溝 底部・櫛目状工具による範囲(約5割)内に波状文欠損・網目状凹溝	床面 横付着	100% 領域外表面 横付着 70% 領域化 横付着 PL22
386	陶生土器	広口壺	—	(14.1)	—	長石・石英・雲母	に点・櫻	普通	底部附近に磨擦状斑・口沿部に櫛目状凹凸(3本)による波状文 底部上辺に平行な凹溝2条・後赤司櫛目状工具による波状文 底部・櫛目状工具による範囲(約5割)内に波状文欠損・網目状凹溝 底部・櫛目状工具による範囲(約5割)内に波状文欠損・網目状凹溝	床面 横付着	100% 外面横付着
387	陶生土器	広口壺	—	(13.3)	—	長石・石英・雲母	に点・櫻	普通	底部附近に磨擦状斑・口沿部に櫛目状凹凸(5本)による波状文 底部上辺に平行な凹溝2条	覆土中	5%
388	陶生土器	広口壺	—	(4.8)	6.2	長石・石英・雲母	に点・櫻	普通	底部内側・外壁下端へラ緊き・底部へフ断き	覆土上層	10%
389	陶生土器	広口壺	—	(14.1)	8.3	長石・石英・雲母・ 赤玉子粒子	に点・少點	普通	底部内側に下の部分の垂直状・網目状附加条(一種附加2条)の 波状文・櫛目状・底部木炭斑	床面	70% 領域外表面保 持量
390	陶生土器	広口壺	—	(13.3)	7.1	長石・石英・雲母	灰白	普通	底部附近に磨擦状斑(5本)による波状文・垂直化する範囲(3 分野)内に波状文欠損・網目状附加条(一種附加2条)の弱波	床面 付着	65% 領域外表面保 持量 内面炭化物 付着
TPD	陶生土器	広口壺	—	(5.7)	—	長石・石英・雲母	灰白	普通	口沿部に波状文・口沿部に櫛目状凹凸(2本)による波状文 底部上辺に平行な凹溝2条・点文・輪郭み痕	覆土中	5% PL38
TPH	陶生土器	広口壺	—	(6.0)	—	長石・石英・雲母	に点・少點	普通	口沿部に見事な小波状・口沿部に櫛目状凹凸(4本)による波 状文・網目状・底部上辺に平行な凹溝2条	覆土上層	5%
TPC	陶生土器	広口壺	—	(5.1)	—	長石・石英・雲母	に点・櫻	普通	口沿部に見事な小波状・口沿部に櫛目状凹凸(5本)による波 状文・網目状	床面	5%
TPD	陶生土器	広口壺	—	(3.3)	—	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口沿部に弱波・口沿部に櫛目状凹凸(4本)による波状文	覆土中	5%
TPH	陶生土器	變形土壺	—	(2.8)	—	長石・石英・雲母	灰黃	普通	口沿部に弱波・口沿部に櫛目状凹凸(4本)による波状文	覆土中	5%

第105号住居跡 (第30・31図)

位置 調査区西部のD 9-12区で、標高15.1mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第106号住居、第1・2号掘立柱建物、第166号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.93m、短軸4.70mの隅丸長方形で、主軸方向はN-54°Wである。壁高は30~44cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 炉は中央部に2か所検出された。炉1は、長径74cm、短径52cmの梢円形で、床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。炉2は、長径33cm、短径49cmほど確認され、検出状況から炉1より古いものと考えられる。

伊1土壙解説

1 黒褐色 植土ブロック中量、炭化粒子・灰微量

2 喀赤褐色 ローム粒子・燒土粒子少量、炭化物・灰微量

伊2土壙解説

3 黑褐色 植土ブロック・炭化物・ローム粒子・灰微量

4 喀赤褐色 燃土ブロック・ローム粒子少量、炭化物・灰微量

ピット 18か所。P 1~P 3は深さ24~61cmで、配置から主柱穴と考えられる。また、P 4~P 18は配置から壁柱穴と考えられる。

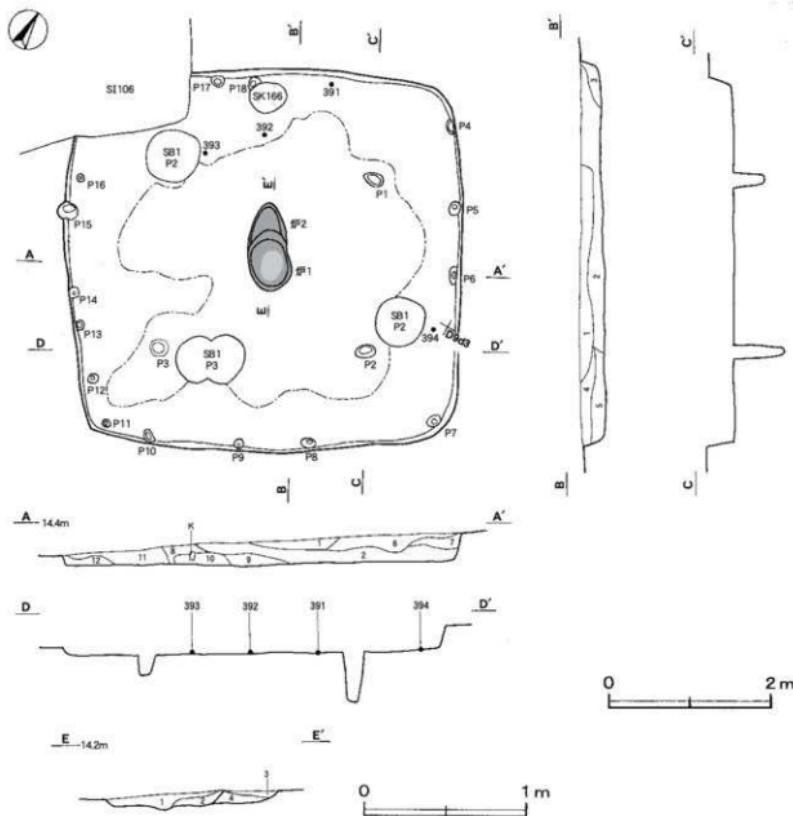
覆土 12層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

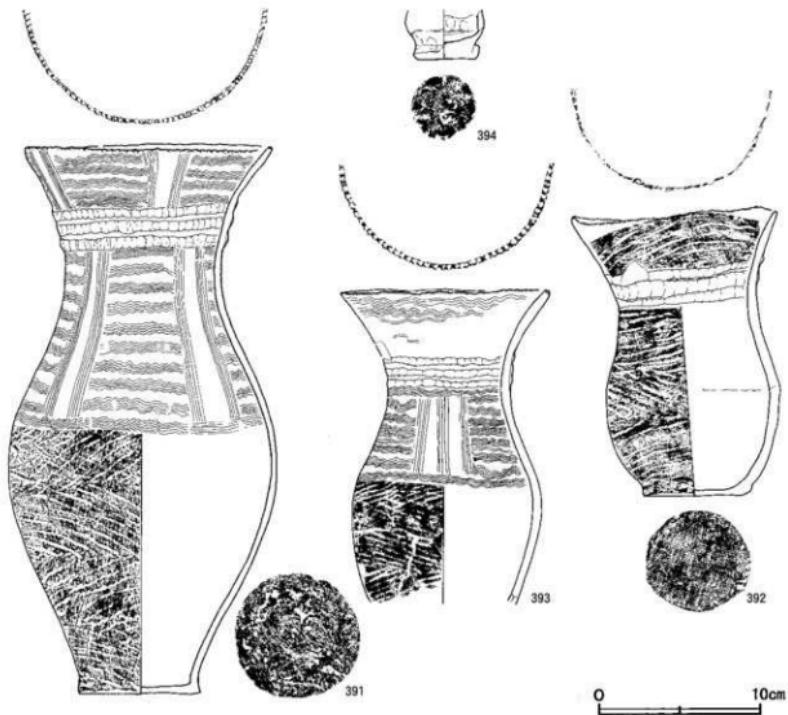
1	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	7	極暗褐色	ローム粒子微量
2	極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	8	黒褐色	ローム粒子少量
3	暗褐色	ローム粒子少量・炭化粒子微量	9	黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
4	褐色	ローム粒子中量・焼土粒子・炭化粒子微量	10	黒褐色	ローム粒子微量
5	極暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	11	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
6	黒褐色	ローム粒子少量・炭化粒子微量	12	暗褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片82点(広口壺), 手捏土器1点(壺類), 踏1点の他に, 混入した土師器片30点も出土している。391は北西壁に倒れかかるようにして出土し, 392・393は中央部北西寄り, 394は北東壁際の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第30図 第105号住居跡実測図



第31図 第105号住居跡出土遺物実測図

第105号住居跡出土遺物観察表(第31図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	底土	色調	焼成	文様及び手法の特徴		出土位置	備考
									表面	裏面		
391	弥生土器	広口壺	15.1	33.8	7.7	長石・石英・雲母	灰褐色	良好	口部附近に刷毛、口部・腹部に櫛目状工具(5本)による凹区(奥15分野)内に波状文充満。底盤上位の削い押付がある。底盤3条で文様を分割。腹部に斜め2条縦(附加1条)の羽状構成。底盤直面		底面	95% 腹部外面覆付着 内面炭化物付着 PL17
392	弥生土器	広口壺	12.6	17.8	6.4	長石・石英・雲母	にじみ赤褐色	普通	口部附近に刷毛押付。口部附近に附加条二種(附加1条)の調文並み。底盤上位に削い押付がある。底盤に附加条二種(附加1条)の調文並み。腹部に斜め2条縦(附加1条)の羽状構成。		底面	95% 腹部外面覆付着 PL22
393	弥生土器	広口壺	12.8	(19.3)	—	長石・石英・雲母	にじみ赤褐色	普通	口部附近に刷毛押付工具(5本)による凹区(奥15分野)内に波状文充満。底盤上部に削い押付3条。腹部に附加条二種(附加1条)の調文並み。		底面	60% 腹部外面覆付着 PL22
394	手形土器	壺形土器	—	(3.0)	3.9	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	腹部外面ナデ。底盤下端に指痕。輪健底。底面砂目板。		底面	20%

第112号住居跡(第32・33図)

位置 調査区西部のC 911区で、標高14.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第110・111号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺構全体の確認はできなかつたが、主軸方向をN-34°-Wとする長軸5.23m、短軸3.94mの隅丸長方形と推定される。壁高は12~37cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北西寄りに位置している。長径83cm、短径66cmの楕円形で、床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変色化している。

炉土層解説

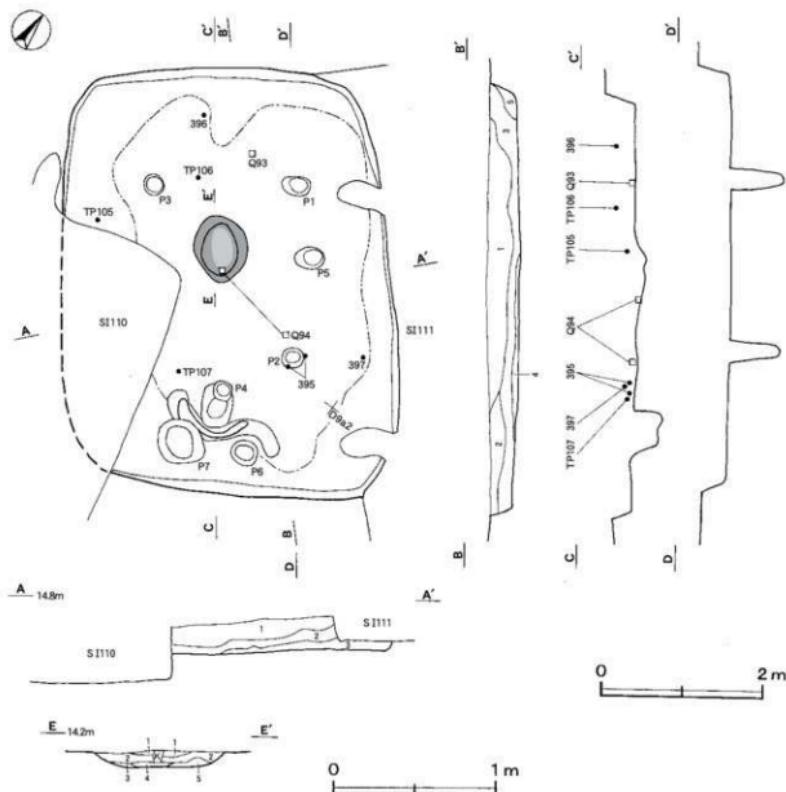
- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 地下粒子少數、炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 地下粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 極暗赤褐色 焼土ブロック少數、炭化粒子微量 |
| 3 帝赤褐色 地下粒子少數、ロームブロック微量 | |

ピット 7か所。P 1～P 3は深さ54～66cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 4は深さ31cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 5～P 7の性格は不明である。

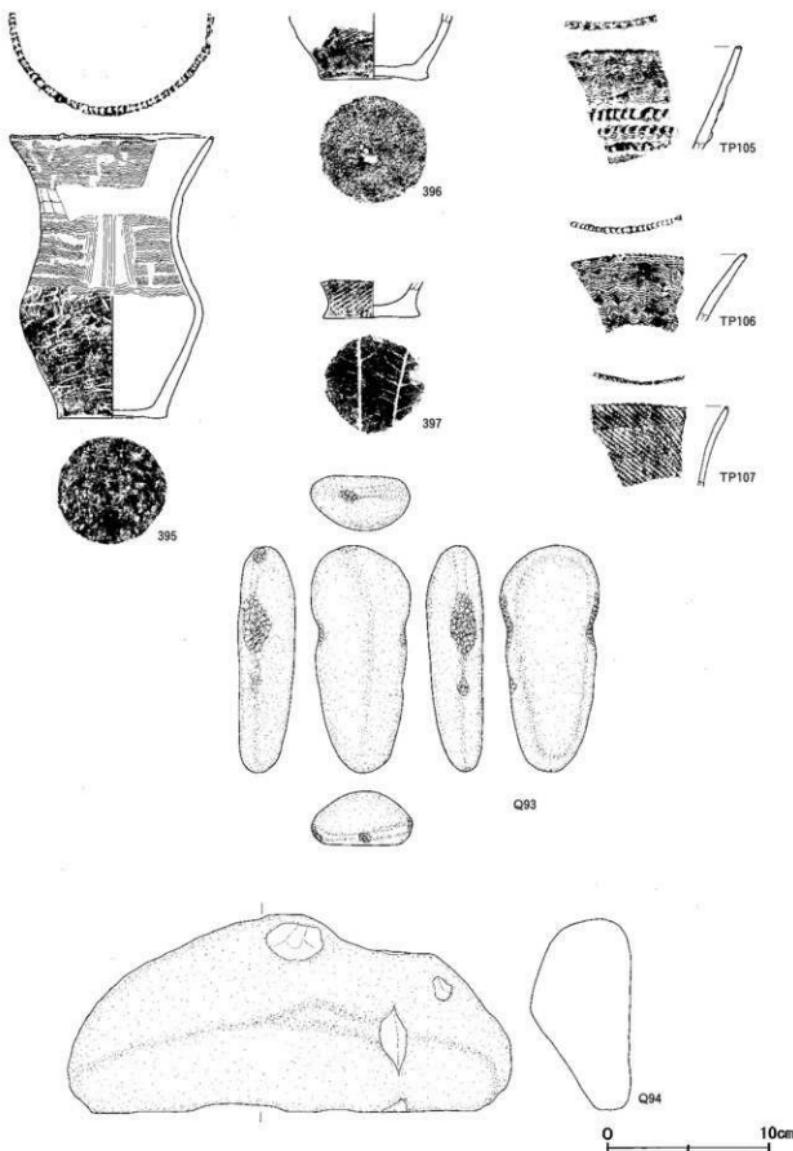
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|---------------------------|--------------------|
| 1 帝赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 極暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 3 黑褐色 ローム粒子少量 | |



第32図 第112号住居跡実測図



第33図 第1112号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 弥生土器片307点（広口壺），土製品3点（不明），石器2点（磨石，炉石），礫7点の他に，混入した土師器片29点も出土している。395はP2付近の覆土下層から出土している。

所見 時期は，出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。

第112号住居跡出土遺物観察表(第33図)

番号	種別	器種	口径	基高	直径	施土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
395	弥生土器	広口壺	12.1	11.5	6.9	長石・石英・雲母 二つ穴	青白	普通	口部に短い小突起2箇以上、口周間に縦彫刻式工具(5本)による波状文、施土上部に斜い押痕(4分割)内に呑込み先端、施土部「頭加多一種(頭加多1型)」の横文文、底部無痕	覆土下層 剖面付着 PL22	70% 脊部外側 付着 PL22
396	弥生土器	広口壺	-	(4.6)	6.6	長石・石英・雲母 二つ穴	青白	普通	「頭加多一種(頭加多1型)」の横文文、底部無痕	覆土中層	10%
397	弥生土器	広口壺	-	(2.1)	6.1	長石・石英・雲母 二つ穴	青白	普通	「頭加多一種(頭加多2型)」の横文文、底部無痕	覆土下層 剖面付着、底部砂質	5%
398	弥生土器	広口壺	-	(6.2)	-	長石・石英・雲母 二つ穴	青白	普通	「頭加多一種(頭加多2型)」の横文文、底部木炭斑	覆土下層	5% PL38
399	弥生土器	広口壺	-	(4.1)	-	長石・石英・雲母 二つ穴	黒褐	普通	口部附近に短い波状線、口周間に縦彫刻式工具(5本)による波状文	海土上層	5%
400	弥生土器	広口壺	-	(5.1)	-	長石・石英・雲母 二つ穴	明赤褐	普通	口部附近に短い波状線、口周間に縦彫刻式工具(5本)による波状文	覆土下層	5% PL38

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q93	鐵石か	14.0	6.0	3.4	約1.4	鐵鉄岩	鐵打痕4か所	覆土下層	PL42
Q94	伊石	27.3	12.3	6.2	2321.9	砂岩	火を受けて変色	覆土下層～床面	

第114号住居跡（第34～36図）

位置 調査区西部のD 9 b3区で、標高14.6mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第1号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.00m, 短軸5.92mの隅丸方形で、主軸方向はN-26°-Wである。壁高は23～41cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部に位置している。長径107cm, 短径80cmの楕円形で、床面を9cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 黒褐色 塗土粒子少量、炭化粒子微量

2 黑褐色 焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量

ピット 5か所。P1～P4は深さ60～68cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ26cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黑褐色 ローム粒子微量

4 黑褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

2 黑褐色 ロームブロック微量

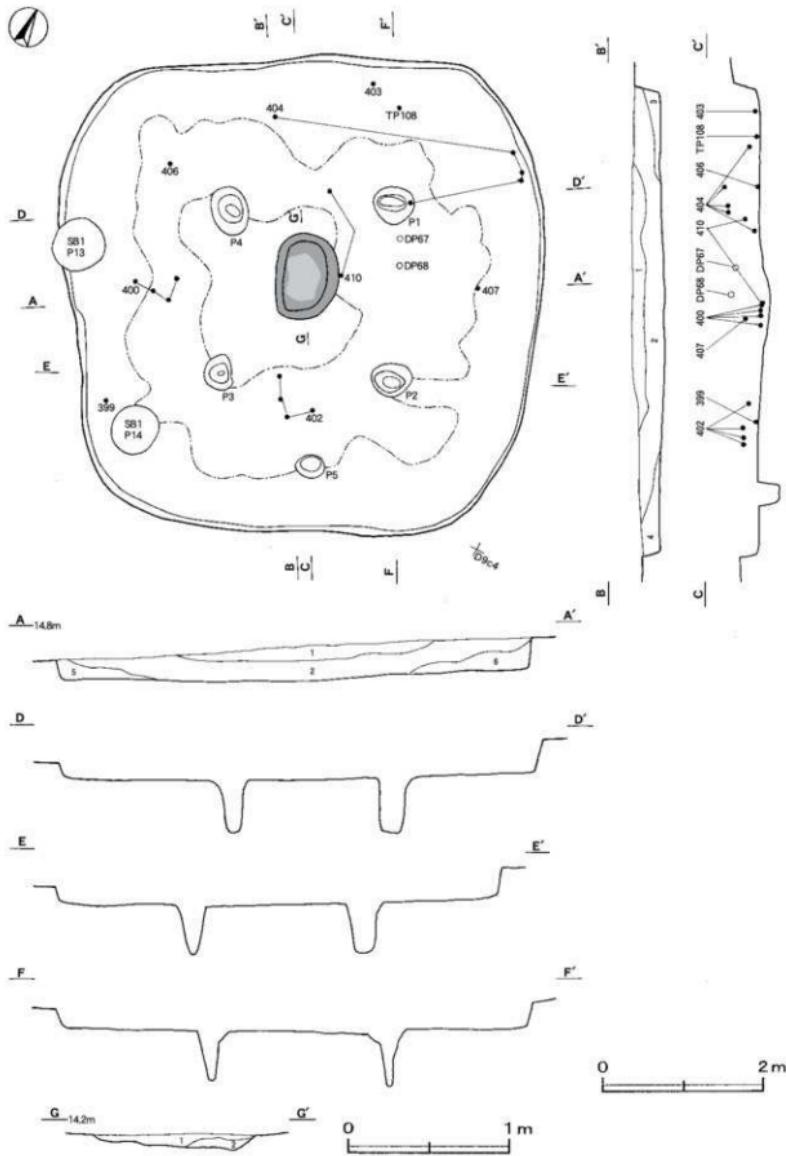
5 黑褐色 ロームブロック少量

3 黑褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

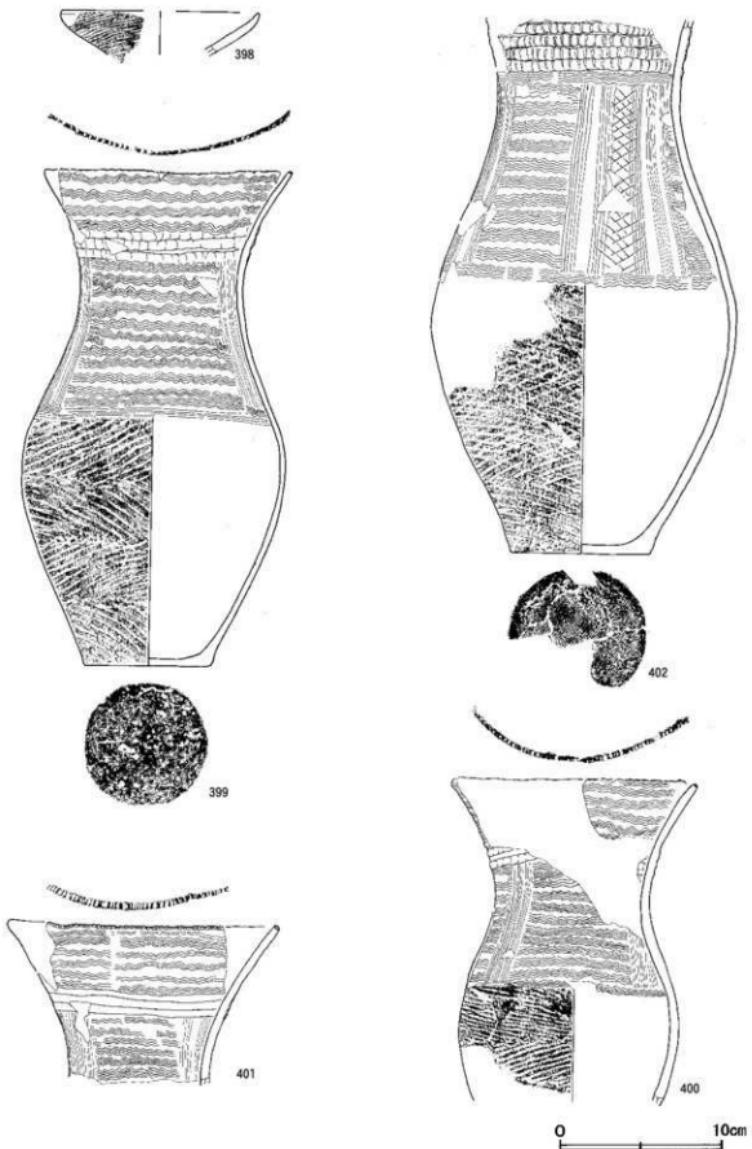
6 單褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片652点（高杯1, 広口壺651), 土製品2点（球状土錐), 石器2点（磨石, 敲石), 矶3点の他に, 混入した繩文土器片7点, 土師器片66点も出土している。399は南コーナー付近の壁に倒れかかるようにして出土している。土師器片は, いずれも第2層より上から出土している。409・410は, 全体を復元できない接合資料であり, 住居廃絶後の早い時期に投棄されたと考えられる。

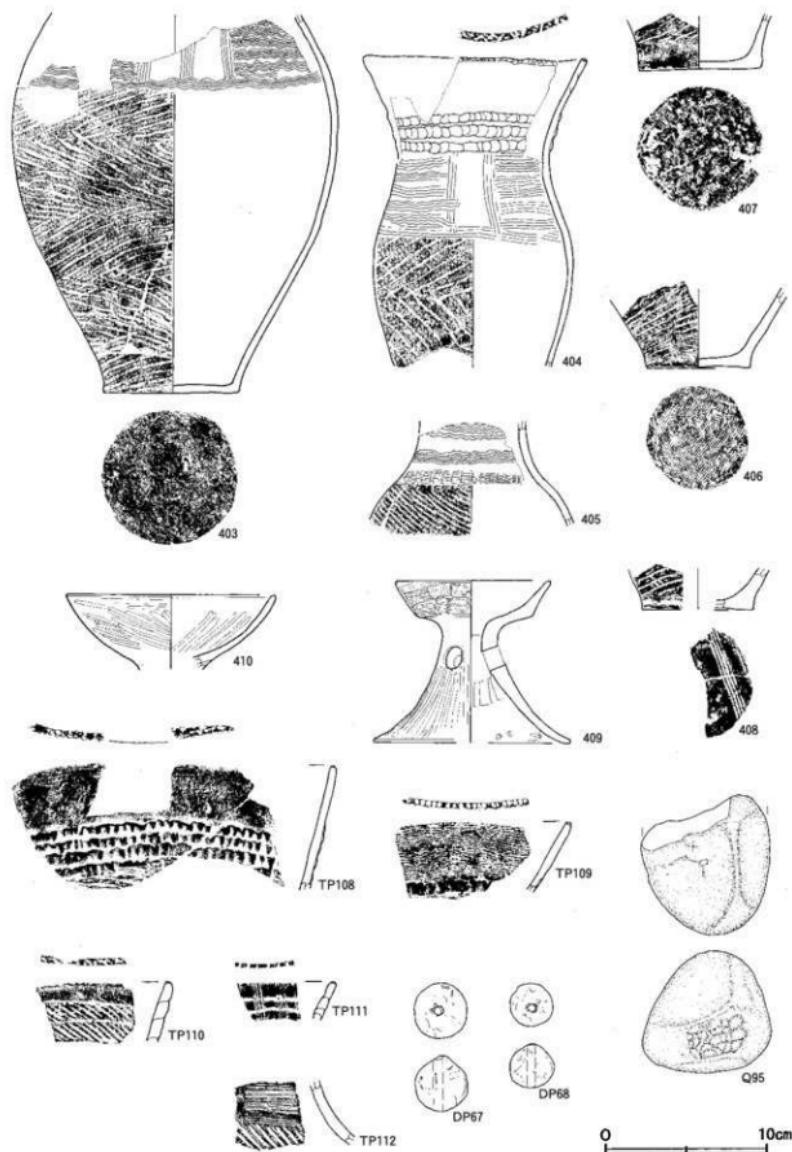
所見 時期は, 出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第34図 第114号住居跡実測図



第35図 第114号住居跡出土遺物実測図(1)



第36図 第114号住居跡出土遺物実測図(2)

第114号住居跡出土遺物観察表(第35~36図)

番号	器種	器種	口径	都高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
388	陶生土器	高所	[12.2]	0.7	—	長石・石英・雲母	二つ立黄褐色	普通	口縁部に附加条一種(附加1巻)の縞文	覆土中	5%
399	陶生土器	広口壺	[15.4]	31.0	7.9	長石・石英・雲母	灰黃褐色	良好	口縁部に附加条一種(附加1巻)の縞文 底部に軽い凹凸があり底面等身 化(一部底)の縞文区画(3分割)内に波状文を施す 輪郭線に附加条一種(附加1巻)の縞文	床面	80% 盤面外側に焼付着 内面焼化物付着 PL18
400	陶生土器	広口壺	15.4	(20.1)	—	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口縁部に軽い凹凸があり底面等身 化(一部底)の縞文区画(4分割)内に波状文を施す 輪郭線に附加条一種(附加1巻)の縞文	覆土下部	60% 頭部外面焼付着
401	陶生土器	広口壺	[16.4]	(10.0)	—	長石・石英・雲母	二つ立赤褐色	普通	口縁部に軽い凹凸があり底面等身 化(一部底)の縞文区画(5分割)内に波状文を施す 輪郭線に附加条一種(附加1巻)の縞文	覆土中	10%
402	陶生土器	広口壺	—	(31.3)	8.8	長石・石英・雲母	灰黃褐色	普通	頭部上部に手打竹刀痕の剥落がある縞文区画(3分割) 内に波状文を施す 輪郭線に附加条一種(附加1巻)の縞文	覆土中	40% 頭部外面焼付着 内面焼化物付着 PL18
403	陶生土器	広口壺	—	(21.4)	8.3	長石・石英・雲母 赤色粒子	二つ立・橙	普通	普通 頭部に波状文を施す 輪郭線に附加条一種(附加1巻)の縞文	覆土下部	40% 頭部・輪郭 部外面焼付着
404	陶生土器	広口壺	[13.3]	(19.1)	—	長石・石英・雲母	二つ立・褐	普通	口縁部に波状文(4分割)内に波状文 輪郭線に附加条一種(附加1巻)の縞文	覆土下部	40% 口縫部外面焼付着 PL20
405	陶生土器	広口壺	—	(6.4)	—	長石・石英・雲母	二つ立・褐	普通	頭部下部に附加条一種(附加1巻)の縞文	覆土中	5%
406	陶生土器	広口壺	—	(4.9)	6.2	長石・石英・雲母	二つ立・褐	普通	頭部に附加条一種(附加1巻)の縞文 底部布田植	床面	5%
407	陶生土器	広口壺	—	(3.3)	7.5	長石・石英・雲母	二つ立・褐	普通	頭部に附加条一種(附加1巻)の縞文 頭部下部に波状文 輪郭線に附加条一種(附加1巻)の縞文	覆土中	5%
408	陶生土器	広口壺	—	(2.6)	(7.0)	長石・石英・雲母	二つ立・褐	普通	頭部に附加条一種(附加1巻)の縞文 頭部下部に波状文 輪郭線に附加条一種(附加1巻)の縞文	覆土中	5%
409	土器鉢	器台	9.5	10.0	[12.2]	長石・石英・雲母	根	普通	頭部外側にケヤキ目地型 内面ナメ 頭部外側へテ裏剥き 輪郭線に附加条一種(附加2巻)の縞文	覆土中	60%
410	土器鉢	高所	12.8	(4.6)	—	長石・石英・雲母	二つ立・褐	普通	頭部外側へテ裏剥き	覆土中	50%
410B	陶生土器	広口壺	—	(7.6)	—	長石・石英・雲母	二つ立・黄褐色	普通	口縁部に波状文 頭部上部に押す形のある縞文4条 頭部に附加条一種(附加1巻)の縞文	覆土下部	5%
410B	陶生土器	広口壺	—	(4.3)	—	長石・石英・雲母	二つ立・黄褐色	普通	口縁部に波状文 頭部上部に押す形のある縞文4条 頭部に附加条一種(附加1巻)の縞文	覆土中	5%
410B	陶生土器	広口壺	—	(3.7)	—	長石・石英・雲母	明褐色	普通	口縫部に波状文 頭部上部に押す形のある縞文4条 頭部に附加条一種(附加1巻)の縞文	覆土中	5% PL39
410D	陶生土器	広口壺	—	(2.4)	—	長石・石英・雲母	明褐色	普通	頭部に波状文 頭部上部に波状文 頭部に附加条一種(附加1巻)の縞文	覆土中	5%
410E	陶生土器	広口壺	—	(4.0)	—	長石・石英・雲母	二つ立・黄褐色	普通	頭部に波状文 頭部上部に波状文	覆土中	5% PL39

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3967	環狀土錐	3.4	0.6	3.4	32.4	土長石・石英・雲母	ナメ 一方向向らの穿孔	覆土上部	
3968	環狀土錐	2.7	0.5~0.6	2.7	26.1	土長石・石英・雲母	ナメ 一方向向らの穿孔	覆土上部	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q96	蓋石	(8.6)	7.8	7.5	(564.9)	石英斑岩	蓋打痕11ヶ所 火を受けて赤変	覆土中	

第134号住居跡 (第37~39図)

位置 調査区西部のD 8 d0区で、標高14mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第133号住居、第1・2号掘立柱建物、第6号ビット群に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による削平を受けているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸6.62m、短軸2.32mほどが確認され、炉や柱穴の位置などから判断して、N~29°~Wを主軸方向とする隅丸方形または隅丸長方形と推定される。確認された壁高は8~12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦と推定され、北側コーナー付近の一部が踏み固められている。

炉 柱穴との位置関係から、中央部のやや北東寄りに位置していると考えられ、長径82cm、短径は38cmほどが確認された。形状は楕円形と推定され、床面を8cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面に赤変硬化は確認できなかった。

炉土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 3か所。P1・P2は深さ32~49cmで、配置から主柱穴と考えられる。P3の性格は不明である。

覆土 3層に分層される。覆土はわずかではあるが、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

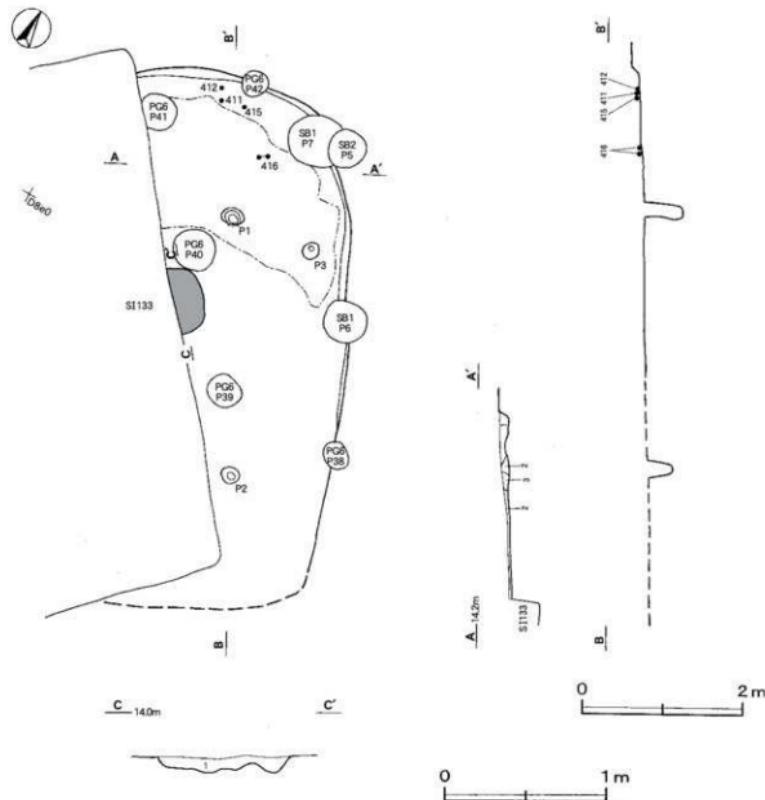
1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

2 極暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

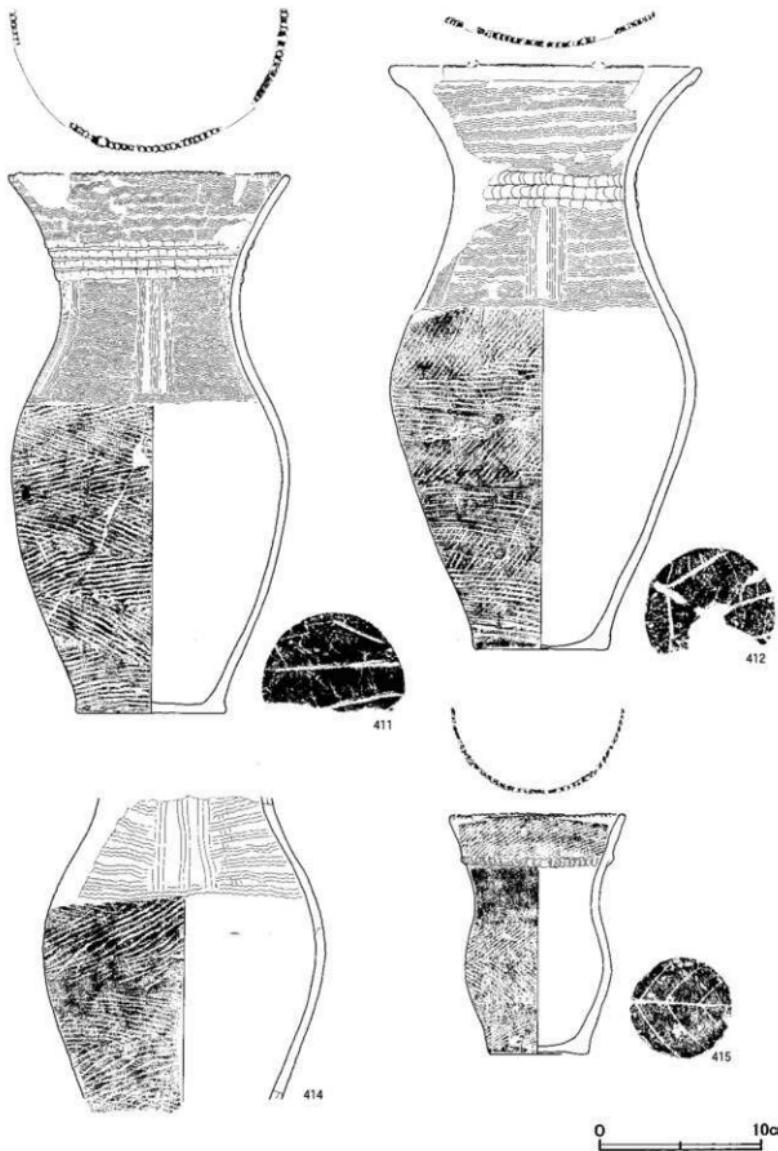
3 黒色 ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片51点（広口壺）、罐1点が出土している。411・412・415・416は北側コーナー寄りの床面からそれぞれ出土している。

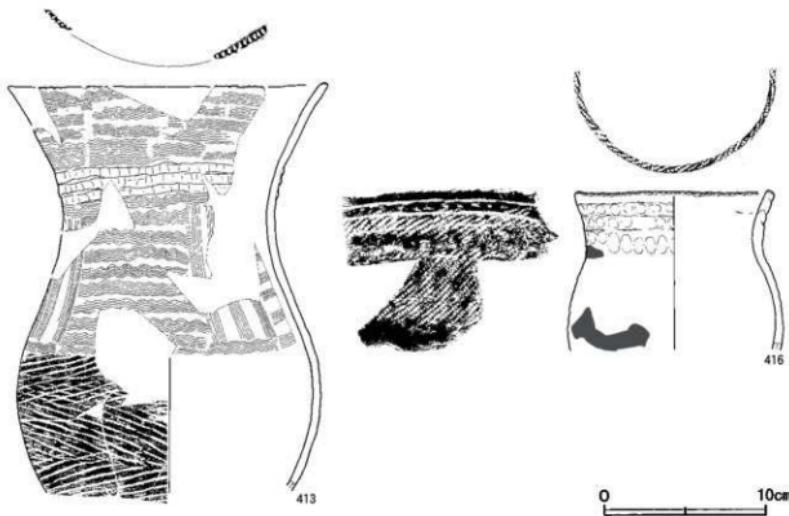
所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第37図 第134号住居跡実測図



第38図 第134号住居跡出土遺物実測図(1)



第39図 第134号住居跡出土遺物実測図(2)

第134号住居跡出土遺物観察表(第38・39図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	地土	色調	地城	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
411	住生土器	広口壺	17.2	33.4	9.0	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口部断面に凹み、口部に複数刃工具(5本)による波状文、腹部上位に横溝・押出文がある器身と、腹部下位に複数刃工具による3条一帯の横溝(5本)。内に波状文を複数回刻印。側面に附加条一様(削り加2条)の波状溝。表面木製痕。	床面	60%、隅部・隅部外面部付着 表面付着 内面炭化物付着 孔18
412	住生土器	広口壺	36.0	[19.0]	8.0	長石・石英・雲母	にふい・黄褐色	普通	口部断面に凹み、小字波(2字以上)。複合刃工具による波状文、口沿部に横溝式工具(4本)による波状文。頭部上位に横溝・押出文のある器身と、腹部第3条、複数刃工具により3条一帯の横溝(3分割以上)内に波状文を複数回刻印。側面に附加条一様(削り加2条)の波状溝。	床面	50%、隅部・隅部外面部付着 表面付着 内面炭化物付着 孔18
413	住生土器	広口壺	[19.6]	(25.2)	—	長石・石英・雲母	にふい・褐色	普通	口部断面に凹み、複合刃工具(6本)による波状文、腹部上位に横溝・押出文がある器身と、腹部下位に横溝・押出文がある器身と、腹部に複数刃工具による3条一帯の横溝(3分割以上)内に波状文を複数回刻印。側面に附加条一様(削り加2条)の波状溝。	覆土中	35%、頭部外面部付着 PL18
414	住生土器	広口壺	—	(18.6)	—	長石・石英・雲母	にふい・褐色	普通	複数刃工具(3本)に上る3条一帯の横溝(3分割以上)内に波状文充填側面に附加条一様(削り加2条)の波状溝。表面木製痕。	覆土中	10%、頭部・隅部外面部付着 表面付着 内面炭化物付着
415	住生土器	広口壺	10.8	14.8	6.1	長石・石英・雲母	にふい・褐色	普通	複数刃工具による複合刃工具による波状文、頭部上位に横溝・押出文、腹部に横溝式工具による3条一帯の横溝(3分割以上)内に波状文を複数回刻印。側面に附加条一様(削り加2条)の波状溝。表面木製痕。	床面	100%、口沿部・頭部外面部付着 PL22
416	住生土器	広口壺	11.7	(9.8)	—	長石・石英・雲母	にふい・黄褐色	普通	口部断面に凹み、口沿部に横溝・押出文がある器身と、腹部に横溝・押出文がある器身と、腹部下位に横溝・押出文がある器身と、口沿部下部に附加条一帯の横溝(3分割以上)内に波状文を複数回刻印。側面に附加条一様(削り加2条)の波状溝。	床面	10%、頭部・隅部外面部付着 PL21

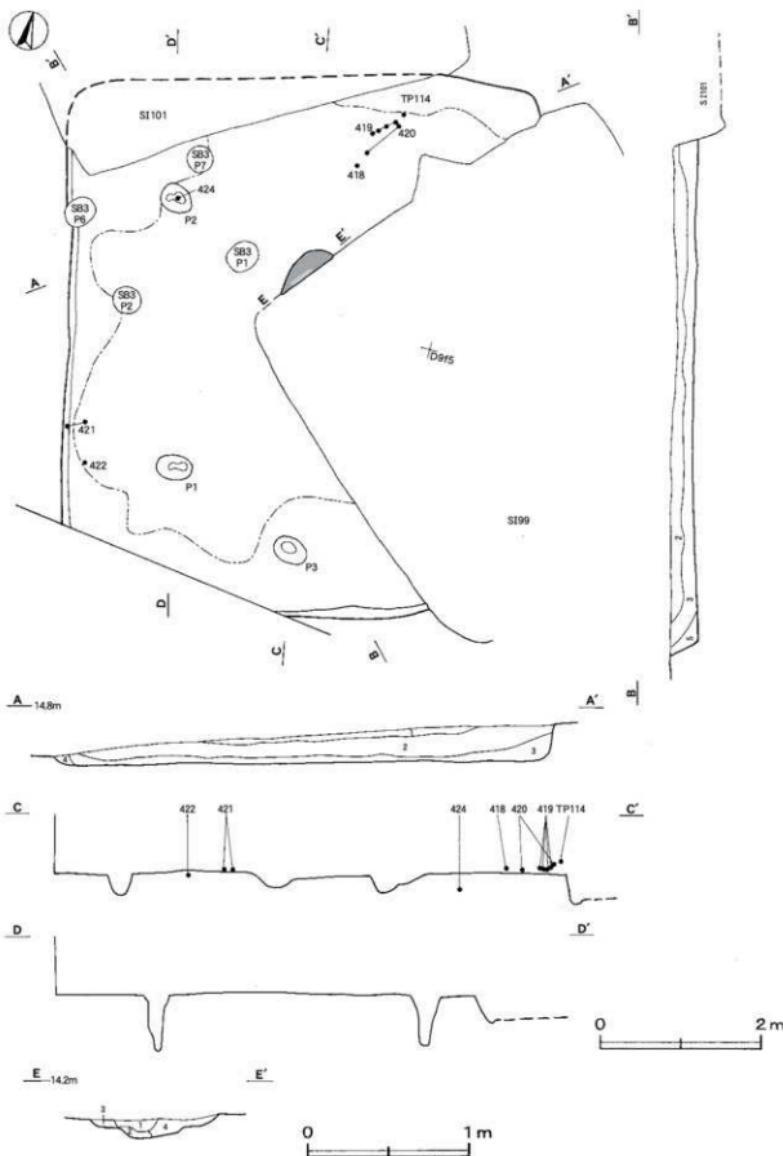
第137号住居跡 (第40~42図)

位置 調査区西部のD 9 e4区で、標高14.4mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第99・101号住居、第3号掘立柱建物、第21号墓坑に掘り込まれている。

規模と形状 南側は調査区域外へ延びているため構造全体の確認はできなかったが、長軸6.50m、短軸5.86mほどが確認され、検出された炉や柱穴の位置などから判断して、N-E-Wを主軸方向とする隅丸長方形と推定される。確認された壁高は12~46cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。



第40図 第137号住居跡実測図

炉 柱穴との位置関係から、中央部のやや北寄りに位置していると考えられ、一部が確認されたのみである。形状は楕円形と推定され、床面を11cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 3 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 赤褐色 焼土ブロック中量 | 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 |

ピット 3か所。P 1・P 2は深さ62~66cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 3は深さ24cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

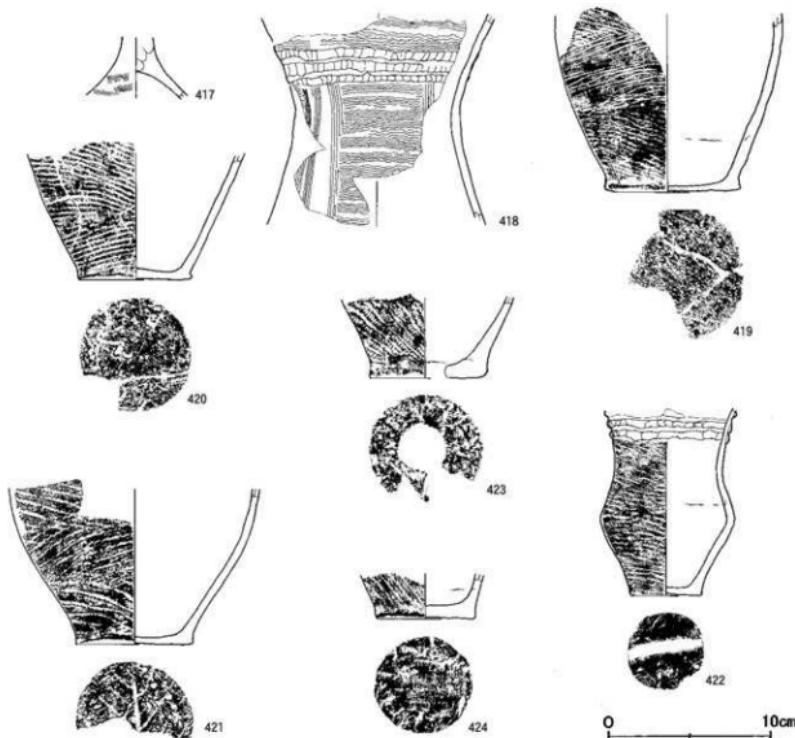
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

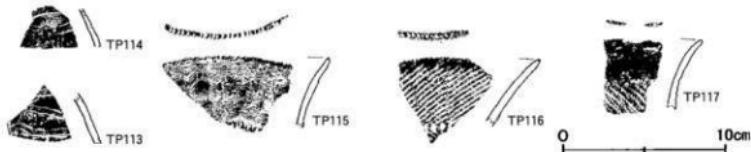
- | | |
|-------------------------|---------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 ローム粒子微量 |
| 3 極暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 弥生土器片269点（広口壺）、罐1点の他に、混入した土師器片23点も出土している。421・422は、西側壁付近の床面から出土し、424はP 1の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第41図 第137号住居跡出土遺物実測図(1)



第42図 第137号住居跡出土遺物実測図(2)

第137号住居跡出土遺物観察表(第41・42図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	使用	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
417	弥生土器	広口壺	—	(3.8)	—	長石・石英・雲母 に灰・褐	普通	脚部外面彫痕状工具(5本)による波状文 内面ナデ	覆土中	5%	
418	弥生土器	広口壺	—	(12.9)	—	長石・石英・雲母 灰灰	普通	口沿部に彫痕状工具(5本)による波状文 瓢箪上段に斜めに 用いた5本の彫痕3条 彫痕状工具による3条一單位の縦区画内 に波状文有り	覆土下部 脚部外側接着	5%	
419	弥生土器	広口壺	—	(10.9)	[8.4]	長石・石英・雲母 に灰・赤褐色	普通	脚部に附加器二種(削打1条)の羽根構成 脊部横筋 1条	覆土下部	30%	
420	弥生土器	広口壺	—	(7.7)	7.0	長石・石英・雲母 に灰・褐	普通	脚部に附加器二種(削打1条)の羽根構成 彫痕状 底部木製模	覆土下部 脚部外側接着	20%	
421	弥生土器	広口壺	—	(9.5)	7.2	長石・石英・雲母 に灰・褐	普通	脚部に附加器二種(削打1条)の羽根構成 底部木製模	床面	15%	内面泥化物付着
422	弥生土器	広口壺	—	(11.6)	4.4	長石・石英・雲母 に灰・褐	普通	脚部上段に斜めに用いた5本の彫痕3条以上 瓢箪下段に彫痕 用多種(削打1条)の波文 彫痕状 底部削り	床面	90%	傾斜外出現 付着 PL23
423	弥生土器	広口壺	—	(4.9)	6.8	長石・石英・雲母 に灰・褐	普通	脚部に附加器二種(削打1条)の波文 彫痕状 距離砂利隙 底部削成導孔	覆土中	10%	内面泥化物付着
424	弥生土器	広口壺	—	(2.8)	6.0	長石・石英・雲母 に灰・褐	普通	脚部に附加器二種(削打1条)の波文 彫痕状 底部木製模 用多種	P1中層	10%	
425	弥生土器	高环カ	—	(3.1)	—	長石・石英・雲母 赤色粒子	普通	脚部下端彫痕状工具(3本)による波状文	覆土中	5%	
426	弥生土器	高环カ	—	(2.2)	—	長石・石英・雲母 赤色粒子	普通	脚部下端彫痕状工具(3本)による波状文	覆土下部	5%	
427	弥生土器	広口壺	—	(4.4)	—	長石・石英・雲母 褐	普通	脚部に彫痕状工具(6本)による波状文 瓢箪上段にハラ状工具による彫打のある残存	覆土中	5%	
428	弥生土器	広口壺	—	(4.2)	—	長石・石英・雲母 黒褐	普通	脚部に彫痕状工具(6本)による波状文 瓢箪上段に鉛文系模様 と柄状	覆土中	5%	
429	弥生土器	広口壺	—	(4.4)	—	長石・石英・雲母 褐褐	普通	脚部に彫痕状工具(6本)による波状文	覆土中	5%	

第141号住居跡(第43図)

位置 調査区中央部のD10e0区で、標高23.4mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第142号住居、第186・187号土坑、第7号溝に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による削平が激しく、遺構全体の確認はできなかったが、検出された炉や柱穴の位置などからN-8°-Wを主軸方向とする、一辺が5.00mほどの隅丸方形と推定される。確認された壁高は5cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦であったと考えられ、炉跡南東部が踏み固められているのが確認された。

炉 柱穴との位置関係から、中央部に位置していると考えられる。形状は楕円形と推定され、長径68cm、短径50cmが確認され、床面を9cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|---------------|--------|-----------------|
| 1 黒褐色 | 後土粒子、炭化粒子微量 | 3 噴赤褐色 | 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 黑褐色 | 炭化粒子少量、燒土粒子微量 | 4 噴赤褐色 | 焼土粒子少量、炭化粒子微量 |

ピット 4か所。深さは48~64cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 単一層であるため、堆積状況は不明である。

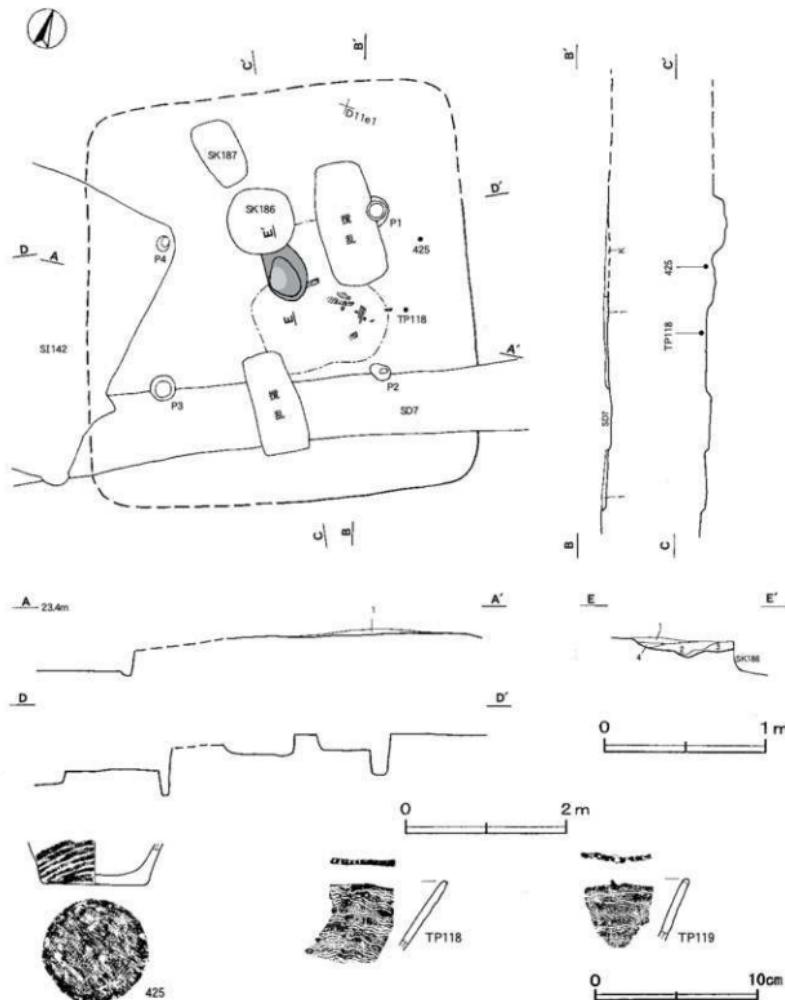
土層解説

- | | |
|-------|------------------|
| 1 噴褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 |
|-------|------------------|

遺物出土状況 弥生土器片13点(広口壺)が出土している。425は床面から出土している。また、床面から焼土とともに炭化材が出土していることから、焼失住居と考えられるが、火を受けて赤変した床面や焼土を確認

することはできなかった。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から弥生時代後期後半と考えられる。また、炭化材の科学分析の結果、樹種はケヤキ、カヤ、コハダの3種類が認められ、丸材であることが判明している。これらは住居構築材であると考えられるが、同様に炭化材樹種同定を行った第143・156号住居跡と樹種が異なつておらず、住居・部材などにより樹種利用が異なっている可能性が指摘されている。



第43図 第141号住居跡・出土遺物実測図

第141号住居出土遺物観察表(第43図)

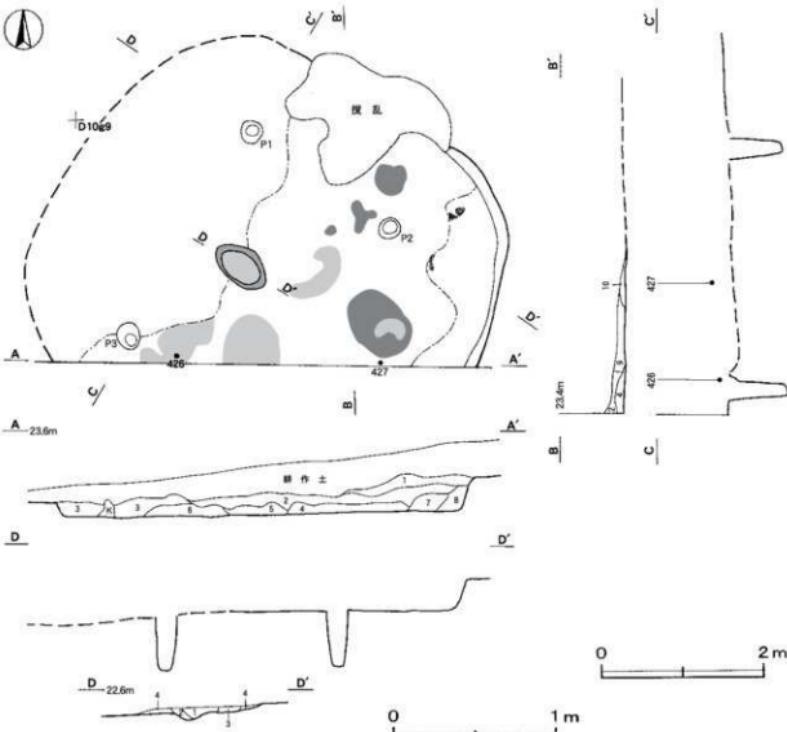
番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
455	陶生土器	広口壺	—	(2.6)	6.6	長石・石英・雲母	青灰	普通	輪郭に附加彫二種(側面1条)の溝文 底部布目板	床面	10%
478	陶生土器	広口壺	—	(4.2)	—	長石・石英・雲母	褐	普通	口部部に刻み 口部繊維状工具(4本)による波状文	覆土下層	5%
709	陶生土器	広口壺	—	0.7	—	長石・石英・雲母	青灰	普通	口部部に刻み 小突起 口部繊維状工具(6本)による波状文	覆土中	5%

第143号住居跡(第44・45図)

位置 調査区中央部のD10g9区で、標高23mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 南側は調査区域外へ延び、さらに耕作による削平を受けていたため長軸5.60m、短軸4.70mほどが確認された。検出された床面の広がりや炉の配置、柱穴の位置関係などから判断して、N=50°-Wを主軸方向とする隅丸長方形と推定される。確認された壁高は20~45cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦と推定され、南東側が踏み固められている。



第44図 第143号住居跡実測図

炉 柱穴との位置関係から、中央部のやや北西寄りに位置していると考えられ、長径73cm、短径45cmの楕円形で、床面を14cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 地土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック微量 | 3 暗褐色 焼土粒子少量・炭化粒子微量 |
| 2 オリーブ色 粘土ブロック少量・焼土粒子微量 | 4 茶褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック微量 |

ピット 3か所。深さ67~72cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 10層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人が堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|------------------------------------|------------------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量・炭化物微量 | 7 暗褐色 炭化物・ローム粒子少量・焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量・炭化物・焼土粒子・鹿沼バミス微量 | 8 黒褐色 烧土ブロック・炭化物少量・ローム粒子・鹿沼バミス微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量・焼土ブロック・鹿沼バミス微量 | 9 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量・焼土粒子・鹿沼バミス微量 |
| 4 暗褐色 炭化粒子中量・ローム粒子少量・焼土ブロック微量 | 10 黑褐色 炭化粒子中量・ローム粒子・焼土粒子・鹿沼バミス微量 |
| 5 暗褐色 ローム粒子少量・炭化物・焼土粒子微量 | |
| 6 極暗褐色 炭化物少量・ローム粒子・焼土粒子・鹿沼バミス微量 | |

遺物出土状況 弥生土器片92点（広口壺）が出土している。426・427は覆土下層からそれぞれ出土している。また、床面から焼土とともに炭化材が出土しており、床面には火を受けて赤変した部分が確認され、焼失住居である可能性が高い。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から弥生時代後期後半と考えられる。また、炭化材の科学分析の結果、樹種はカヤで、丸材であることが判明している。これらは住居構築材であると考えられるが、同様に炭化材樹種同定を行った第141・156号住居跡と樹種が異なっており、住居・部材などにより樹種利用が異なっている可能性が指摘されている。



第45図 第143号住居跡出土遺物実測図

第143号住居跡出土遺物観察表(第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	直徑	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
426	弥生土器	広口壺	—	(1.3)	7.6	長石・石英・雲母	に赤褐色	普通 弱燒	網目に斜面条文2種(斜面1条)の羽状構成・底面調整 内面 網目	覆土下層	10%
427	弥生土器	広口壺	—	(1.3)	[8.0]	長石・雲母	灰褐色	普通	網目に斜面条文2種(斜面1条)の羽状構成 内面 網目	覆土下層	5% 内面炭化物付着

第148号住居跡 (第46図)

位置 調査区中央部のD11j9区で、標高23.6mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第146号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北東側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、東西長3.40m、南北長3.70mほどが確認された。平面形は隅丸方形または隅丸長方形と推定され、検出された壁から想定して、主軸方向はN-44°-Wと考えられる。壁高は14cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、南東壁から中央部にかけてが踏み固められているのが確認できた。

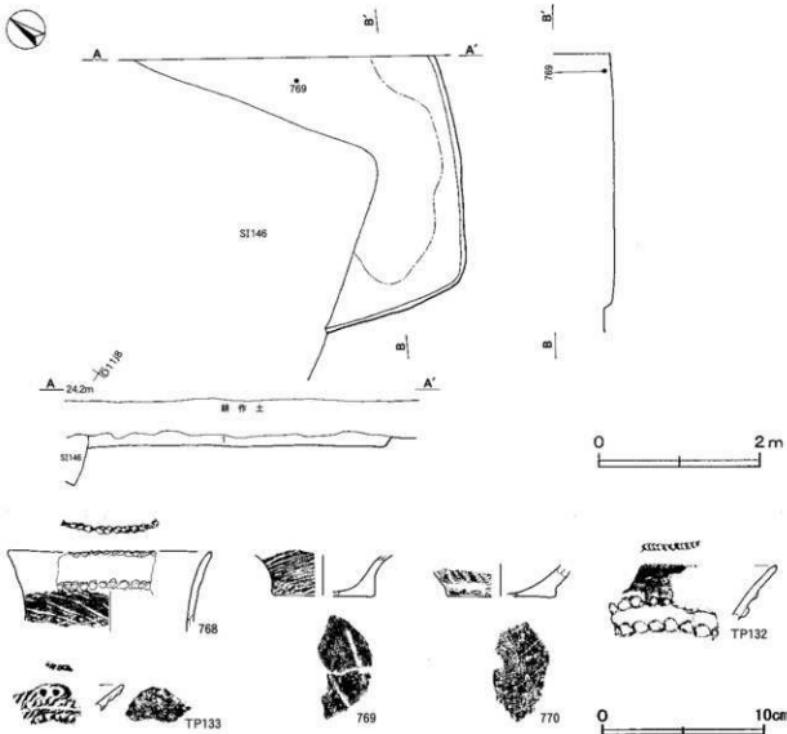
覆土 単一層で、堆積状況は不明である。

土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック・燒土粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片58点(広口壺), 瓦1点が出土している。769は南東側の覆土下層から出土している。

所見 遺構の大部分を第146号住居に掘り込まれているため、炉跡や柱穴を確認することができなかった。時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第46図 第148号住居跡・出土遺物実測図

第148号住居跡出土遺物観察表(第46図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
768	弥生土器	広口壺	[12.4]	[4.9]	—	長石-石英-雲母	黄褐色	普通	口部部に刷毛押付 石刃部裏文 斧部上辺に圓文削痕による網目状の凹凸 背部1条、腹部2-3列加条一種(附加1条)の網文	覆土中 5%	
769	弥生土器	広口壺	—	12.5	[6.4]	長石-石英-雲母	浅黃色	普通	網目状附加条二種(附加1条)の網文 腹部木葉文を調査	覆土下層	5%
770	弥生土器	広口壺	—	12.0	[6.6]	長石-石英-雲母	二呂一赤褐色	普通	網目状附加条二種(附加1条)の網文 腹部木葉文	覆土中 5%	
TP132	弥生土器	広口壺	—	12.0	—	長石-石英-雲母	灰褐色	普通	口部部に刷毛押付(頭頂上位)に指輪による押正のある隆脊2条以上	覆土中 5%	
TP133	弥生土器	広口壺	—	11.5	—	長石-石英-雲母	二呂一赤褐色	普通	口部部に刷毛押付(頭頂上位)に指輪による押正の隆脊2条以上	覆土中 5% PL38	PL38

第149号住居跡（第47図）

位置 調査区中央部のD11j7区で、標高23.6mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第146号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南西側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、東西長1.30m、南北長5.90mほどが確認された。平面形は隅丸方形または隅丸長方形と推定され、検出された壁から想定して、主軸方向はN-53°-Wと考えられる。壁高は16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、北東壁際が踏み固められているのが確認できた。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

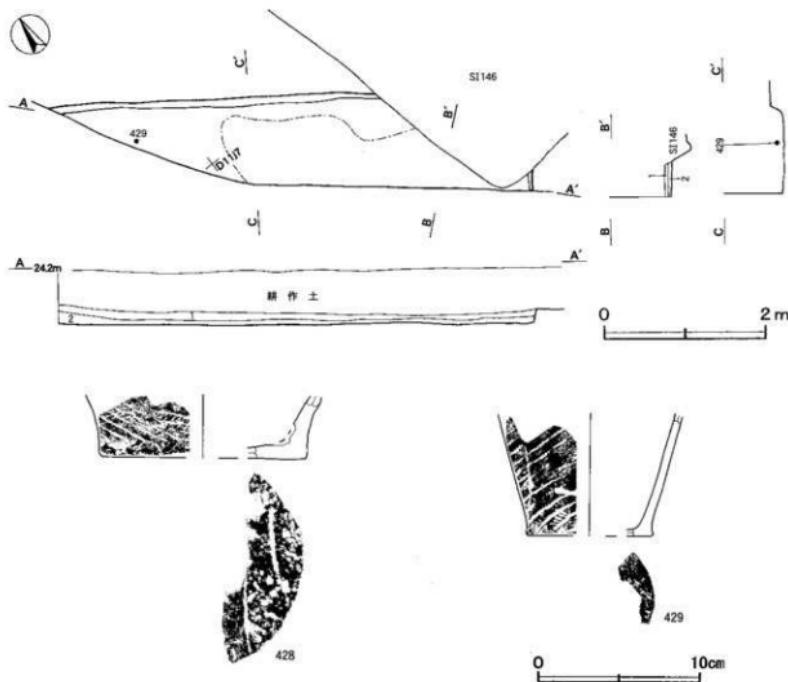
土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック微量

2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片33点（広口壺）、罐1点が出土している。429は北東側壁付近から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第47図 第149号住居跡・出土遺物実測図

第149号住居跡出土遺物観察表(第47図)

番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
428	陶生土器	広口壺	-	0.9	[12.6]	黄土・黒母・赤色 模子	にぶい緋	普通	輪郭2附加条二種(附加1条)の溝文、底部木葉底	覆土中	5%
429	陶生土器	広口壺	-	0.6	[7.8]	黄土・黒母・赤色 模子	灰黄褐色	普通	輪郭2附加条二種(附加1条)の溝文、底部布目底	覆土下層	5% 内面炭化物付着

第152号住居跡(第48・49図)

位置 調査区中央部のD11i10区で、標高23.4mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南西側は調査区外へ延びるため遺構全体を確認することができなかつた。また、耕作による搅乱のため床面が露出した状態で、長軸5.30m、短軸3.60mほどが確認された。検出された炉や柱穴の位置などから判断して、N-15°-Wを主軸方向とする隅丸長方形と推定される。

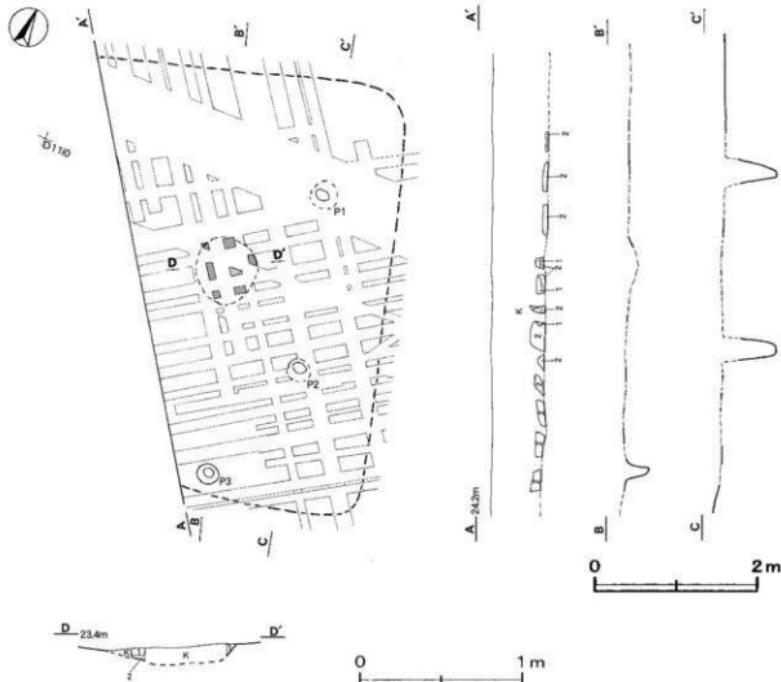
床 平坦であったと考えられる。

炉 柱穴との位置関係から、中央部に位置していたと考えられる。長径84cm、短径78cmの楕円形と推定され、床面を11cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変化している。

炉土層解説

1. 暗赤褐色 塗土粒子・炭化粒子微量

2. 暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量



第48図 第152号住居跡実測図

ピット 3か所。P 1～P 2は深さ65～67cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 3は深さ30cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 2層に分層されるが、耕作による搅乱が激しいため堆積状況は不明である。

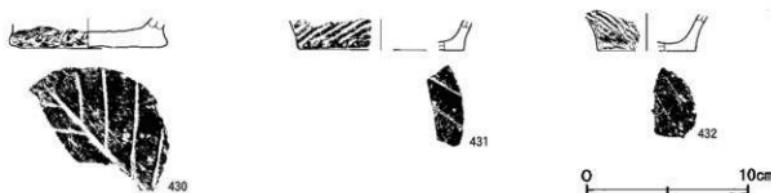
土層解説

1 喀 極 色 ローム粒子・燒土粒子少量。炭化粒子微量

2 黒 極 色 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片71点（広口壺）が出土している。耕作による搅乱が激しく、一部は床下まで達しており、出土した遺物はすべて擾乱の影響を受けている。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から弥生時代後期後半と考えられる。



第49図 第152号住居跡出土遺物実測図

第152号住居跡出土遺物観察表(第49図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備 考
430	弥生土器	広口壺	—	(1.8)	[9.8]	長芯石英-黄母	にふい黄母	普通	脚部に附加条二種（附加1条）の溝文、底部木葉底	覆土中	5%
431	弥生土器	広口壺	—	(1.9)	[10.2]	長芯石英-黄母	灰褐色	普通	脚部に附加条二種（附加1条）の溝文、底部木葉底	覆土中	5%
432	弥生土器	広口壺	—	(2.2)	[6.6]	長芯石英-赤色 粘土	にぬ褐色	普通	脚部に附加条二種（附加1条）の溝文、底部木葉底	覆土中	5%

第153号住居跡（第50図）

位置 調査区中央部のD 12h2区で、標高23.4mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 耕作による搅乱のため、床面が露出した状態で、長軸5.10m、短軸4.70mほどが確認された。検出された炉の位置や床面の広がりなどから判断して、N-79°-Wを主軸方向とする隅丸方形と推定される。

床 平坦であったと考えられ、硬化面の一部が確認された。

炉 確認された床面の広がりから、中央部に位置していたと考えられる。確認された径は40cmほどで、橢円形と推定され、床面を16cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 黒 極 色 燃土粒子少量、ローム粒子微量

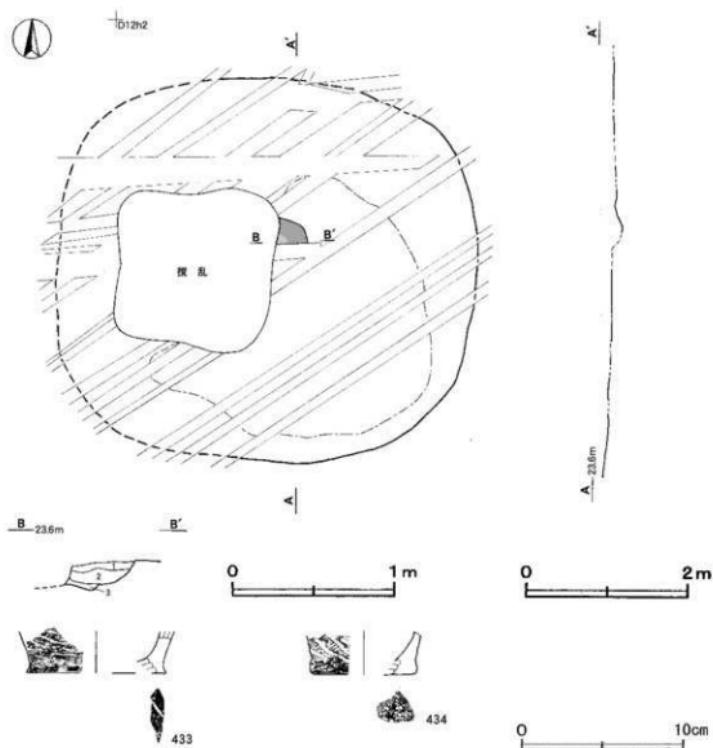
3 喀 極 色 燃土ブロック中量、ローム粒子微量

2 黒 極 色 燃土ブロック少量、ローム粒子微量

覆土 不明である。

遺物出土状況 弥生土器片43点（広口壺）が出土している。耕作による搅乱が激しく、一部は床下まで達しており、出土した遺物はすべて擾乱の影響を受けている。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から弥生時代後期後半と考えられる。



第50図 第153号住居跡・出土遺物実測図

第153号住居跡出土遺物観察表(第50図)

番号	種別	部種	口徑	部高	底径	胎土	色調	地成	文様及び手迹の特徴	出土位置	備考
433	陶生土器	広口壺	—	(2.6)	(8.6)	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰褐色	普通	開底口付加条二種(附加1段)の縞文、近底木葉柄	覆土中	5%
434	陶生土器	広口壺	—	(2.7)	(6.6)	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	開底口付加条二種(附加1段)の縞文、近底布田板	覆土中	5%

第154号住居跡 (第51図)

位置 調査区東部のD12g1区で、標高23.3mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 耕作による搅乱のため、床面が露出した状態で、長軸4.30m、短軸3.90mほどが確認された。検出された床面の広がりや炉の位置などから判断して、N-31°-Eを主軸方向とする隅丸長方形と推定される。

床 平坦であったと考えられ、硬化面の一部が確認された。

炉 確認された床面の広がりから、北西部に位置していると考えられる。長径76cm、短径56cmが確認され、楕円形と推定される。床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉で、炉床面は火を受けて赤変硬化している。砂岩の炉石が炉床のやや東寄りから出土している。

炉土層解説

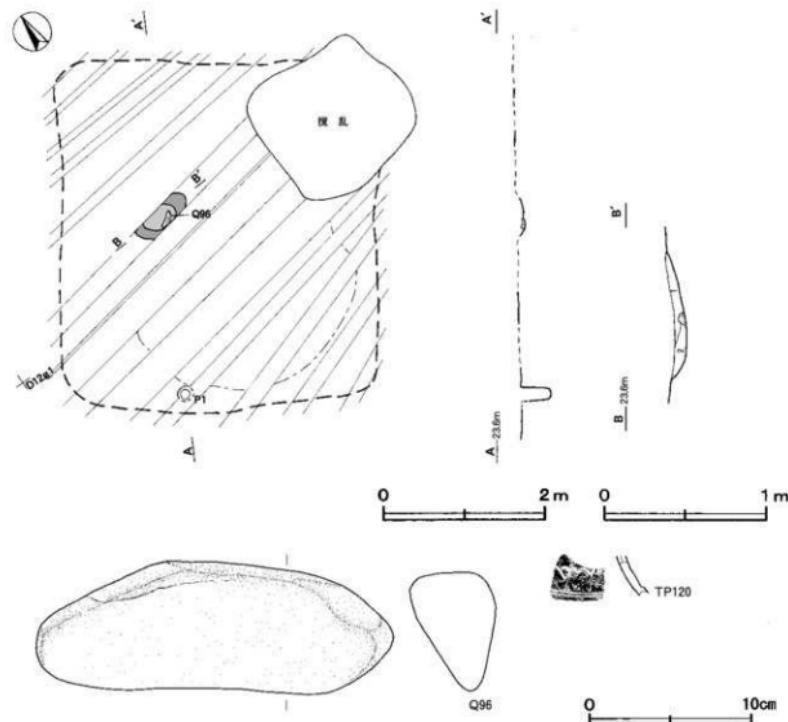
1 基 地 色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 2 基 地 色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 1か所。P 1は深さ38cmで、性格は不明である。

覆土 不明である。

遺物出土状況 弥生土器片22点（広口壺）、石製品1点（炉石）の他に、搅乱によって混入したと考えられる瓦質土器1点、不明鉄製品1点も出土している。耕作による搅乱が激しく、一部は床下まで達しており、出土した遺物はすべて搅乱の影響を受けている。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から弥生時代後期後半と考えられる。



第51図 第154号住居跡・出土遺物実測図

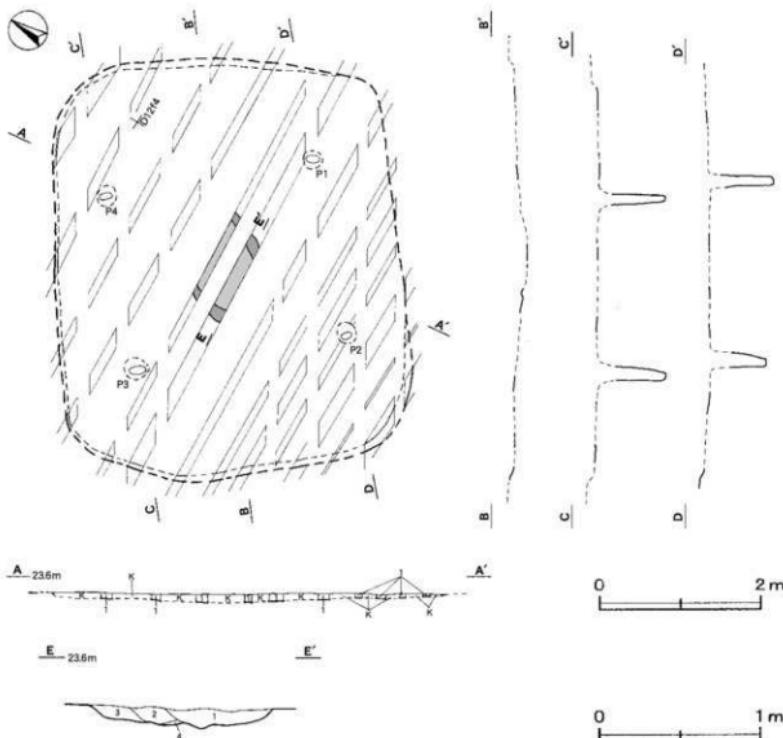
第154号住居跡出土遺物観察表(第51図)

番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴		出土位置	備考	
									直口壺	（2.8）	長石-石英-雲母	粗灰	普通
Q96	陶生土器												
Q96	砂岩	長3	幅3	厚さ	重量	材質		特徴			出土位置	備考	
		22.0	8.2	5.2	1059.1	砂岩		火を受けて赤変			伊豆面		

第155号住居跡（第52・53図）

位置 調査区東部のD12f3区で、標高23.5mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.26m、短軸4.30mの隅丸長方形で、主軸方向はN-55°-Eである。耕作による搅乱のため、南東側の床面が露出した状態で検出されたが、遺存している壁高は7cmほどで、外傾して立ち上がっている。床 ほぼ平坦である。



第52図 第155号住居跡実測図

炉 中央部に位置している。長径140cm、短径80cmほどの梢円形と推定され、床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|---------------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色 極土粒子中量 ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 喙赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 喙赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 | 4 喙褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 |

ピット 4か所。深さは75~86cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 単一層であるため、堆積状況は不明である。

土層解説

- | |
|-----------------|
| 1 喙褐色 ロームブロック少量 |
|-----------------|

遺物出土状況 弥生土器片90点（広口壺）が出土している。耕作による搅乱が激しく、一部は床下まで達しており、出土した遺物はすべて擾乱の影響を受けている。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から弥生時代後期後半と考えられる。



第53図 第155号住居跡出土遺物実測図

第155号住居跡出土遺物観察表(第53図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
435	弥生土器	広口壺	—	(3.8)	[18.4]	長石・石英・雲母 に多い黄鉄	青緑	普通	輪郭に附加各二種（斜め1条）の網文、底部本葉筋	覆土中	5%
436	弥生土器	広口壺	—	(3.8)	—	長石・石英・雲母 に多い黄鉄	青緑	普通	輪郭に輪廊状工具（3本）による波状文、頸部下側に下向きの 螺旋文・直弦文	覆土中	5%

第156号住居跡 (第54~56図)

位置 調査区東部のD12g5区で、標高23.3mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.10m、短軸4.26mの隅丸長方形で、主軸方向はN-50°-Wである。壁高は20~32cmで、外傾して立ち上っている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部に位置している。長径76cm、短径58cmの梢円形で、床面を8cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|-----------------------------|-------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量 |
|-----------------------------|-------------------|

ピット 5か所。P 1~P 4は深さ79~84cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ30cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

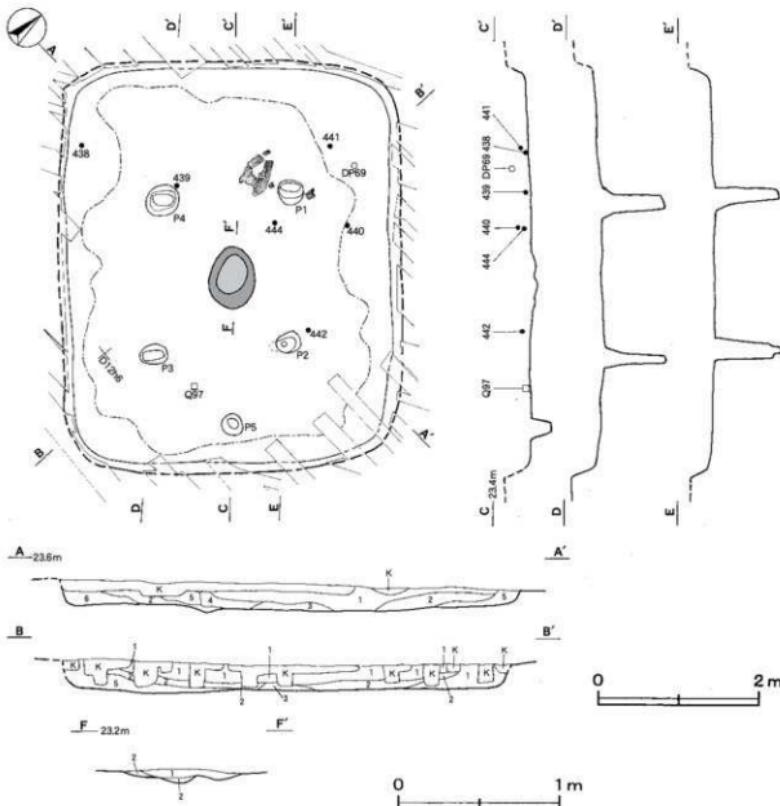
覆土 6層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

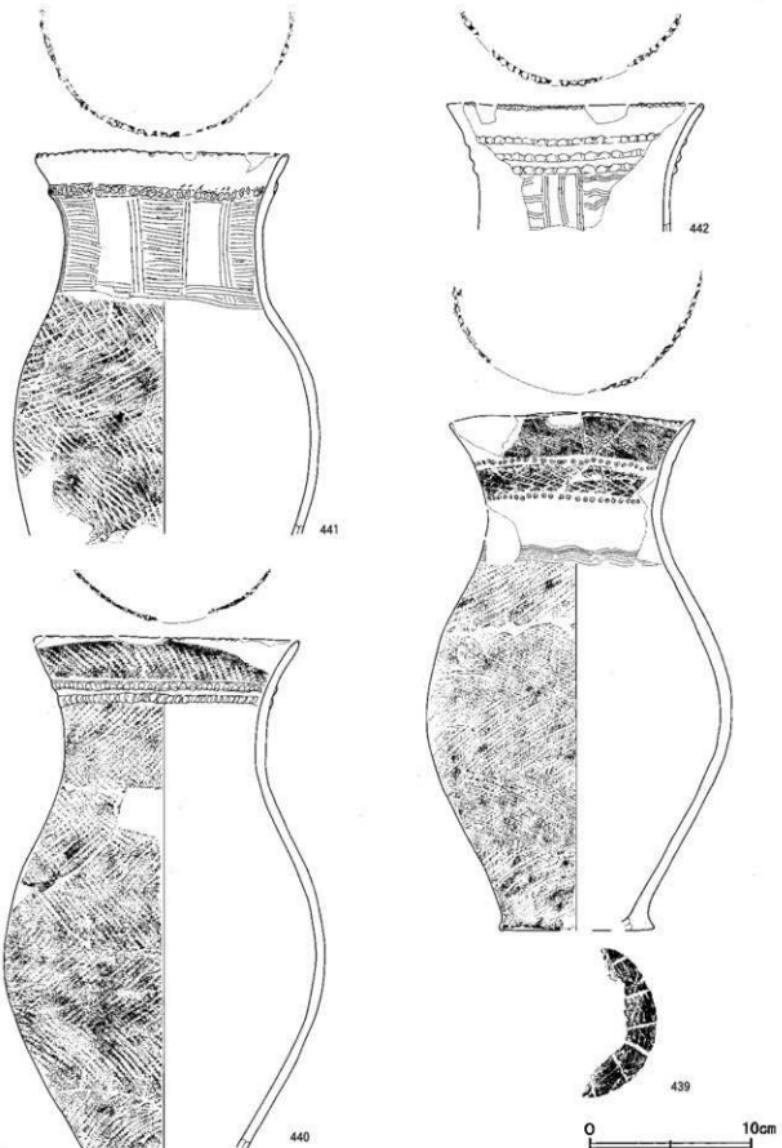
1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	4 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
2 増褐色 ロームブロック・炭化粒子微量	5 増褐色 炭化物・ローム粒子微量
3 黒褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量	6 褐色 ロームブロック少量、燒土粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片384点(広口壺), 土製品1点(紡錘車), 石製品1点(不明石製品), 磁4点も出土している。また、覆土下層の床面近くから炭化材が検出されていることから、焼失住居と考えられるが、火を受けて赤変した床面や焼土を確認することはできなかった。439はP4付近, 440は北東壁寄り, 441は北東コ一ナーカー寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。

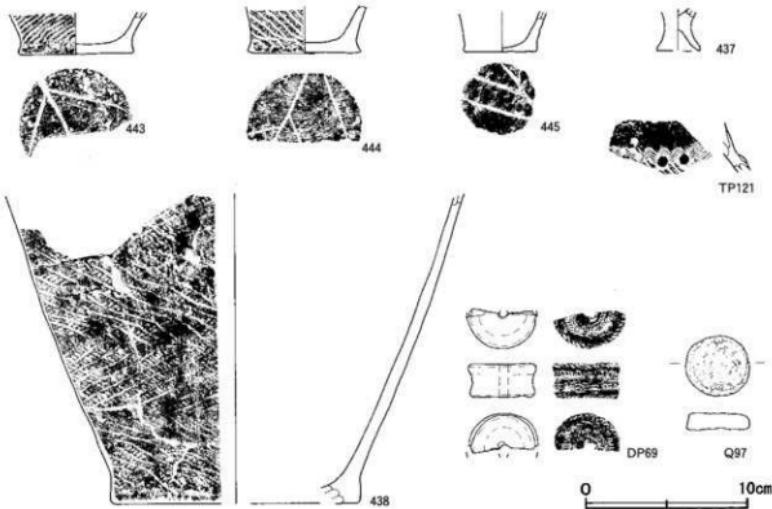
所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。また、炭化材の科学分析の結果、樹種はケヤキで、板材であることが判明している。これらは住居構築材であると考えられるが、同様に炭化材樹種同定を行った第141・143号住居跡と樹種が異なっており、住居・部材などにより樹種利用が異なっている可能性が指摘されている。



第54図 第156号住居跡実測図



第55図 第156号住居跡出土遺物実測図(1)



第156図 第156号住居跡出土遺物実測図(第55-56図)

第156号住居跡出土遺物観察表(第55-56図)

番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
437	弥生土器	高杯	-	(2.6)	[2.8]	長石・石英・雲母	に灰・椎	普通	脚部分	覆土中	30% ミニチュア
438	弥生土器	広口壺	-	(19.5)	[15.4]	長石・石英・雲母	に灰・椎	普通	脚部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 編織状	床面	20%
439	弥生土器	広口壺	14.9	22.0	[9.6]	長石・石英・雲母	に灰・椎	普通	口部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 編織状 口部部に底付押圧 口辺部から腹部に斜坡状二種(附加1条)の羽状構成 腹部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 腹部本葉底 脚部外側に斜坡状	覆土下層	80% 脚部外側斜坡 PL19
440	弥生土器	広口壺	[16.2]	[21.5]	-	長石・石英・雲母	に灰・椎	普通	口部に附加条二種(附加1条)を施す後に斜坡状二種(附加1条)の羽状構成 口部部に底付押圧 口辺部上位にやや豊竹管による軽度の凹凸のある種底2条 腹部に附加条一種(附加2条)の羽状構成	覆土下層	70% 周辺・脚部 外側斜坡付着 PL19
441	弥生土器	広口壺	15.4	(23.8)	-	長石・石英・雲母	に灰・椎	普通	口部に底付押圧 口辺部底付 口部上位にやや豊竹管による軽度の凹凸のある種底2条 腹部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	覆土下層	45% 周辺・脚部 外側斜坡付着 PL19
442	弥生土器	広口壺	[15.6]	(7.8)	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	に灰・椎	普通	口部に底付押圧 口辺部底付 口部上位にやや豊竹管による軽度の凹凸のある種底2条(2分野以上) 内に突出支承部	覆土下層	5% 口辺部から 脚部外側斜坡
443	弥生土器	広口壺	-	(2.6)	7.2	長石・石英・雲母	に灰・椎	普通	脚部に附加条二種(附加2条)の羽状構成	覆土中	5%
444	弥生土器	広口壺	-	(3.6)	7.2	長石・石英・雲母	灰陶	普通	脚部に附加条一種(附加2条)の羽状構成 腹部本葉底	覆土下層	5%
445	弥生土器	ミニチュア	-	(2.5)	4.5	長石・石英・雲母	に灰・椎	普通	脚部二枚 腹部本葉底	覆土中	10%
TP121	弥生土器	広口壺	-	(3.4)	-	長石・石英・雲母	に灰・椎	普通	脚部二枚(2分野以上)に底付斜坡 脚部に附加条二種(附加2条)の羽状構成	覆土中	5%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP69	前拂車	4.4	0.6	2.1	(25.5)	土(長石・石英・雲母)	両面及び側面に木軸竹管による刺穿	覆土上層	PL40

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q97	不明石製品	4.1	3.7	1.2	4.5	輕石	全面にぼかし研磨痕	床面	

第158号住居跡（第57～60図）

位置 調査区東部のD13h3区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置している。

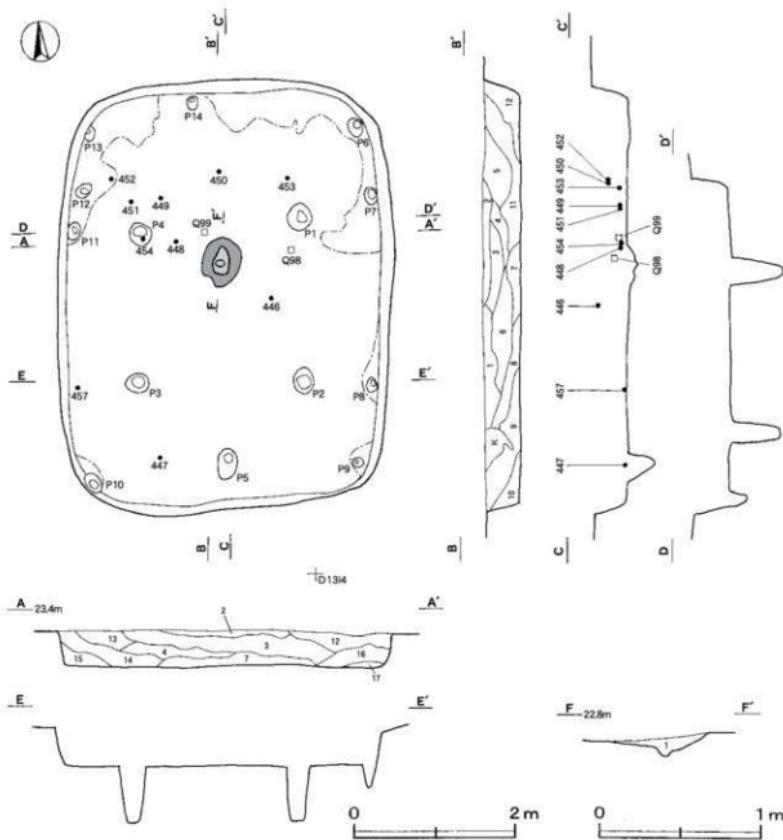
規模と形状 長軸5.35m、短軸4.18mの隅丸長方形で、主軸方向はN-2°-Eである。壁高は40~48cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部から壁面までが広く踏み固められている。

炉 中央部のやや北寄りに位置している。長径62cm、短径47cmの楕円形で、床面を11cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。また、炉石を据えていたと思われる5cmほどの窪みを確認することができた。

炉土層解說

1 黒褐色 焼土ブロック少量、炭化物微量



第57図 第158号住居跡実測図

ビット 14か所。P 1～P 4は深さ61～68cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ34cmで、配置から出入り口施設に伴うビットと考えられる。P 6～P 14は15～37cmで、住居を取り囲むように壁際に配置されていることから、壁柱穴と考えられる。

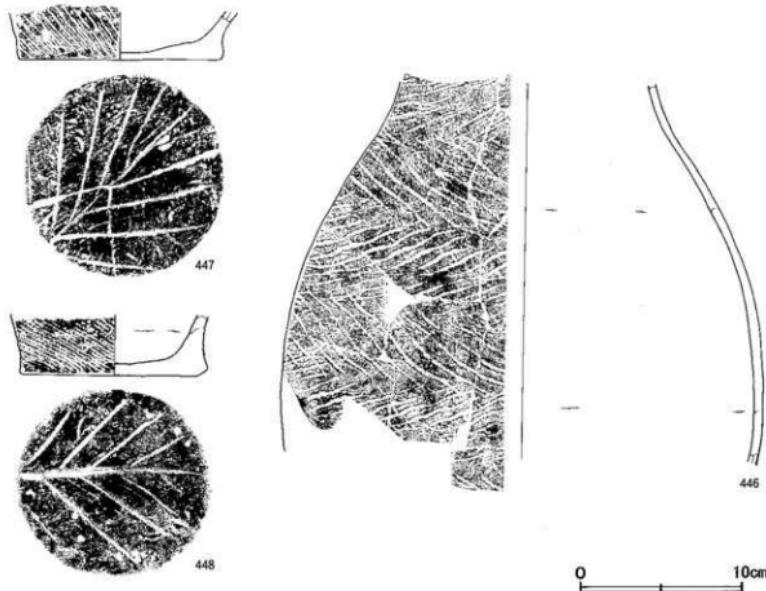
覆土 17層に分層される。第1～6層、第12・13層はブロック状の堆積状況を示す人為堆積であり、それ以外は自然堆積と考えられる。

土層解説

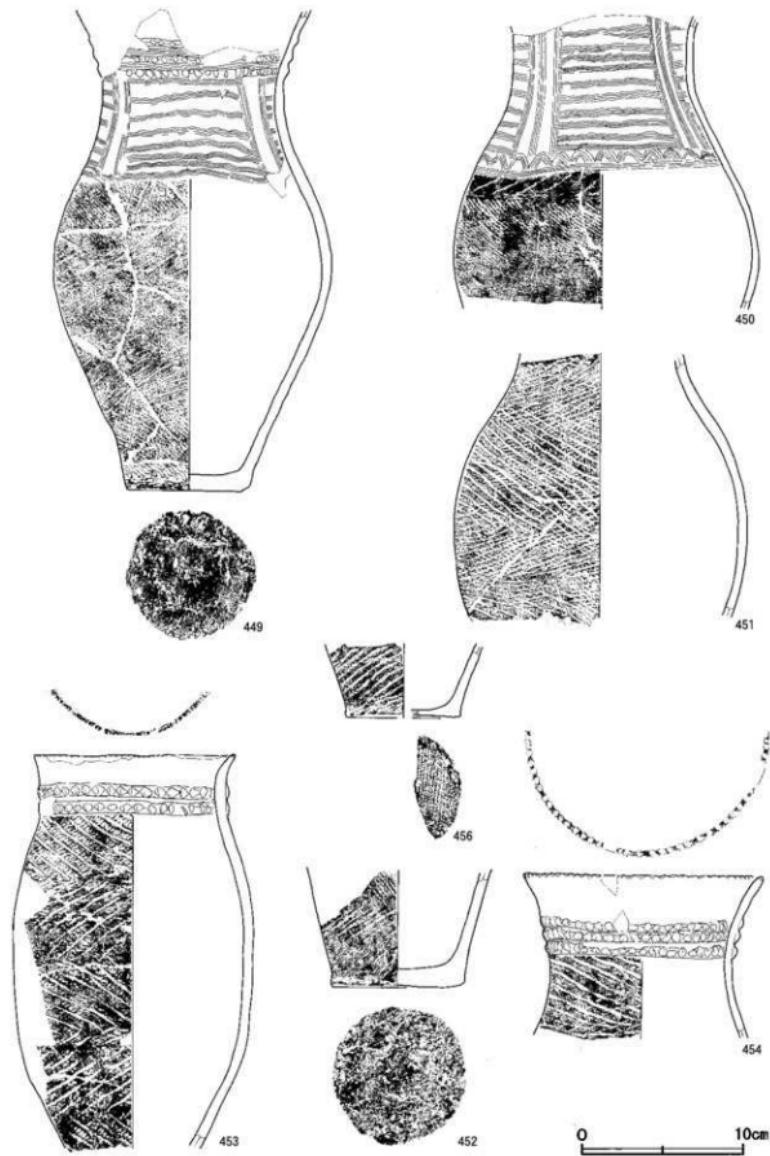
1 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	10 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	11 暗褐色	ローム粒子少量
3 楊柳褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	12 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	13 暗褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量
5 黒褐色	炭化物少量、ロームブロック・焼土ブロック微量	14 楊柳褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
6 楊柳褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	15 黒褐色	ロームブロック少量
7 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	16 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
8 暗褐色	ロームブロック少量	17 暗褐色	ローム粒子少量、炭化物微量
9 暗褐色	ロームブロック中量		

遺物出土状況 弥生土器片729点（広口壺726、片口壺3）、石製品4点（磨石1、敲石2、砥石1）が出土している。449はP 4付近の覆土下層、450は中央部北寄りの覆土中層から斜位の状態でそれぞれ出土している。また、457は西側壁際の床面から出土している。これらは、ほとんど北寄りの覆土中・下層から破片で出土しており、住居廃絶後の早い時期に投棄されたと考えられる。

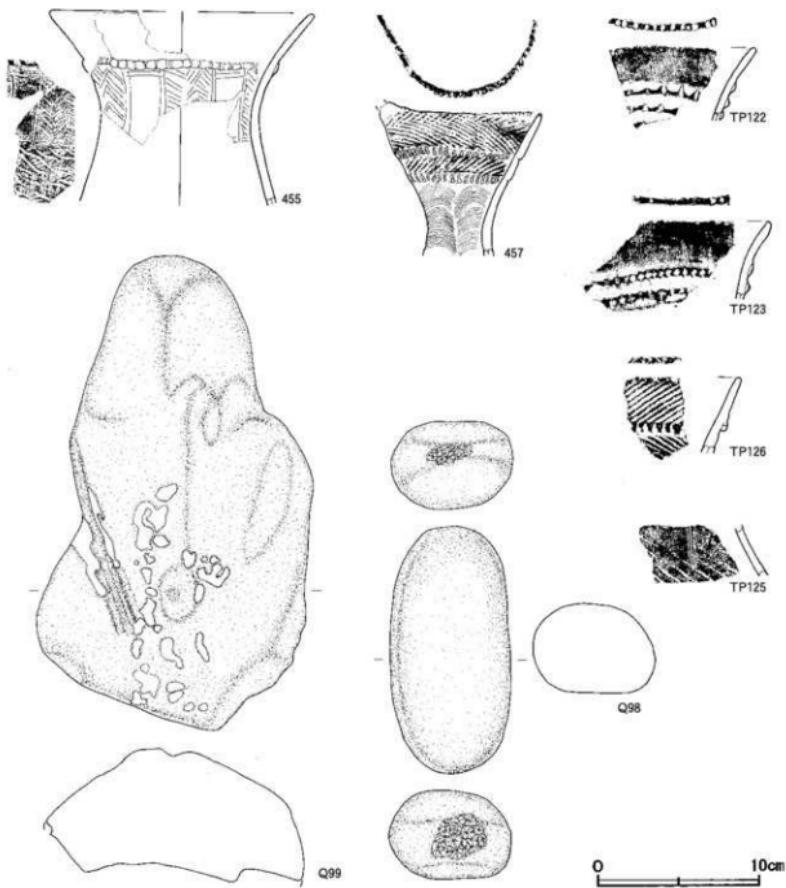
所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第58図 第158号住居跡出土遺物実測図(1)



第59図 第158号住居跡出土遺物実測図(2)



第60図 第158号住居跡出土遺物実測図(3)

第158号住居跡出土遺物観察表(第58~60回)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
455	陶生土器	広口壺	—	(20.9)	—	長石・石英・雲母 ・赤色粒子	二ぶ・黄褐色	普通	頭部から側面に附加彫二種(附加彫1条)の溝文 羽状構成、輪組状	覆土下層	15%
457	陶生土器	広口壺	—	(3.0)	12.5	長石・石英・雲母 ・赤色粒子	板	普通	脚部に附加彫一種(附加彫2条)の溝文、輪組状、底部木葉痕	床面	10%
458	陶生土器	広口壺	—	(0.9)	11.7	長石・石英・雲母 ・赤色粒子	二ぶ・黄褐色	普通	脚部に附加彫一種(附加彫2条)の溝文、輪組状、底部木葉痕	覆土下層	10%
459	陶生土器	広口壺	—	(29.7)	7.7	長石・石英・雲母 ・赤色粒子	扁平・板	普通	山形彫文、頭部上部に横波状工具による所の丸い隆起3ヶ 尾部頭部に輪組状工具(4本)による施文、同工具による紺目痕(4分野)でご波状文充填、脚部に附加彫一種(附加彫2条)の 溝文、輪組状痕	覆土下層 胎土外面模様	80% PL19
460	陶生土器	広口壺	—	(13.0)	—	長石・石英・雲母 ・赤色粒子	明黄褐色	普通	輪組状工具(4本)による3条一單位の縦区痕(4分野)内に 波状文充填、頭部下位に施文と直文、脚部に附加彫二種 (附加彫1条)上脚部彫一種(附加彫2条)の輪組状	覆土中層 胎土外面模様	30% PL21

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
451	弥生土器	広口壺	—	(16.1)	—	長石・石英・雲母・ 赤玉粒子	にい・赤鉄	普通	網目及び網目付附加条二種(附加1条)の織文	覆土下層	10% 橋脚外側保付着
452	弥生土器	広口壺	—	(7.2)	8.3	長石・石英・雲母・ 赤玉粒子	根	普通	網目付附加条一種(附加2条)の織文、底部調整痕	覆土中層	10%
453	弥生土器	広口壺	12.3	(24.2)	—	長石・石英・雲母・ 赤玉粒子	灰褐色	普通	口部附近に「山」字形溝文、網目上付に押付のある隆起2条 網目付附加条一種(附加1条)の織文	覆土下層	30% 口部・根 橋脚外側保付着
454	弥生土器	広口壺	14.8	(10.0)	—	長石・石英・雲母・ 赤玉粒子	灰褐色	普通	口部附近に「山」字形溝文、網目上付に押付のある隆起3条 網目付附加条一種(附加1条)の織文	覆土下層	20% 口部から 橋脚外側保付着
455	弥生土器	広口壺	[16.2]	(4.8)	—	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口部附近に「山」字形溝文、網目上付に押付のある隆起3条 網目付附加条一種(附加1条)の織文	覆土中	5% 橋脚外側保付着
456	弥生土器	広口壺	—	(4.6)	[7.2]	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口部附近に「山」字形溝文、網目上付に押付のある隆起1条、横 吹穴1孔(2孔)に上付(2孔) (2分割以上) 内に山形文を張 網目付附加条一種(附加1条)の織文	覆土中	5% 橋脚外側保付着
457	弥生土器	肩口壺	—	(9.4)	—	長石・石英・雲母	明褐色	普通	口部附近に「山」字形溝文、網目上付に押付のある隆起2条 吹穴1孔(2孔)に上付(2孔) (2分割以上) 内に山形文を張 横吹穴1孔(1孔)に上付(1孔)の溝文	床面	10%
TP22	弥生土器	広口壺	—	(4.5)	—	長石・石英・雲母	にい・黄鉄	普通	口部附近に「山」字形溝文、網目上付に押付のある隆起2条 吹穴1孔(2孔)に上付(2孔) (2分割以上) 内に山形文を張 横吹穴1孔(1孔)に上付(1孔)の溝文	覆土中	5% PL38
TP23	弥生土器	広口壺	—	(4.9)	—	長石・石英・雲母	にい・黄鉄	普通	口部附近に「山」字形溝文、網目上付に押付のある隆起2条 吹穴1孔(2孔)に上付(2孔) (2分割以上) 内に山形文を張 横吹穴1孔(1孔)に上付(1孔)の溝文	覆土中	5% PL38
TP25	弥生土器	広口壺	—	(3.2)	—	長石・石英・雲母	明褐色	普通	口部附近に「山」字形溝文、網目上付に押付のある隆起2条 吹穴1孔(2孔)に上付(2孔) (2分割以上) 内に山形文を張 横吹穴1孔(1孔)に上付(1孔)の溝文	覆土中	5% PL38
TP26	弥生土器	広口壺	—	(4.7)	—	長石・石英・雲母	褐	普通	口部附近に「山」字形溝文、網目上付に押付のある隆起2条 吹穴1孔(2孔)に上付(2孔) (2分割以上) 内に山形文を張 横吹穴1孔(1孔)に上付(1孔)の溝文	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 質	出土位置	備 考
Q96	礫石	15.3	7.5	5.5	1020.0	砂岩	肉瘤部に縦打痕、側面全面にわざと無理 火を火 けさせやすく赤熱 燃え盡きに耐え易い	覆土下層	
Q99	礫石	29.2	17.1	8.4	4380.0	砂岩	口部附近に溝文等に上付(1孔) 燃え尽きに耐え易い	覆土下層	

第159号住居跡（第61～65図）

位置 調査区東部のD13i3区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.10m、短軸4.60mの隅丸長方形で、主軸方向はN-1°-Eである。壁高は18～30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が広く踏み固められている。

炉 中央部のやや北寄りに位置している。長径101cm、短径66cmの橢円形で、床面を6cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。砂岩の炉石がL字状に炉床中央部に据えられていた。

炉土層解説

1 黒褐色 植物ブロック少量、ローム粒子微量

ピット 13か所。P 1～P 4は深さ32～53cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ31cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6～P 13は16～25cmで、住居を取り囲むように壁際に配置されていることから、壁柱穴と考えられる。

覆土 12層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 塗化粒子少量、ローム粒子微量

2 黑褐色 ロームブロック微量

3 黑褐色 ロームブロック・塗化ブロック・塗化粒子微量

4 黑褐色 ロームブロック・塗化物微量

5 極暗褐色 ロームブロック少量、塗土ブロック・塗化物微量

6 黑褐色 塗土ブロック少量、塗化物・ローム粒子微量

7 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・塗化物微量

8 暗褐色 ロームブロック少量、塗化物微量

9 黑褐色 ロームブロック微量

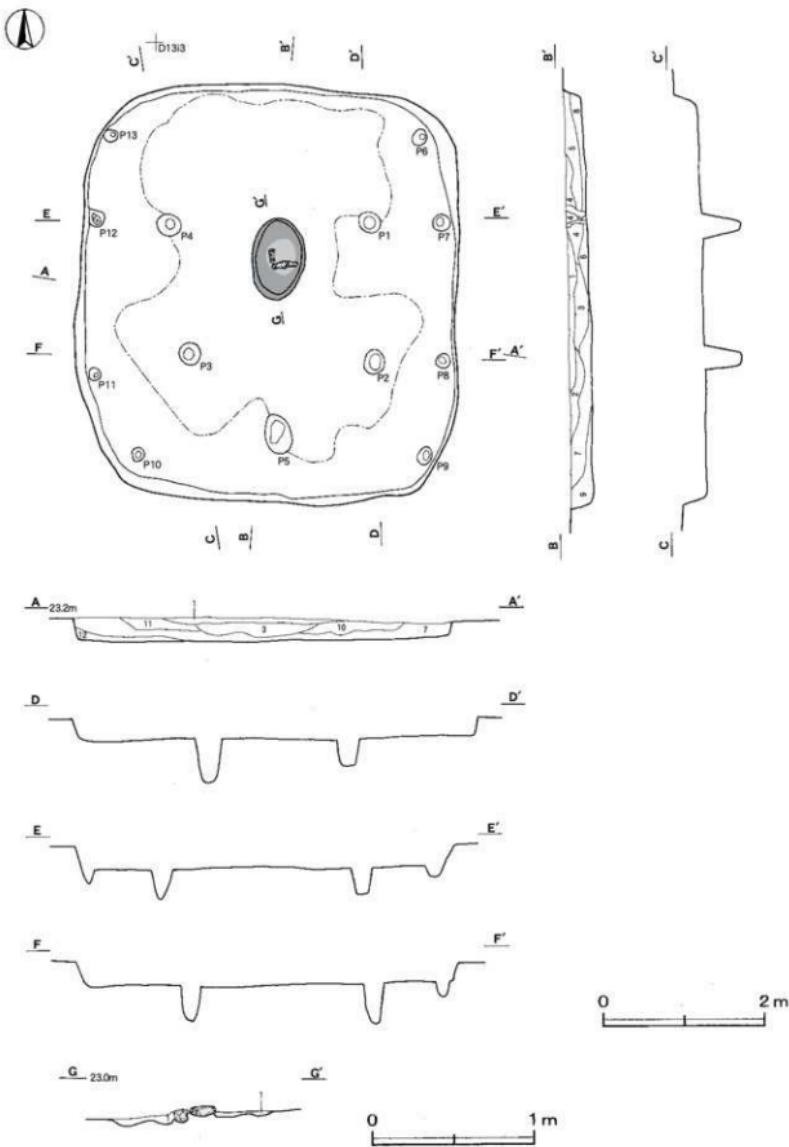
10 極暗褐色 烧土ブロック・ローム粒子微量

11 極暗褐色 ロームブロック・塗化物微量

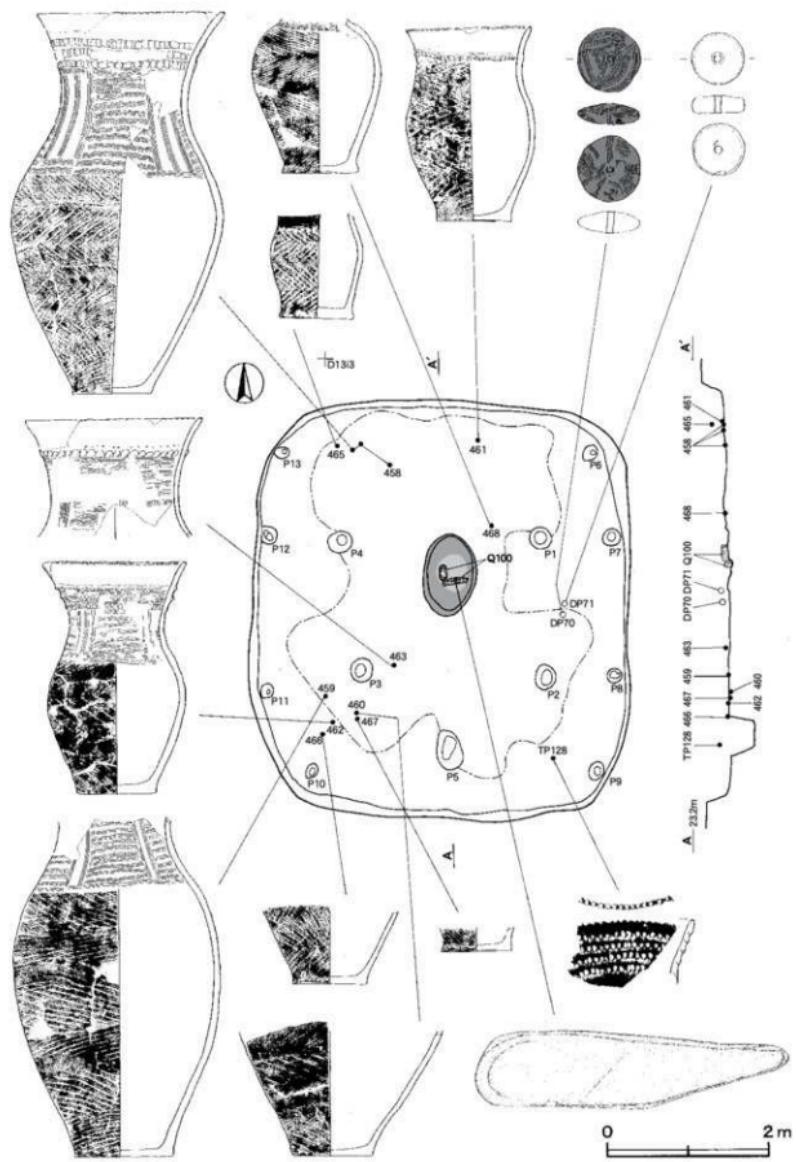
12 暗褐色 ロームブロック・塗化物少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片91点（広口壺）、土製品2点（紡錘車）、石製品4点（磨石1, 炉石1）、礫2点の他に、混入した織文土器片1点も出土している。458は北西コーナー部の床面、465は北西コーナー部覆土中層、459・462は南西コーナー部の床面、461は北側壁寄りの床面からそれぞれ出土している。また、DP70・DP71は東壁寄りの覆土下層から出土している。

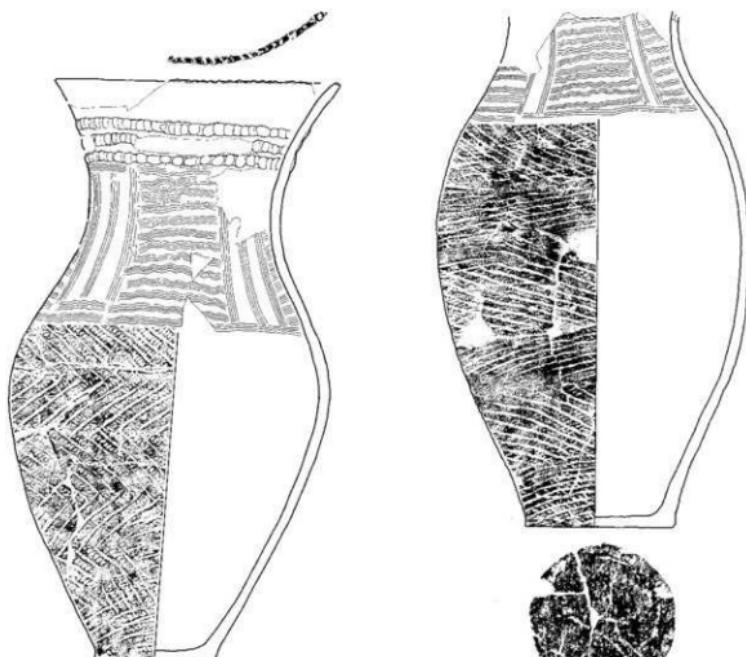
所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



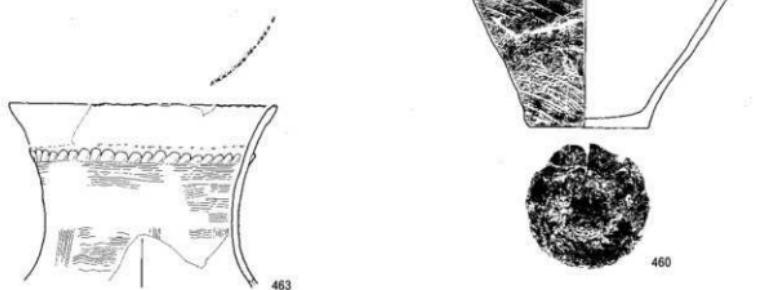
第61図 第159号住居跡実測図



第62図 第159号住居跡遺物出土状況図



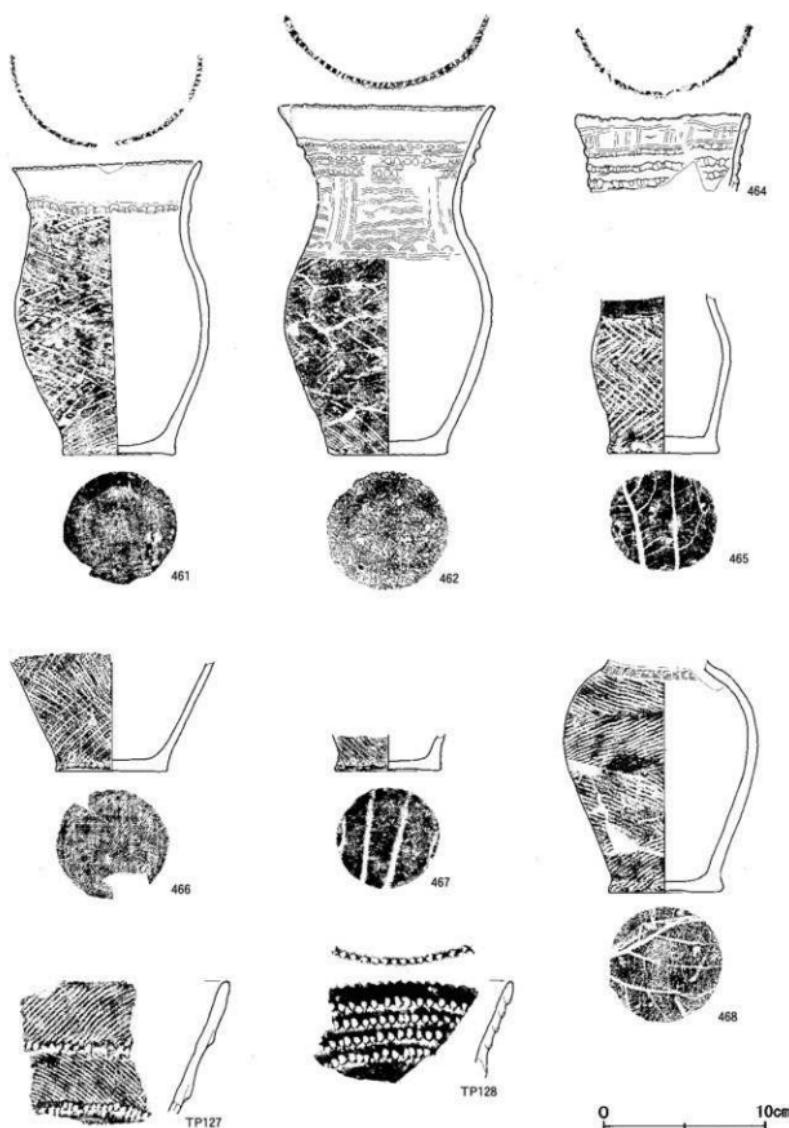
458



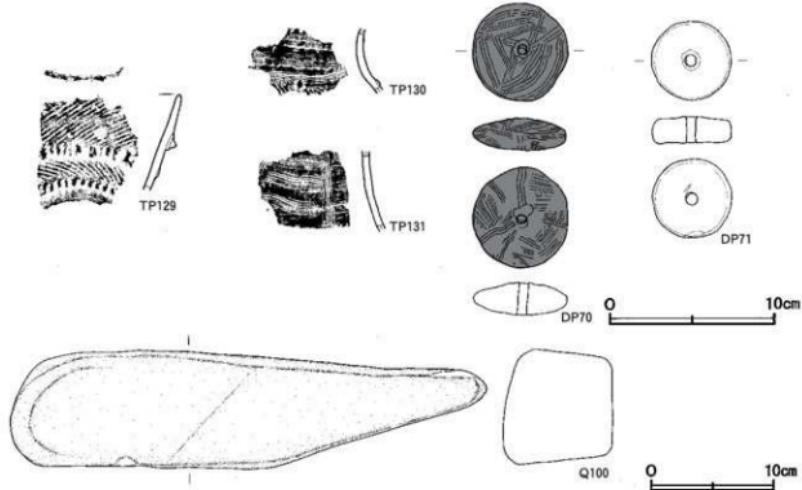
463



第63図 第159号住居跡出土遺物実測図(1)



第64図 第159号住居跡出土遺物実測図(2)



第65図 第159号住居跡出土遺物実測図(3)

第159号住居跡出土遺物観察表(第63~65図)

番号	種別	部種	口径	高さ	底径	地土	色調	使用	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
48	弥生土器	広口壺	[17.2]	25.4	7.4	長石・石英・雲母	に凹・楕	普通	口部底に束ね押印、口切削無文、頭部上位に斜い押印のあと底面3条、彫刻工具(4本)による3条+一部位の縦区画(4分割)内に斜め加条、脚部に斜め加条(脚加1条)の形状成形、底部有刷	床面	95% 床面・側壁 底面外側覆材 内部炭化物付着 PL20
49	弥生土器	広口壺	-	(31.5)	9.1	長石・石英・雲母	に凹・楕	普通	脚部有刷工具(3本)による3区画(4分割)内に波状文・羽状文、底部有刷	床面	80% PL20
50	弥生土器	広口壺	-	(11.0)	7.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	楕	普通	脚部に羽状文・楕(脚加1条)の形状成形、底部有刷	床面	5% 床面 底面外側覆材 内部炭化物付着 PL20
51	弥生土器	広口壺	11.4	18.0	6.8	長石・石英・雲母	に凹・楕	普通	口部底に束ね押印、口切削無文、頭部上位に半載竹管による斜め吹き込み棒1本、脚部に斜め加条(脚加1条)の形状成形、底部有刷	床面	95% 床面・側壁 底面外側覆材 内部炭化物付着 PL20
52	弥生土器	広口壺	13.0	21.5	7.3	長石・石英・雲母	に凹・楕	普通	口部底に束ね押印、口切削無文、頭部上位に彫刻工具による斜め吹き込み棒1本、底部有刷工具(3本)による波状文・羽状文、底部有刷工具による斜め吹き込み棒と斜め加条(脚加1条)の形状成形、底部有刷	床面	80% 床面外側覆材 内部炭化物付着 PL20
53	弥生土器	広口壺	[16.2]	(10.9)	-	長石・石英・雲母	浅黄褐	普通	口部底に束ね押印、口切削無文、頭部上位に斜め吹き込み棒による斜め吹き込み棒1本、底部有刷工具による波状文・羽状文、底部有刷工具による斜め吹き込み棒と斜め加条(脚加1条)の形状成形、底部有刷	覆土下層	10%
54	弥生土器	広口壺	[10.4]	(4.7)	-	長石・石英・雲母	に凹・楕	普通	口部底に束ね押印、口切削無文、頭部上位に彫刻工具(2本)による斜め吹き込み棒、任意の縦区画(4分割)内に波状文・羽状文、底部有刷工具による斜め吹き込み棒と斜め加条(脚加1条)の形状成形、底部有刷	覆土中層	5% 外面覆材
55	弥生土器	広口壺	-	(9.7)	6.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	に凹・楕	普通	頭部に束ね文・脚部に斜め加条(脚加1条)の形状成形、底部有刷	覆土中層	80% PL23
56	弥生土器	広口壺	-	(6.7)	6.8	長石・石英・雲母	楕	普通	頭部に斜め加条(脚加1条)と斜め加条(脚加1条)の形状成形、底部有刷	床面	10% 床面外側覆材
57	弥生土器	広口壺	-	(2.2)	6.5	長石・石英・雲母	灰黒	普通	脚部に斜め加条(脚加1条)の形状成形、底部有刷	床面	5% 床面外側覆材
58	弥生土器	壺	-	(14.0)	6.6	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	頭部下部に彫刻工具(7本)による斜め吹き文・脚部に斜め加条(脚加1条)の形状成形、底部有刷	床面	50% 床面
59	弥生土器	広口壺	-	(8.0)	-	長石・石英・雲母	浅黄褐	普通	口部底に束ね押印、2段階の複合工具、口部斜め加条(脚加1条)の形状成形、上下端とも下端に波状文・羽状文、底部有刷工具による斜め吹き込み棒と斜め加条(脚加1条)の形状成形、底部有刷	覆土中層	5%
60	弥生土器	広口壺	-	(5.9)	-	長石・石英・雲母	浅黄褐	普通	頭部に束ね押印、4段階の複合工具、各段とも下端に波状文・羽状文	覆土下層	5% PL38
61	弥生土器	広口壺	-	(5.6)	-	長石・石英・雲母	楕	普通	頭部有刷工具(3本)による斜め吹き文・脚部に斜め加条(脚加1条)と斜め加条(脚加1条)の形状成形、底部有刷	覆土中	5% PL39
62	弥生土器	片口壺	-	(3.9)	-	長石・石英・雲母	墨褐	普通	頭部下部斜め吹き工具(4本)による波状文・脚部下端斜め吹き工具による斜め吹き文・波状文	覆土中	5% 床面外側覆材
63	弥生土器	片口壺	-	(4.6)	-	長石・石英・雲母	普通	頭部下端斜め吹き工具(7本)による縦区画内に波状文	覆土中	5% 床面	

番号	器種	最大径	口径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
IP70	粘土器	6.0	0.6	2.0	64.5	土(表石/石英-漂母)	表面に輪廓切工具(3本)による不規則な輪文(側面に同工具による輪文)、一方凹の穿孔	覆土下層	PL40
IP71	粘土器	4.8	0.7	1.6	49.8	土(表石/石英-漂母)	丁寧なナギ 一方凹の穿孔	覆土下層	PL40

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q100	炉石	38.7	9.7	8.9	4220.0	砂岩	火を受けて赤変	炉底面	

表3 弥生時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面 柱穴 三辺 ビット 伊	内部施設		覆土	主な出土遺物	時期	新旧關係 (旧→新)
							柱穴	三辺 ビット				
88	D9a5	N-29°-W	隅丸長方形	5.53 × 4.12	14~48	平坦	4	—	1	人為 弥生土器、土製品、石製品、鐵文土器、土師器	後期後半	本跡→SI167
90	D9d9	N-2°-W	[隅丸方形]	5.00 ×(4.70, 6~66	平坦	4	1	—	1	自然 弥生土器、土製品、石器、鐵文土器、土師器	後期後半	本跡→SI70-80
92	D9c7	N-43°-W	[円形]	[8.30] × 7.80	20~48	平坦	4	2	1	自然 弥生土器、土製品、石器、鐵文土器、土師器	後期後半	本跡→SI80-95/96
96	D9d6	N-53°-W	隅丸長方形	6.08 × 4.89	30~44	平坦	4	1	—	1 自然 弥生土器、土製品、石器、鐵文土器、土師器	後期後半	SI92→本跡
100	D9e6	N-38°-W	隅丸長方形	5.76 × 4.92	20~36	平坦	4	1	—	1 自然 弥生土器、鐵文土器、土師器	後期後半	本跡→SI99
105	D9d2	N-54°-W	隅丸長方形	4.93 × 4.70	30~44	平坦	3	—	15	2 人為 弥生土器、手作土器、鐵文土器、土師器	後期後半	本跡→SI106-116
112	C9J1	N-34°-W	隅丸長方形	5.23 ×[3.94, 12~17]	平坦	3	1	3	1	自然 弥生土器、土製品、石器、鐵文土器、土師器	後期後半	本跡→SI110-111
114	D9d3	N-26°-W	隅丸方形	6.00 × 5.92	23~41	平坦	4	1	—	1 自然 弥生土器、土製品、石器、鐵文土器、土師器	後期後半	本跡→SI1
134	D8d9	N-29°-W	[隅丸長方形]	6.62 × 2.32	8~12	平坦	2	—	—	1 人為 弥生土器、鐵文土器、土師器	後期後半	本跡→SI133-134→SI2-476n 本跡
137	D9e4	N-8°-W	[隅丸長方形]	6.50 × 5.86	12~46	平坦	2	1	—	1 自然 弥生土器、鐵文土器、土師器	後期後半	SD99.101-SI63-1 SI2-SI166 1号墓竪坑
141	D10e6	N-8°-W	[隅丸方形]	5.00 × 4.72	5	平坦	4	—	—	1 不明 弥生土器、炭化材	後期後半	本跡→SI142- SI96-187-SD7
143	D10g9	N-50°-W	[隅丸長方形]	5.60 × 4.70	20~45	平坦	3	—	—	1 人為 弥生土器、炭化材	後期後半	
148	D11J9	N-44°-W	[隅丸方形]	[3.70 × 3.40]	14	平坦	—	—	—	1 不明 弥生土器、鐵文土器、土師器	後期後半	本跡→SI146
149	D11J7	N-53°-W	[隅丸方形] [隅丸長方形]	[5.90 × 1.12]	16	平坦	—	—	—	1 自然 弥生土器、鐵文土器、土師器	後期後半	本跡→SI146
152	D11f6	N-15°-W	[隅丸方形]	5.30 × 3.60	—	平坦	2	1	—	1 不明 弥生土器	後期後半	
153	D12h2	N-53°-W	[隅丸方形]	5.10 × 4.70	—	平坦	—	—	—	1 不明 弥生土器	後期後半	
154	D12g1	N-31°-E	[隅丸長方形]	4.30 × 3.90	—	平坦	—	1	—	1 不明 弥生土器、石製品、真實土器、鐵文土器、土師器	後期後半	
155	D12f3	N-55°-E	[隅丸長方形]	5.26 ×[4.30]	7	平坦	4	—	—	1 不明 弥生土器	後期後半	
156	D12g5	N-50°-W	隅丸長方形	5.10 × 4.26	20~32	平坦	4	1	—	1 人為 弥生土器、土製品、石製品、鐵文土器、土師器	後期後半	
158	D13h3	N-2°-E	隅丸長方形	5.35 × 4.18	40~48	平坦	4	1	9	1 人為 自然 弥生土器、石製品	後期後半	
159	D13i3	N-1°-E	隅丸長方形	5.10 × 4.60	18~30	平坦	4	1	8	1 自然 弥生土器、土製品、石製品、鐵文土器	後期後半	

(2) 土坑

第174号土坑（第66図）

位置 調査区東部のD12e2区で、標高23.4mほどの台地上に位置している。

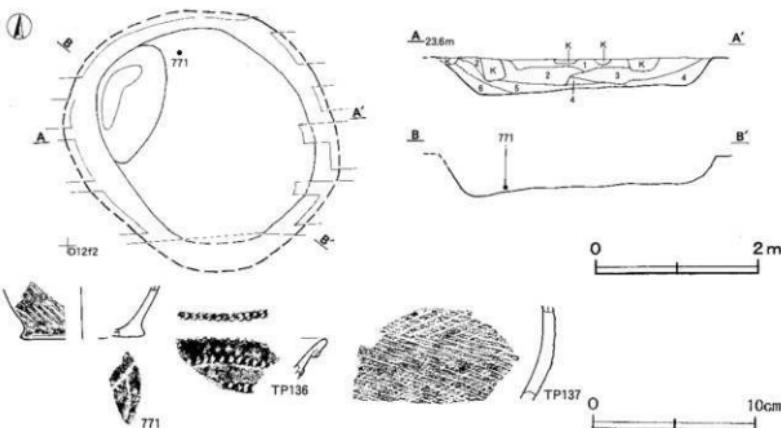
規模と形状 長径3.36m、短径3.00mの楕円形で、深さは32~50cmである。主軸方向はN-73°-Wで、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、北西方向に緩やかに傾いている。

覆土 6層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------------|
| 1 灰褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 灰褐色 | ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 5 喀褐色 | 粘土ブロック多量、ロームブロック・炭化物微量 |
| 3 灰褐色 | ロームブロック少量、炭化物、燒土粒子微量 | 6 喀褐色 | 粘土ブロック多量、ローム粒子中量、炭化物微量 |

遺物出土状況 弥生土器片31点（広口壺）が出土している。771は北側壁際の覆土下層から出土している。
所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器から弥生時代後半と考えられる。



第66図 第174号土坑・出土遺物実測図

第174号土坑出土遺物観察表(第66図)

番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
771	弥生土器	広口壺	-	0.1	7.8	粘土石英質 赤色粒子	灰褐色	普通	輪郭附加条（附加1条）の溝文 底部木葉痕	覆土下層	5%
TP136	弥生土器	広口壺	-	0.9	-	長石・石英・雲母	褐	普通	口唇部・口辺部に原形押捺 覆土中層	覆土中	5%
TP137	弥生土器	広口壺	-	0.7	-	長石・石英・雲母	褐	普通	輪郭附加条（附加2条）の溝文 刃状構成	覆土中	5%

3 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では、中位段丘から台地上にかけて古墳時代後期の住居跡37軒が確認された。以下、遺構と遺物について記載する。

竪穴住居跡

第72号住居跡（第67図）

位置 調査区西部のD10g3区で、標高17.2mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 耕作による搅乱が激しく、全体を検出することはできなかったが、N-5°-Eを主軸方向とする長軸3.00m、短軸3.46mほどの方形と推定される。壁高は50cm前後で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

窓 火床部や袖、煙道部の掘り込みなどは検出できなかったが、北壁の中央部付近に砂質粘土の散らばりが確認されたことから、北壁中央部に付設されていたと想定される。

覆土 2層に分層されるが、耕作による搅乱が激しいため堆積状況は不明である。

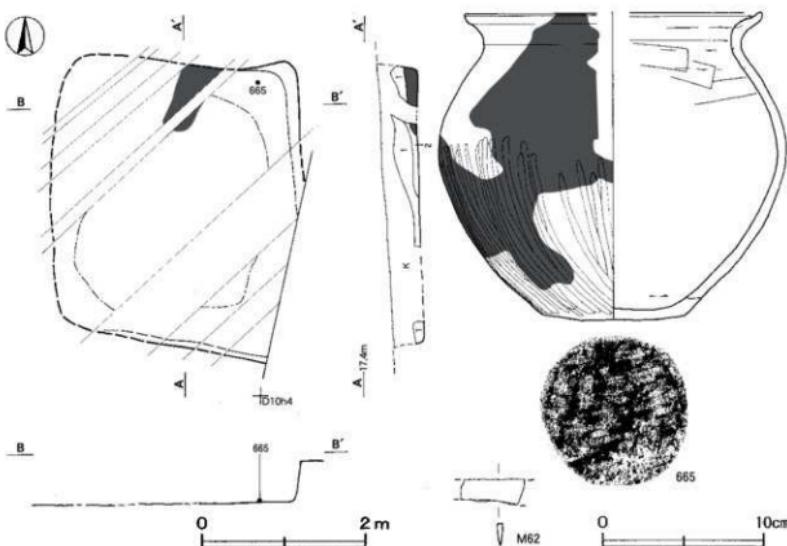
土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量

2 暗褐色 砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片20点(坏2、甕18)の他に、耕作による搅乱で混入した弥生土器片9点、須恵器片12点、灰釉陶器片1点も出土している。665は北東コーナー部の床面、M62は覆土中からそれぞれ出土している。その他は細片のため図示できない。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から時期は7世紀前半と考えられる。



第67図 第72号住居跡・出土遺物実測図

第72号住居跡出土遺物観察表(第67図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
665	土師器	甕	[18.2]	18.9	9.0	長心・芯窓・雲母 に白・赤鉄	普通	口沿部内・外面模子アラ 体部中央から下端へフ透き ナナフ 輪組付	床面	50% 外面模付着	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M62	刀子	(4.0)	1.6	0.4	(5.5)	鐵	刀身の一部 切先・茎尻欠損	覆土中	

第77号住居跡(第68・69図)

位置 調査区西部のD 9・19区で、標高15mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第98号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.60m, 短軸3.52mの方形で、主軸方向はN-28°-Wである。壁高は4~12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

窓 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで112cmである。袖部幅は85cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しているが、赤変や硬化部分は確認されなかった。煙道部は、壁外へ34cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

塗土層解説

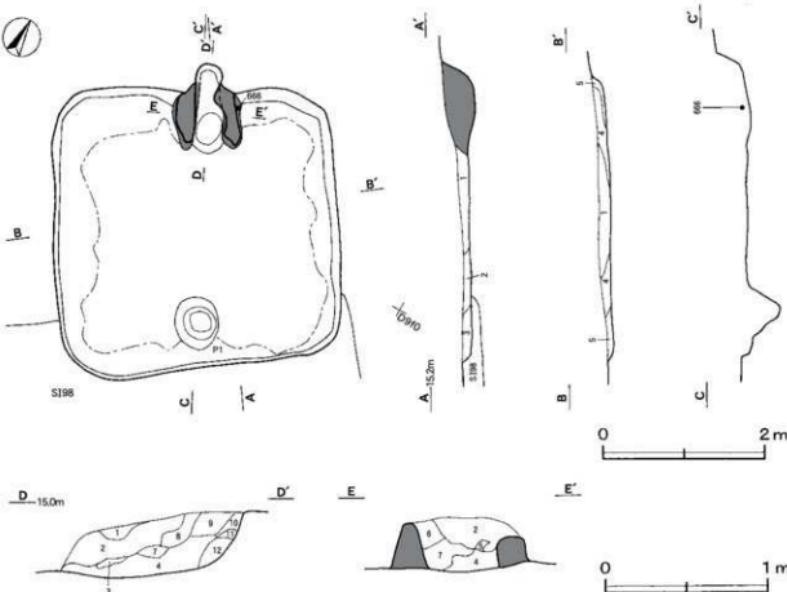
1	に赤褐色	砂質粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	7	褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
2	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量	8	褐色	砂質粘土粒子多量、焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量
3	灰褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量	9	黒褐色	炭化粒子中量、焼土粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量
4	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量	10	褐色	焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量
5	黒褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	11	黒褐色	炭化粒子中量、ローム粒子微量
6	明褐色	炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量	12	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量

ピット 1か所。深さは40cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

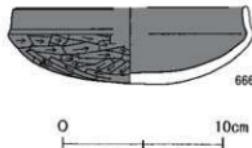
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	4	黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
3	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量			



第68図 第77号住跡実測図



第69図 第77号住居跡出土遺物実測図

第77号住居跡出土遺物観察表(第69図)

番号	種別	器種	口径	基高	底径	粘土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
666	土師器	环	[14.3]	4.7	—	長心石器質跡 赤土粒子	にじみ 褐色	普通	口沿部内・外面積ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	床面	60%

第79号住居跡（第70～73図）

位置 調査区西部のD 9 d8区で、標高15.2mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第80・90号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 一边が4.80mほどの方形で、主軸方向はN-18°-Wである。壁高は20~66cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで116cmである。袖部幅は84cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けで赤変硬化している。煙道部は、壁外へ16cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第3層は天井部の崩落層であると考えられる。

遺土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|-------------------------------|----|-------|---------------------------|
| 1 | 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量、ロームブロック・燒土ブロック・炭化物微量 | 5 | 同じ暗褐色 | 燒土粒子中量、砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 | 同じ | 砂質粘土粒子中量、炭化物・ローム粒子・燒土粒子微量 | 6 | 黒褐色 | 燒土粒子少量、ローム粒子・炭化物粒子微量 |
| 3 | 灰褐色 | 砂質粘土粒子多量、ローム粒子・燒土粒子・炭化物粒子微量 | 7 | 同じ | 砂質粘土粒子中量、炭化物粒子少量、燒土ブロック微量 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子・燒土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化物微量 | 8 | 黒褐色 | 燒土粒子・砂質粘土粒子微量 |
| | | | 9 | 黒褐色 | 砂質粘土粒子少量、ローム粒子・燒土粒子微量 |
| | | | 10 | 黒褐色 | ローム粒子・燒土粒子・砂質粘土粒子微量 |

ピット P 1～P 4は深さ48~54cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ22cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

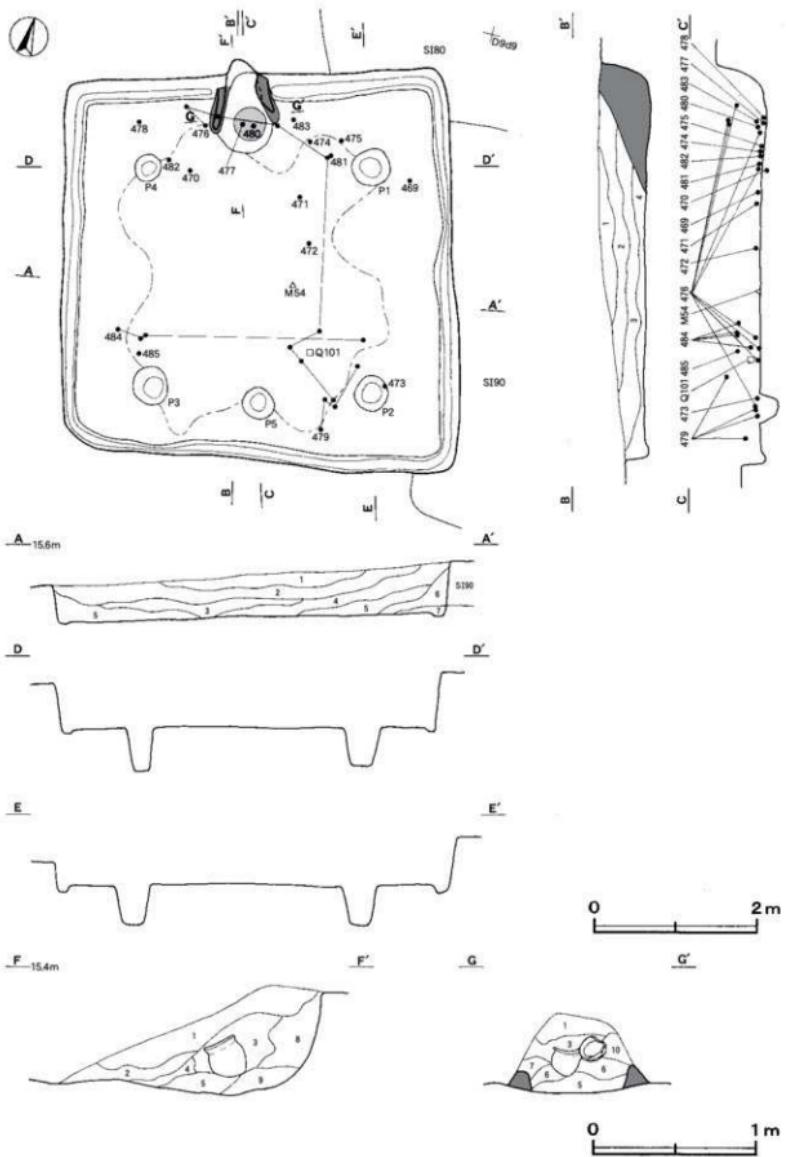
覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示しているが、遺物の出土状況や接合関係などから人為堆積と考えられる。

土層解説

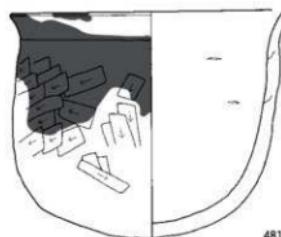
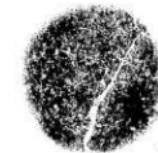
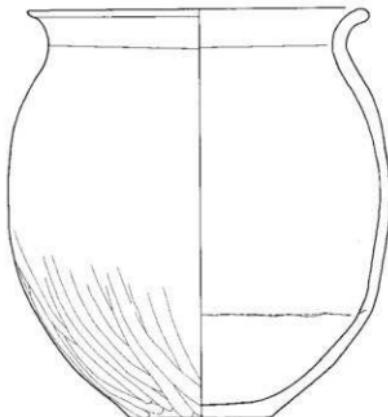
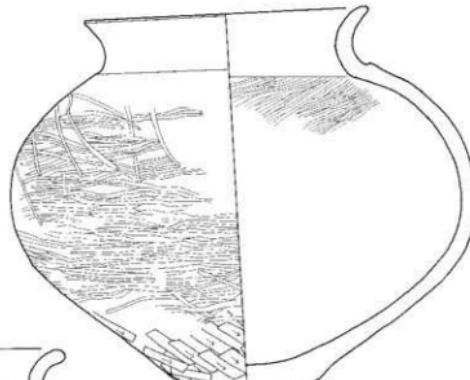
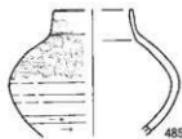
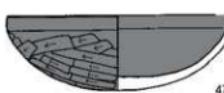
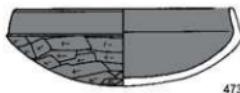
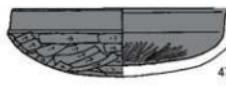
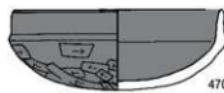
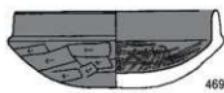
- | | | | | | |
|---|-----|----------------------|---|-----|-------------------|
| 1 | 暗褐色 | 燒土粒子少量、ローム粒子・炭化物粒子微量 | 5 | 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化物粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子・燒土粒子・炭化物粒子微量 | 6 | 黒褐色 | 炭化物粒子少量、ローム粒子微量 |
| 3 | 黒褐色 | 炭化物粒子少量、燒土粒子微量 | 7 | 黒褐色 | 炭化物粒子少量、ロームブロック微量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物粒子微量 | | | |

遺物出土状況 土師器片421点（坏類78、高坏 6、壺 1、甕334、瓶 2）、須恵器片5点（壺類1、瓶類4）、土製品1点（支脚）、石器1点（砥石）、鐵製品1点（刀子）、礫1点の他に、混入した弥生土器片53点、須恵器片10点も出土している。469は東壁のやや北側、470は北西コーナー寄り、472は中央部、471・474は中央部のやや竈寄りの床面からそれぞれ出土している。477・480は竈内からの出土で、住居廃絶時には竈に掛けられた状態で遺棄された可能性が高い。

所見 時期は、出土土器などから6世紀中葉と考えられる。

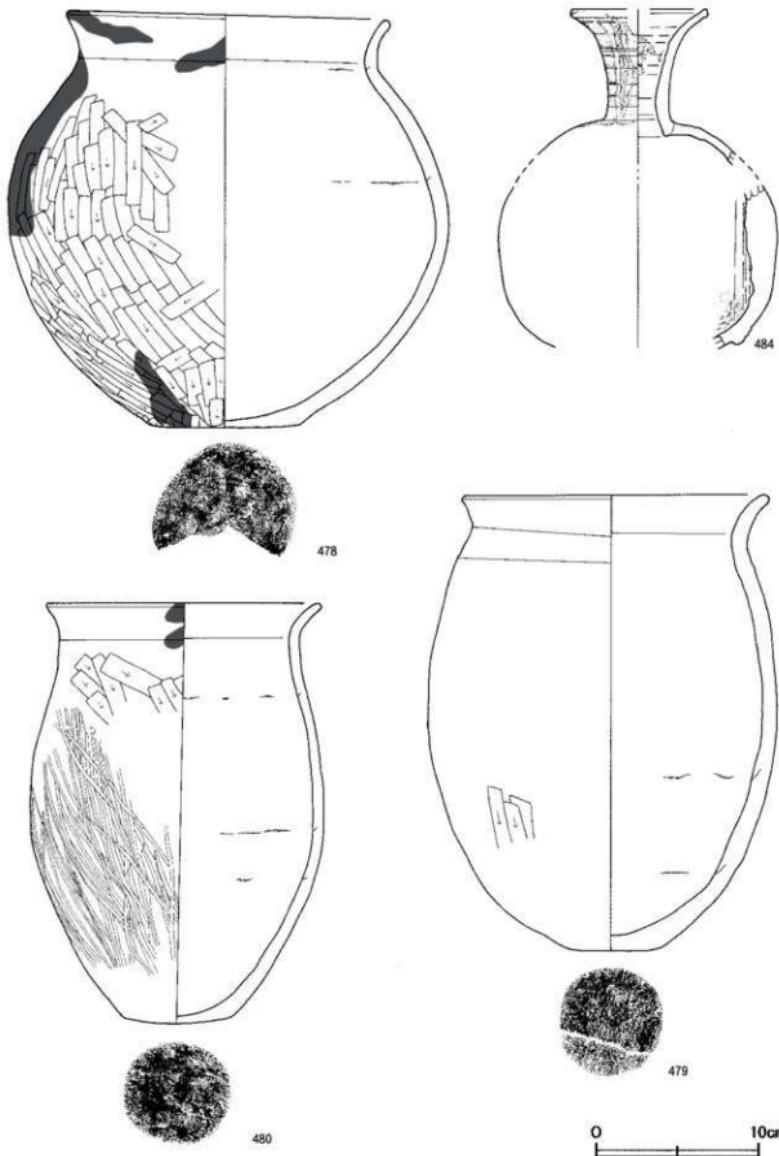


第70図 第79号住居跡実測図

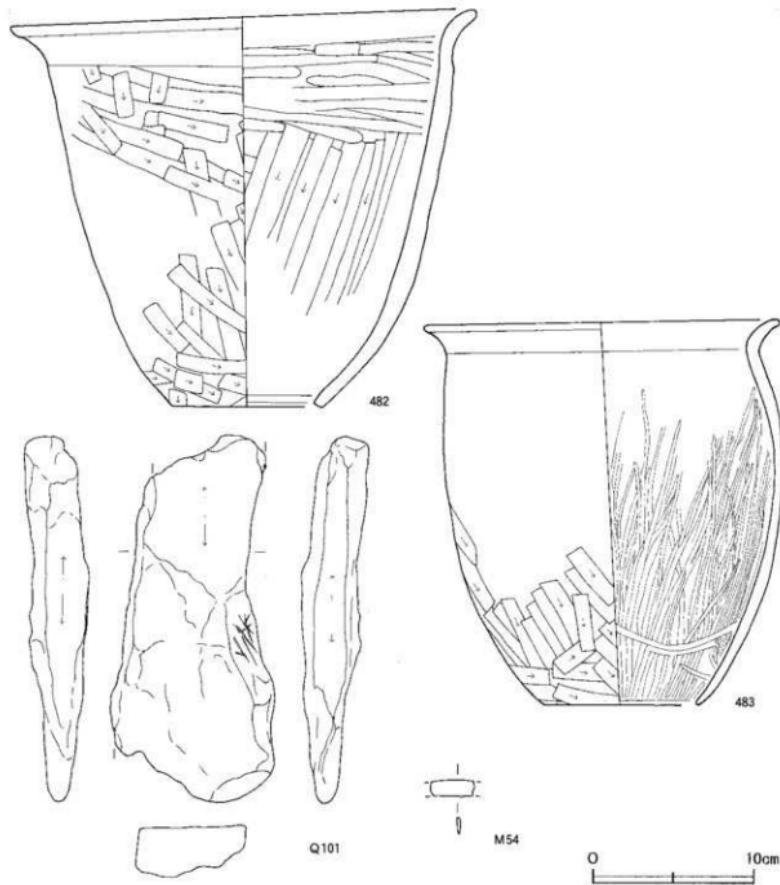


0 10cm

第71図 第79号住居跡出土遺物実測図(1)



第72図 第79号住居跡出土遺物実測図(2)



第73図 第79号住居跡出土遺物実測図(3)

第79号住居跡出土遺物観察表(第71~73図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
469	土師器	环	12.4	4.8	—	長石・石英・雲母・金剛粒子	褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ削き	床面	100% PL24
470	土師器	环	13.0	5.0	—	長石・石英・赤色粒子	紅・赤褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	床面	95% PL24
471	土師器	环	13.4	4.2	—	長石・雲母	灰・黄褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ削き	床面	95%
472	土師器	环	13.3	5.2	—	長石・石英・赤色粒子	暗赤褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	床面	95%
473	土師器	环	13.3	4.8	—	長石・石英・雲母	紅・赤褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	床面	60% PL24
474	土師器	环	13.2	4.3	—	長石・石英・雲母	紅・赤褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ削き	床面	100% PL24
475	土師器	环	13.9	4.6	—	長石・石英・雲母	淡褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	床面	60%

番号	種別	部種	口径	厚高	底径	粘土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
476	土鍋器	壺	17.2	23.3	8.6	長石・石英・鐵	にぬ・橙	良好	口沿面内・外表面ナグ・体部外面へラ削り 体部上部が らちで内へラ削き 一部内部へラ削き	壇上層 ～下層	80% PL30
477	土鍋器	便	20.6	25.3	9.6	長石・石英・鐵	明赤褐	良好	口沿面内・外表面ナグ・体部外面へラ削り後ヘラナグ 内面へナグ・輪郭削	壇内	100% PL31
478	土鍋器	甕	19.8	25.8	9.0	長石・石英・赤色 粘土・鐵	褐	普通	口沿面内・外表面ナグ・体部外面へラ削り 内面ナグ 輪郭削	床面	50% 口沿部・周 部・外縁付着
479	土鍋器	甕	18.3	28.1	6.4	長石・石英・鐵	にぬ・橙	普通	口沿面内・外表面ナグ・体部外面下部へラ削り 内・外 面ナグ・輪郭削	壇上層 ～中層	
480	土鍋器	便	16.8	26.0	6.7	長石・石英・鐵	橙	普通	口沿面内・外表面ナグ・体部外面へラ削り後ヘラ削き	壇内	95% 口沿部外面 PL31
481	土鍋器	小形甕	17.1	14.0	—	長石・石英・鐵	にぬ・橙	普通	口沿面内・外表面ナグ・体部外面へラ削り 内面ナグ 輪郭削	床面	100% 口沿部外面 PL23
482	土鍋器	甕	25.6	24.6	9.2	長石・石英・鐵	二つ・黄褐	普通	口沿面内・外表面ナグ・体部内・外面へラ削り 内面ナグ 輪郭削	床面	95% PL22
483	土鍋器	甕	21.7	23.8	9.7	長石・石英・鐵	にぬ・橙	普通	口沿面内・外表面ナグ・体部外面へラ削り後ヘラ削き	床面	95%
484	窯窓器	裡窓	[8.2]	[20.9]	—	長石・鐵	灰オリーブ	良好	クロコ形 窓口部外面に沈殿 内・外面開灰による目 地窓	壇上層 ～中層	15%
485	窯窓器	裡窓	[4.8]	[7.0]	—	砂粒	明褐色	良好	体部下端回転へラ削り 口沿部・体部上部、隣灰による 自然剥離	壇上層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q100	砾石	(22.6)	10.1	3.1	(900.5)	褐灰色	砂面3面	壇上中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M54	刀子	(2.2)	0.7	0.2	(0.9)	鉄	刃身の一部 刃先・裏尻欠損	床面	

第80号住居跡（第74～77図）

位置 調査区西部のD 9 c9区で、標高15.7mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第90・92号住居跡を掘り込み、第79号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.70m、短軸7.40mの方形で、主軸方向はN-20°-Wである。壁高は8～58cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで115cmである。袖部幅は86cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けけて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ36cm掘り込まれ、火床面から急激に立ち上がっている。

竈土層解説

1 黒褐色	燒土ブロック・砂質粘土粒子・ローム粒子微量	9 極暗褐色	砂質粘土粒子中量、燒土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
2 褐色	砂質粘土粒子中量、炭化粒子少量、燒土粒子微量	10 黑褐色	燒土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
3 極暗褐色	燒土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	11 黃褐色	砂質粘土粒子多量、燒土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
4 黑褐色	ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量	12 暗赤褐色	燒土ブロック中量、炭化粒子少量、砂質粘土粒子微量
5 増赤褐色	燒土ブロック中量、砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	13 極暗褐色	ローム粒子・燒土粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
6 暗褐色	炭化粒子少量、燒土ブロック・ローム粒子微量		
7 黑褐色	ローム粒子・炭化粒子微量		
8 黑褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量		

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ56～70cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ37cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 14層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	8 黑褐色	燒土粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・炭化物微量
2 黑褐色	炭化物微量・ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
3 黑褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	10 黑褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量
4 黑褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・燒土粒子微量	11 黑褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
5 黑褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量	12 黑褐色	燒土・炭化物・ローム粒子微量
6 黑褐色	ローム粒子微量	13 黑褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
7 黑褐色	ロームブロック・燒土ブロック・炭化粒子微量	14 黑褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量

貯蔵穴 南壁中央部の壁際に位置し、長軸81cm、短軸74cmの長方形で、深さは22cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

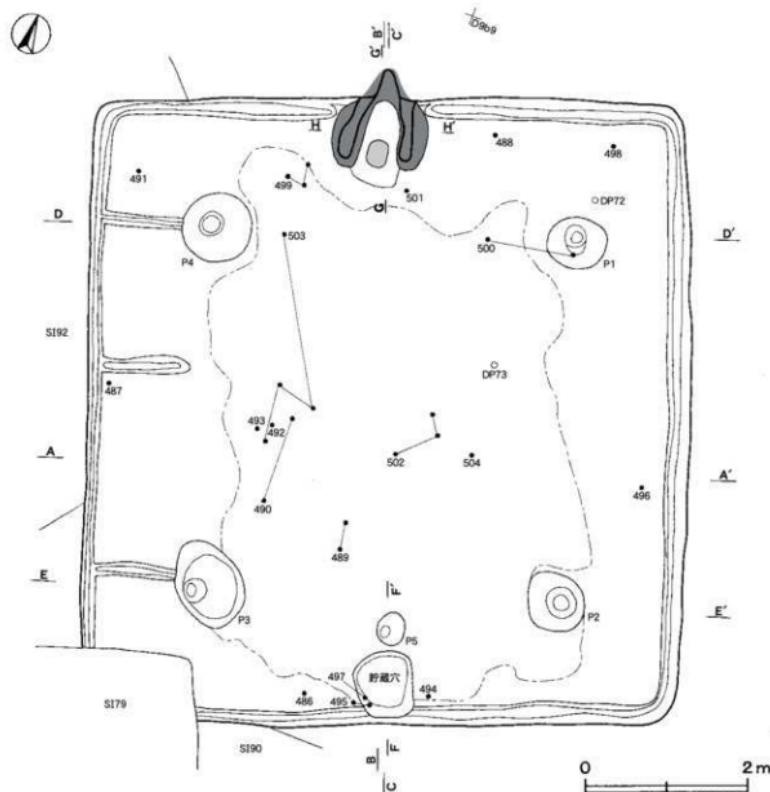
貯蔵穴土層解説

- 1 黒 色 炭化粒子微量
- 2 黒 関 色 ローム粒子・炭化粒子微量

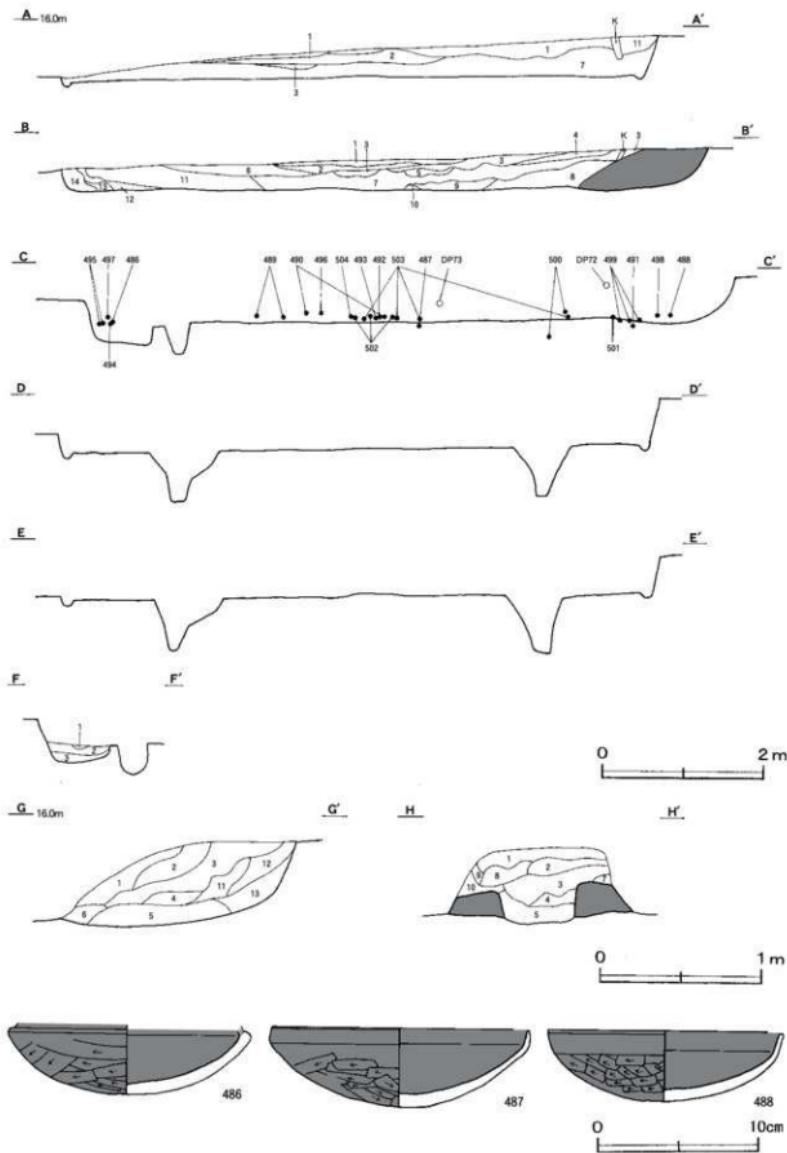
3 増 棚 色 ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片1352点（坏457、高坏31、楕12、鉢3、壺1、甕847、瓶1）、ミニチュア土器1点、土製品7点（球状土錐）、繩8点の他に、流れ込んだ縄文土器片5点、弥生土器片256点、須恵器片8点も出土している。486・494・495は南壁際から、487は西壁際から488は北壁際から、499・501は竈付近の床面からそれぞれ出土している。

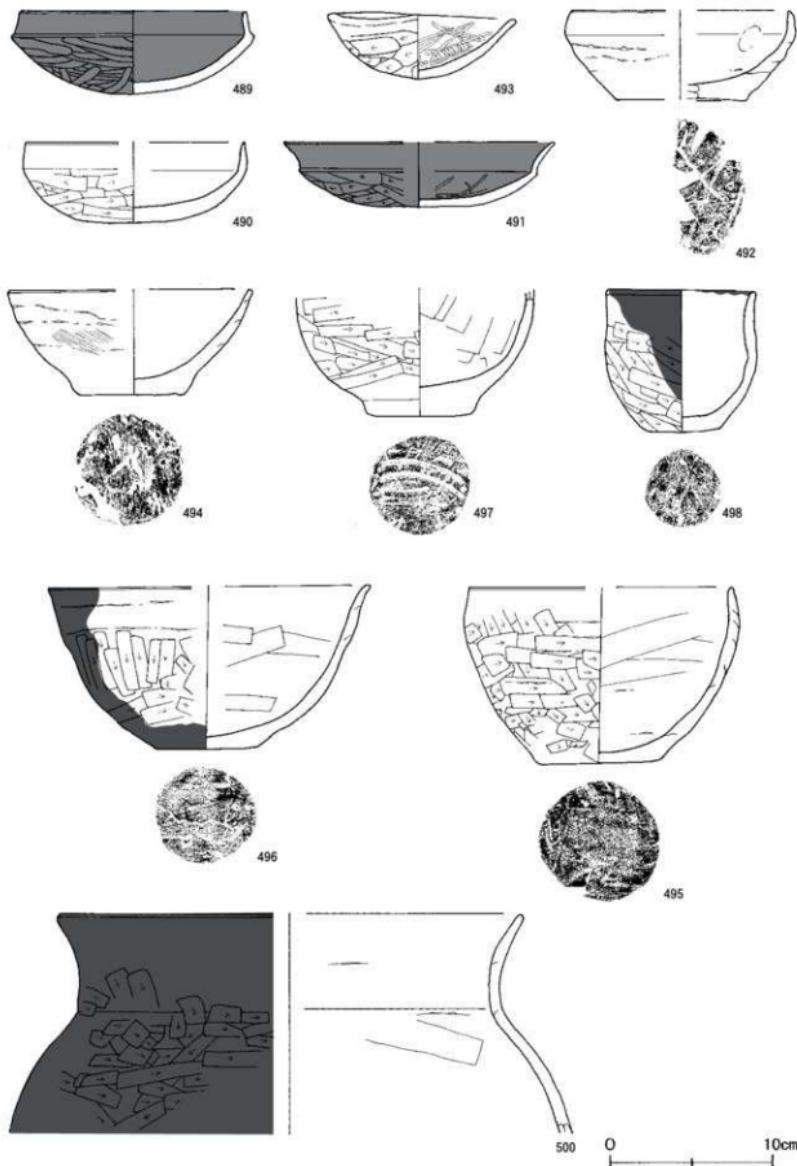
所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



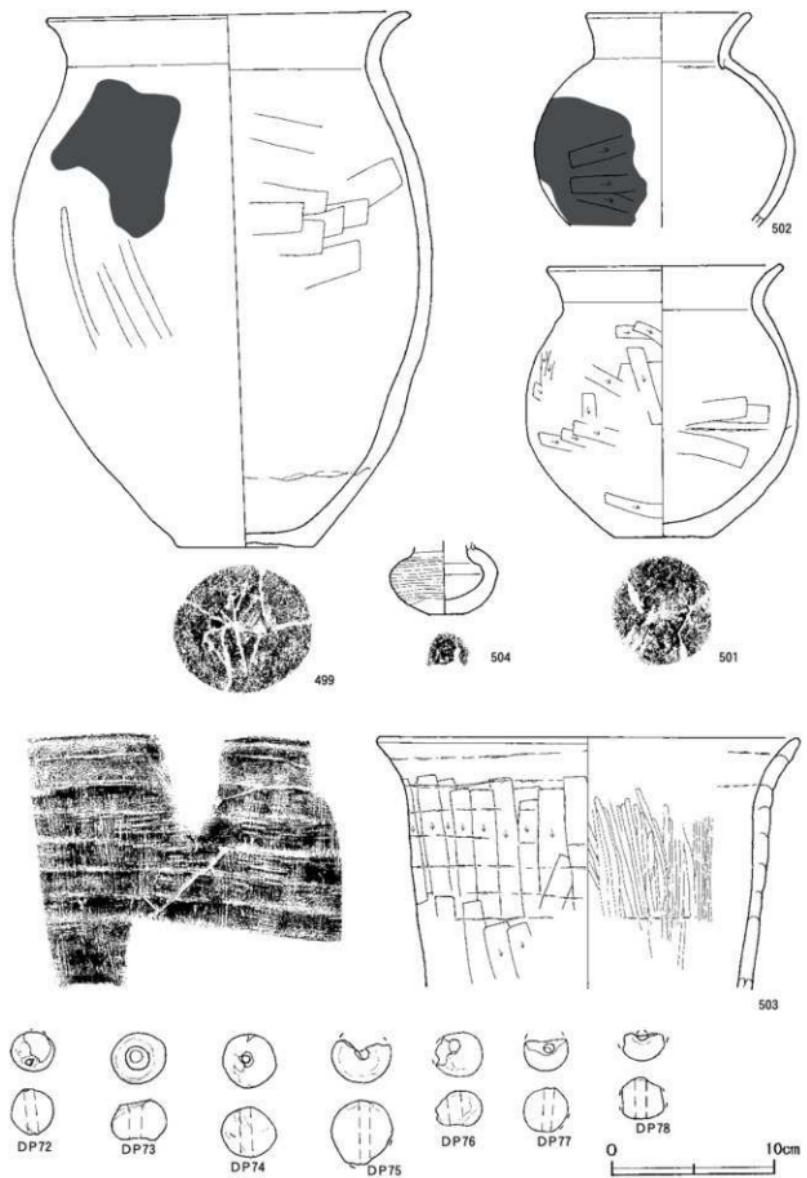
第74図 第80号住居跡実測図



第75図 第80号住居跡・出土遺物実測図



第76図 第80号住居跡出土遺物実測図(1)



第77図 第80号住居跡出土遺物実測図(2)

第80号住居跡出土遺物観察表(第75~77図)

番号	種別	器種	口径	高さ	直径	粘土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
88	土師器	环	—	(4.2)	—	長石・石英・雲母	にごり・褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へフリ付 内面ナデ	床面	90%
89	土師器	环	15.9	4.8	—	長石・石英・赤色 粒子	にごり・褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へフリ付 内面ナデ	床面	93% PL25
90	土師器	环	14.6	4.3	—	長石・石英・赤色 粒子	褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へフリ付 内面ナデ	床面	90% PL24
91	土師器	环	13.7	5.2	—	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へフリ付 内面ナデ	覆土下層	80% PL24
92	土師器	环	[13.1]	4.9	—	長石・石英・赤色 粒子	にごり・黄褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へフリ付 内面ナデ	覆土下層	70%
93	土師器	环	[16.4]	4.0	—	長石・石英・赤色 粒子	灰褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へフリ付 内面ナデ	床面	40%
94	土師器	环	11.4	4.0	—	長石・石英・赤色 粒子	にごり・褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へフリ付 内面ナデ	覆土下層	85% PL24
95	土師器	环	[13.2]	5.5	[8.0]	長石・石英・赤色 粒子	にごり・褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外表面によるナデ 内面ナデ	覆土下層	40%
96	土師器	环	[14.8]	6.5	6.2	長石・石英・赤色 粒子	褐色	普通	体部内・外面ナデ 編織目 体部外面に削痕	床面	95% PL33
97	土師器	环	[15.9]	11.0	7.5	長石・石英・赤色 粒子	にごり・褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へフリ付 内面ヘラナデ	床面	70% PL27
98	土師器	环	[19.6]	10.0	6.6	長石・石英・赤色 粒子	にごり・褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へフリ付	覆土下層	60% PL27
99	土師器	环	—	(7.8)	6.3	長石・石英・赤色 粒子	にごり・黃褐色	普通	体部外面へフリ付 内面ヘラナデ 底面へフリ付	覆土下層	50%
100	土師器	环	21.6	32.7	8.5	長石・石英・褐色	褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へフリ付	床面	95% PL31
101	土師器	环	[28.2]	[13.5]	—	長石・石英・雲母 粒子	淡黃褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へフリ付 内面ナデ 編織目	覆土下層	20% 外面探付着
102	土師器	环	8.8	8.9	4.9	長石・石英・雲母 粒子	にごり・褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へフリ付 内面ナデ 正絞	床面	100% 口沿部内・ 外面探付着 PL23
103	土師器	环	14.2	16.6	6.0	長石・石英・雲母	にごり・赤褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へフリ付 内面ナデ 編織目	床面	90% PL28
104	土師器	环	9.8	(13.1)	—	長石・石英・雲母	にごり・褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へフリ付 内面ナデ 編織目	覆土下層	40% 外面探付着
105	土師器	瓶	25.6	(15.3)	—	長石・石英・雲母 粒子	にごり・褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へフリ付	覆土下層	20%
106	土師器	ミニチュア	—	(4.0)	2.2	長石・石英・雲母	赤褐色	普通	体部外面へフリ付後へ削き 内面ナデ	覆土下層	60% PL33

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	備考
IP72	球状土器	2.6	0.6	(2.9)	(35.1)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方凹心の穿孔	覆土下層
IP73	球状土器	3.4	1.5	2.4	22.9	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方凹心の穿孔	覆土中層
IP74	球状土器	3.4	0.6~0.8	3.1	29.5	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方凹心の穿孔	覆土中
IP75	球状土器	3.7	0.6	(4.0)	(26.3)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方凹心の穿孔	覆土中
IP76	球状土器	(2.9)	0.9	2.1	(31.8)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方凹心の穿孔	覆土中
IP77	球状土器	2.8	[0.6]	(2.7)	(31.8)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方凹心の穿孔	覆土中
IP78	球状土器	(2.6)	[0.7]	2.5	(8.9)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方凹心の穿孔	覆土中

第 81 号住居跡 (第78~80図)

位置 調査区西部のC 9 J8区で、標高16.4mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第84号住居跡を掘り込んでいる。

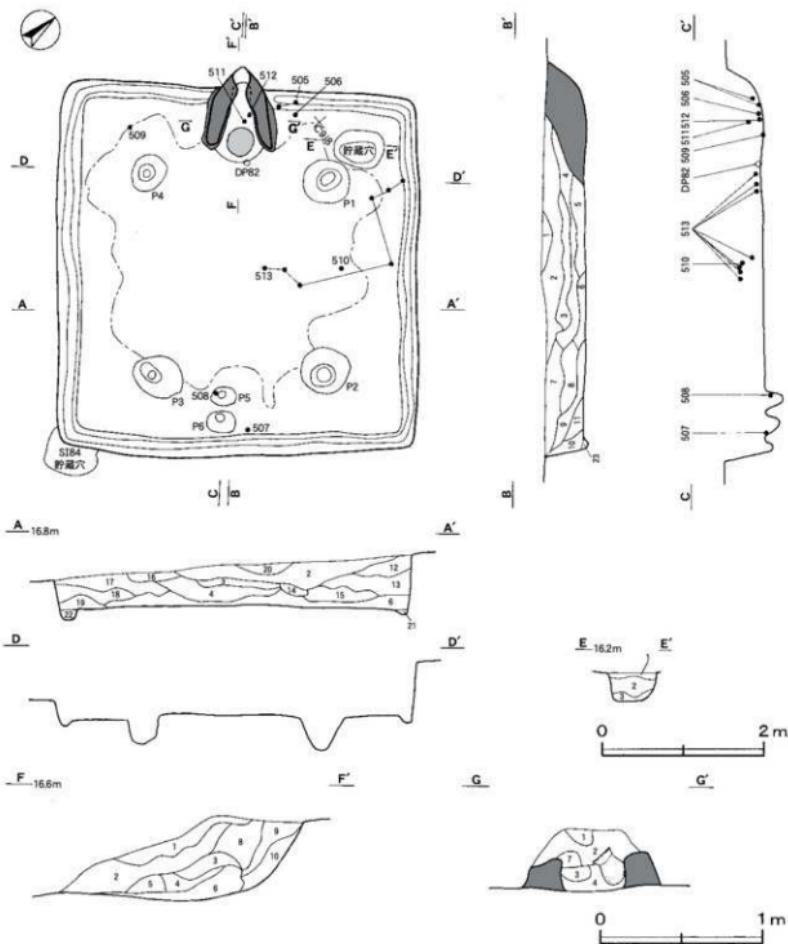
規模と形状 長軸4.55m、短軸4.42mほどの方形で、主軸方向はN-47°-Wである。壁高は24~66cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで118cmである。袖部幅は86cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ26cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

遺土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------------|---------|------------------------------|
| 1 黒 色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック・砂質粘土粒子微量 | 6 に朱赤色 | 焼土ブロック少量、炭化粒子・ローム粒子微量 |
| 2 黒 色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 7 鮎 鮎 色 | 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 3 棕 色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 8 暗 棕 色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 4 紫赤褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 9 暗 棕 色 | ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 5 に朱赤色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量 | 10 に朱赤色 | 砂質粘土粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 |



第78図 第81号住居跡実測図

ピット 6か所。P 1～P 4は深さ32～48cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ18cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6は深さ21cmで配置から出入り口施設に伴うピットと考えられるが、P 5との新旧関係は不明である。

覆土 23層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	13	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	14	褐色	ロームブロック中量
3	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	15	褐色褐色	ローム粒子少量、炭化物微量
4	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	16	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5	褐色褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	17	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
6	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	18	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
7	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	19	暗褐色	ローム粒子・炭化物微量
8	暗褐色	ロームブロック少量	20	褐色褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
9	褐色	ロームブロック微量	21	黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
10	黑色	ロームブロック微量	22	暗褐色	ローム粒子微量
11	暗褐色	ロームブロック微量	23	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
12	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量			

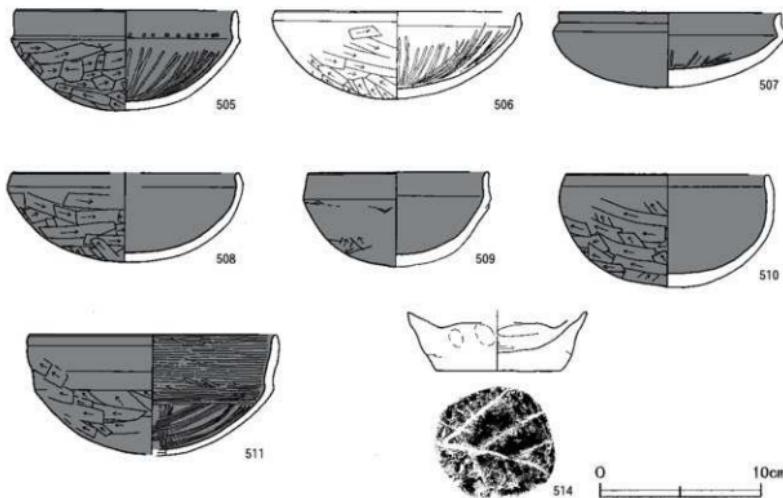
貯蔵穴 北側コーナー部に位置し、長径61cm、短径46cmの楕円形で、深さは42cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

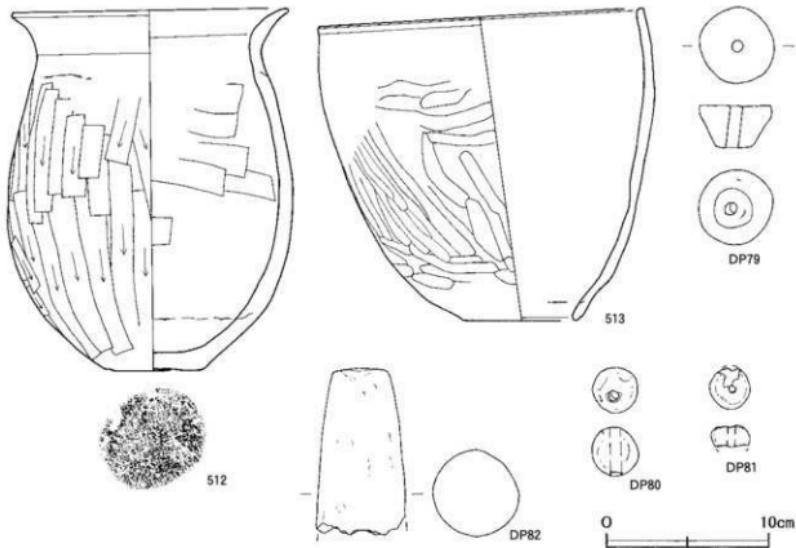
1	褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	3	暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
2	褐色	ロームブロック・炭化粒子微量			

遺物出土状況 土師器664点(环164、高杯1、甕496、瓶3)、手捏土器1点、土製品4点(球状土錐、管状土錐、紡錘車、支脚)の他に、混入した弥生土器81点、須恵器片7点も出土している。505・506は竈右側、507が南東壁際、509は西側コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。508はP 5内、511・512は竈内からの出土で、住居廃絶時には竈に掛けられた状態で遺棄された可能性が高いと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第79図 第81号住居跡出土遺物実測図(1)



第80図 第81号住居跡出土遺物実測図(2)

第81号住居跡出土遺物観察表(第79・80図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	断土	色調	施成	手 法 の 特 権	出土位置	備 考
305	土師器	环	13.6	6.1	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	にごり・橙	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ・ラ磨き	床面	100% PL24
306	土師器	环	15.1	5.4	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	淡黄橙	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ・ラ磨き	床面	95% PL25
307	土師器	环	13.7	4.6	-	長石・石英・赤色 粒子織	にごり・赤橙	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面・縁調整不明 内面へラ削き	床面	90% PL24
308	土師器	环	[14.0]	5.5	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	にごり・赤橙	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面・ラ削り後ナデ 内面ナデ	P5内	60%
309	土師器	环	11.0	5.9	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	にごり・橙	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	床面	80% PL24
510	土師器	瓶	12.5	6.9	-	長石・石英・赤色 粒子	にごり・黄橙	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面ナデ	壁上中層	95% PL29
511	土師器	瓶	15.2	7.4	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	にごり・赤橙	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面へラ削 き	壁内	90% PL29
512	土師器	甕	16.7	22.2	6.1	長石・石英・雲母 赤色粒子	にごり・橙	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	壁内	100% PL31
513	土師器	甕	19.8	19.1	6.9	長石・石英・雲母 赤色粒子	橙	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面ナデ	壁上中層 ～下層	60%
514	土師器	手形土器	[11.0]	3.7	7.6	長石・石英・赤色 粒子	淡黄橙	普通	体部内・外面指面によるナデ 輪埴輪 本垂張	P1覆土中	80%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特 権	出土位置	備 考
879	前縫串	4.6	0.7	2.5	96.1	土(長石・石英・雲母)	丁寧なナデ・片面孔、断面は台形	覆土中	PL40
880	環状土縛	2.8	0.7	3.0	21.9	土(長石・石英・雲母)	ナデ・一方向からの穿孔	覆土中	
881	環状土縛	2.5	0.4	(1.2)	(7.5)	土(長石・石英・雲母)	ナデ・一方孔からの穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特 権	出土位置	備 考
892	支脚	(10.2)	3.4 ～ (5.5)	(292.0)	土(長石・石英・雲母)	全面丁寧なナデ	床面	

第84号住居跡（第81・82図）

位置 調査区西部のD 9 a8区で、標高16.0mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第81号住居に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による削平が激しく、東西長3.10mほど、南北長2.20mほどが確認された。主軸方向は、竈の位置や貯蔵穴の配置などからN-62°-Eと考えられる。

床 確認された床面はほぼ平坦で、竈前付近が踏み固められている。

竈 遺存している床面から判断して、東壁中央部に付設されていると考えられる。袖部幅は77cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- | | | | | | |
|--------|--------|------------------|---------|----------|--------------|
| 1 晴赤褐色 | 燒土粒子少量 | 炭化物・ローム粒子・砂質粘土粒子 | 2 楊柳赤褐色 | 燒土ブロック中量 | 炭化物・砂質粘土粒子微量 |
| 微量 | | | | | |

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | |
|-------|--------------|-------|----------|-------------|
| 1 晴 色 | ロームブロック微量 | 3 黒 色 | 燒土ブロック少量 | 炭化物・ローム粒子微量 |
| 2 黑 色 | ローム粒子・燒土粒子微量 | | | |

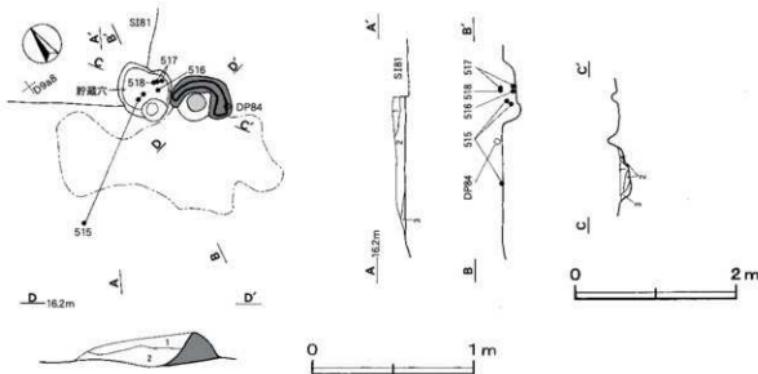
貯蔵穴 北側コーナー部に位置し、長径68cm、短径60cmの橢円形で、深さは12cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土中に焼土粒子や焼土粒子ブロック、白灰などが混じっている。

貯蔵穴土層解説

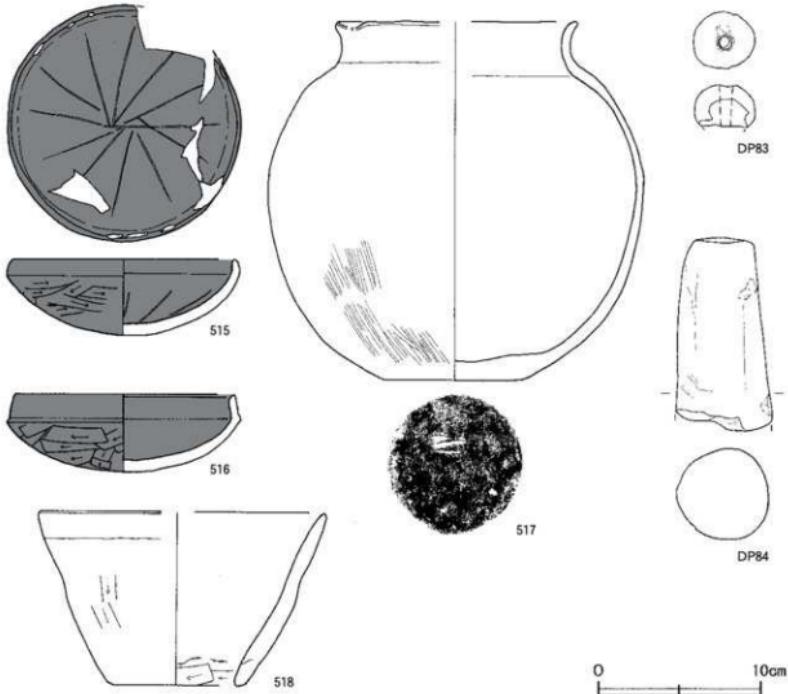
- | | | | | |
|--------|--------------------------------|---------|----------------|-----------------|
| 1 黒 色 | ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量 | 3 楊柳赤褐色 | 燒土ブロック・ローム粒子少量 | 炭化粒子・砂質粘土粒子・灰微量 |
| 2 楊柳褐色 | 燒土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | | | |

遺物出土状況 土器片43点（坏9、甕34）、土製品2点（球状土錘、支脚）、礫2点の他に、流れ込んだ弥生土器片81点も出土している。517・518は貯蔵穴内から出土しており、518は517の内部から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第81図 第84号住居跡実測図



第82図 第84号住居跡出土遺物実測図

第84号住居跡出土遺物観察表(第82図)

番号	種別	器種	口径	器高	径差	断土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
515	土鍋器	环	13.6	4.7	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外曲へラ削り後丁寧なナデ 内部放射状の削痕	床面～ 貯蔵穴内	90% PL25
516	土鍋器	环	13.3	4.8	—	長石・石英・雲母 朱色粒子	淡黄褐	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外曲へラ削り後ヘラ磨き	貯蔵穴内	80% PL24
517	土鍋器	甌	[14.4]	21.9	8.2	長石・石英・雲母	青い黄褐	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外曲へラ削り後ヘラ磨き 青色ナデ	床面	60%
518	土鍋器	甌	[17.3]	10.6	8.4	長石・石英・赤色 粒子	にじむ褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外曲へラ削り 単孔器へラ削り 偏磨削	貯蔵穴内	70%

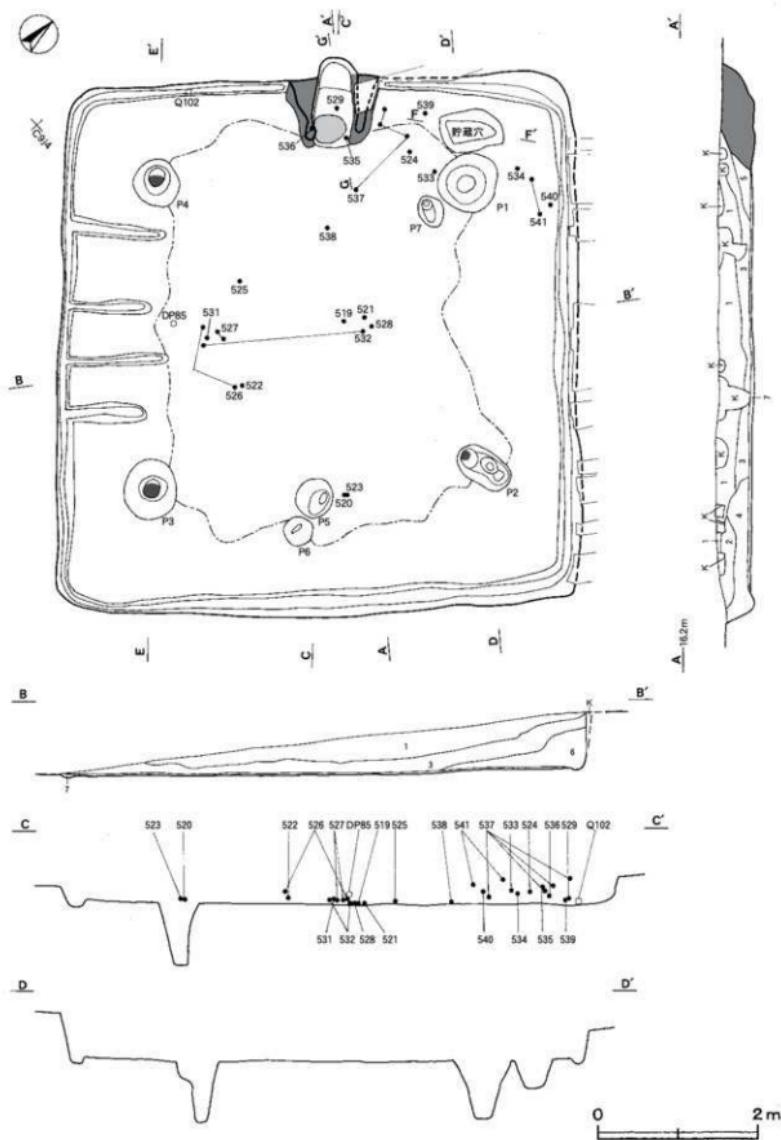
番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP83	環狀土鍤	3.8	0.6～0.8	(2.6)	(33.4)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP84	支脚	(31.8)	3.2～(5.9)	(382.1)	粘土(長石・石英・雲母)	丁寧なナデ	覆土下層	

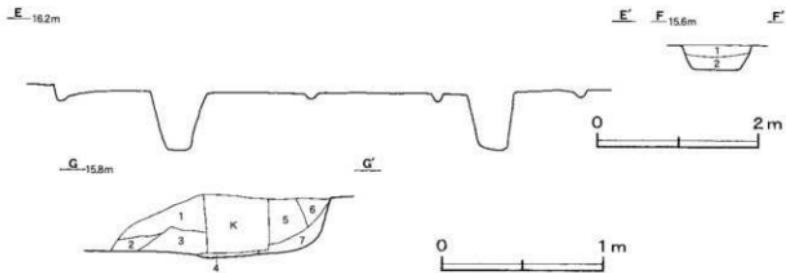
第86号住居跡(第83～87図)

位置 調査区西部のC 9 i5区で、標高15.8mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 長軸6.68m、短軸6.46mほどの方形で、主軸方向はN-46°-Wである。壁高は24～66cmで、外傾して立ち上がっている。



第83図 第86号住居跡実測図(1)



第84図 第86号住居跡実測図(2)

床 挖り方を調査した結果、床面は2面あることが確認された。廃絶時の床面(第2次面)は、ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、第1次面上に覆土層第7層を客土して構築している。第1次面も中央部が踏み固められていた。壁溝が竈部分を除いて周回しており、第2次面の南西壁側には間仕切り溝が4条確認された。

竈 北西壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで112cmである。耕作による擾乱を受けており、袖部幅は112cmほどと考えられ、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、床面とほぼ同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ~24cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

塗土層解説

- | | | | | | |
|---|------|-------------------------|---|------|----------------------|
| 1 | 淡赤褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 5 | 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化物・砂質粘土粒子少量 |
| 2 | 暗赤褐色 | 焼土粒子少數、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 6 | 褐色 | 砂質粘土粒子少數、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少數、ローム粒子微量 | 7 | 暗赤褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少數 |
| 4 | 淡赤褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少數 | | | |

ピット 7か所。P1~P4は深さ70~74cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ78cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられ、P1以外は柱痕跡が確認できた。また、P2は拡張されたような状態で柱穴が確認されたことから柱を差し替えた可能性があるが明確ではない。P6・P7の性格は不明である。

覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。第7層は1次面の床材である。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|----------------------|---|-----|-----------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子少數、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少數 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 | 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少數、焼土粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少數、焼土粒子微量 | 7 | 褐色 | ロームブロック少數、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少數、焼土粒子微量 | | | |

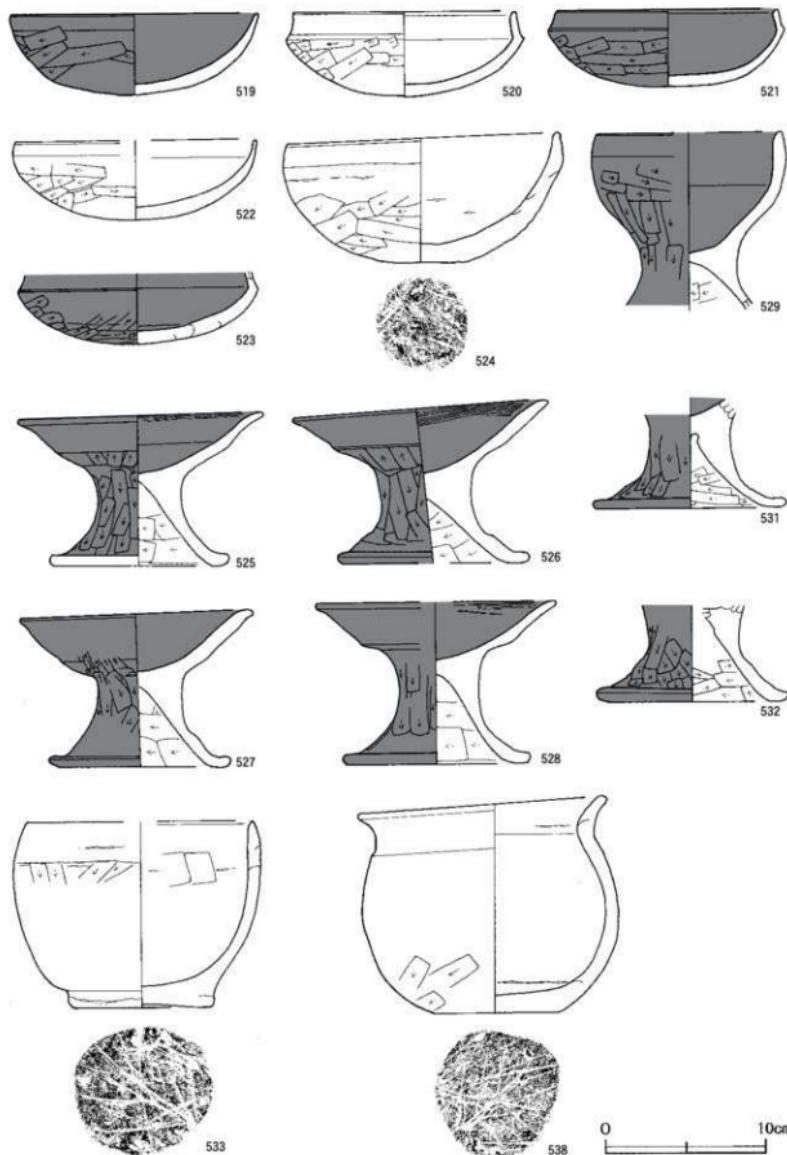
貯藏穴 北側コーナー部に位置し、長径76cm、短径50cmほどの不整梢円形で、深さは35cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯藏穴土層解説

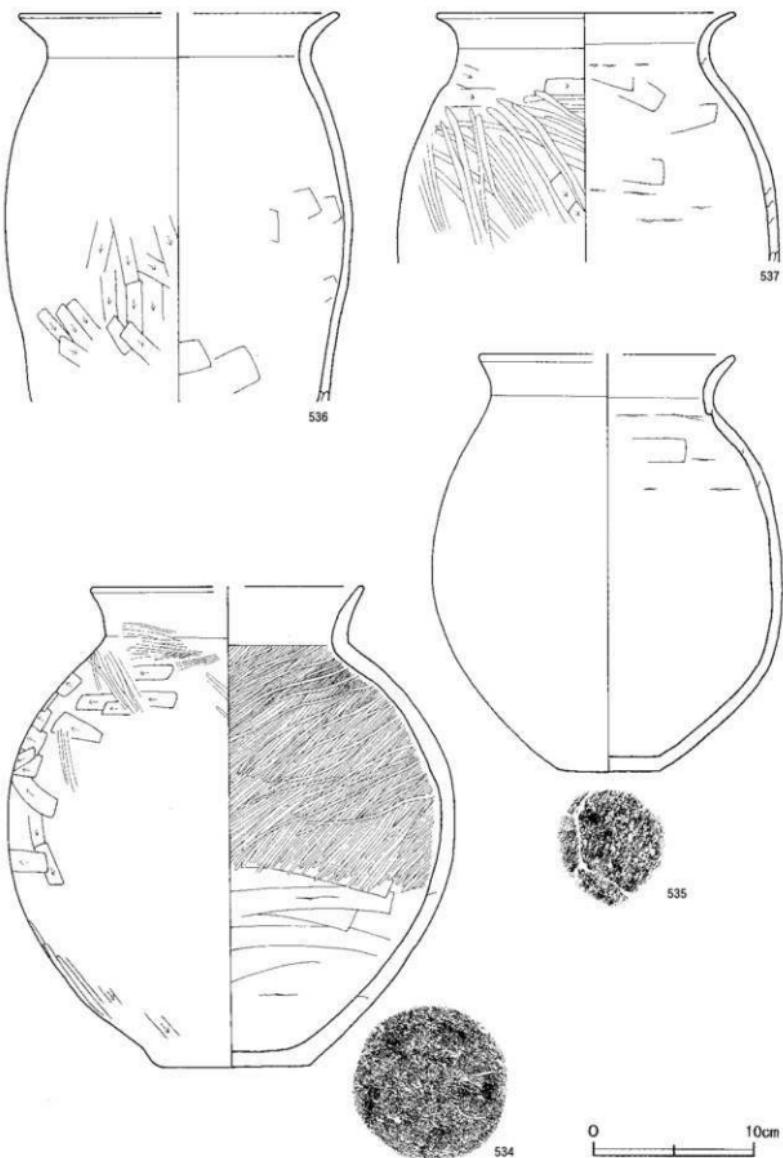
- | | | | | | |
|---|-----|---------------------|---|----|----------------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 2 | 褐色 | ローム粒子少數、炭化粒子微量 |
|---|-----|---------------------|---|----|----------------|

遺物出土状況 土師器片1701点(坏246、高坏47、榎1、鉢1、甕1403、瓶3)、土製品4点(球状土錐、管状土錐、支脚2)、石器1点(砥石)、礫4点の他に、流れ込んだ弥生土器片18点、須恵器片5点も出土している。高坏は、529が竈内から出土している他はすべて中央部の床面や床面に近い覆土下層から出土している。また、534は北コーナー付近の覆土下層から、539は竈右側の床面から逆位でそれぞれ出土している。535・536は竈内からの出土で、住居廃絶時には竈に掛けられた状態で遺棄された可能性が高いと考えられる。

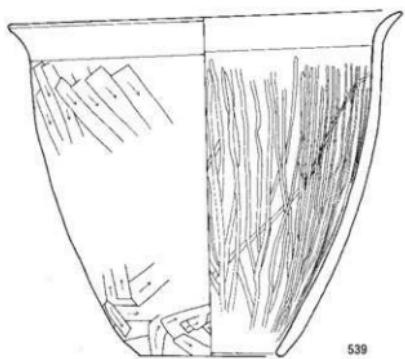
所見 床は2面あり、住居構築時の床の上に新たに貼床をしていることが確認できた。時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



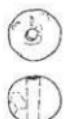
第85図 第86号住居跡出土遺物実測図(1)



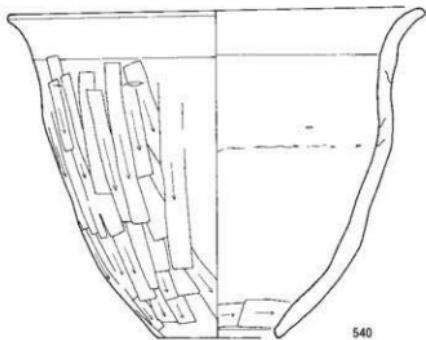
第86図 第86号住居跡出土遺物実測図(2)



539



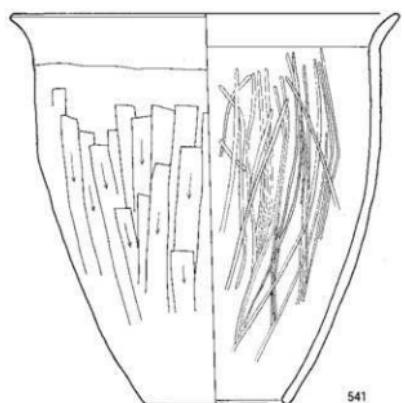
DP85



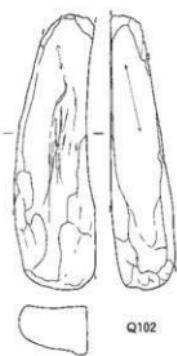
540



DP86



541



Q102



第87図 第86号住居跡出土遺物実測図(3)

第86号住居跡出土遺物観察表(第85~87図)

番号	種別	器種	口径	都高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
519	土鍋器	坪	15.2	5.0	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	にじ・緑	普通	口沿部内・外面模ナゲ 体部外面へラ削り後丁寧なナゲ	床面	95% PL25
520	土鍋器	坪	13.6	5.2	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	にじ・緑	普通	口沿部内・外面模ナゲ 体部外面へラ削り後ナゲ 内面ナゲ	床面	70% PL25
521	土鍋器	坪	13.6	4.7	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	灰褐色	普通	口沿部内・外面模ナゲ 体部外面へラ削り後ナゲ 内面ナゲ	床面	75% PL25
522	土鍋器	坪	[14.8]	4.9	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	にじ・緑	普通	口沿部内・外面模ナゲ 体部外面へラ削り後ナゲ 内面ナゲ	覆土下層	70% PL25
523	土鍋器	坪	-	(4.3)	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	普通	口沿部内・外面模ナゲ 体部外面へラ削り後ナゲ 内面ナゲ 輪郭線	床面	75%	
524	土鍋器	輪	16.8	8.1	3.5	長石・石英・雲母 赤色粒子	灰褐色	普通	口沿部内・外面模ナゲ 体部外面へラ削り 内面ナゲ 輪郭線	海土下層	95% PL29
525	土鍋器	高坪	15.1	9.4	11.2	長石・石英・雲母 赤色粒子	にじ・黄緑	普通	口沿部外面、脚部内・外面へラ削り後ナゲ 口沿部内面へラ削き	床面	90% PL30
526	土鍋器	高坪	15.6	10.0	[12.0]	長石・石英・雲母 赤色粒子	にじ・黄緑	普通	口沿部外面、脚部内・外面へラ削り後ナゲ 口沿部内面へラ削き	覆土下層	60% PL30
527	土鍋器	高坪	14.0	9.7	10.2	長石・石英・雲母 赤色粒子	にじ・黄緑	普通	口沿部外面、脚部内・外面へラ削り 口部内面ナゲ	覆土下層	60% PL30
528	土鍋器	高坪	[14.8]	10.0	11.7	長石・石英・雲母 赤色粒子	にじ・黄緑	普通	口沿部外面、脚部内・外面へラ削り 口部内面へラ削き後ナゲ	床面	60% PL30
529	土鍋器	高坪	[11.4]	(11.0)	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	にじ・緑	普通	口沿部外面、脚部内・外面へラ削り 口沿部内面ナゲ	覆土下層	60%
530	土鍋器	高坪	-	(6.7)	12.1	長石・石英・雲母 赤色粒子	にじ・黄緑	普通	脚部内・外面へラ削り後ナゲ	覆土下層	40%
532	土鍋器	高坪	-	(5.9)	12.0	長石・石英・雲母 赤色粒子	にじ・黄緑	普通	脚部内・外面へラ削り後ナゲ	覆土下層	40%
533	土鍋器	輪	[14.0]	11.5	9.1	長石・石英・雲母 赤色粒子	にじ・緑	普通	口沿部内・外面模ナゲ 体部外面へラ削り後ナゲ 内面へラ削き	覆土下層	70% PL27
534	土鍋器	便	[16.5]	29.7	9.8	長石・石英	にじ・緑	良好	口沿部内・外面模ナゲ 体部外面へラ削り後ナゲ 内面へラ削き 輪郭線	海土下層	95% PL31
535	土鍋器	便	[15.6]	25.9	6.4	長石・石英・雲母 赤色粒子	にじ・黄緑	普通	外側面部調整不明 内面へラナゲ 輪郭線	窓内	70%
536	土鍋器	便	[19.7]	(24.0)	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	根	普通	口沿部内・外面模ナゲ 体部外面へラ削り 内面へラナゲ	窓内	40%
537	土鍋器	便	18.1	(15.5)	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	根	普通	口沿部内・外面模ナゲ 体部外面へラ削り後ナゲ 内面へラ削き	覆土上層 ~中層	40%
538	土鍋器	小形便	15.2	13.4	7.7	長石・石英・雲母 赤色粒子	にじ・緑	普通	口沿部内・外面模ナゲ 体部外面へラ削り後ナゲ 内面ナゲ 輪郭線、底部木蓋痕	床面	90% PL27
539	土鍋器	瓶	24.3	21.4	8.8	長石・石英・雲母 赤色粒子	にじ・赤褐色	良好	口沿部内・外面模ナゲ 体部外面へラ削り 内面へラ削き	床面	100% PL32
540	土鍋器	瓶	25.3	20.3	7.7	長石・石英・雲母 赤色粒子	にじ・緑	普通	口沿部内・外面模ナゲ 体部外面へラ削り 内面ナゲ 瓶孔 底部へラ削り 輪郭線	覆土下層	95% PL32
541	土鍋器	瓶	23.8	21.2	8.6	長石・石英・雲母 赤色粒子	にじ・黄緑	普通	口沿部内・外面模ナゲ 体部外面へラ削り 内面へラ削き	覆土中層	60%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
H865	鉢状土鍤	3.2	0.7~0.8	2.8	(29.3)	土(長石・石英・雲母) 赤色粒子	ナゲ 一方向からの穿孔	覆土下層	
H866	管状土鍤	3.9	1.7~1.8	9.7	(175.0)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	ナゲ	覆土中	

第93号住居跡（第88~90図）

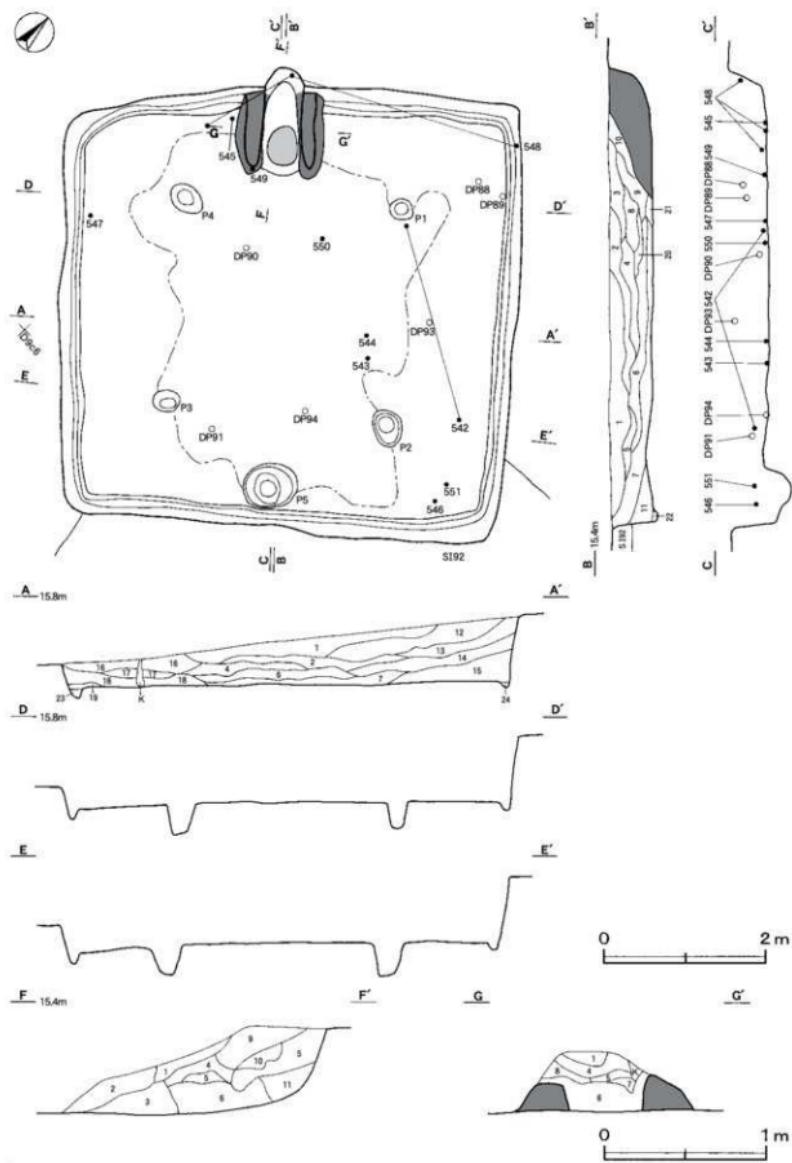
位置 調査区西部のD 9b6区で、標高15.4mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第92号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.70m、短軸5.54mほどの方形で、主軸方向はN-44°-Wである。壁高は30~78cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで134cmである。袖部幅は112cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、床面とほぼ同じ高さの地山面を使用しており、火を受けた赤変硬化している。煙道部は、壁外へ22cm掘り込まれ、火床面から急速に立ち上がっている。第5層は天井部の崩落層と考えられる。



第88図 第93号住居跡実測図

塗土層解説

1 極暗褐色	炭化物・砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少 量	7 灰褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
2 黒褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量	8 にじみ褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量・ローム粒子微量
3 にじみ褐色	焼土粒子・炭化粒子少量・ローム粒子微量	9 灰褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量・焼土粒 子微量
4 極暗褐色	炭化粒子・砂質粘土粒子少量・ローム粒子・焼土粒 子微量	10 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微 量
5 にじみ褐色	砂質粘土ブロック中量・焼土粒子少量・ローム粒子・砂 質粘土粒子微量	11 赤褐色	焼土ブロック中量・炭化粒子少量・ローム粒子・砂 質粘土粒子微量
6 にじみ褐色	ロームブロック中量・炭化粒子少量		

ピット 5か所。P1～P4は深さ32～42cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ35cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

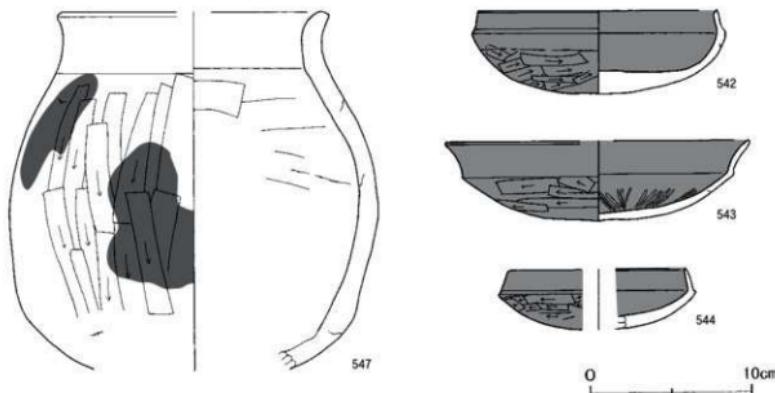
覆土 24層に分層される。周囲から土砂が流入し、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

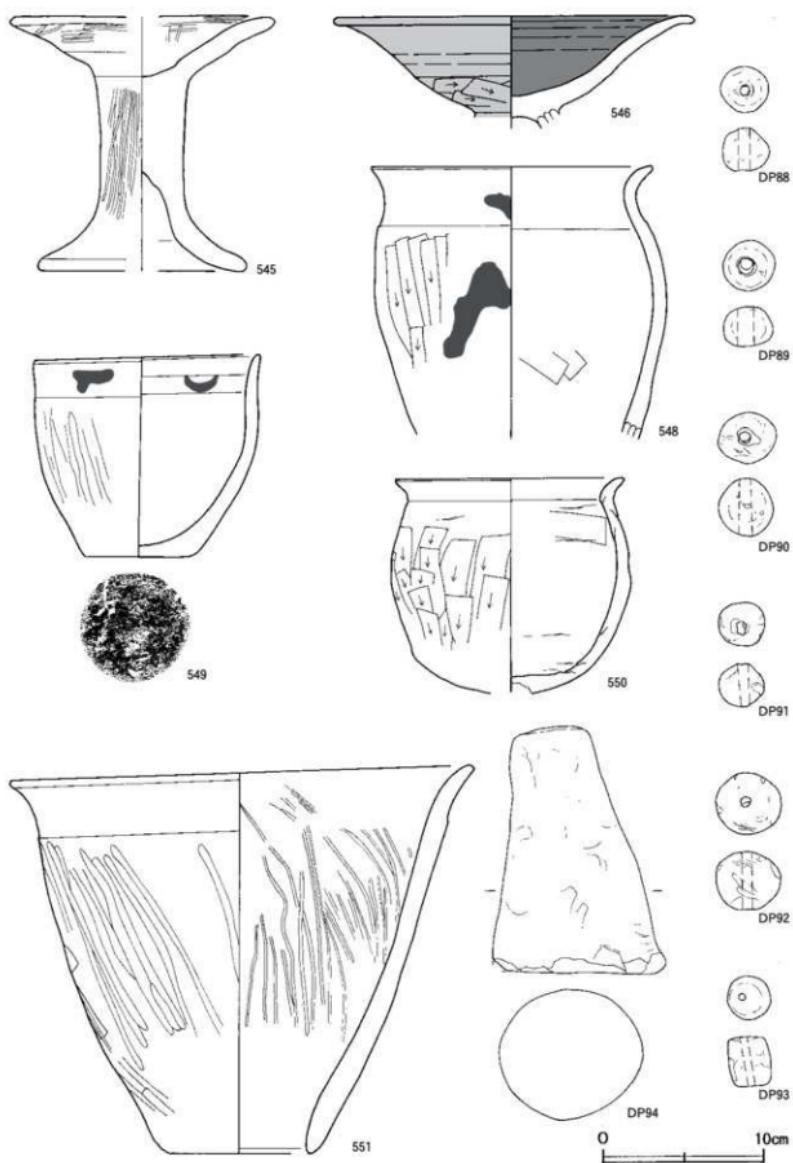
1 黒褐色	ロームブロック・炭化物微量	13 極暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2 單褐色	ロームブロック少量・炭化物微量	14 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	15 黑褐色	ロームブロック少量・炭化粒子微量
4 單褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	16 單褐色	ローム粒子少量・炭化粒子微量
5 單褐色	ローム粒子少量・炭化粒子微量	17 單褐色	ロームブロック少量・炭化物微量
6 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	18 極暗褐色	ロームブロック少量
7 黑褐色	ロームブロック微量	19 單褐色	ロームブロック微量
8 灰褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	20 にじみ褐色	砂質粘土粒子中量・ロームブロック微量
9 黑褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子微量	21 灰褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
10 黑褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	22 單褐色	ロームブロック微量
11 黑褐色	炭化粒子少量・ローム粒子微量	23 極暗褐色	ローム粒子少量
12 單褐色	ローム粒子少量・炭化粒子微量	24 桃色	ロームブロック微量

遺物出土状況 士師器片1052点(坪302、高坪16、甕733、瓶1)、土製品8点(紡錘車1、球状土鍤5、管状土鍤1、支脚1)、碟1点の他に、流れ込んだ甕文土器片21点、甕生土器片4点、須恵器片7点も出土している。543・544・550は中央部、545は北西壁の竈左側、547は南西壁際の床面からそれぞれ出土している。549は竈左袖部の補強材として使用されていたと考えられ、逆位の状態で出土している。548は北西壁際の覆土下層、北側コーナー付近の覆土下層、竈煙道部からそれぞれ出土したものが接合したもので、住居が埋没していく過程で流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第89図 第93号住居跡出土遺物実測図(1)



第90図 第93号住居跡出土遺物実測図(2)

第93号住居跡出土遺物観察表(第89・90図)

番号	器種	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
542	土鍋器	坪	14.7	5.0	—	長石・石英・雲母 に赤褐色	普通	口沿部内・外面横ナダ 体部外面へフリ付り	内面へフリ付 ナダ	覆土下層	80% PL25	
543	土鍋器	坪	[18.6]	4.9	—	長石・石英・雲母 に赤褐色	普通	口沿部内・外面横ナダ 体部外面へフリ付り	内面へフリ付 ナダ	床面	70%	
544	土鍋器	坪	[10.8]	3.6	—	長石・石英・雲母 赤色粒子	灰褐色	普通	口沿部内・外面横ナダ 体部外面へフリ付り	内面ナダ	床面	50%
545	土鍋器	高坪	[15.4]	15.7	[12.4]	長石・石英・雲母 根	普通	环部外面・脚部外面へフリ付り 环部内面へフリ付	内面ナダ	床面	40%	
546	土鍋器	高坪	21.6	6.8	—	長石・石英・雲母 明赤褐色	普通	环部外面へフリ付り 内面ナダ	覆土上層	50% 赤色 内面赤色表面		
547	土鍋器	便	[16.0] (22.1)	—	—	長石・石英・雲母 に赤褐色	普通	口沿部内・外面横ナダ 体部外面へフリ付り	内面ナダ	覆土上層	20% 外面側付着	
548	土鍋器	便	17.2	(16.7)	—	長石・石英・雲母 に赤褐色	普通	口沿部内・外面横ナダ 体部外面へフリ付り	内面ナダ	床面	40% 外面側付着	
549	土鍋器	小手裏	13.2	12.5	6.5	長石・石英・雲母 根	普通	口沿部内・外面横ナダ 体部外面へフリ付り	内面ナダ	床面	70%	
550	土鍋器	小手裏	13.6	(13.2)	—	長石・石英・雲母 根	普通	口沿部内・外面横ナダ 体部外面へフリ付り	内面ナダ	床面	70% PL36	
551	土鍋器	瓶	28.4	24.0	8.6	長石・石英・斜方 赤色粒子	普通	口沿部内・外面横ナダ 体部内・外面へフリ付り	内面へフリ付 き	覆土上層	95% PL22	

番号	器種	最大径	口径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP88	環狀土鍤	3.0	0.7	2.6	22.7	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DP89	環狀土鍤	3.2	1.0	2.4	22.7	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DP90	環狀土鍤	3.5	0.7~0.8	3.5	(36.8)	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP91	環狀土鍤	2.8	0.6~0.7	2.7	19.3	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DP92	環狀土鍤	4.0	0.6	3.7	56.0	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向からの穿孔	覆土中	
DP93	環狀土鍤	2.8	0.4	3.1	36.2	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向からの穿孔	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP94	支脚	15.3	4.2~10.7	(1096.0)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	全面ナダ 指頭痕	床面	門41

第97号住居跡 (第91・92図)

位置 調査区西部のD 9 g0区で、標高15.2mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第98号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.90m、短軸4.70mほどの方形で、主軸方向はN-18°-Wである。壁高は25~52cmで、外傾して立ち上がっている。

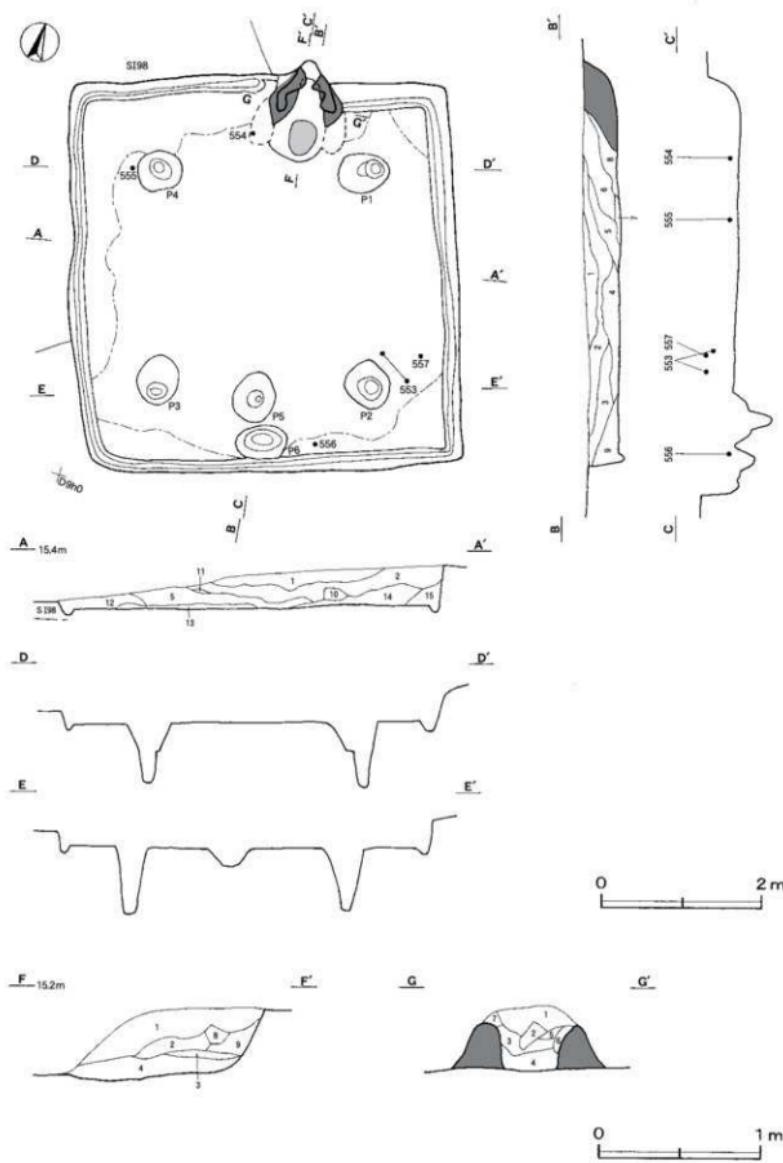
床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁のやや東寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで126cmである。袖部幅は96cmほどが遺存しており、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ21cmほど掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量	7 黄褐色	砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・燒土粒子微量
2 黒褐色	燒土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量	8 黑褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量、燒土粒子微量
3 初赤褐色	燒土ブロック・砂質粘土ブロック・炭化粒子少量	9 黑褐色	炭化粒子・砂質粘土粒子少量、燒土ブロック微量
4 赤褐色	燒土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量		
5 黄褐色	砂質粘土ブロック中量、ローム粒子・燒土粒子微量		
6 褐色	砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量		

ピット 6か所。P 4は深さ73~84cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ46cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6は深さ23cmで、配置から出入り口施設に伴う補助的な役割を果たした可能性があるが明確ではない。



第91図 第97号住居跡実測図

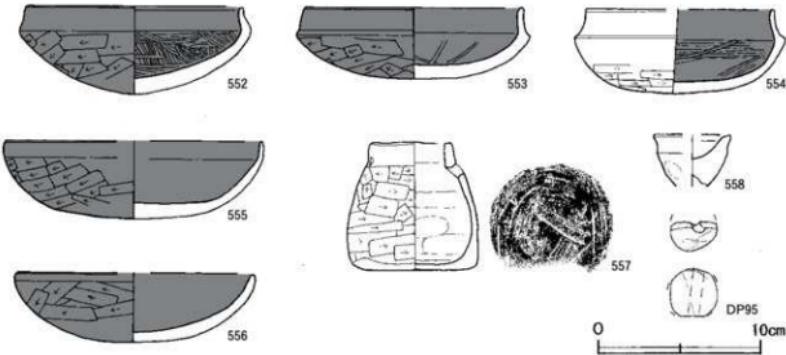
覆土 15層に分層される。周囲から土砂が流入し、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量	9 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	10 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	11 黑褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
4 黑褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量	12 黑褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	13 黑褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
6 黑褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	14 黑褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
7 黑褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	15 黑褐色	ロームブロック微量
8 暗褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量		

遺物出土状況 土器器片197点(坏52,高坏2,鉢1,壺1,甕141),ミニチュア土器1点(高坏カ),土製品3点(球状土錐1,不明2),礫3点の他に,流れ込んだ弥生土器片142点,須恵器片4点も出土している。553は南東コーナー付近の覆土上層,554は竈左側の覆土下層,555は北西コーナー付近の覆土下層からそれぞれ出土している。557は覆土上層からの出土である。

所見 時期は,出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第92図 第97号住居跡出土遺物実測図

第97号住居跡出土遺物観察表(第92図)

番号	器種	器形	口径	脚高	底径	胎土	色調	地成	手 法 の 特 権	出土位置	備 考
552 土鍋器	环	13.1	5.4	—	長石・石英・雲母 に灰・黒	普通	口沿部内・外面横ナギ 体部外表面へラ削りナギ 内面へラ削り	覆土中	95% PL25		
553 土鍋器	环	13.1	4.4	—	長石・石英・雲母 に灰・黒	普通	口沿部内・外面横ナギ 体部外表面へラ削りナギ 内面へラ削り	覆土上層	90% PL26		
554 土鍋器	环	[11.4]	5.1	—	長石・石英・雲母 に灰・黒	普通	口沿部内・外面横ナギ 体部外表面へラ削り 内面へラ削き	覆土下層	60%		
555 土鍋器	环	[15.6]	4.8	—	長石・石英・雲母 に灰・黒	普通	口沿部内・外面横ナギ 体部外表面へラ削り 内面ナギ	覆土下層	50%		
556 土鍋器	环	[14.4]	4.2	—	長石・石英・雲母 に灰・黒	普通	口沿部内・外面横ナギ 体部外表面へラ削り 内面ナギ	覆土下層	50%		
557 土鍋器	小形壺	4.8	7.8	7.5	長石・石英・雲母 赤色胎土	二段式 に灰・黒	普通	口沿部内・外面横ナギ 体部上部に相対する尊孔 体部外表面へラ削り	覆土上層	95% PL33	
558 土鍋器	ミニチュア	[4.6]	0.2	—	長石・石英・雲母 に灰・黒	普通	口沿部内・外面横ナギ 体部上部に相対する尊孔 体部外表面削りによるナギ 微細な ナギナギ	覆土中	10% 高坏カ		

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特 権	出土位置	備 考
DP95 球狀土錐	(球狀土錐)	(0.0)	(0.7)	2.9	(13.5)	土(長石・石英・雲母)	ナギ 一方向からの穿孔	覆土中	

第98号住居跡（第93・94図）

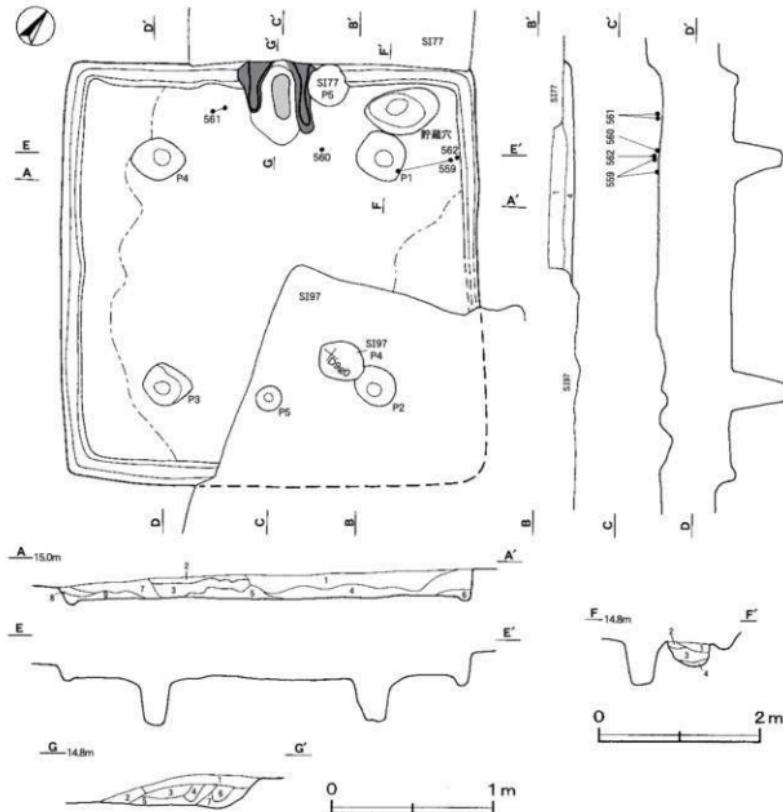
位置 調査区西部のD 9 f9区で、標高14.8mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第77・97号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.26m、短軸5.16mの方形で、主軸方向はN-34°-Wである。壁高は18~24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分と重複部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで106cmである。右袖部は第77号住居のP 5に掘り込まれているが、袖部幅は80cmほどが確認できた。袖部は、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、床面と同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、重複のための不明であるが、遺存状態から緩やかに外傾して立ち上がっていたものと考えられる。



第93図 第98号住居跡実測図

遺土層解説

1	暗褐色	燒土ブロック・砂質粘土粒子少量。ローム粒子・炭化粒子微量	4	暗赤褐色	燒土ブロック中量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量
2	暗赤褐色	燒土ブロック・砂質粘土粒子中量。炭化粒子微量	5	黒褐色	炭化粒子少量、燒土粒子・砂質粘土粒子微量
3	暗褐色	砂質粘土ブロック少量。燒土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	6	黃褐色	砂質粘土ブロック多量、燒土粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は深さ54～62cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ8cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 9層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人が堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・燒土粒子微量	6	黒褐色	ロームブロック少量
2	暗褐色	ローム粒子少量	7	黒褐色	ロームブロック微量
3	極暗褐色	ロームブロック少量。燒土粒子微量	8	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
4	極暗褐色	ロームブロック少量。燒土ブロック微量	9	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
5	褐色	砂質粘土粒子中量。ローム粒子少量			

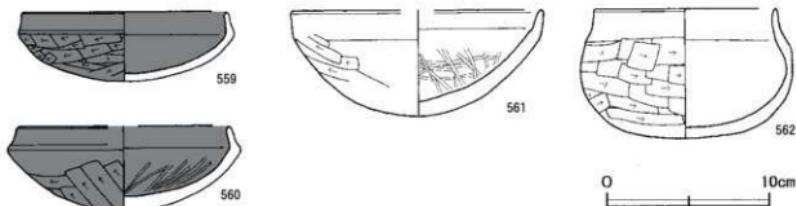
貯藏穴 北東コーナー部に位置し、長径91cm、短径56cmほどの梢円形で、深さは35cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯藏穴土層解説

1	黒褐色	炭化粒子少量、燒土ブロック・ローム粒子微量	3	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子少量、燒土ブロック・炭化粒子微量	4	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器149点(坏28、椀1、甕120)の他に、混入した弥生土器74点も出土している。560は北コーナー付近の床面、562は覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第94図 第98号住居跡出土遺物実測図

第98号住居跡出土遺物観察表(第94図)

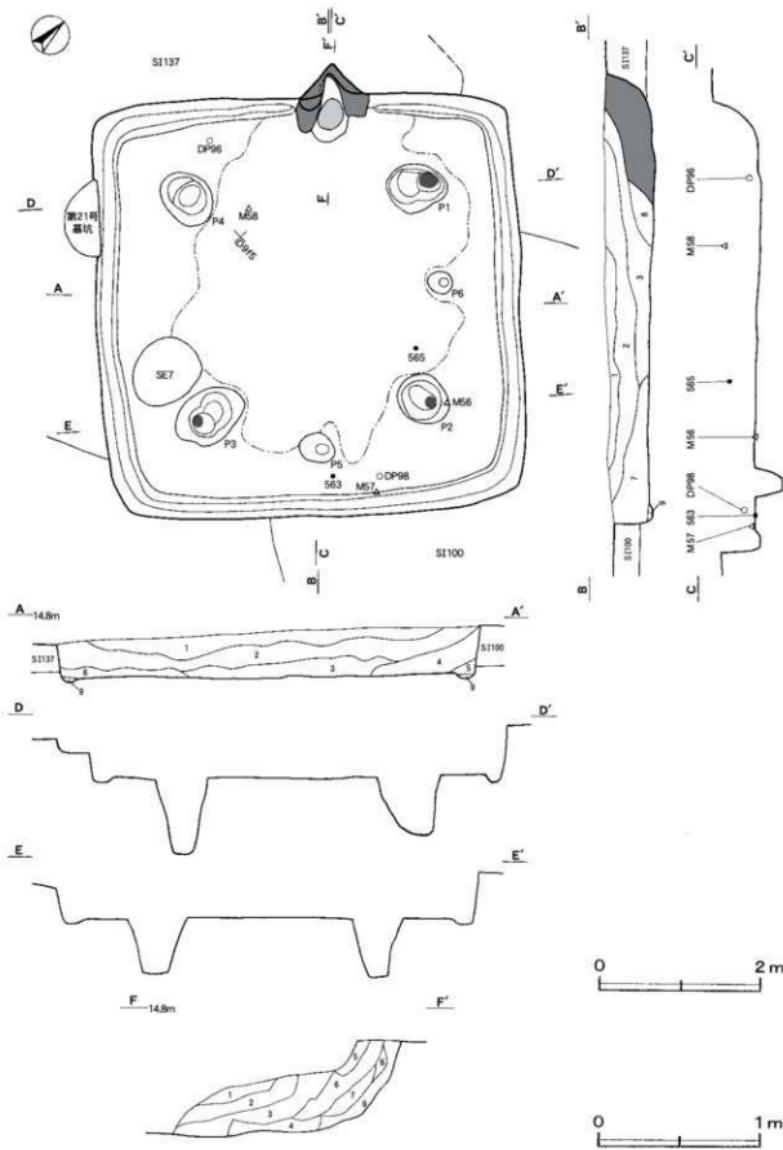
番号	種別	器種	口径	器高	底径	筋	土	色調	焼成	手法の特徴	出上位置	備考
559	土師器	坏	12.5	4.2	—	長石・石英	に凹・塊	普通	口沿部内・外面横ナギ	体部外面へラ削り後後ナギ 内面ナギ	覆土下層	70% PL25
560	土師器	坏	[13.0]	5.2	—	長石・石英・雲母	粗	普通	口沿部内・外面横ナギ	体部外面へラ削り 内面へラ削き	床面	60%
561	土師器	坏	[15.2]	8.4	—	長石・石英・雲母 赤色粒子	に凹・塊	普通	口沿部内・外面横ナギ	体部外面へラ削り 内面へラ削き	覆土下層	70% PL29
562	土師器	椀	11.2	7.9	—	長石・石英・雲母	に凹・黄褐色	普通	口沿部内・外面横ナギ	体部外面へラ削り 内面ナギ	覆土下層	100% PL29

第99号住居跡(第95・96図)

位置 調査区西部のD9e5区で、標高14.4mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第100号・137号住居跡を掘り込み、第21号墓坑、第7号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.26m、短軸5.15mの方形で、主軸方向はN-44°-Wである。壁高は35～60cmで、外傾して立ち上がっている。



第95図 第99号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁のほぼ中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで96cmである。袖部幅は88cmほどで、床面と同じ高さの地表面に砂質粘土で構築されている。火床部は、床面と同じ高さの地表面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ39cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

遺土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、砂質粘土ブロック・焼土粒子微量	6 黄褐色 砂質粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 灰褐色 砂質粘土ブロック中量、ローム粒子少量、焼土粒子	7 赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量
3 黑褐色 炭化粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量	8 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
4 暗赤褐色 焙土ブロック少量、砂質粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	9 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5 増褐色 砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	

ピット 6か所。P 1～P 4は深さ70～93cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ35cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6は深さ40cmで、主軸に沿って主柱穴と直線的に配置されていることから補助柱穴の可能性が想定される。P 1～P 3には柱痕跡が認められ、その対角線上の内側に柱抜き取りのための掘り方が確認された。

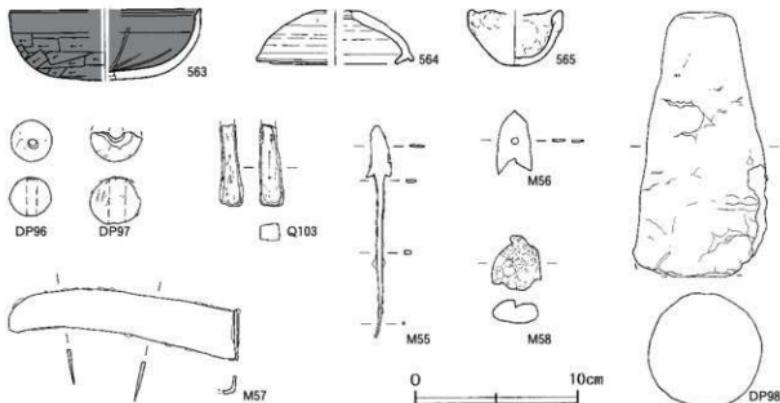
覆土 9層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量	6 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
2 黒褐色 焙土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	7 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3 増褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	8 増褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・砂質粘土粒子微量
4 黑褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	9 黑褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
5 増褐色 ロームブロック少量	

遺物出土状況 土師器片885点（壺217、高壺7、壺1、甕660）、手捏土器1点（壺形カ）、土製品3点（球状土錐2、支柱1）、鉄製品4点（鍔2、鎌1、槌状滓1）、礫13点の他に、流れ込んだ弥生土器片195点、須恵器片5点も出土している。563は南東壁際の床面から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、時期は、出土土器から7世紀前半と考えられる。



第96図 第99号住居跡出土遺物実測図

第99号住居跡出土遺物観察表(第96図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	粘土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
961	土師器	瓶	[11.6]	4.2	—	長石・石英・雲母・赤土粒子	明るい	普通	口沿部内・外面横ナギ 体部外面へラ削り 内面へラ削き	床面	30%
964	須恵器	盞	[8.2]	[3.3]	—	長石	灰	良好	天井部斜面のへラ削り	覆土中	29%
965	土師器	手探土器	[5.6]	3.4	—	長石・石英	にじみ	普通	口沿部・内面指觸面 体部外面ナギ 磨擦痕	覆土上層	50%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
IP96	埠狀土錐	2.5	0.6	2.4	13.4	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方丸みの穿孔	覆土下層	
IP97	埠狀土錐	(3.2)	1.0	2.9	(31.4)	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方丸みの穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
IP98	支脚	16.2	3.4 (7.6)	6770.0	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	全面ナゲ 指頭痕	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q103	続石	(5.0)	1.4	1.5	(120.0)	燧灰岩	鉄面2面	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M55	鉢器	13.0	1.5	0.3~0.5	1.9	鉄	長脚三脚脚 基身部三脚形 鉢小開	覆土中	PL43
M56	鉢器	4.0	2.1	0.1	2.9	鉄	無脚3角脚 断面平型 中央に径0.4cmの透かし	床面	PL43
M57	鍾	14.1	4.3	0.2	50.7	鉄	弓字に背骨 端部全面折り返し 断面形は三角	床面	PL43
M58	陶片	3.3	3.0	1.3	15.4	鉄	表面に赤鉛付着 凸凹有り	覆土上層	

第101号住居跡 (第97~99図)

位置 調査区西部のD 9 d4区で、標高14.6mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第137号住居跡を掘り込み、第104号住居、第3号掘立柱建物、第161号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.36m、短軸5.14mの方形で、主軸方向はN-30°-Wである。壁高は38~90cmで、外傾して立ち上がってている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分と北西コーナー部を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで131cmである。袖部幅は89cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けた赤変硬化している。煙道部は、壁外へ38cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がってている。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|-------------------------|-------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | 砂質粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロ | 4 黒褐色 | 砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭 |
| 2 灰褐色 | 砂質粘土粒子微量 | 5 灰褐色 | 灰化粒子微量 |
| 3 にじみ褐色 | 砂質粘土粒子中量、燒土粒子・灰化粒子少量、ロー | 6 灰褐色 | ローム粒子・燒土粒子・灰化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 4 増赤褐色 | ム粒子微量 | 7 灰褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 5 増赤褐色 | 燒土ブロック中量、砂質粘土ブロック・灰化粒子少 | 8 黒褐色 | ローム粒子少量、砂質粘土粒子微量 |
| 6 黑褐色 | 量 | 9 灰褐色 | ローム粒子少量、燒土粒子・灰化粒子微量 |

ピット 5か所。P 1 ~ P 4 は深さ36~64cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5 は深さ26cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 9層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

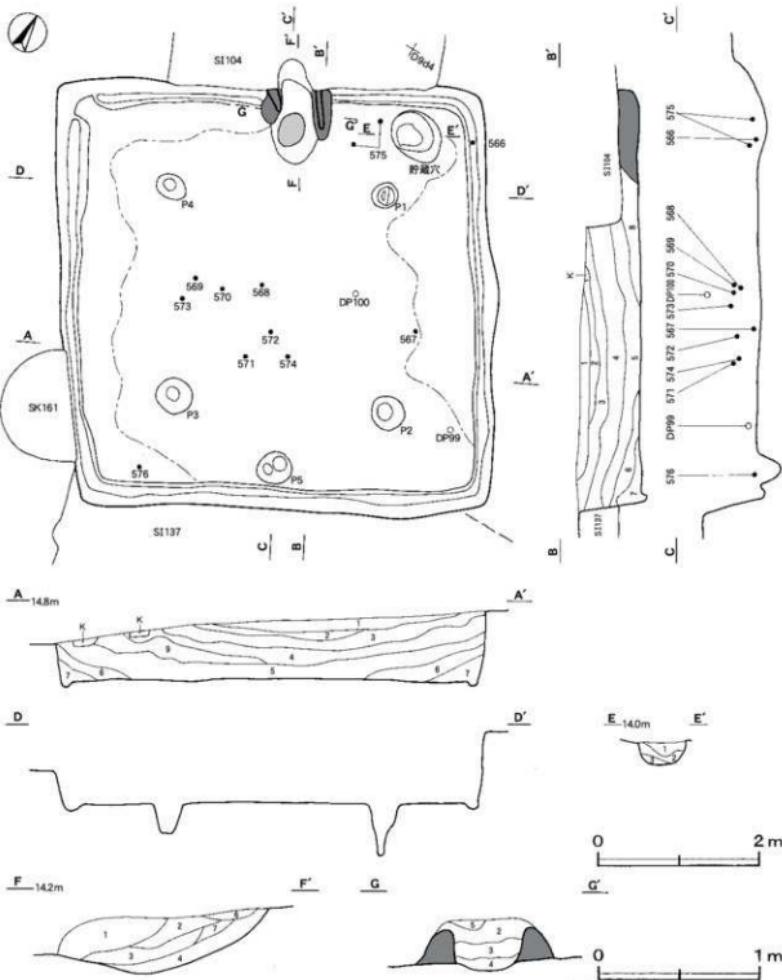
- | | | | |
|--------|-----------------------|-------|--------------------------|
| 1 増褐色 | ローム粒子・燒土粒子・灰化粒子微量 | 6 増褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 増褐色 | ローム粒子少量、燒土粒子・灰化粒子微量 | 7 増褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 極暗褐色 | 灰化粒子少量、ロームブロック・燒土粒子微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子・燒土粒子・灰化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 4 極暗褐色 | ローム粒子少量、灰化粒子微量 | 9 灰褐色 | ローム粒子中量、燒土粒子・灰化粒子微量 |
| 5 黑褐色 | ローム粒子・灰化粒子少量 | | |

貯蔵穴 北側コーナー部に位置し、長径67cm、短径56cmほどの楕円形で、深さは30cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量・焼土粒子微量
2 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

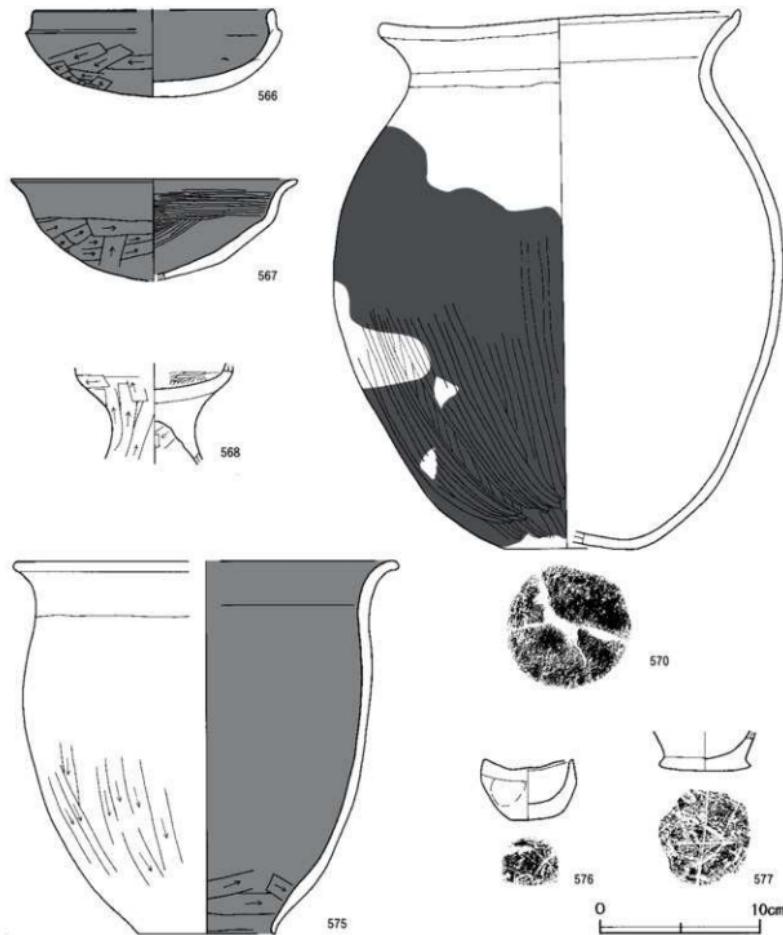
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量



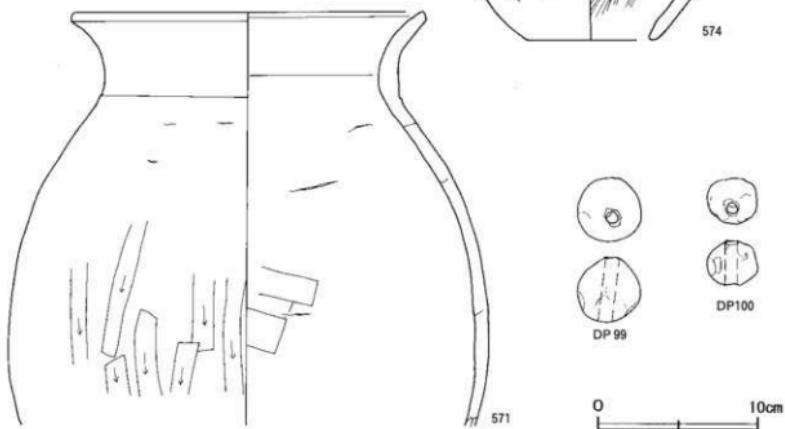
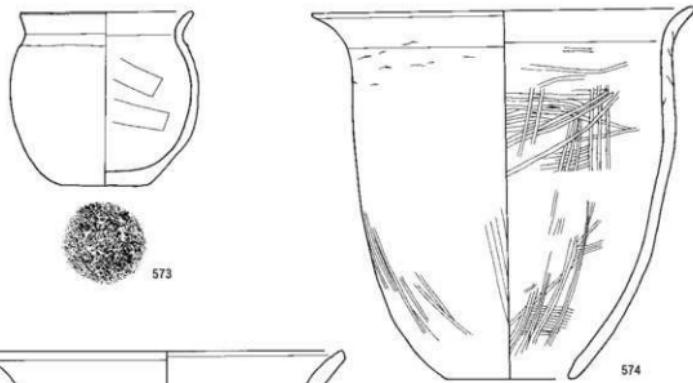
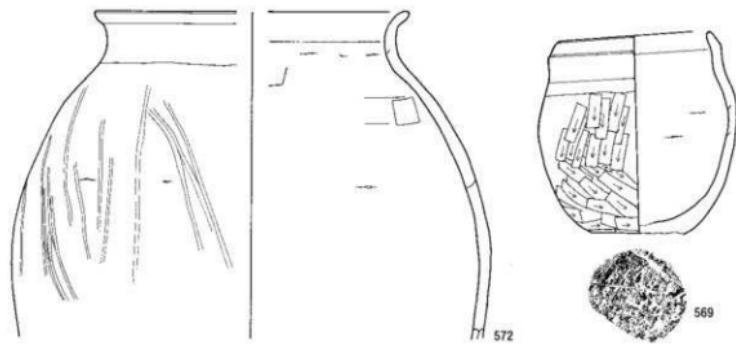
第97図 第101号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片1098点（環310, 高環19, 盖1, 弧764, 瓶4）, 手捏土器2点（环形カ）, 土製品6点（球状土錐2, 支脚4）, 石器1点（敲石）, 鉄製品1点（鉄滓カ）, 繩5点の他に, 流れ込んだ繩文土器片3点, 弥生土器片140点, 須恵器片19点も出土している。566は北コーナー部の壁構内, 568～574は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 出土した遺物のほとんどが覆土第3・4層内から出土しており, 住居廃絶後の堆みに投棄されたものと考えられる。時期は, 出土土器から7世紀前半と考えられる。



第98図 第101号住居跡出土遺物実測図(1)



第99図 第101号住居跡出土遺物実測図(2)

第101号住居跡出土遺物觀察表(第98・99図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	施土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
566	土師器	瓶	[14.7]	5.4	—	長石・石英・雲母 赤鉄粒子	にじみ青黒	普通	口沿部内・外曲面ナデ 体部外曲面へフリフリ 内面摩擦調整不 規則	覆土内	90%
567	土師器	环	17.7	(6.2)	—	長石・石英	にじみ青	普通	口沿部内・外曲面ナデ 体部外曲面へフリフリ 内面へフリフリ	覆土下層	40%
568	土師器	盖	—	(6.8)	—	長石・石英・雲母 赤鉄粒子	にじみ青	普通	环部内面・翻曲部内・外曲面へフリフリ 环部内面へフリフリ	覆土中層	20%
569	土師器	小形壺	9.3	12.5	5.7	長石・石英	にじみ青	普通	口沿部内・外曲面ナデ 体部外曲面へフリフリ 輪縁直	覆土中層	70% PL28
570	土師器	甕	22.0	32.3	7.4	長石・石英・雲母	淡黄青	普通	口沿部内・外曲面ナデ 体部外曲面中位から下端へフリフリ	覆土中層	80% 外面糊付着 PL21
571	土師器	甕	21.6	(25.7)	—	長石・石英・雲母 赤鉄粒子	普通	口沿部内・外曲面ナデ 体部外曲面中位から下端へフリフリ	覆土下層	50%	
572	土師器	甕	[19.6]	(20.1)	—	長石・石英・赤鉄 粒子	にじみ黄青	普通	口沿部内・外曲面ナデ 体部外曲面へフリフリ後へフリフリ 西面へ ナラダ 輪縁直	覆土中層	30%
573	土師器	小形甕	10.7	10.8	5.6	長石・石英	にじみ青	普通	口沿部内・外曲面ナデ 体部外曲面摩擦調整不明 内面へナラダ	覆土中層	90% PL28
574	土師器	甕	23.4	23.0	8.1	長石・石英・赤鉄 粒子	にじみ青黒	普通	口沿部内・外曲面ナデ 体部外曲面へフリフリ後へフリフリ 体部 内面へナラダ	覆土中層	70%
575	土師器	甕	[23.6]	23.0	8.4	長石・石英	にじみ黄青	普通	口沿部内・外曲面ナデ 体部外曲面へフリフリ 体部外曲面草花模 様??	覆土下層	60% 粘付着
576	土師器	手捏土器	8.5	3.8	2.1	長石・石英・雲母	橙	普通	口沿部内・外曲面ナデ 体部外曲面によるナラダ 内面ナラダ	覆土下層	70% PL33
577	土師器	手捏土器	—	(2.6)	5.6	長石・石英・赤鉄 粒子	褐灰	普通	指觸によるナラダ 近部底面直	覆土中	10%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
IP99	環狀土塊	4.0	0.9	4.0	39.2	土(長石・石英・雲母)	ナラダ 一方孔心の穿孔	覆土下層	
IP100	環狀土塊	3.2	0.8	2.8	21.7	土(長石・石英・雲母)	ナラダ 一方孔心の穿孔	覆土上層	

第106号住居跡 (第100・101図)

位置 調査区西部のD 9 c1区で、標高14.1mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第105号住居跡を掘り込み、第1号・第2号掘立柱建物、第10号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.56m、短軸4.47mの方形で、主軸方向はN-49°-Eである。壁高は23~46cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から竈前付近にかけてが踏み固められている。

竈 北東壁のやや南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで91cmである。袖部幅は96cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けた赤変化している。煙道部は、壁外へ14cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

塗土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量。炭化粒子・砂質粘土粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子少量、砂質粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 黄褐色 砂質粘土ブロック中量、焼土粒子微量
- 6 黑褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 墓褐色 烧土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 8 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 9 重打褐色 砂質粘土粒子多量、焼土粒子微量
- 10 黑褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量

ピット 5か所。P 1 ~ P 4 は深さ30~60cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 2 ~ P 4 からは柱立て替えの痕跡が確認され、それぞれの内側に柱痕跡が確認された。P 5 は深さ46cmで、柱建て替え以前の主柱穴と考えられる。

覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黑褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黑褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 墓褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 墓褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 6 黑褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

貯蔵穴 東側コーナー部に位置し、長径91cm、短径56cmほどの楕円形で、深さは42cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

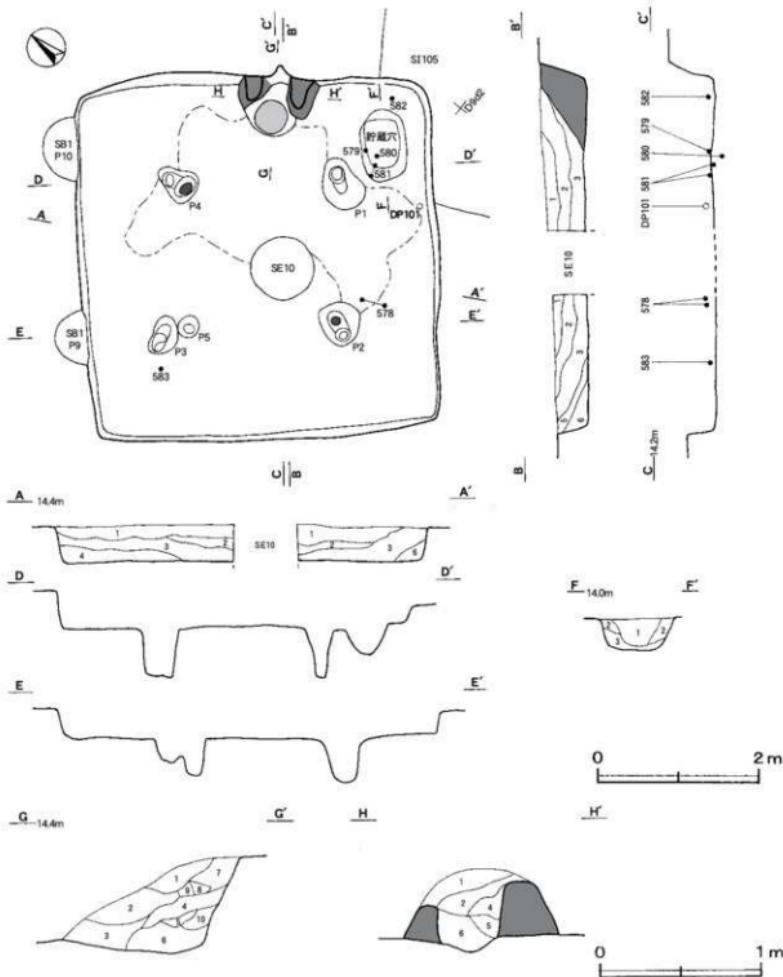
貯藏穴土層解說

1 黒 色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
2 黒 色 ロームブロック・炭化粒子少量

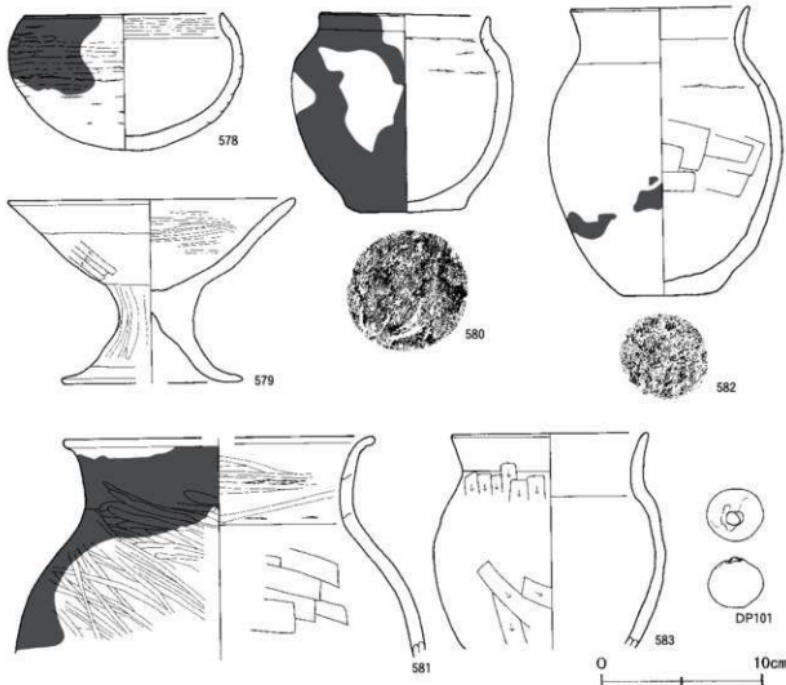
3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片686点(坪94, 器台2, 高坏7, 壺1, 壶579, 壶3), 土製品1点(球状土錐), 鉄滓1点, 瓦16点の他に, 流れ込んだ弥生土器片115点, 須恵器片5点も出土している。578は南コーナー寄りの覆土下層, 579は東コーナー寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。580は貯蔵穴内からの出土である。

所見 時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第100図 第106号住居跡実測図



第101図 第106号住居跡出土遺物実測図

第106号住居跡出土遺物観察表(第101図)

番号	種別	器種	口径	器高	直径	胎 土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
578	土師器	碗	12.3	8.4	—	長むし石英	に晶 壓	普通 輪廻窯	口沿部内・外面横ナデ後内面へフ景き 体部外面へフ景き	覆土下層	70% 外面摸付着 P129
579	土師器	高杯	17.4	11.3	[11.2]	長むし石英・赤鉄 長むし石英	に晶 壓	普通 輪廻窯外へフ景き	外部口沿部内・外面横ナデ 环底外面へラ削り 内面へフ景	覆土下層	70%
580	土師器	小形壺	10.4	12.4	7.5	二段むし赤鉄 長むし石英・赤鉄	普通	口沿部内・外面横ナデ	体部外面ナデ 編織低	約5cm内	95% 外面摸付着 P128
581	土師器	壺	[19.0]	[13.7]	—	長心し石英・雲母	根	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へフ景き	床面～ 約5cm内	15% 外面摸付着 P129
582	土師器	小形壺	11.0	17.7	5.2	長心し石英・雲母 赤鉄粒子	波浪模	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面摸付着不明 内面へラナデ 輪廻窯	覆土下層	70% 外面摸付着 P129
583	土師器	小形壺	12.0	[13.2]	—	長むし石英・雲母	に晶 壓	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	覆土下層	50%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
DP101	球状土塊	3.5	0.8~0.9	3.1	28.4	土(貝石・石英・雲母)	ナデ 一方向の穿孔	覆土下層	

第116号住居跡 (第102・103図)

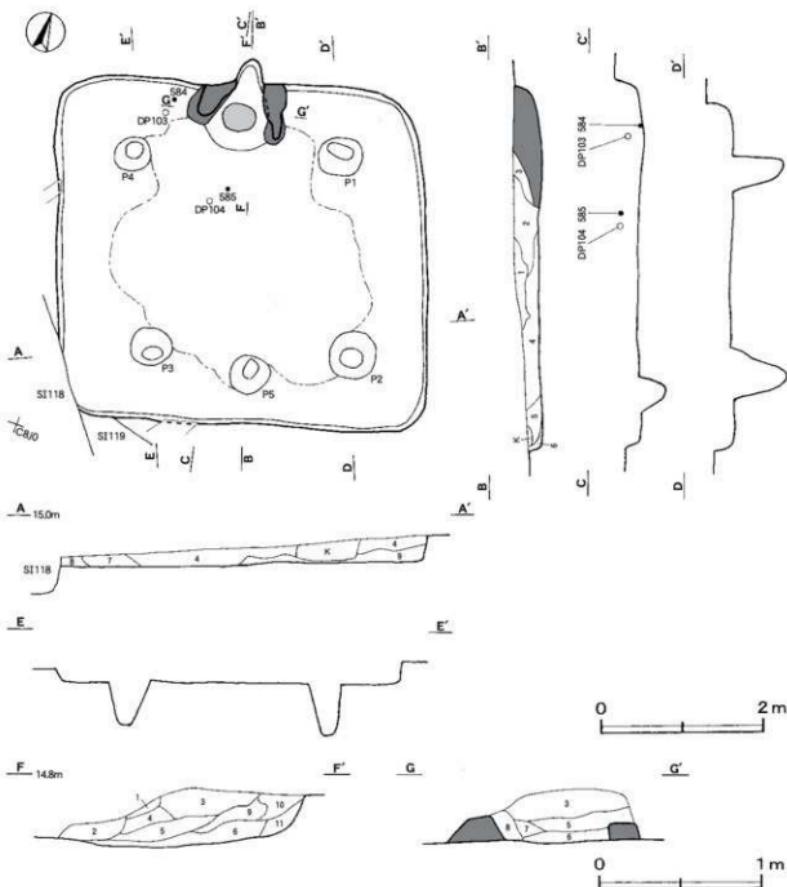
位置 調査区西部のC 8 i0区で、標高14.7mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第119号住居跡を掘り込み、第118号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.58m、短軸4.26mほどの方形で、主軸方向はN-21°-Wである。壁高は20~32cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

窓 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで117cmである。袖部幅は118cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受け赤変硬化している。煙道部は、壁外へ28cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第3・8層は天井部や袖材の崩落層と考えられる。



第102図 第116号住居跡実測図

遺土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	7 にじみ褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量・炭化粒子微量
2 にじみ褐色	砂質粘土粒子少量・ローム粒子・炭化粒子微量	8 黄褐色	砂質粘土粒子多量・焼土粒子・炭化粒子微量
3 黄褐色	砂質粘土粒子多量・焼土粒子微量	9 灰褐色	砂質粘土粒子中量・炭化粒子少量・ローム粒子・焼土粒子微量
4 喀褐色	焼土粒子微量	10 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5 黑褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	11 喀褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
6 にじみ黒褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子中量・炭化粒子微量		

ビット 5か所。P 1～P 4は深さ58～68cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ34cmで、配置から出入り口施設に伴うビットと考えられる。

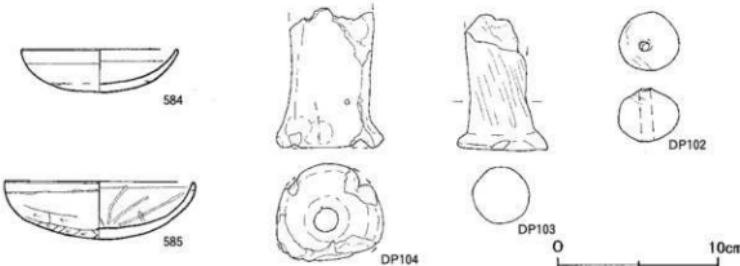
覆土 9層に分層される。周囲から土砂が流れ込んだ様相を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	6 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	7 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量・炭化粒子微量
3 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	8 黑褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
4 黑褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量	9 黑褐色	ローム粒子・炭化粒子少量・焼土粒子微量
5 黑褐色	ローム粒子・焼土粒子微量・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土器片374点(坏45, 高杯2, 麽類327), 土製品3点(球状土錘, 支脚, 羽口), 砧5点の他に、流れ込んだ弥生土器片48点, 須恵器片20点も出土している。584は竈左側の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀後半と考えられる。



第103図 第1116号住居跡出土遺物実測図

第116号住居跡出土遺物観察表(第103図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
584	土器片	坏	9.6	2.7	—	長石・石英・雲母	褐	普通	口凹部内・外面横十テ、体部外縁二ヶ所) 内面十テ 縦筋直	床面	70% PL28
585	土器片	坏	11.7	3.6	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	明灰褐色	普通	口凹部内・外面横十テ 体部外縁二ヶ所引 内面へラ筋き	覆土上層	60% PL28

番号	器種	最大径	径	厚さ	重量	材質	特徴	値	出土位置	備考
DP102	球状土錘	3.8	0.7	3.3	42.2	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方端中心の穿孔		覆土中	

番号	器種	長さ	径	底径	重量	材質	特徴	値	出土位置	備考
DP103	支脚	(8.0)	3.5~3.8	5.6	(32.1)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	ヘラ筋き		覆土中層	

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特徴	値	出土位置	備考
DP93	羽口	(8.0)	1.3~2.8	1.4~2.8	(230.0)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	外縁ナデ		覆土上層	

第119号住居跡（第104・105図）

位置 調査区西部のC 8 j0区で、標高14.3mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第116・118号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.95m、短軸4.30mほどの長方形と推定され、主軸方向はN-10°-Eである。確認された壁高は60cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦であるが、硬化面などは確認できなかった。

炉 中央部やや北寄りに確認され、長径63cm、短径39cmほどの楕円形と推定される。第118住居の掘り方に壊されているため、赤変部分は確認されなかつたが、皿状にややくぼんだ状態でロームが熱を受けて硬化している。

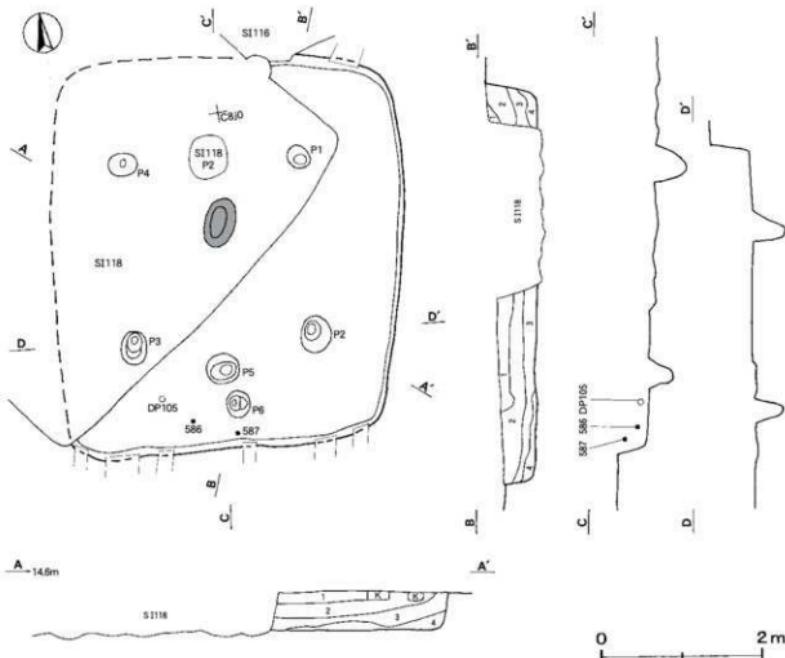
ピット 6か所。P 1～P 4は深さ33～39cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ29cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6は深さ36cmで、配置から出入り口施設に伴う補助的な役割を果たした可能性があるが明確ではない。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒 極褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

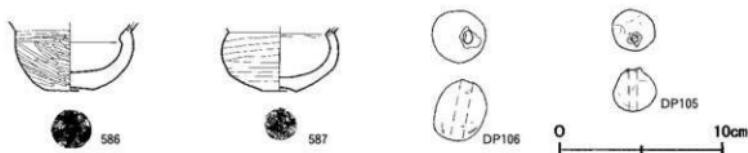
3 極褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色 ロームブロック微量



第104図 第119号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片70点(坏20, 塵2, 麦48), 土製品2点(球状土錐), 磨5点の他に, 流れ込んだ弥生土器片65点も出土している。586は南壁際の覆土下層から, 587は覆土中層から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが, 時期は, 出土土器から4世紀代と考えられる。



第105図 第119号住居跡出土遺物実測図

第119号住居跡出土遺物観察表(第105図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
586	土師器	壺	—	(4.2)	2.6	長石・石英・雲母 にぬけ	褐色	普通	体部外面へラブ着き 内面ナデ	覆土下層	50% PL33
587	土師器	壺	—	(3.9)	2.0	長石・石英・赤色 粘土	褐色	普通	体部外面へラブ着き 内面ナデ	覆土中層	50% PL33

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
IP105	球狀土錐	2.7	0.5	2.7	17.0	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向ひらの穿孔	覆土下層	
IP106	球狀土錐	3.4	0.7	3.9	37.6	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向ひらの穿孔	覆土中	

第122号住居跡(第106・107図)

位置 調査区西部のD 8 a7区で, 標高13.9mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第124・125・126号住居跡を掘り込み, 第22号墓坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.24m, 短軸5.05mの方形で, 主軸方向はN-39°-Wである。壁高は14~30cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められており, 窓右側部分を除いて壁溝が周回している。

窓 北西壁のやや北寄りに付設されている。第22号墓坑に右袖部が掘り込まれているため, 煙道部までの82cmだけが確認された。遺存している袖部幅は117cmほどで, 床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。

火床部は, 床面と同じ高さの地山面を使用しており, 火を受けて赤変硬化している。煙道部は, 壁外へ59cm掘り込まれ, 火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竪土層解説

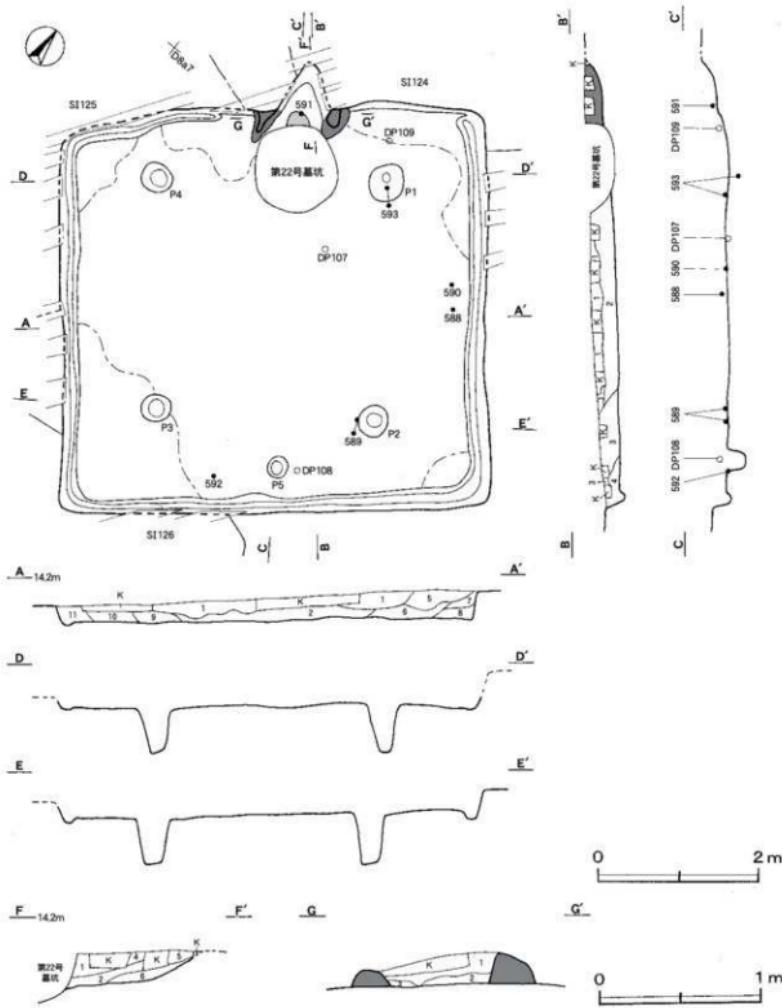
- | | | | | | |
|---|------|-----------------------------------|---|------|-----------------------------|
| 1 | 黒褐色 | 砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 | 暗赤褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 | ぬれ褐色 | 燒土ブロック中量, 砂質粘土粒子少量, ローム粒子, 炭化粒子微量 | 5 | 褐色 | 燒土ブロック中量, 炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 3 | ぬれ褐色 | 砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 | 暗赤褐色 | 燒土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量 |

ピット 5か所。P 1 ~ P 4は深さ57~62cmで, 配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ26cmで, 配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 11層に分層される。壁際はブロック状の堆積状況を示す人為堆積で, 中央部はレンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

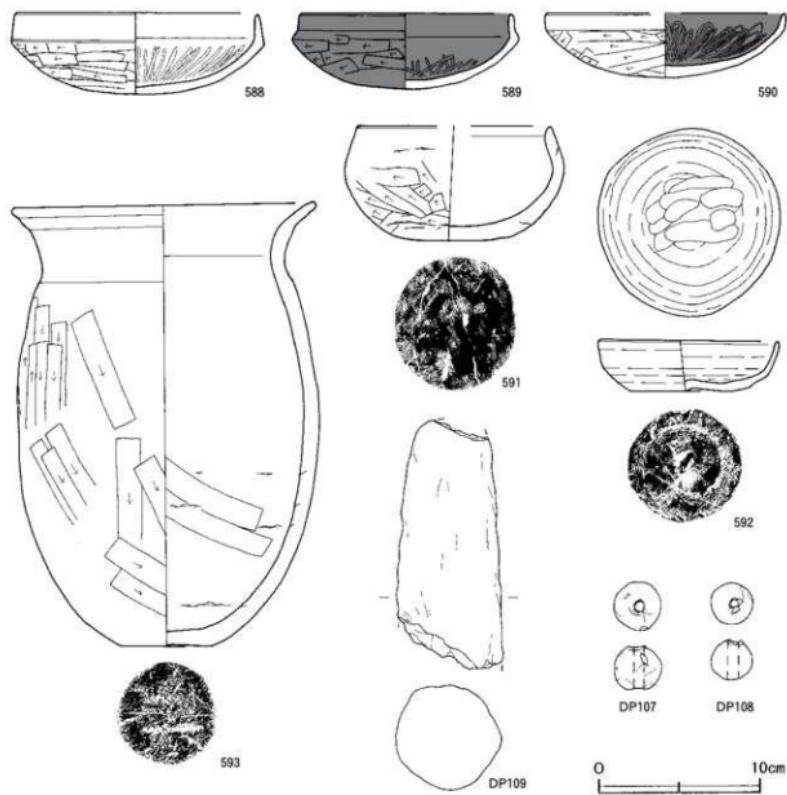
- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 棕暗褐色 | ローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 棕暗褐色 | ローム粒子少量・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 9 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量・炭化粒子微量 | 10 黒褐色 | ロームブロック少量・炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子少量・焼土ブロック・炭化粒子微量 | | |



第106図 第122号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片365点（坏48、高坏1、甕316）、須恵器1点（坏）、土製品3点（球状土錐2、支脚1）、鍬9点の他に、流れ込んだ弥生土器片63点、須恵器片10点も出土している。588・590は北東壁際の覆土下層、589はP2付近の覆土下層、592は南東壁際の床面からそれぞれ出土している。593はP1付近の床面とP1覆土中層から出土した土器片が接合しており、住居廃絶により柱の抜き取り穴に流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から7世紀前半と考えられる。



第107図 第122号住居跡出土遺物実測図

第122号住居跡出土遺物観察表(第107図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特徴	出土位置	備考
588	土師器	坏	15.1	5.0	—	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口沿部内・外面横十字 体部外面へラ削り 内面へフ削き	覆土下層	100% P1.26
589	土師器	坏	13.0	4.7	—	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	口沿部内・外面横十字 体部外面へラ削り 内面へフ削き 輪切削孔	覆土下層	80% P1.26
590	土師器	坏	[14.6]	3.9	—	長石・石英・雲母 金合子粒子	紅褐色	普通	口沿部内・外面横十字 体部外面へラ削り 内面へフ削き	覆土下層	70%

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴		出土位置	備 考
								底面	内面		
302	氣泡器	球	11.0	3.2	7.2	長石・石英	灰	良好	底面擦毛へア切り 内面仕上げナダ	床面	100% 墓着 P1.28
301	土鍋器	楕	[11.8]	7.1	7.0	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口沿部内・外面横ナダ 体部外面へア切り 内面ナダ 華燒低 輪組有	墓内	60%
303	土鍋器	楕	18.5	27.4	5.6	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口沿部内・各面横ナダ 体部外面へア切り 内面ナダ 華燒低 輪組有	床面-P1 壁中層	70%

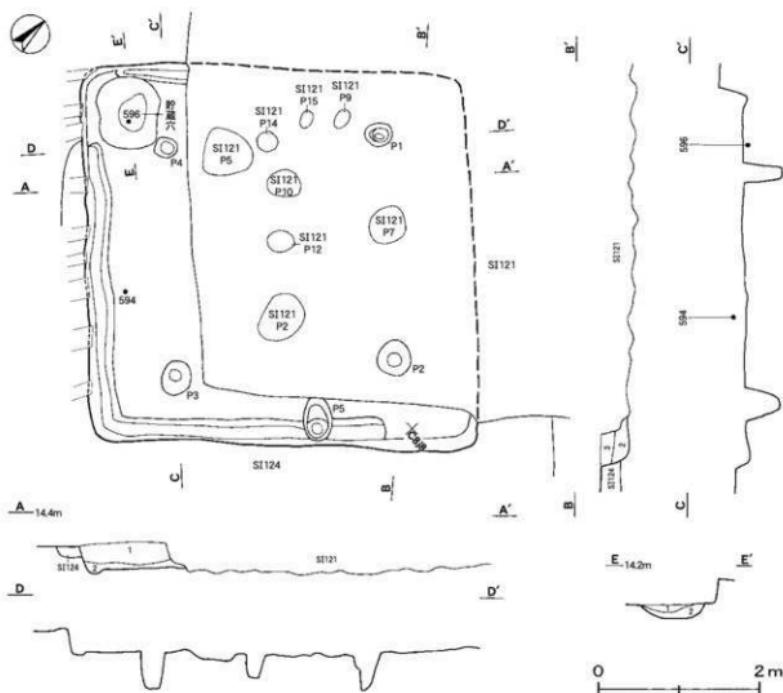
番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	手 法 の 特 徴		出土位置	備 考
								底面	内面		
DP007	環状土鍤	2.9	0.6	2.7	(25.1)	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向からの穿孔			床面	
DP008	環状土鍤	2.6	0.6~0.7	2.4	13.8	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向からの穿孔			墓土中層	

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	手 法 の 特 徴		出土位置	備 考
							底面	内面		
DP009	支脚	(15.4)	4.6~6.5	(51.8)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	指掘によるナダ			覆土下層	

第123号住居跡 (第108~109図)

位置 調査区西部のC 8.j7区で、標高14.1mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第124号住居跡を掘り込み、第121号住居に掘り込まれている。



第108図 第123号住居跡実測図

規模と形状 遺存している壁や柱穴の配置から、N-47°-Wを主軸方向とする一辺が4.80mほどの方形と推定される。確認された壁高は13~29cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦と考えられる。南コーナー部を中心に両側へ壁構が延びている。

ピット 5か所。P 1~P 4は深さ40~49cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層に分層される。ロームブロックや焼土ブロックを含む人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、燒土ブロック・炭化粒子微量	3 黒褐色 ロームブロック・燒土粒子・炭化粒子少量
2 極暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量	

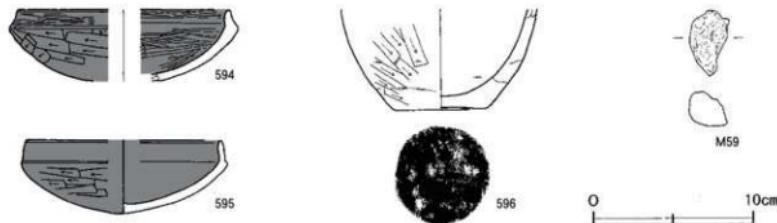
貯蔵穴 西側コーナー部に位置し、長径88cm、短径70cmの楕円形で、深さは18cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・燒土ブロック・炭化物微量	2 暗褐色 ロームブロック少量、燒土粒子微量
----------------------------	------------------------

遺物出土状況 土師器片174点(坪20、高坪1、器台1、甕152)、鉄製品2点(鉄滓、不明)、礪1点の他に、混入した弥生土器片15点、須恵器片6点も出土している。594は南西壁際の覆土下層、596は貯蔵穴からそれぞれ出土している。

所見 本跡は大部分を第121号住居に掘り込まれており、時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第109図 第123号住居跡出土遺物実測図

第123号住居跡出土遺物観察表(第109図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色調	施成	手 法 の 特 殊	出土位置	備 考
594	土師器	坪	[13.2]	(4.5)	—	長石・石英・雲母 に粘・黄褐色	普通	口沿部・内面へラ磨き 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	30%	
595	土師器	坪	[12.0]	4.5	—	長石・石英・雲母 に粘・褐	普通	口沿部・外表面仕上げ 体部外面へラ削り 内面ナメ	覆土中	30%	
596	土師器	甕	—	(6.2)	5.9	長石・石英・雲母 ・赤鉄粒子	普通	体部外面へラ削り 輪郭低	貯蔵穴内	10%	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 殊	出 土 位 置	備 考
M59	陶滓洋	4.1	2.4	2.1	25.7	鐵	表面に赤褐色付着 頭凸有り	覆土中	

第124号住居跡 (第110・111図)

位置 調査区西部のC 8 j7区で、標高14.1mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第121・122・123号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺存している壁や柱穴の配置から、N-44°-Wを主軸方向とする長軸6.00mほど、短軸5.70mほどの方形と推定される。確認された壁高は6~29cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦と考えられる。

ピット 4か所。深さは47~65cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 3層に分層される。不規則な堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

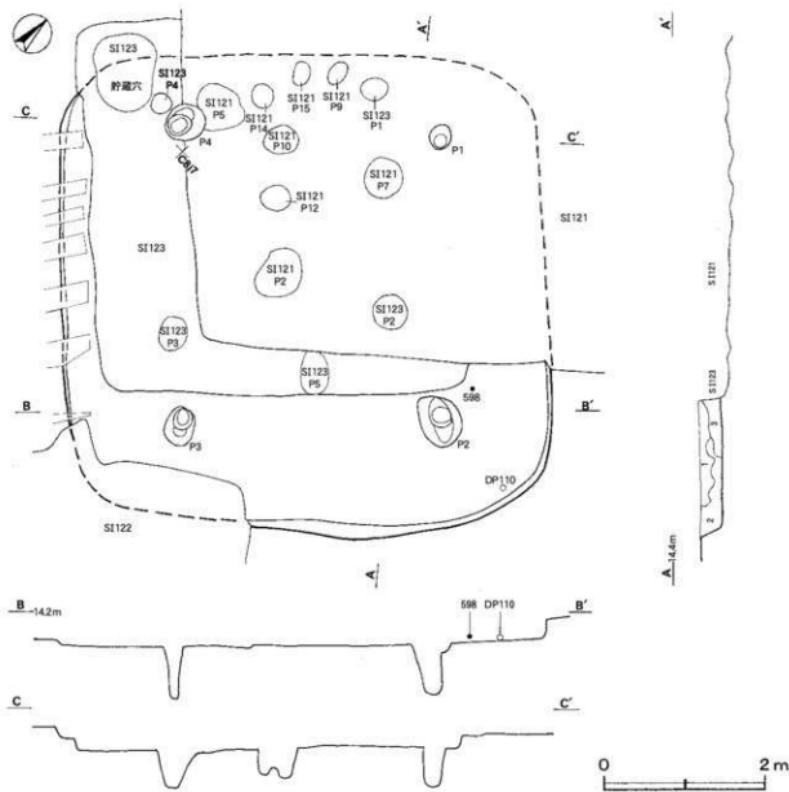
1 黒褐色 炭化物・ローム粒子微量

3 噴褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

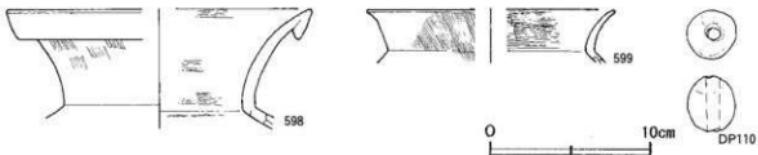
2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片26点(高杯8、器台1、甕17)、土製品1点(球状土錐)、礫3点の他に、流れ込んだ弥生土器片18点も出土している。598は東コーナー付近の覆土下層から出土している。

所見 大部分は第121・122・123号住居に掘り込まれているため、時期を特定できる遺物が少ないが、4世纪代と考えられる。



第110図 第124号住居跡実測図



第111図 第124号住居跡出土遺物実測図

第124号住居跡出土遺物観察表(第111図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	粘土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
598	土師器	壺	[18.8]	(7.4)	—	長石・石英・雲母	淡黄褐	普通	口沿部内・外面ハケ田調整後擦り消し・輪埴板	覆土下層	10%
599	土師器	甕	[15.3]	(3.2)	—	長石・石英・雲母	褐	普通	口沿部内・外面ハケ田調整	覆土中	5%
DP110	块状土塊		3.1	0.7~0.8	3.4	31.2	土(長石・石英・雲母)	ナデ	一方向凹凸の穿孔	覆土下層	

第125号住居跡 (第112・113図)

位置 調査区西部のD 8 a6区で、標高13.8mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第122号住居、第168・169号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.60m、短軸3.80mの長方形で、主軸方向はN-55°-Wである。壁高は20cmで、外傾して立ち上がっていいる。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、遺存している部分には、窓部分を除いて壁溝が周回している。竈 北西壁中央部に付設されている。耕作による擾乱を受けており、焚口部から煙道部までは82cmほどと推定される。袖部幅は88cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しているが、赤変や硬化部分を検出することはできなかった。煙道部は、壁外へ10cmほど掘り込まれていると推定され、火床面から外傾して立ち上がっていいる。

塗土層解説

1	暗褐色	燒土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子、砂質粘土粒子微量	7	黃褐色	砂質粘土粒子中量、燒土粒子微量
2	暗褐色	子微量	8	暗褐色	燒土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
3	灰褐色	砂質粘土粒子多量、燒土粒子・炭化粒子微量	9	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
4	暗赤褐色	燒土粒子・砂質粘土粒子中量、炭化粒子微量	10	灰褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量
5	灰褐色	燒土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子、砂質粘土粒子微量	11	黑褐色	炭化粒子少量、燒土粒子・砂質粘土粒子微量
6	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	12	黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ25～51cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ19cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

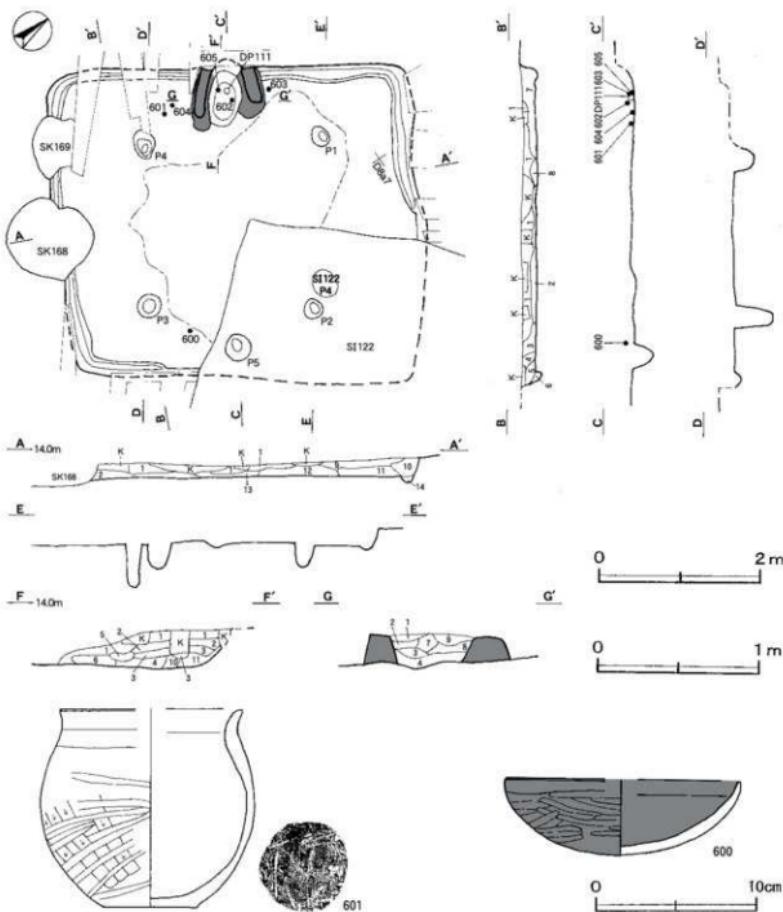
覆土 14層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

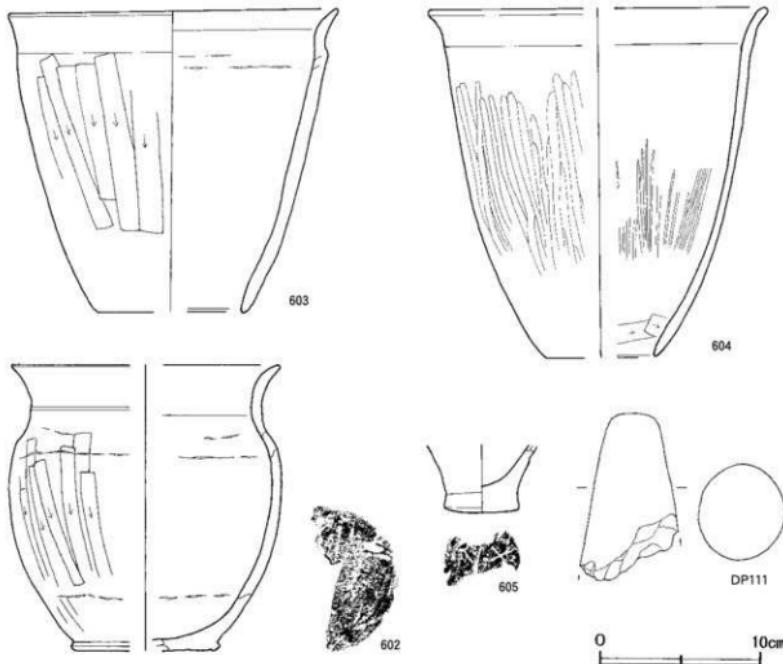
1	黒褐色	ロームブロック・炭化物微量	8	暗褐色	ローム粒子少量、炭化物微量
2	暗褐色	ローム粒子少量	9	黒褐色	ロームブロック微量
3	黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	10	黒褐色	ローム粒子・燒土粒子微量
4	極暗褐色	ロームブロック微量	11	極暗褐色	ロームブロック少量
5	暗褐色	ロームブロック少量	12	黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
6	褐色	ローム粒子中量	13	暗褐色	ロームブロック少量
7	黒褐色	ロームブロック・燒土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック微量	14	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片160点（坏35、高坏2、壺1、甕121、瓶1）、手捏土器1点（甕カ）、土製品2点（支脚）、礫2点の他に、耕作時の擾乱により混入した須恵器片2点も出土している。600は出入り口付近の覆土下層から出土している。その他の遺物は竈付近を中心に出土しており、601・604は竈左側の床面、603は竈右側の床面からの出土である。602・DP111は竈内から重なるように出土しており、住居廃絶時には竈に掛けられた状態で遺棄された可能性が高い。また、605も竈内からの出土で、住居の廃絶時に竈に関わる祭祀的な行為の可能性も考慮できる。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第112図 第125号住居跡・出土遺物実測図



第113図 第125号住居跡出土遺物実測図

第125号住居跡出土遺物観察表(第112・113図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	粘土	色調	使成	手法の特徴	出土位置	備考
600	土師器	壺	[14.4]	(4.7)	—	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口辺部内・外面横ナギ 体部外面へラ削り後へラ磨き	覆土下層	88%
602	土師器	甌	[16.5]	17.7	[8.5]	長石・石英・雲母	にじみ青褐色	普通	口辺部内・外面横ナギ 体部外面へラ削り 製造板	窓内	40%
601	土師器	小形甌	[11.2]	12.2	5.8	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	口辺部内・外面横ナギ 体部外面へラ削り後へラ磨き 蓋部へ2削り	表面	59%
603	土師器	甌	20.3	18.7	[8.9]	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面横ナギ 体部外面へラ削り 製造板	表面	50%
604	土師器	甌	[21.0]	21.6	[6.8]	長石・石英・雲母	にじみ青	普通	口辺部内・外面横ナギ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へ2削り 製造板 内部内面へラ削り	表面	45%
605	土師器	手捏土器	—	(4.2)	4.7	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ナギ	窓内	70%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP111	支脚	(10.3)	3.0~6.0	284.4	土(長石・石英・雲母)	丁寧なナギ	窓内	

第126号住居跡 (第114図)

位置 調査区西部のD 8 b7区で、標高13.7mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第122号・127号住居に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による搅乱のため床面まで削平された状態で検出され、長軸4.50m、短軸4.40mほどが確認

された。遺存している床面や炉の位置などから判断して、N-8°-Wを主軸方向とする方形と推定される。

床 平坦であるが、削平により硬化面は確認できなかった。

炉 北寄りに2か所確認された。炉1は中央部の北側に位置し、長径78cm、短径57cmの楕円形で、床面を掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。炉2は北側のやや東寄り位置し、長径41cm、短径33cmの楕円形で、床面を掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

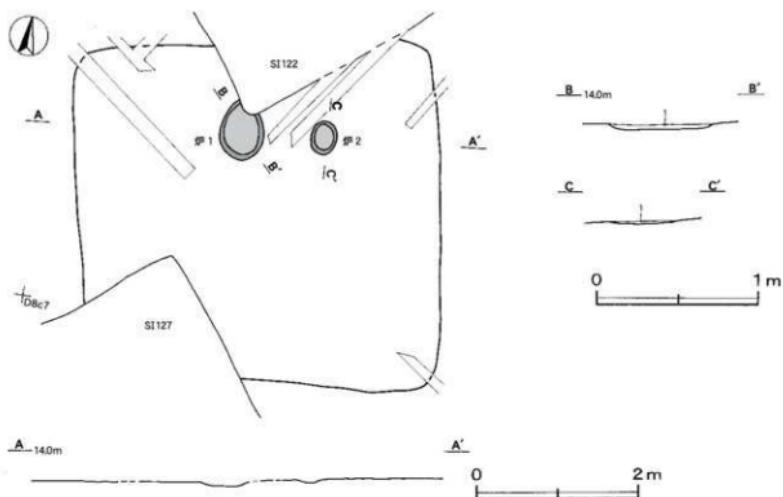
炉1土層解説

1 褐赤褐色 後土粒子中量

炉2土層解説

1 極端赤褐色 烧土粒子少量

所見 遺物が出土していないため、時期は不明であるが、第122・127号住居に掘り込まれ、また、炉を有することなどから5世紀以前と想定される。



第114図 第126号住居跡実測図

第127号住居跡（第115図）

位置 調査区西部のD 8 c7区で、標高13.7mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第126号住居跡を掘り込み、第9号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 大部分は搅乱を受けており、長軸6.20mほど、短軸2.60mほどが確認された。平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向N-37°-Wである。壁高は50cm前後で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、北西壁と南東壁に壁溝が周回している。

ピット 1か所。深さは51cmで、配置から柱穴と考えられる。

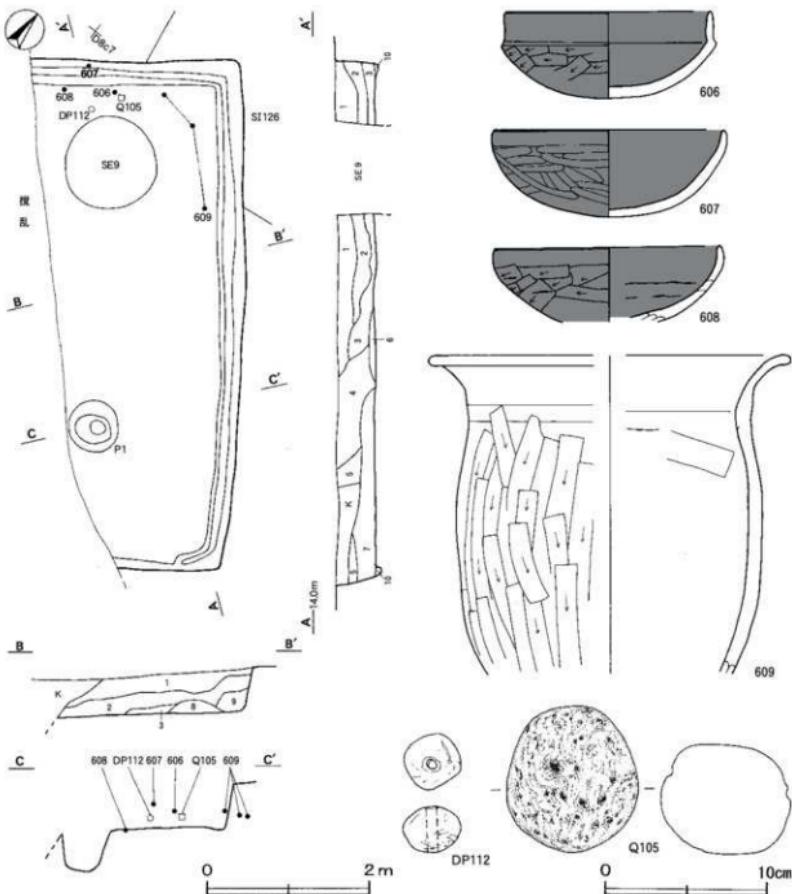
覆土 10層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量	6 開色	ロームブロック少量
2 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量
3 極暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 黒褐色	ローム粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	9 開色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
5 極暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	10 黒褐色	ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器器352点(坏141, 瓢211), 土製品2点(球状土錐), 石器1点(磨石), 磁2点の他に, 混入した弥生土器32点, 須恵器片6点も出土している。606・609・DP112・Q105は北コーナー付近の覆土下層, 608は床面から出土している。

所見 時期は, 出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第115図 第127号住居跡・出土遺物実測図

第127号住居跡出土遺物観察表(第115図)

番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
606	土師器	坪	12.4	5.3	—	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	口沿部内・外面横ナギ 体部外面へラ削り 内面ナギ	覆土下層	95% PL.26
607	土師器	坪	14.2	5.2	—	長石・石英・雲母 赤色粒子	黒褐色	普通	口沿部内・外面横ナギ 体部外面へラ削り 内面ナギ	覆土中層	80% PL.26
608	土師器	坪	13.8	(4.6)	—	長石・石英・雲母	二凹い赤褐色	普通	口沿部内・外面横ナギ 体部外面へラ削り 内面ナギ 輪縁張	床面	50%
609	土師器	甕	[21.8]	(19.5)	—	長石・石英・雲母	に凹い褐	普通	口沿部内・外面横ナギ 体部外面へラ削り 内面ヘラナギ 輪縁張	覆土下層	30%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DF12	環状土器	3.4	0.6	2.9	31.3	土(長石・石英・雲母)	ナギ 一方向からの穿孔	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
605	不明	9.0	8.0	6.6	152.3	輕石	研磨痕	覆土下層	浮子カ PL.26

第128号住居跡(第116図)

位置 調査区西部のC 9h1区で、標高15.1mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 農耕による搅乱のため床面の一部が削平されており、長軸3.80m、短軸3.40mほどが確認された。遺存している壁や検出された炉の位置などから判断して、N-48°-Wを主軸方向とする長方形と推定される。遺存している壁高は8cm前後で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北西寄りに位置している。長径68cm、短径47cmの梢円形で、床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 黒褐色 極少。ローム粒子・炭化粒子微量

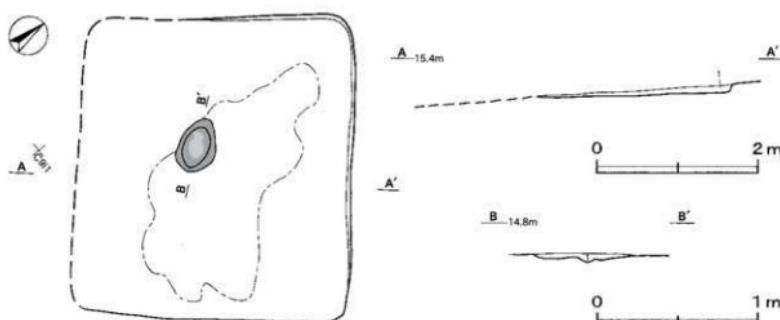
覆土 単一層であるため、堆積状況は不明である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量。炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片43点(塙1、甕42)が出土しているが、細片のため図示することはできない。

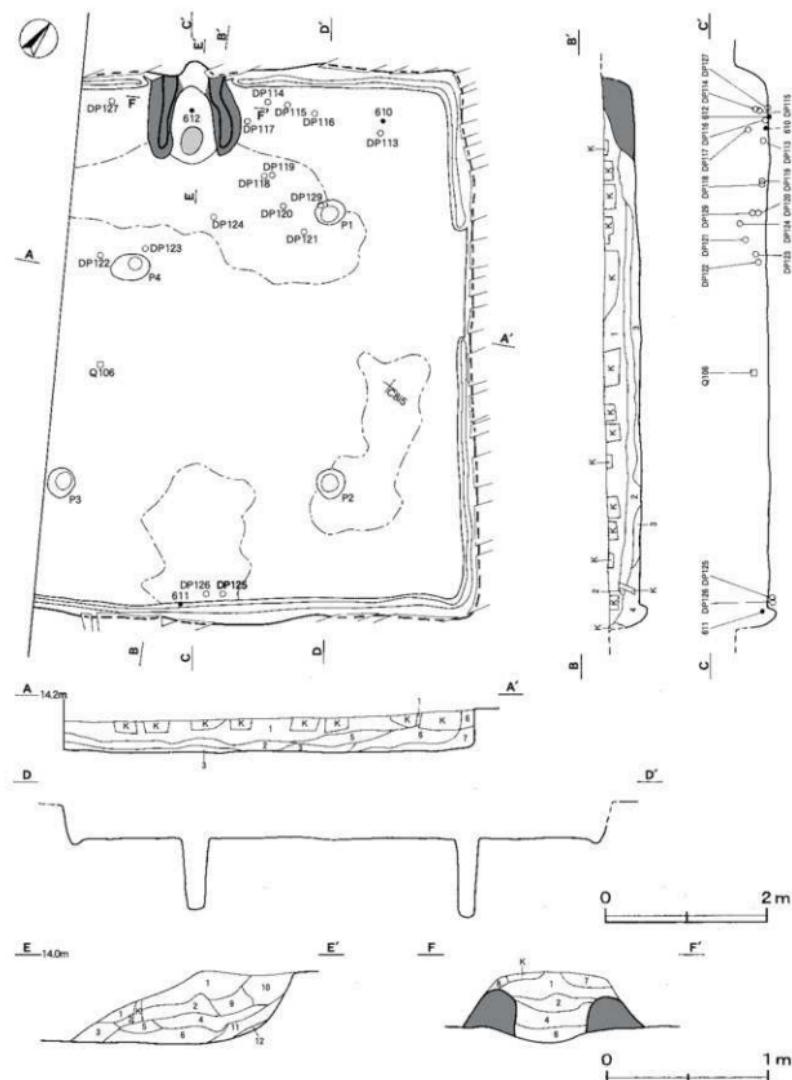
所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土遺物や遺構の形態などから4世紀代と考えられる。



第116図 第128号住居跡実測図

第130号住居跡（第117～119図）

位置 調査区西部のC 8 14区で、標高13.9mほどの中位段丘上に位置している。



第117図 第130号住居跡実測図

規模と形状 南西側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸6.82m、短軸は5.40mほどが確認された。平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向はN-35°-Wである。壁高は40～44cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前や出入り口付近が踏み固められている。竈部分と北東壁の一部を除いて塀構が周回している。

竈 北西壁中央部に付設されていると考えられ、焚口部から煙道部まで126cmである。袖部幅は114cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けた赤変硬化している。煙道部は、壁外へ18cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第9層は天井部の崩落層と考えられる。

塗土層解説

1 白 色 ローム粒子少量	7 黒 色 ローム粒子・炭化粒子微量
2 黑 色 砂質粘土ブロック・ローム粒子少量	8 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3 にじみ褐色 ローム粒子・焼土粒子少量	9 黄褐色 砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 灰褐色 砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量	10 にじみ褐色 砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
5 白褐色 烧土ブロック中量、砂質粘土ブロック・ローム粒子 少量	11 喧褐色 炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子 微量
6 黑褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	12 黑褐色 炭化物・砂質粘土ブロック少量、ローム粒子微量

ピット 4か所。P 1～P 3は深さは92～102cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 4は深さ37cmで、性格は不明である。

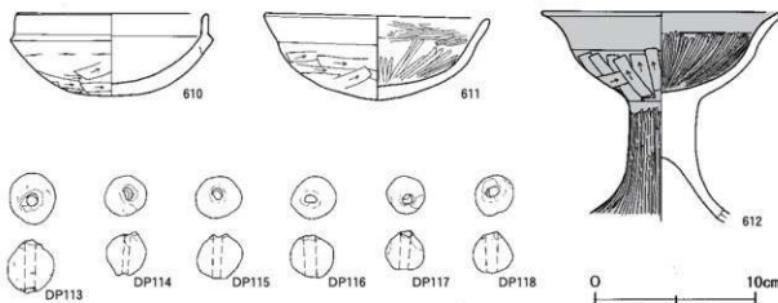
覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

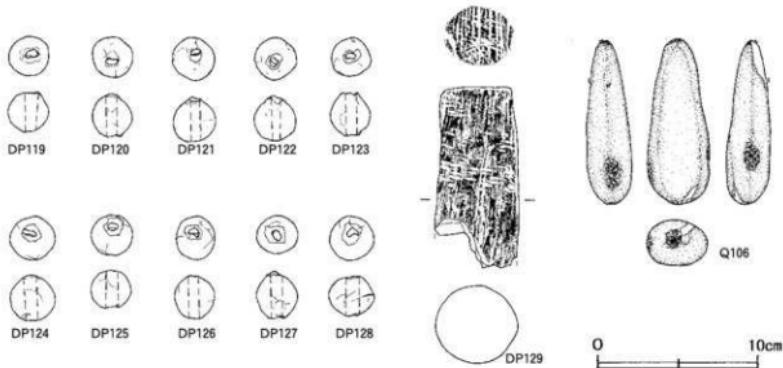
1 喧褐色 ローム粒子・炭化粒子微量	5 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
2 黑褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量	6 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
3 極暗褐色 ローム粒子少量	7 にじみ褐色 ローム粒子少量
4 白色 ローム粒子少量	

遺物出土状況 土器片584点(坪47、窓529、瓶2)、土製品23点(球状土鍾19、支脚3、不明1)、石器1点(敲石)、鐵滓1点、礪6点の他に、混入した弥生土器片125点、須恵器片22点も出土している。610は北コーナー部の床面から出土している。612は竈内の火床面よりやや奥まった位置から逆位の状態で出土し、二次焼成を受けていることから支脚として転用された可能性が高い。

所見 時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第118図 第130号住居跡出土遺物実測図(1)



第119図 第130号住居跡出土遺物実測図(2)

第130号住居跡出土遺物観察表(第118・119図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	粘 土	色調	焼成	手 法 の 特 殊	出土位置	備 考
630	土師器	环	11.7	5.1	—	長石・石英・雲母・赤鉄鉱・赤玉子	灰褐色	普通	口沿部内・外面焼付テ・体部外表面へ削り 内面ナダ	縫隙	床面 100% PL26
631	土師器	环	13.9	5.2	—	長石・石英・雲母・赤鉄鉱・赤玉子	明褐色	普通	口沿部内・外面焼付テ・体部外表面へ削り 内面へ削き	覆土下層	99% PL27
632	土師器	高环	14.7 (12.9)	—	—	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	底部外表面・外曲構ナダ・体部外表面へ削り 縫隙外表面へ削り後へ削き 内面へ削き	室内	88% 市井 PL30

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土地位置	備 考
DP13	環状土鍤	2.9	0.6	3.3	24.3	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向のみの穿孔	覆土下層	
DP14	環状土鍤	2.5	0.3	2.7	(15.2)	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向のみの穿孔	覆土下層	
DP15	環状土鍤	2.8	0.5~0.6	2.7	18.5	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向のみの穿孔	覆土下層	
DP16	環状土鍤	2.8	0.7	2.6	(18.4)	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向のみの穿孔	覆土下層	
DP17	環状土鍤	2.4	0.5~0.6	2.4	(10.3)	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向のみの穿孔	覆土中層	
DP18	環状土鍤	2.5	0.6~0.8	2.5	(12.7)	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向のみの穿孔	覆土下層	
DP19	環状土鍤	2.5	0.6~0.8	2.5	15.1	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向のみの穿孔	覆土下層	
DP20	環状土鍤	2.5	0.7	2.7	15.9	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向のみの穿孔	覆土下層	
DP21	環状土鍤	2.7	0.6	2.7	(18.7)	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向のみの穿孔	覆土中層	
DP22	環状土鍤	2.6	0.4~0.6	2.8	17.0	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向のみの穿孔	覆土下層	
DP23	環状土鍤	2.5	0.7	2.6	15.6	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向のみの穿孔	覆土上層	
DP24	環状土鍤	2.9	0.7~0.8	2.8	18.6	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向のみの穿孔	床面	
DP25	環状土鍤	2.6	0.7	2.3	14.2	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向のみの穿孔	床面	
DP26	環状土鍤	2.7	0.6	2.6	16.3	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向のみの穿孔	床面	
DP27	環状土鍤	2.5	0.7	2.9	14.7	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向のみの穿孔	覆土下層	
DP28	環状土鍤	2.9	0.9	2.5	(17.1)	土(長石・石英・雲母)	ナダ 一方向のみの穿孔	電覆土中	

番号	器種	長さ	径	重 量	材 質	特 徴	出土地位置	備 考
DP29	支脚	(11.3)	4.1~(5.2)	(306.6)	土(長石・石英・雲母)	格子状の網目	覆土中層	

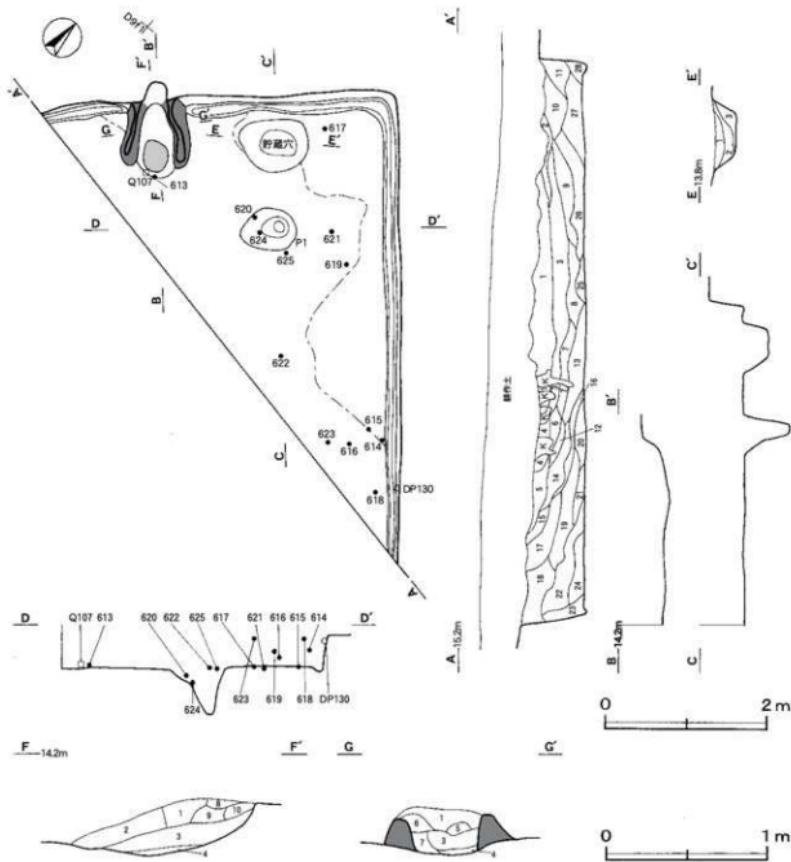
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重 量	材 質	特 徴	出土地位置	備 考
Q100	磁石	10.2	3.8	2.7	(138.2)	砂岩	両端部と両側面に磨打痕	覆土中層	

第132号住居跡（第120～122図）

位置 調査区西部のD 9 f2区で、標高14.2mほどの中位段丘上に位置している。

規模と形状 南側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかつたが、長軸5.80m、短軸4.48mほどが確認できた。竈や柱穴の位置などから判断して、N-42°-Wを主軸方向とする方形または長方形と推定される。確認できた壁高は39～78cmで、外傾して立ち上がつてゐる。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、遺存している部分には、竈部分を除いて塙溝が周回してゐる。



第120図 第132号住居跡実測図

竈 北西壁の中央部に付設されていると考えられ、焚口部から煙道部まで120cmである。袖部幅は88cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りこぼして使用しており、火を受けて赤茶硬化している。煙道部は、壁外へ24cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっていいる。

遺土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	6 にじみ褐色	砂質粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量
2 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子少量	7 にじみ褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ロームブロック微量
3 極暗褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ロームブロック微量	8 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4 にじみ褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・砂質粘土ブロック微量	9 極暗褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
5 暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量	10 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 1か所。深さは60cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 28層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人形が堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック微量	15 淡褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 極暗褐色	ローム粒子少量	16 暗褐色	ロームブロック・砂質粘土粒子少量、炭化物・焼土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	17 淡褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック微量
4 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	18 黑褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
5 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	19 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
6 黑褐色	ロームブロック微量	20 極暗褐色	ロームブロック少量
7 極暗褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量	21 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量
8 極暗褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量	22 淡褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
9 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	23 黑褐色	ローム粒子微量
10 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	24 暗褐色	ローム粒子少量
11 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	25 黑褐色	ロームブロック少量
12 黑褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	26 極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量
13 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	27 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
14 にじみ褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、ローム粒子微量	28 黑褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量

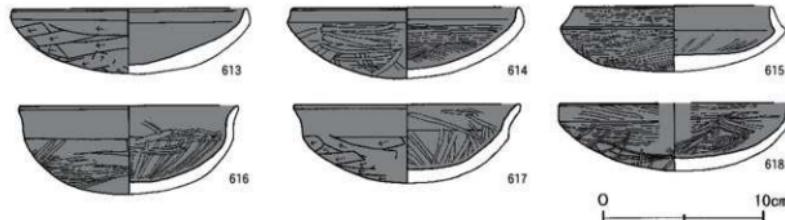
貯藏穴 北側コーナー部に位置し、長径85cm、短径66cmの楕円形で、深さは31cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯藏穴土層解説

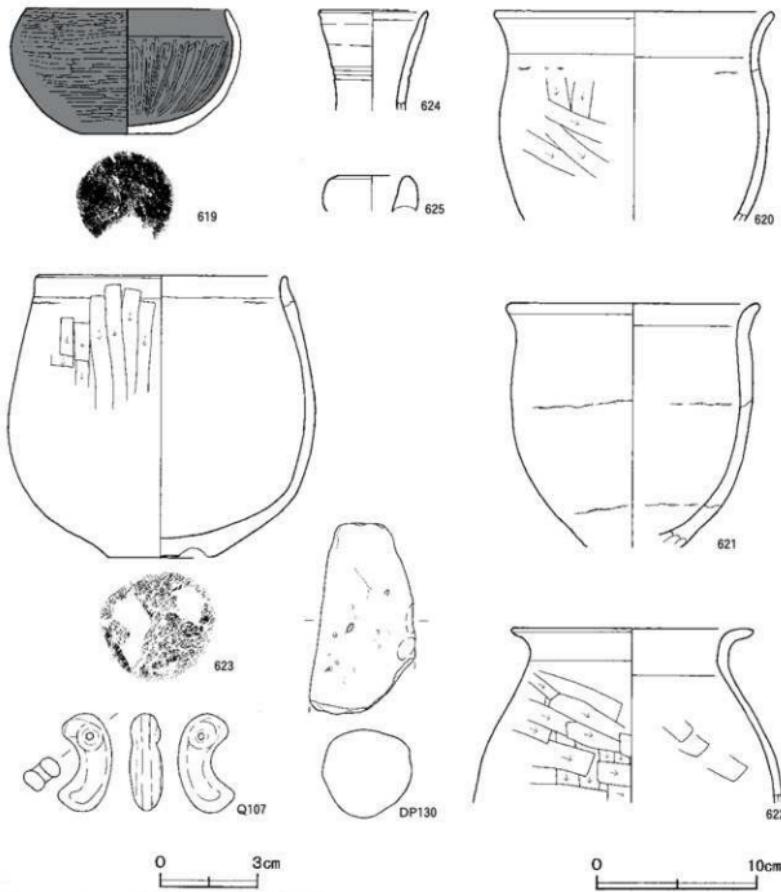
1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	3 暗褐色	ロームブロック少量
2 黑褐色	ローム粒子少量		

遺物出土状況 土器片218点(环37、楕1、甕179、瓶1)、須恵器片1点(瓶類)、手捏土器1(坏カ)、土製品1点(支脚)、石製品1点(勾玉)、繩1点の他に、流れ込んだ弥生土器片26点も出土している。613は竈前、615は北東壁際、617は北コーナー部、621はP1付近の床面からそれぞれ出土している。624はP1覆土上層から出土している。南東壁際の遺物は比較的高い位置から出土しており、埋没過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第121図 第132号住居跡出土遺物実測図(1)



第122図 第132号住居跡出土遺物実測図(2)

第132号住居跡出土遺物観察表(第121・122図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	施述	手法の特徴	出土位置	備考	
613	土師器	环	14.5	4.3	-	長石・石英・雲母 に似る	普通	口部断面・外表面横ナギ	体部外面へラ削り 内面ナギ	床面	85% PL26	
614	土師器	环	13.9	4.4	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	普通	口部断面・外表面横ナギ	体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へ ラ削り	壁上中筋	90% PL26	
615	土師器	环	12.2	4.0	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	普通	口部断面・外表面横ナギ	体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へ ラ削り	床面	85% PL26	
616	土師器	环	13.5	5.5	-	長石・石英・雲母 に似る	普通	口部断面・外表面横ナギ	体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へ ラ削り	壁上下筋	75% PL27	
617	土師器	环	13.9	4.9	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	黒褐	普通	口部断面・外表面横ナギ	体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	70% PL26
618	土師器	环	[14.4]	4.2	-	長石・石英・赤色 粒子	普通	口部断面・外表面横ナギ	体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へ ラ削り	壁上上筋	50%	
619	土師器	桶	12.4	7.7	5.7	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口部断面・外表面横ナギ	体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へ ラ削り 正面へラ削り	壁上中筋	85% PL29

番号	種別	器種	口径	器高	近底	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
620	土師器	甕	17.2	(12.9)	—	長心・赤・張目・赤色粒子	明赤褐色	普通	口沿部・外表面横ナデ 体部外面へフタ附 編織底	P1 覆土上層	60%
622	土師器	甕	14.6	(10.7)	—	長心・赤英	淡黄褐色	普通	口沿部・外表面横ナデ 体部外面へフタ附 内面ヘラナデ	床面	30%
623	土師器	甕	15.4	17.4	6.6	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口沿部・外表面横ナデ 体部外面へフタ附 編織底	覆土上層	30%
621	土師器	小形甕	15.2	(15.0)	—	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口沿部・外表面横ナデ 体部外面へフタ附 編織底	P1 覆土上層	60%
624	須恵器	瓶類	6.5	(6.2)	—	長石・石英	褐灰	良好	口縁部に2条の平行沈線	—	9%
625	土師器	手捏土器	4.4	(2.2)	—	長心・赤・張目・赤色粒子	棕	普通	ナデ	床面	40%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
BP100	支脚	(11.8)	2.9~(6.6)	0.616	土(長石・石英・雲母・赤色粒子 等)	指面に上ナデ 粗底	覆土上層	—

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
QH67	勾玉	3.6	1.6	1.0	6.0	滑石	一方向か心の穿孔 孔径6.2mm	覆土下層	P1.42

第133号住居跡（第123・124図）

位置 調査区西部のD 8 e9区で、標高13.7mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第134号住居跡を掘り込み、第6号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 南側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかつたが、N-38°-Wを主軸方向とする長軸6.70m、短軸6.60mほどの方形と推定される。壁高は35~37cmで、外傾して立ち上がつてゐる。

床 ほぼ平坦で、全体が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで146cmである。袖部幅は106cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けけて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ32cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がつてゐる。

遺土層解説

- 1 暗褐色 砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子 5 に向赤褐色 極上ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子・砂質粘土粒子中量、炭化粒子微量 6 に向赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
- 3 に向褐色 焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 7 單赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子微量
- 4 極暗褐色 砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 7か所。P 1～P 3は深さは22~41cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 4は深さ16cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 5～P 7の性格は不明である。

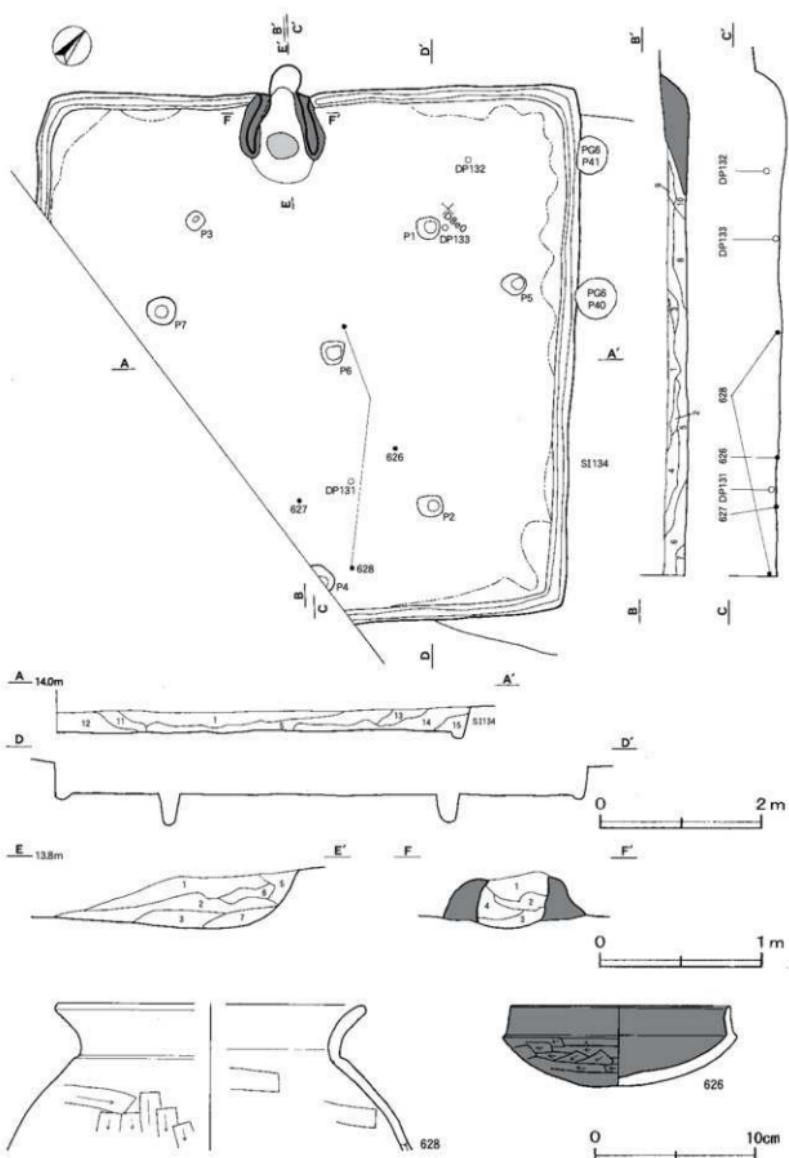
覆土 15層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

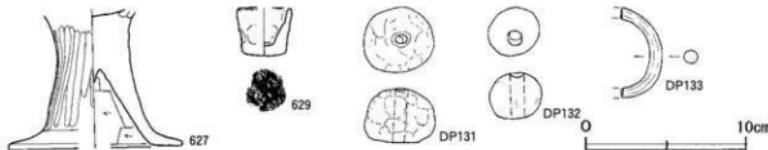
- | | |
|----------------------------------|------------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 10 白褐色 ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 極暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 4 黑褐色 ローム粒子・炭化粒子少量 | 12 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 13 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 14 白褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 7 暗褐色 ローム粒子少量 | 15 黑褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 8 黑褐色 砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片649点（环17、高环7、堀624、瓶1）、手捏土器1（壺カ）、土製品4点（球状土錐2、紡錘車1、不明1）、鍍2点の他に、流れ込んだ弥生土器片106点、須恵器片11点も出土している。626・627は中央部南東寄りの床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第123図 第133号住居跡・出土遺物実測図



第124図 第133号住居跡出土遺物実測図

第133号住居跡出土遺物観察表(第123・124図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	粘土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
626	土師器	环	13.4	5.0	—	長石・右葉・雲母	黒	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	床面	99%
627	土師器	高环	—	(8.5) [10.6]	長石・右葉・雲母	に凹・櫛	普通	脚部外面へラ削り後へラ磨き 脚部内面へラ削り	床面	23%	
628	土師器	甕	[18.6]	(9.0)	—	長石・右葉・雲母	に凹・櫛	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	覆土下層	15%
629	土師器	手捏土器	[3.2]	2.9	2.1	長石・右葉・雲母	黒	普通	指捏ねによるナデ 指捏痕	覆土中	70%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
IPM1	球状土塊	4.4	0.7	3.3	63.7	土(長石・右葉・雲母)	指捏痕 一方向か心の穿孔	覆土下層	
IPM2	球状土塊	3.3	0.9	2.9	27.2	土(長石・右葉・雲母)	ナデ 一方向か心の穿孔	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
IPG2	不明土製品	(5.0)	(2.6)	0.8	(6.2)	土(長石・右葉・雲母)	全面丁寧なナデ	覆土下層	

第136号住居跡 (第125・126図)

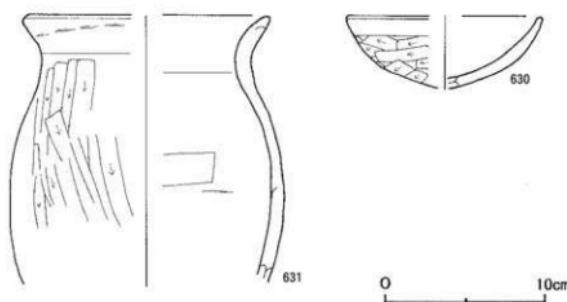
位置 調査区西部のC 8 b8区で、標高14.9mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第120号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、N-34°-Eを主軸方向とする一辺が5.80mほどの方形と推定される。壁高は50~80cm前後で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、南側部分が踏み固められている。

ピット 3か所。深さは64~74cmで、配置から主柱穴と考えられる。



第125図 第136号住居跡出土遺物実測図

覆土 3層に分層されるが、耕作による搅乱が激しいため堆積状況は不明である。

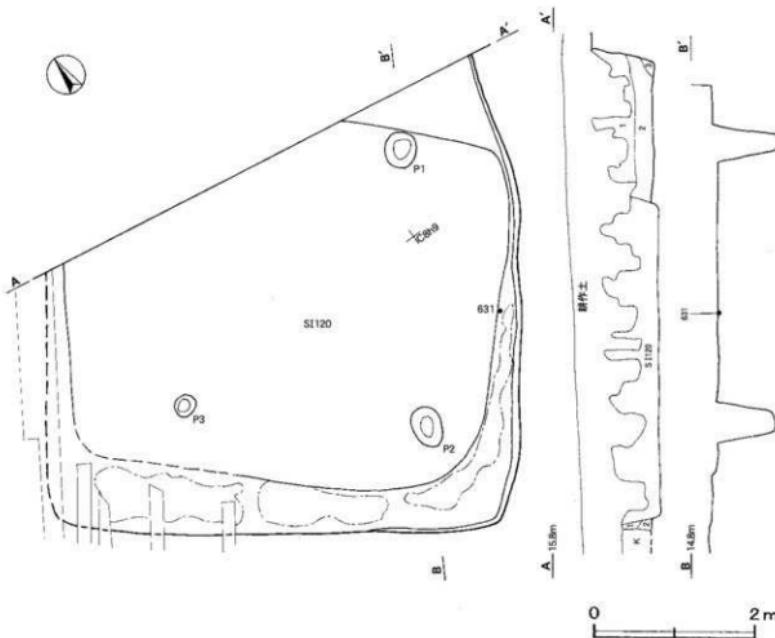
土層解説

- | | |
|-----------------------------|---------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 3 黑褐色 ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片65点(环13, 高环5, 瓢47), 確1点の他に、流れ込んだ弥生土器片12点も出土している。

631は南東壁寄りの床面から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器から6世紀代と考えられる。



第126図 第136号住居跡実測図

第136号住居跡出土遺物観察表(第125図)

番号	種別	器種	口径	基高	底径	断土	色調	使用	手法の特徴	出土位置	備考
630	土師器	环	[12.0]	(4.5)	—	長石・石英・雲母	黒	普通	口沿部内・外曲横ナデ 体部外面へフ削り 内面ナデ	覆土中	25%
631	土師器	甕	[15.0]	(6.6)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口沿部内・外曲横ナデ 体部外面へフ削り 内面ヘナデ	床面	40%

第138号住居跡(第127図)

位置 調査区中央部のD10e9区で、標高22.6mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第8号構に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による搅乱が激しいため遺構全体の確認はできなかったが、N-7°-Wを主軸方向とする長軸3.23m、短軸3.18mの方形と推定される。遺存している壁高は23cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されているが、第8号構に掘り込まれているため煙道部は検出できなかった。遺存している袖部幅は85cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。

遺土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------------|--------|-----------------|
| 1 純赤褐色 | 砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 3 純赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子微量 |
| 2 灰褐色 | 鹿沼バミス少量、ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量 | | |

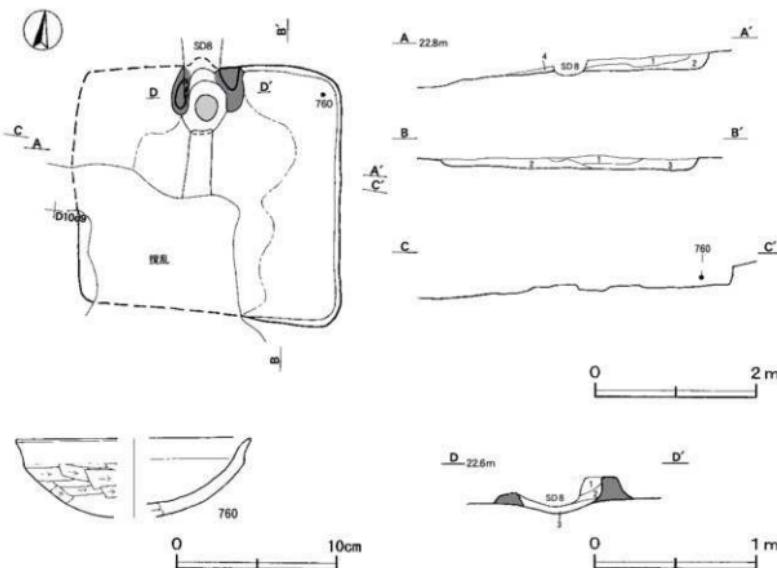
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|---------|-------------------------------------|---------|-----------------------------------|
| 1 純 褐 色 | ロームブロック・焼土ブロック・鹿沼バミス微量 | 4 暗 褐 色 | 鹿沼バミスブロック少量、焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 2 褐 色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・鹿沼バミス微量 | | |
| 3 塗 褐 色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・鹿沼バミスブロック・砂質粘土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片10点(壺1、甕9)の他に、流れ込んだ繩文土器片1点、弥生土器片3点も出土している。760は北東コーナー部の覆土下層から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、第139号住居跡と規模や主軸方向がほぼ同じであり、出土遺物の特徴も酷似することから7世紀前半と考えられる。



第127図 第138号住居跡・出土遺物実測図

第138号住居跡出土遺物観察表(第127図)

番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
760	土鍋器	坪	[14.6]	[4.8]	-	長石・石英・雲母	に紅褐色	普通	口部内部・外表面ナガ 体部外面へ手削り 内面ナガ	覆土下層	40%

第139号住居跡(第128・129図)

位置 調査区中央部のD10c0区で、標高23.0mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 長軸3.42m、短軸3.30mの方形で、主軸方向はN-21°-Wである。壁高は4~26cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁のはば中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで83cmである。袖部幅は89cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ31cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

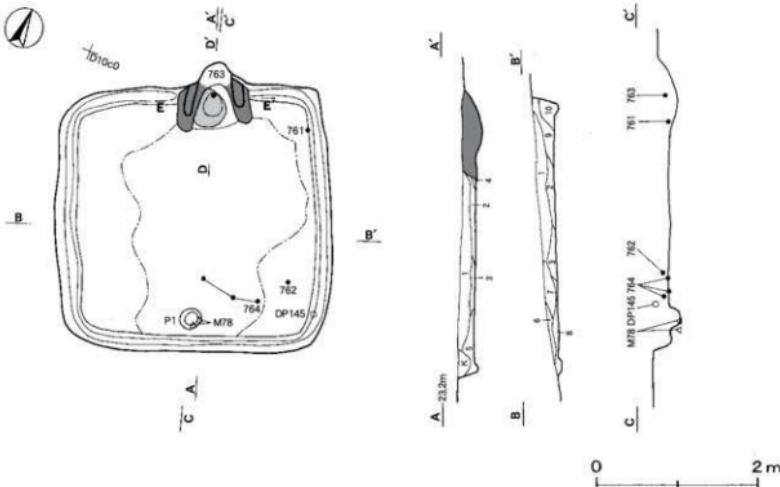
- | | | | |
|--------|---------------------|--------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 3 に黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス少量 |
| 2 に黒褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | | |

ピット 1か所。深さは13cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 10層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

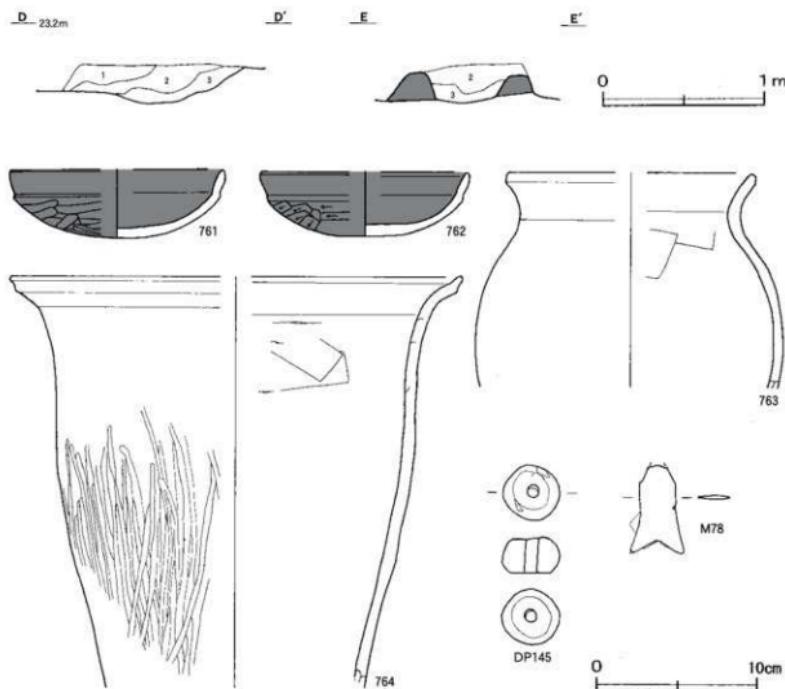
- | | | | |
|-------|-------------------------------|--------|---------------------|
| 1 暗褐色 | 鹿沼バミス少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 5 褐色 | ローム粒子・鹿沼バミス少量、炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子・鹿沼バミス微量 | 6 極暗褐色 | 炭化物・ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量、鹿沼バミス微量 |
| 4 褐色 | ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 褐色 | ローム粒子中量、鹿沼バミスブロック微量 |
| | | 9 褐色 | 鹿沼バミス中量、ローム粒子少量 |
| | | 10 褐色 | ローム粒子・鹿沼バミス少量 |



第128図 第139号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片42点(坏4, 瓢37, 盆1), 土製品1点(紡錘車), 鉄製品1点(鉄鎌), 磨5点の他に、流れ込んだ弥生土器片12点も出土している。761は北東コーナー部の覆土下層, 762は南東コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。764は南東コーナー寄りの床面から覆土下層にかけて出土している。M78はP1の底面近くから出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀前半と考えられる。



第129図 第139号住居跡・出土遺物実測図

第139号住居跡出土遺物観察表(第129図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
761	土師器	坏	[13.2]	4.2	—	長石・石英・雲母	にぼい褐色	普通	口沿部内・外底残ナデ 体部外曲へづけ後へづき 内面ナデ	覆土下層	59%
762	土師器	坏	[12.8]	4.0	—	長石・石英・雲母	にぼい黄褐色	普通	口沿部内・外底残ナデ 体部外曲へづけ後 内面ナデ	覆土下層	40%
763	土師器	甕	[15.0]	[13.2]	—	長石・石英・雲母	にぼい赤褐色	普通	口沿部内・外底残ナデ 体部外曲輪郭整不明 内面へナダ	胎内	20%
764	土師器	甕	[27.8]	[25.3]	—	長石・石英・雲母	にぼい褐色	普通	口沿部内・外底残ナデ 体部外曲へづけ後へづき 内面へナダ	底面	40%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP145	紡錘車	3.6	0.7	2.3	30.0	土(長石・石英・雲母)	ナデ	覆土上層	

番号	部種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M78	鉄鍵	(5.5)	3.3	0.3	(8.5)	鉄	無蓋5角錐 斜面平型	P1内	

第140号住居跡（第130図）

位置 調査区中央部のD11d1区で、標高23.4mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 長軸3.52m、短軸3.16mの長方形で、主軸方向はN-7°-Wである。壁高は10~26cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

窓 北壁のはば中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで75cmである。袖部幅は99cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ18cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

土壤層解説

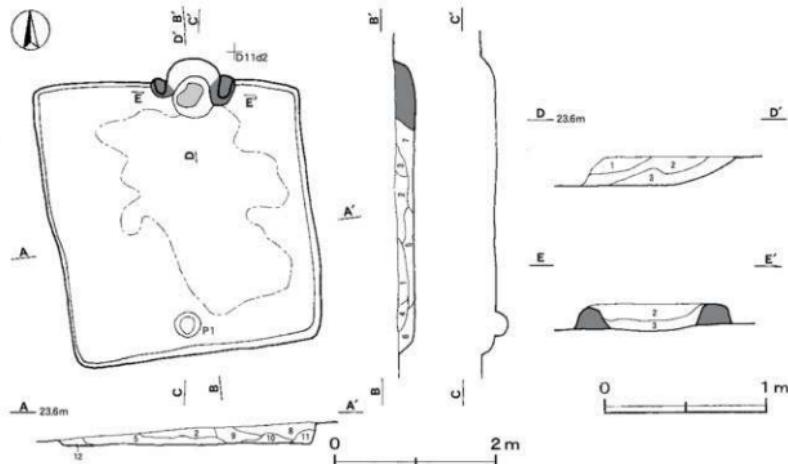
- | | | | | | |
|---|-----|---------------------------------|----|-----|-----------------------------|
| 1 | 暗褐色 | 砂質粘土ブロック少量。ロームブロック・焼土ブロック・灰化物微量 | 3 | 黒褐色 | 焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子・砂質粒子微量 |
| 2 | 褐色 | ロームブロック少量、泥沼バミスブロック微量 | | | |
| 4 | 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物・砂質粒子微量 | 5 | 褐色 | ローム粒子少量、泥沼バミス微量 |
| 6 | 褐色 | ロームブロック少量、泥沼バミス微量 | 7 | 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物・砂質粒子微量 |
| | | | 8 | 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| | | | 9 | 暗褐色 | ローム粒子少量、泥沼バミスブロック微量 |
| | | | 10 | 暗褐色 | ローム粒子少量、泥沼バミス微量 |
| | | | 11 | 暗褐色 | ロームブロック中量、泥沼バミス微量 |
| | | | 12 | 褐色 | ローム粒子少量、泥沼バミス微量 |

ピット 1か所。深さ16cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 12層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土壤層解説

- | | | | | | |
|---|-----|-----------------------------|----|-----|-----------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック中量、泥沼バミス微量 | 7 | 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物・砂質粒子微量 |
| 2 | 褐色 | ロームブロック少量、泥沼バミスブロック微量 | 8 | 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物・砂質粒子微量 | 9 | 暗褐色 | ローム粒子少量、泥沼バミスブロック微量 |
| 4 | 褐色 | ロームブロック少量、泥沼バミス微量 | 10 | 暗褐色 | ローム粒子少量、泥沼バミス微量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 | 11 | 暗褐色 | ロームブロック中量、泥沼バミス微量 |
| 6 | 褐色 | ロームブロック少量、炭化物・泥沼バミスブロック微量 | 12 | 褐色 | ローム粒子少量、泥沼バミス微量 |



第130図 第140号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片13点(甕)の他に、流れ込んだ弥生土器片4点も出土しているが、細片のため図示することはできない。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、第139号住居跡と規模や主軸方向がほぼ同じであり、出土遺物の特徴も酷似することから7世紀前半と考えられる。

第142号住居跡（第131・132図）

位置 調査区中央部のD10F0区で、標高23.0mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第141号住居跡を掘り込み、第7号溝に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による搅乱が激しく、遺構全体の確認はできなかったが、東西長2.30mほど、南北長3.50mほどが確認できた。遺存している竈や壁からN-97°-Eを主軸方向とする方形と推定される。壁高は6~15cmで、外傾して立ち上がっている。

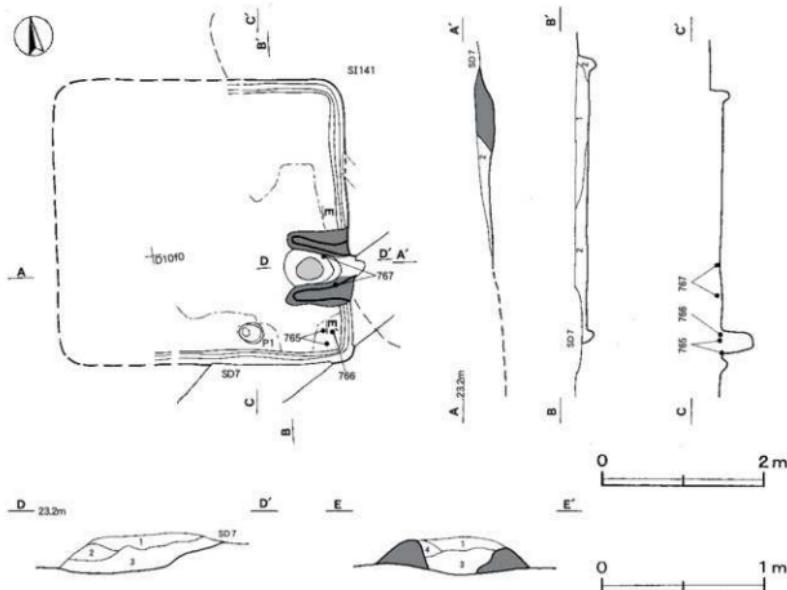
床 ほぼ平坦で、中央部から竈付近が踏み固められており、遺存部分には竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 東壁の南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで101cmである。袖部幅は93cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ~18cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 純赤褐色 塗土粒子少量、砂質粘土粒子微量
2 にぬれ色 塗土粒子中量、砂質粘土粒子少量

- 3 純赤褐色 塗土ブロック少量、砂質粘土粒子微量
4 にぬれ色 砂質粘土粒子中量、燒土ブロック・炭化物微量



第131図 第142号住居跡実測図

ピット 1か所。深さ38cmで、性格は不明である。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

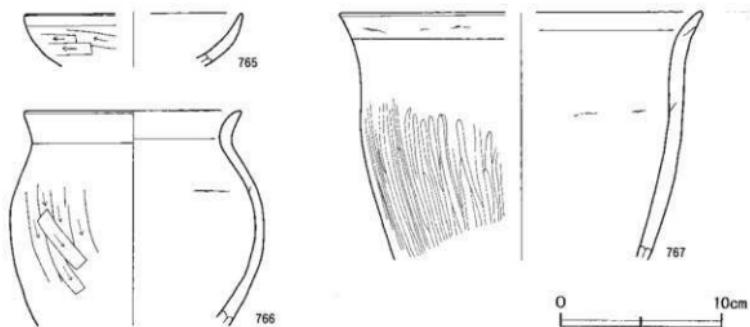
土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片60点(环4, 瓶55, 瓶1), 砕2点の他に、流れ込んだ弥生土器片6点も出土している。

765・766は南東コーナー部の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀前半と考えられる。



第132図 第142号住居跡出土遺物実測図

第142号住居跡出土遺物観察表(第132図)

番号	種別	器種	D径	H高	径差	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
765	土師器	环	[13.4]	(0.2)	—	長石・石英・雲母 赤色粒子	褐	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	床面	20%
766	土師器	甕	13.4	(13.2)	—	長石・石英	にじみ 褐	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 篦削痕	床面	70%
767	土師器	甕	[22.2]	(15.2)	—	長石・石英・雲母 赤色粒子	にじみ 褐	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ巻き 篦削痕	竈内	15%

第144号住居跡(第133・134図)

位置 調査区中央部のD11e3区で、標高23.7mほどの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状 一边が6.00mほどの方形で、主軸方向はN-25°-Wである。壁高は41~45cmで、外傾して立ち上っている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁のやや中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで96cmである。袖部幅は76cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ19cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上っている。

竈土層解説

1 にじみ褐色 砂質粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量

2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量

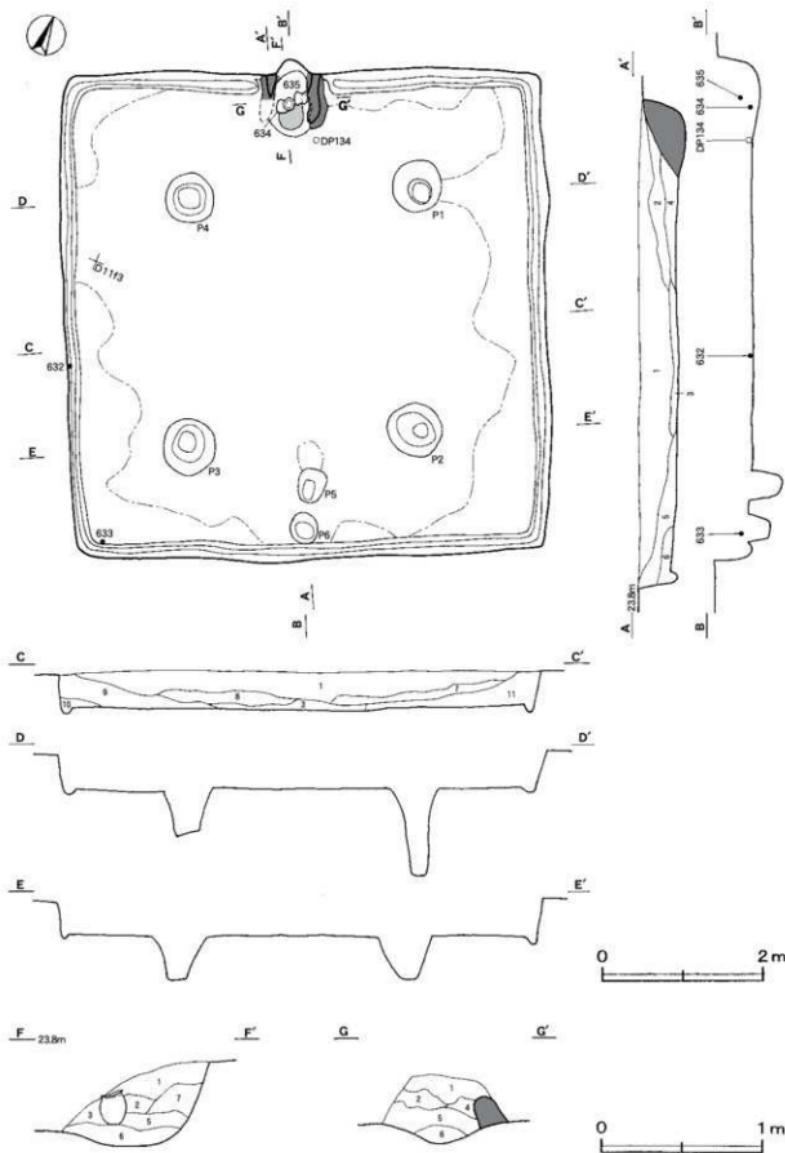
3 暗褐色 粒子微量

4 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量

5 暗赤褐色 烧土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量

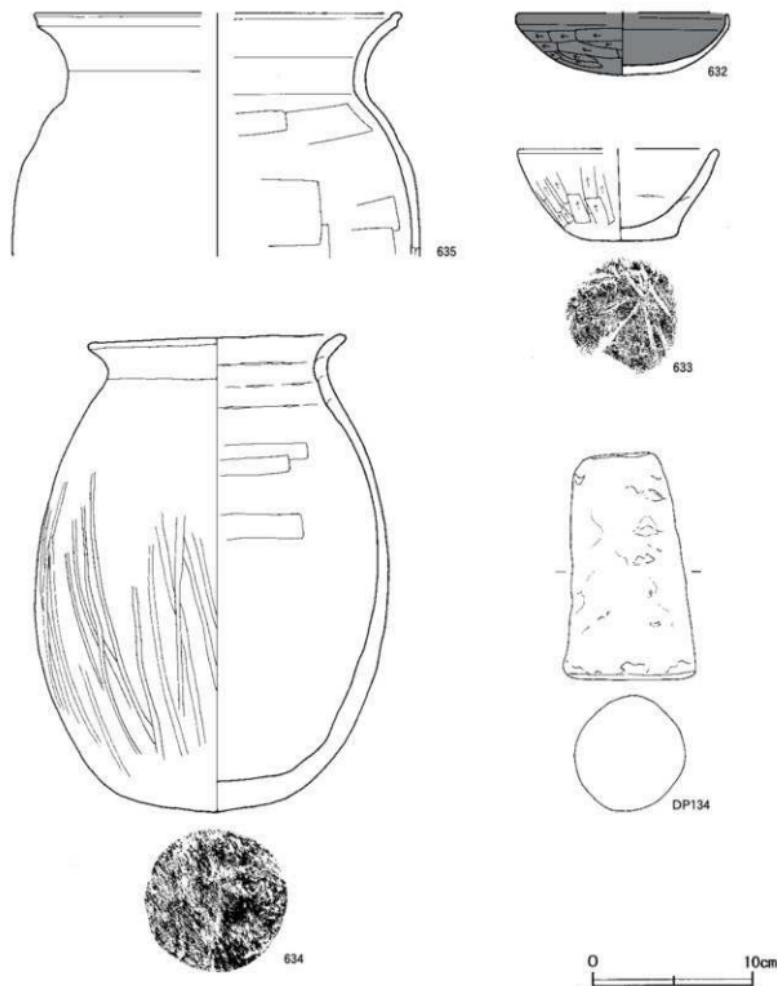
6 暗赤褐色 烧土ブロック・砂質粘土粒子微量

7 暗褐色 炭化物少量、焼土ブロック・ローム粒子微量



第133図 第144号住居跡実測図

ピット 6か所。P 1～P 4は深さ57～106cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ44cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6は深さ32cmで、覆土上層部分に多少のしまりが確認されたことから、P 5以前の出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第134図 第144号住居跡出土遺物実測図

覆土 11層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化物少量	6 極暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
2 極暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	7 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
3 暗褐色	ローム粒子少量、炭化物微量	8 極暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
5 暗褐色	砂質粘土粒子微量	10 黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子微量
		11 黑褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片315点(环51, 鉢1, 瓶263), 土製品1点(支脚), 瓦18点の他に, 流れ込んだ弥生土器片1点も出土している。632は南西壁際の覆土下層, 633は南コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。634・635は窓内からの出土で, 住居の廃絶時には竈に掛けられた状態で遺棄された可能性が高い。

所見 時期は, 出土土器から6世紀中葉と考えられる。

第144号住居跡出土遺物観察表(第134図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
632	土師器	环	[13.0]	3.8	—	長石・石英・雲母・金無粒子	にごい黄褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	覆土下層	50%
633	土師器	鉢	[12.3]	5.6	6.8	長石・石英・雲母	にごい褐色	普通	体部外面へラ削り 補強板	覆土下層	50%
634	土師器	甕	15.6	29.4	8.4	長石・石英・雲母・金無粒子	にごい褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ削き 内面ナデ	窓内	100% PL32
635	土師器	甕	[22.6]	[15.0]	—	長石・石英・雲母・金無粒子	薄黄褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面ナデ 内面へナデ	窓内	20%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
IP134	支脚	(14.0)	5.5~8.2	(860.6)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子・砂質)	指面によるナデ 研磨	床面	PL41

第145号住居跡 (第135・136図)

位置 調査区中央部のD11g6区で, 標高23.8mほどの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状 北東側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが, 長軸5.50m, 短軸5.00mほどが確認され, N-23°-Wを主軸方向とする方形または長方形と推定される。確認された壁高は32~40cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められており, 竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されていると推定され, 焚口部から煙道部まで102cmである。袖部幅は92cmで, 床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は, 地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており, 熱を受けて硬化しているが赤変部分は確認できなかった。煙道部は, 壁外へ28cm掘り込まれ, 火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。第3層は天井部の崩落層と考えられる。

竈土層解説

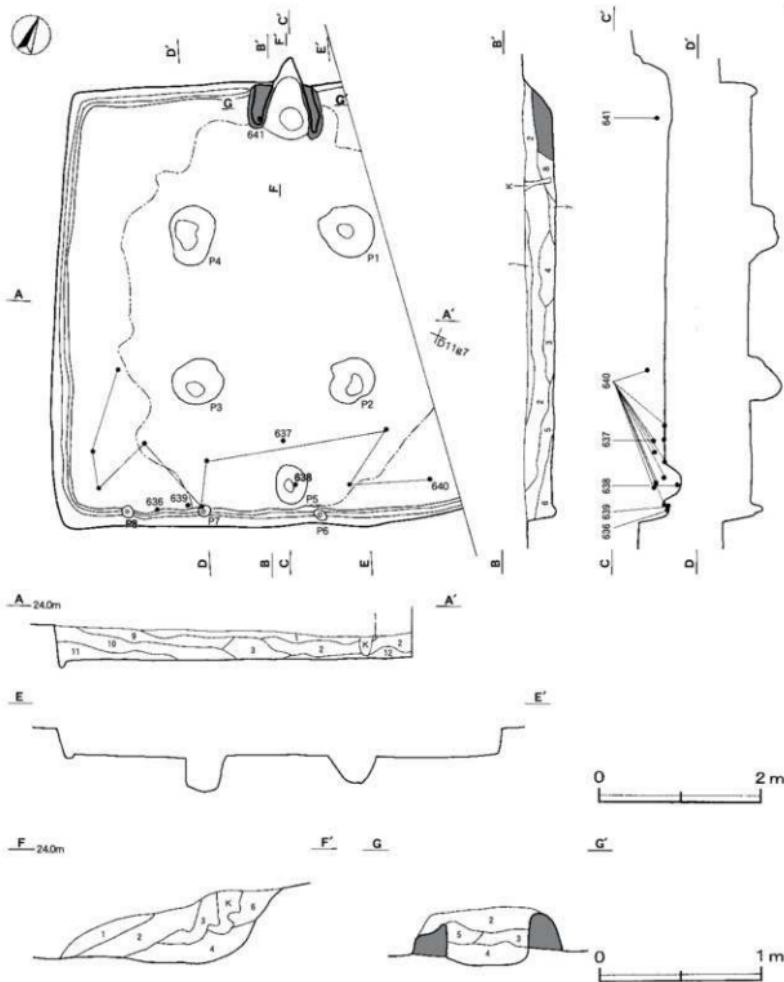
1 暗褐色	炭化粒子・砂質粘土粒子少量, ロームブロック・焼土粒子微量	4 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子・砂質粘土粒子微量
2 黒褐色	砂質粘土ブロック中量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	5 暗褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量, 焼土粒子微量
3 オリーブ褐色	砂質粘土粒子多量, 焼土ブロック・炭化物微量	6 にごい褐色	砂質粘土ブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量

ピット 8か所。P1~P4は深さ33~44cmで, 配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ23cmで, 配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6~P8は深さ12~14cmで, 壁柱穴と考えられるが明確ではない。

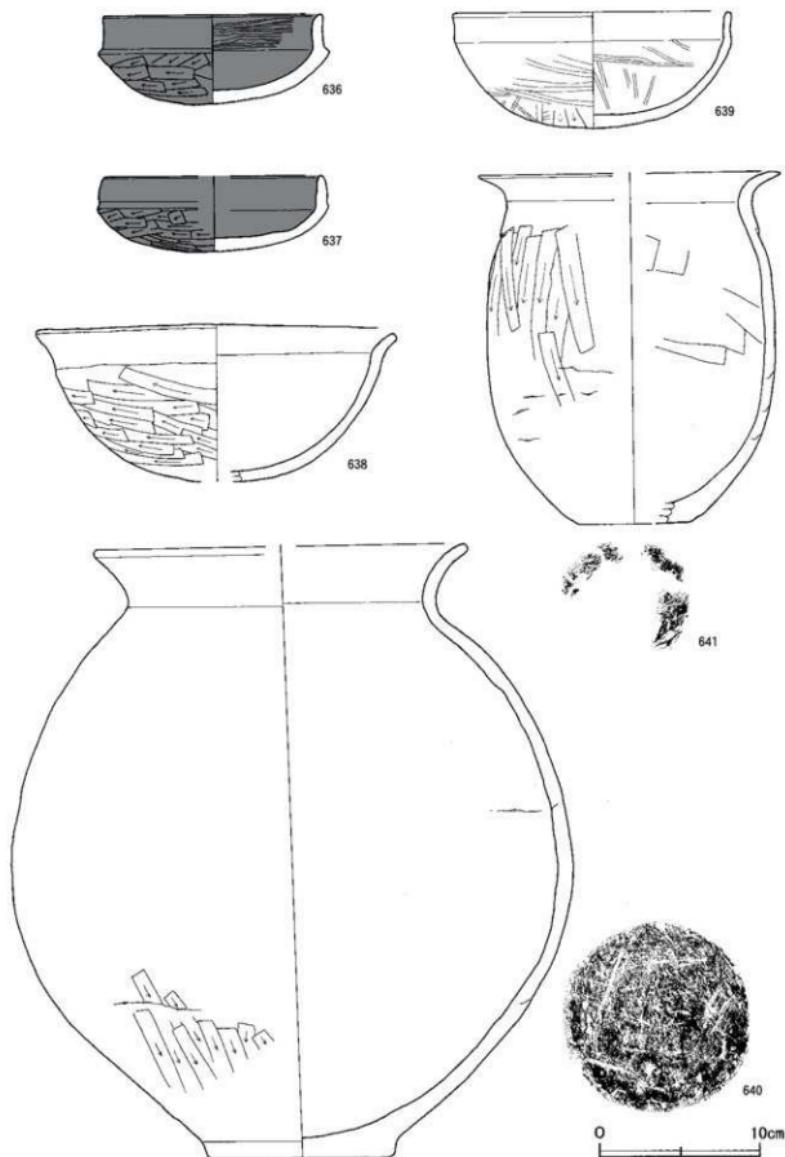
覆土 12層に分層される。一部の層はレンズ状の堆積状況を示しているが, 遺物の出土状況や接合関係などから人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒 橙 色	炭化粒子少量、ローム粒子微量	7 暗 橙 色	ローム粒子少量、炭化物・砂質粘土粒子微量
2 極暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	8 暗 橙 色	ロームブロック・炭化物・砂質粘土ブロック少量
3 増 橙 色	ロームブロック少量	9 極暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
4 暗 橙 色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	10 極暗褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量
5 暗 橙 色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	11 暗 橙 色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
6 暗 橙 色	ローム粒子少量、炭化物微量	12 暗 橙 色	ロームブロック中量、炭化粒子微量



第135図 第145号住居跡実測図



第136図 第145号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片164点(坏38, 挽2, 発124), 積4点の他に, 流れ込んだ弥生土器片137点も出土している。636は南側の壁溝, 637は出入り口ピット付近の床面からそれぞれ出土している。638は底部が穿孔されており, 出入り口ピットの底面から逆位で出土している。640は南寄りの覆土中層から床面より出土していることから, 埋没の過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から6世紀中葉と考えられる。

第145号住居跡出土遺物観察表(第136図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
636	土師器	坪	13.4	5.6	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	にぬ・橙	普通	口沿部内・外面横ナギ後面へラözき 体部外側へラ削り	要溝	100%
637	土師器	坪	[13.4]	4.6	-	長石・石英・雲母	にぬ・赤褐色	普通	口沿部内・外面横ナギ 体部外側へラ削り 内面ナギ	床面	50%
638	土師器	坪	22.0	9.7	-	長石・石英・雲母	にぬ・橙	普通	口沿部内・外面横ナギ 体部外側へラ削り 内面ナギ	P5内	95% PL29
639	土師器	坪	17.0	7.1	-	長石・石英・雲母	にぬ・黄褐色	普通	口沿部内・外面横ナギ 体部外側へラ削り 後面へラözき	床面	75% PL29
640	土師器	便	[22.8]	28.0	11.4	長石・石英・雲母 粒子	にぬ・黄褐色	普通	口沿部内・外面横ナギ 体部外側へラ削り 輪埴張	壁土中層 床面	60%
641	土師器	便	[18.4]	21.6	7.1	長石・石英	にぬ・橙	普通	口沿部内・外面横ナギ 体部外側へラ削り 内面へラナギ 輪埴張	窓内	40%

第146号住居跡(第137・138図)

位置 調査区中央部のD11i8区で, 標高23.6mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第148・149号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北東側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが, 長軸5.96m, 短軸5.70mの方形で, 主軸方向はN-12°-Wである。確認された壁高は42~52cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められており, 窓部分を除いて壁溝が周回している。

窓 北壁中央部に付設されていると考えられ, 窓口部から煙道部まで110cmである。袖部幅は97cmで, 床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は, 床面と同じ地山面を使用しており, 火を受けて赤変硬化している。煙道部は, 壁外へ19cm掘り込まれ, 火床面から急激に立ち上がっている。

竪土層解説

1	暗褐色	砂質粘土粒子少量, ローム粒子微量	4	暗赤褐色	砂質粘土粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
2	褐色	砂質粘土粒子中量, 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量	5	暗赤褐色	焼土粒子中量, 砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量
		土粒子微量	6	暗褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量, 焼土粒子微量
3	暗赤褐色	砂質粘土粒子中量, 烧土粒子少量, ローム粒子微量	7	暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量

ピット 5か所。P1~P4は深さ76~90cmで, 配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ27cmで, 配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

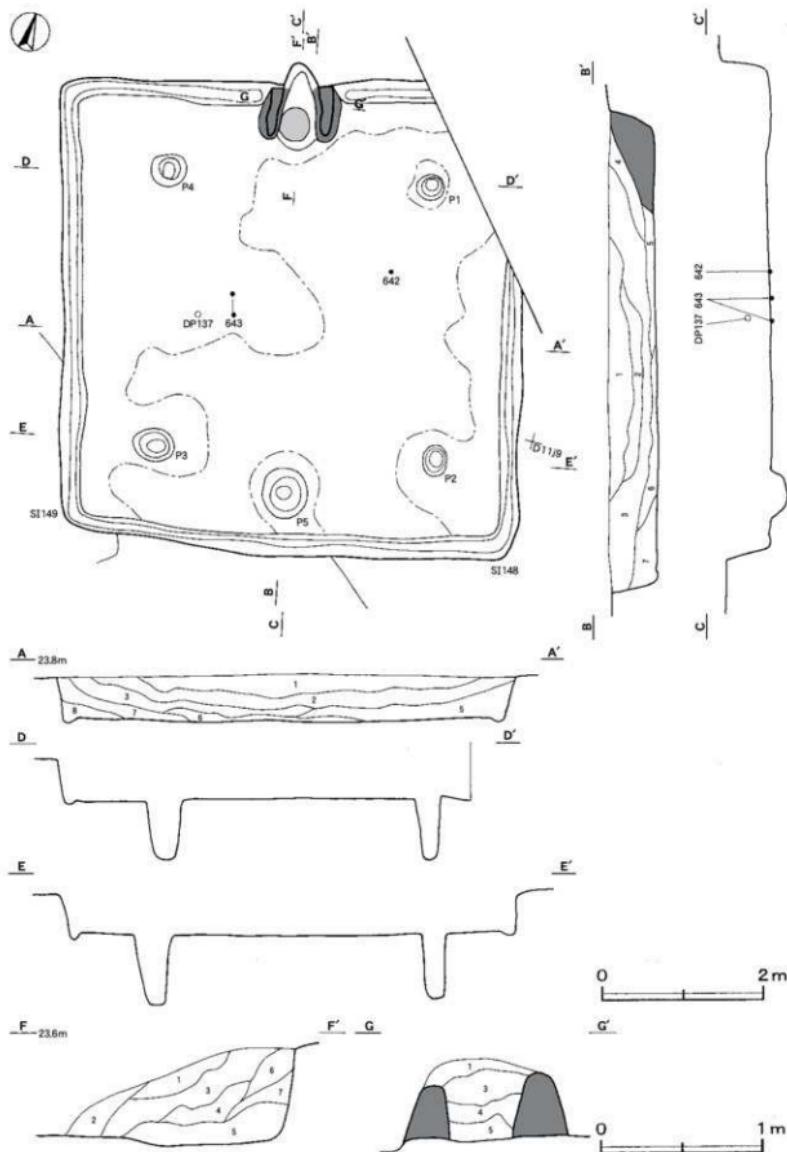
覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

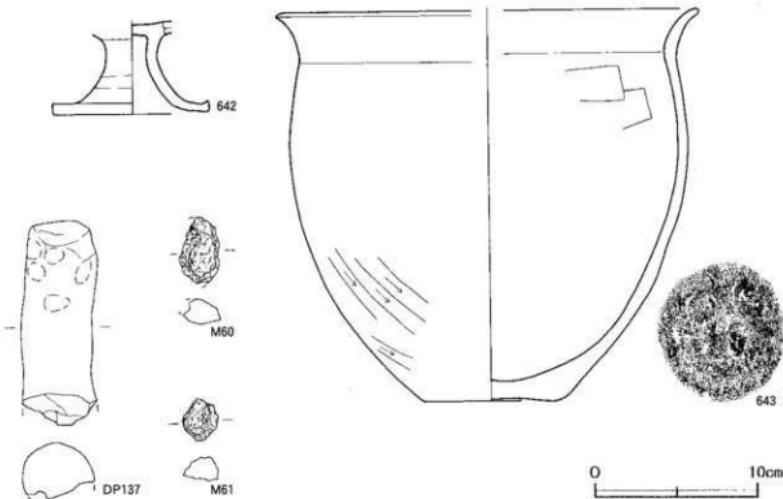
1	黒褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	5	暗褐色	ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化物微量	6	灰褐色	ロームブロック中量, 炭化物少量, 烧土粒子微量
3	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	7	暗褐色	ローム粒子少量, 烧土粒子・炭化粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	8	褐色	ローム粒子少量, 炭化物微量

遺物出土状況 土師器片388点(坏90, 挽298), 須恵器1点(高坏カ), 土製品6点(支脚1, 不明5), 鉄滓2点, 積20点の他に, 流れ込んだ弥生土器片261点も出土している。642・643は中央部の床面から出土している。

所見 時期は, 出土土器から6世紀代と考えられる。



第137図 第146号住居跡実測図



第138図 第146号住居跡・出土遺物実測図

第146号住居跡出土遺物観察表(第138図)

番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
642	遺物跡	高盤	—	(5.7)	9.7	長石・石英	陶灰	普通	脚部内・外面ロクロナデ	床面	45%
643	土器跡	甕	[25.6]	23.9	8.2	長石・石英・雲母 灰色粘子	灰	普通	口沿部内・外面横ナデ 底部外面へラ削り 内面へラナデ	床面	50%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP137	支脚	(2.4)	4.8	(23.6)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 指造版	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M60	陶片	(4.0)	(2.6)	1.5	(20.7)	陶	表面に赤鉛付着 四凸有り	覆土中	
M61	陶片	2.6	2.3	1.6	6.4	陶	表面に赤鉛付着 四凸有り	覆土中	

第147号住居跡 (第139~142図)

位置 調査区中央部のE11a9区で、標高23.6mほどの台地上に位置している。

規模と形状 北東側と南西側が調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸4.90m、短軸3.82mほどが確認された。竈や柱穴の位置などから判断して、N-42°-Wを主軸方向とする方形または長方形と推定される。確認できた壁高は40~62cmで、外傾して立ち上がっている。

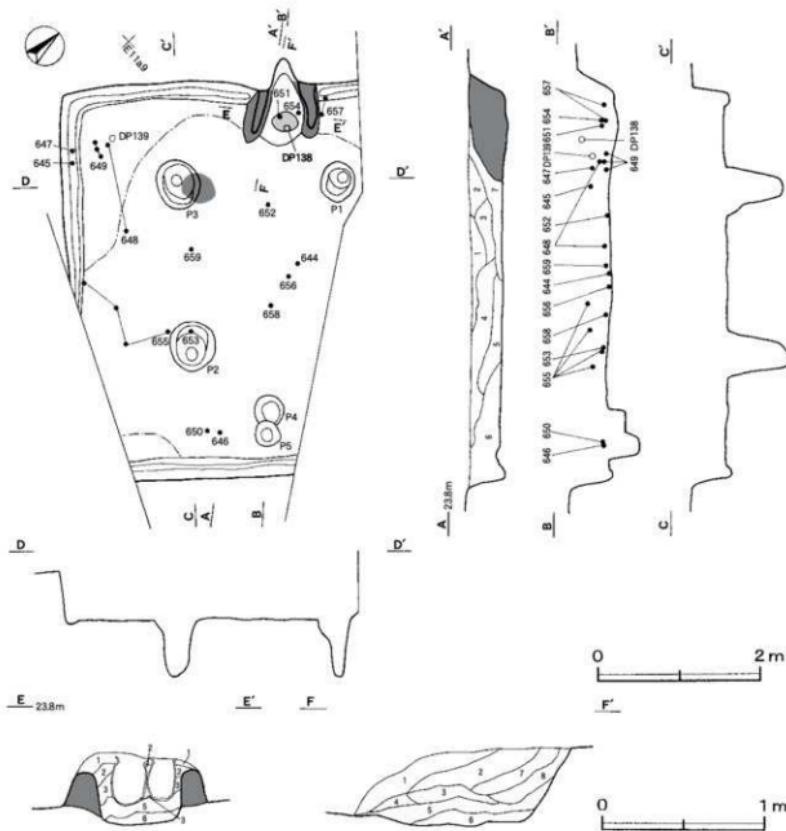
床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設されていると考えられ、焚口部から煙道部まで107cmである。袖部幅は93cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ28cm掘り込まれ、火床面から急激に立ち上がっている。

寒士解15

- | | | | | | |
|---|------|---------------------------|---|-----|--------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量 | 5 | 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック・砂質粘土粒子微量 |
| 2 | 灰黃褐色 | 砂質粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック微量 | 6 | 黒褐色 | 砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量 |
| 3 | 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量 | 7 | 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量、炭化物微量 |
| 4 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 8 | 暗褐色 | 炭化物・焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |

ビット 5か所。P 1～P 3は深さ70～74cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 4は深さ24cm、P 5は深さ42cmで、配置からいざれも出入り口施設に伴うビットと考えられるが、土層断面からP 5が新しいことが確認された。



第139図 第147号住居跡実測図

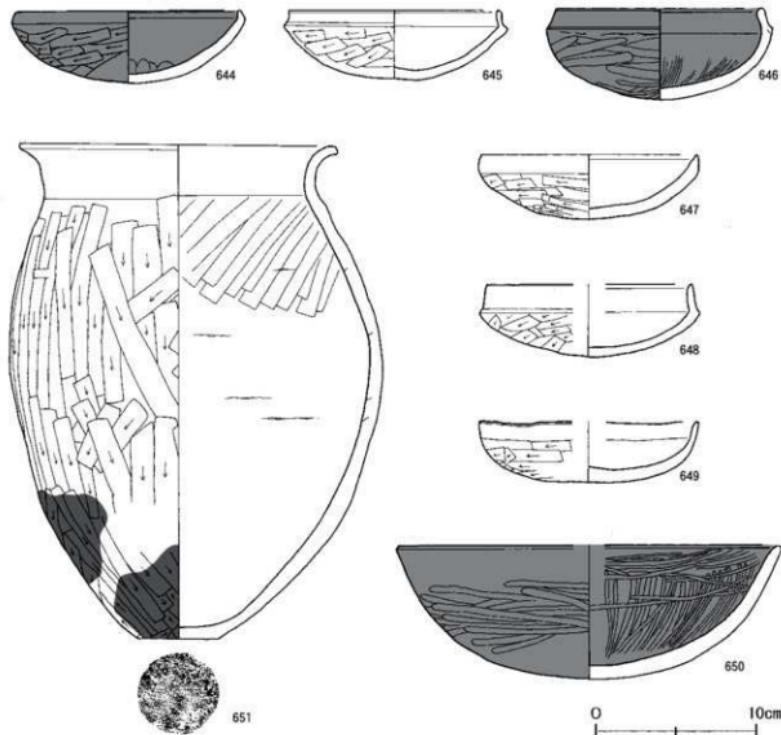
覆土 7層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

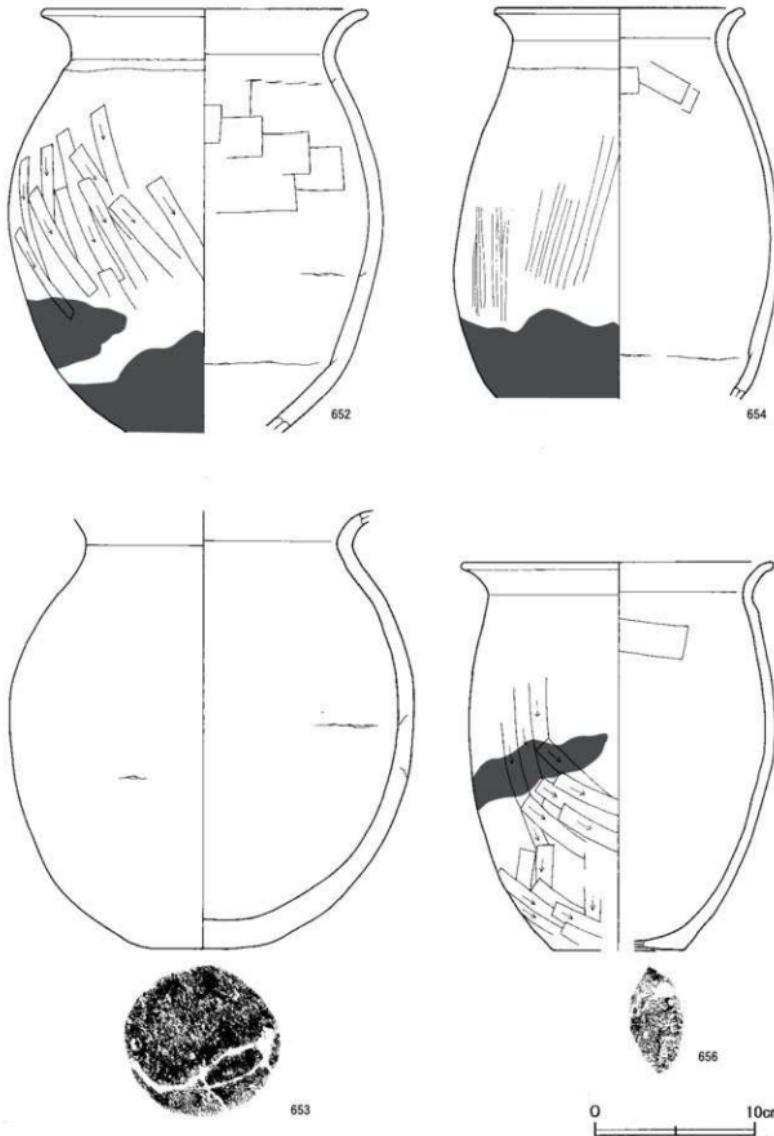
- | | | | |
|--------|---------------------------|--------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子・砂質粘土粒子微量 | 5 黑褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 3 極暗褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ロームブロック微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| | 微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・砂質粘土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片396点(坏70点, 槌1, 高坏1, 瓢324), ミニチュア土器2点(壺, 瓢), 土製品2点(球状土錐, 支脚), 瓦14点の他に, 流れ込んだ弥生土器片97点も出土している。粘土塊はP3に流れ込むような状態で検出された。遺物は覆土中全体から出土しており, 平面的にも散らばりが認められることから, 住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。644は中央部の床面, 645は南西壁際の覆土中層, 646・650は出入り口ビット付近の床面からそれぞれ出土している。651・654は窓内からの出土で, 住居廃絶時には窓に掛けられた状態で遺棄された可能性が高い。654については激しい2次焼成を受けており底部の復元が不可能であった。658は中央部のほぼ床面, 659は中央部P3寄りの床面からそれぞれ出土している。

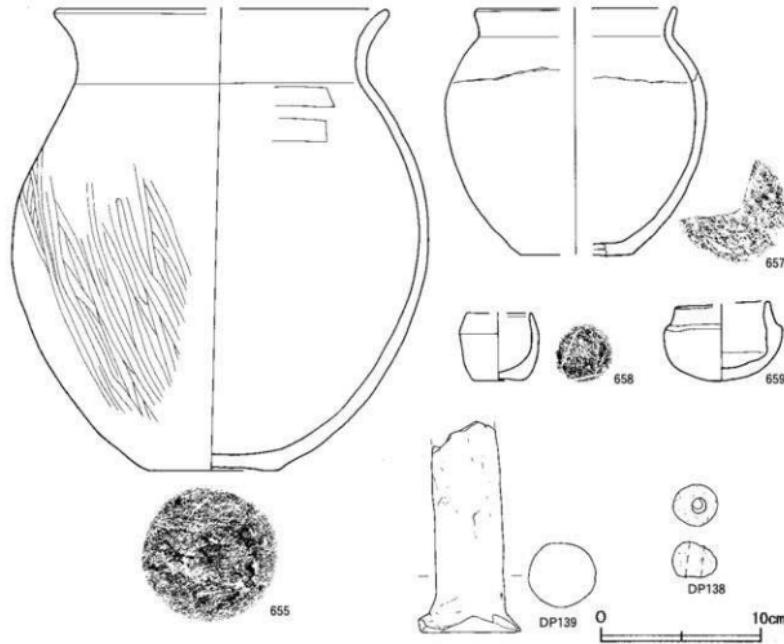
所見 時期は, 出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第140図 第147号住居跡出土遺物実測図(1)



第141図 第147号住居跡出土遺物実測図(2)



第147図 第147号住居跡出土遺物実測図(3)

第147号住居跡出土遺物観察表(第140~142図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	施文	手法の特徴	出上位置	備考
641	土師器	环	13.9	4.5	—	長石・石英・雲母	灰黒	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ後仕上げナデ	床面	100% PL.27
645	土師器	环	13.0	4.4	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	壁上中筋	80%
646	土師器	环	12.7	5.6	—	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラ磨き	床面	90%
647	土師器	环	13.4	3.9	—	長石・石英・雲母	二見赤褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	壁上中筋	90% PL.27
648	土師器	环	[12.6]	4.5	—	長石・石英・雲母	二見赤褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	壁土下筋	75%
649	土師器	环	[13.6]	3.8	—	長石・石英・雲母	反黄褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	壁土下筋	50%
650	土師器	环	[23.6]	8.3	—	長石・石英・雲母	二見赤褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラ磨き	床面	50%
651	土師器	甕	19.4	30.7	5.0	長石・石英・雲母	二見赤褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	壁内	95% 外面僅付着
652	土師器	甕	19.8	(26.3)	—	長石・石英・赤色粘土	二見赤褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラナデ	床面	80% 外面僅付着
653	土師器	甕	(27.1)	9.3	—	長石・石英・雲母	二見赤褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部内・外面摩滅調整不明 輪模痕	床面	80%
654	土師器	甕	15.1	(24.2)	—	長石・石英・赤色粘土	二見赤褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラナデ	壁内	75% 外面僅付着
655	土師器	甕	[30.4]	28.6	8.0	長石・石英	二見赤褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 体済	壁上中筋	50%
656	土師器	甕	19.0	24.1	[8.2]	長石・石英	二見赤褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	床面	50% 外面僅付着
657	土師器	小形甕	[12.2]	15.2	[6.8]	長石・石英・雲母	橙	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部内・外面摩滅調整不明 輪模痕	壁土下筋	50%
658	土師器	ミニチュア	[4.0]	4.2	3.2	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面ナデ 内面ナデ	床面	95% 梗型 a 内面紅變付着
659	土師器	ミニチュア	[5.8]	5.0	—	長石・石英・雲母	二見赤褐色	普通	口沿部内・外面横ナデ 体部外面ナデ 内面ナデ	床面	50% 梗型 a 内面紅變付着

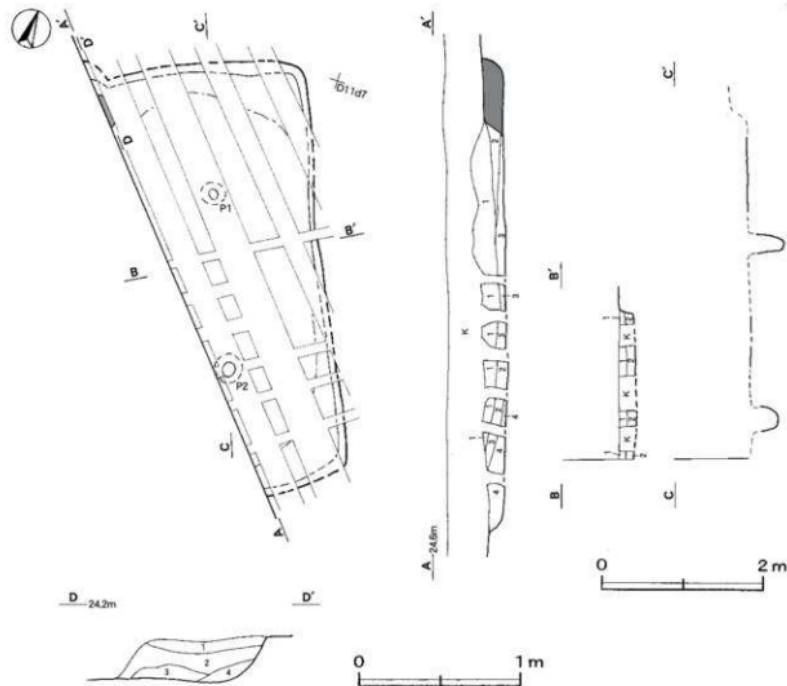
番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
IPEB	球状土器	2.8	0.9~1.0	2.1	13.3	土(黄土・石英混入)	一方向同心の穿孔	覆土層	
IPED	支脚	(13.0)	(4.1)~6.4	(287.0)	土(黄土・石英混入)	ナゲ		覆土中層	

第150号住居跡 (第143図)

位置 調査区中央部のD 11d6区で、標高24.0mほどの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状 南西側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかつたが、長軸5.40m、短軸2.60mほどが確認された。確認できた壁や柱穴から判断して、N~26°~Wを主軸方向とする方形または長方形と推定される。確認できた壁高は16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。



第143図 第150号住居跡実測図

竈 検出された状況から北東壁の中央部に付設されていると考えられ、焚口部から煙道部まで100cmほどが確認された。耕作による搅乱により袖部は遺存しておらず、構築状況については不明である。火床部は、床面と同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ26cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 黒褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子少量	3 暗赤褐色	焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量、炭化物・ローム粒子微量
2 暗褐色	燒土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化物・ローム粒子微量	4 にじ褐色	砂質粘土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量

ピット 2か所。深さは35~43cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量	3 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化物	4 灰褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片4点(环1, 壁3), 瓦1点の他に、流れ込んだ弥生土器片1点も出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期を特定できる遺物が少ないと、出土遺物や遺構の形態などから6世紀代と考えられる。

第151号住居跡(第144図)

位置 調査区中央部のD11e8区で、標高23.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 南西側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸5.50m、短軸5.40mの方形で、主軸方向はN-39°-Wである。壁高は12~28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで115cmである。耕作による搅乱が激しく右袖部の一部しか遺存していない。袖部は、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されていたと考えられる。火床部は、床面と同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ42cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 暗赤褐色	燒土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化物微量	4 黒褐色	燒土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化物微量
2 暗褐色	砂質粘土粒子多量、燒土粒子少量	5 暗赤褐色	燒土粒子中量、炭化物・砂質粘土粒子微量
3 にじ褐色	ローム粒子・燒土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化物微量		

ピット 6か所。P1~P4は深さ46~60cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ31cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ52cmで、覆土上層部分に多少の硬化面が確認されたことから、P5以前の出入り口施設に伴うピットと考えられる。

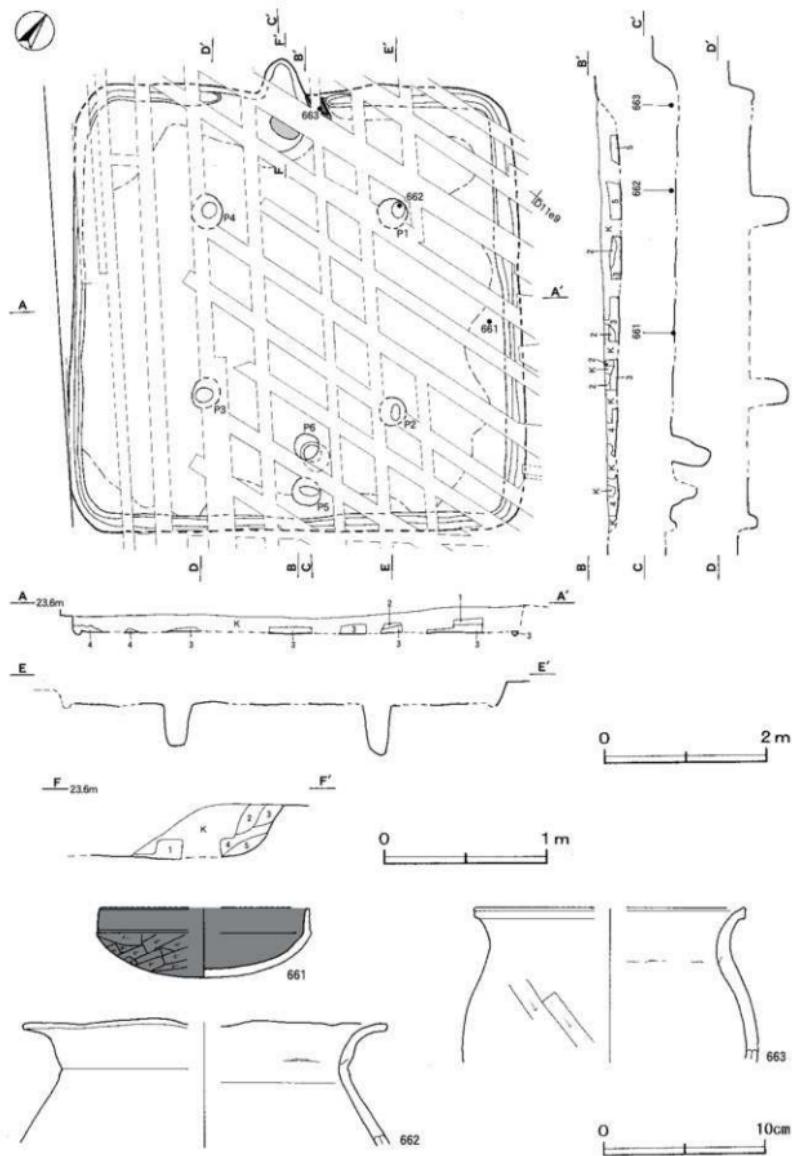
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量	4 黒褐色	ロームブロック微量
2 暗褐色	ロームブロック少量	5 暗褐色	ロームブロック少量、燒土粒子・砂質粘土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片87点(环55, 壁32)の他に、流れ込んだ弥生土器片53点も出土している。661は北東壁際の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第144図 第151号住居跡・出土遺物実測図

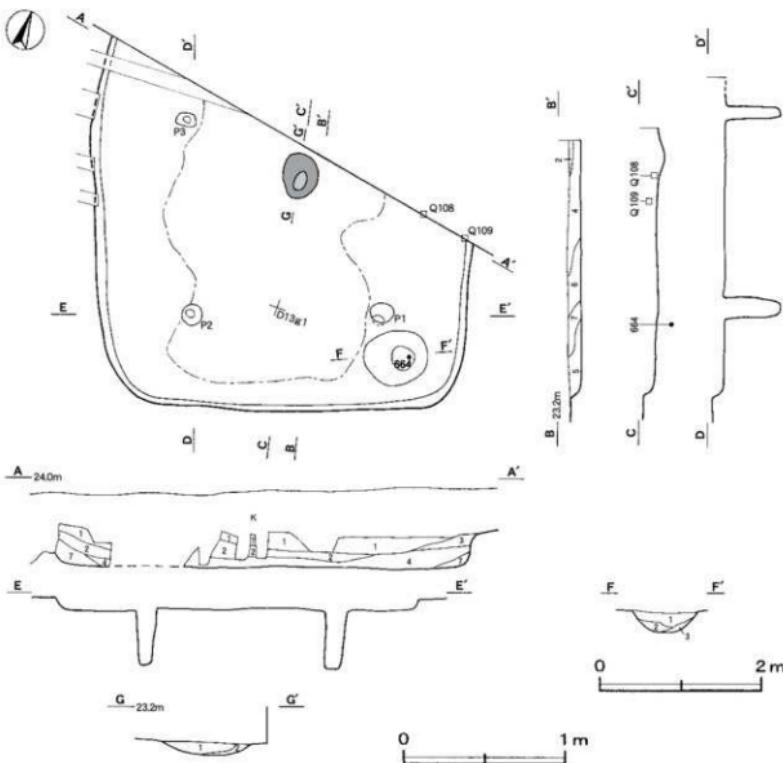
第151号住居跡出土遺物観察表(第144図)

番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
661	土器器	坪	[12.8]	4.3	—	長石-石英-雲母 赤色粒	明赤色	普通	口沿部内・外面模ナメ 体部外面へラ削り 内面ナメ	床面	40%
662	土器器	甕	[21.8]	7.9	—	長石-石英-雲母 粒子	灰白-棕	普通	口沿部内・外面模ナメ 体部内・外面ナメ 焼結質	床面	10%
663	土器器	甕	[16.6]	9.5	—	長石-石英-赤色 粒子	灰白-棕	普通	口沿部内・外面模ナメ 体部外面へラ削り 内面ナメ 焼結質	覆土下解	10%

第157号住居跡 (第145-146図)

位置 調査区東部のD12f0区で、標高23.0mほどの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状 北側は調査区域外へ延びているため構造全体の確認はできなかったが、長軸4.60m、短軸4.50mほどが確認された。確認できた壁や柱穴から判断して、N-17°-Wを主軸方向とする隅丸方形または隅丸長方形と推定される。確認できた壁高は12~38cmで、外傾して立ち上がっている。



第145図 第157号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 柱穴との位置関係から、中央部のやや北西寄りに位置していると考えられ、長径55cm、短径45cmの楕円形で、床面を7cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 焰赤褐色 塵土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 2 増赤褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 3か所。深さ69~74cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量	5 極暗褐色 ローム粒子少量
2 増褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量	6 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 極暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量	7 黒褐色 ローム粒子少量
4 增褐色 ローム粒子少量	

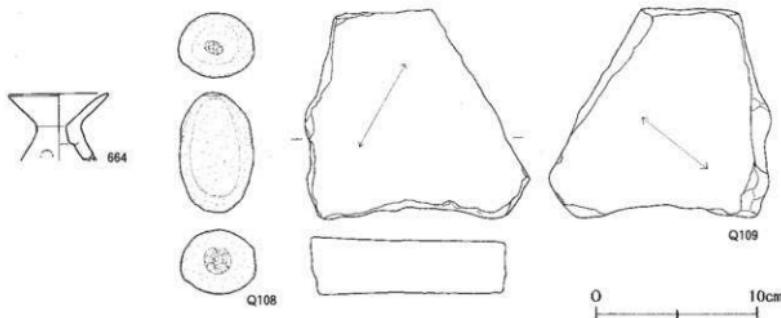
貯蔵穴 南東コーナー部に位置し、長径80cm、短径68cmの楕円形で、深さは24cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 增褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 增褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片35点（坏3、高坏1、器台1、甕30）、石器2点（敲石、砥石）の他に、流れ込んだ弥生土器片29点も出土している。664は貯蔵穴内から出土している。Q108・Q109は東壁側の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀代と考えられる。



第146図 第157号住居跡出土遺物実測図

第157号住居跡出土遺物観察表(第146図)

番号	種別	器種	口径	器高	直徑	胎土	色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考
									内面	外面		
664	土師器	器台	6.0	(4.1)	—	長石・石英・雲母	明褐色	普通	环面部・外面ナデ	輪縁底	貯蔵穴内	68%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質		特徴		出土位置	備考
						内面	外面	内面	外面		
Q108	敲石	7.4	4.6	4.0	197.6	石英		全面擦痕	両端間に敲打痕	覆土下層	PL42
Q109	砥石	(12.9)	(33.9)	3.6	(815.1)	砂岩		砥面		覆土下層	

表4 古墳時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面 堅穴住居跡	内部施設			覆土	主な出土遺物	時期	新旧編年 (旧→新)	
							平坦	傾斜	柱立	セト	垂柱			
72	D10e3	N-5°-E	〔長方形〕	3.52×[3.00]	50	平坦	—	—	—	—	—	不明 土師器	7世紀前半	
77	D9f9	N-28°-W	方形	3.60×3.52	4~12	平坦	—	—	1	—	■■■	自然 土師器、手捏土器、罐	6世紀後葉	SII98~本跡
79	D9d8	N-18°-W	方形	4.80×4.80	20~66	平坦 全周	4	1	—	■■■	人為 土師器、須恵器、土製品、石器、鉄製品、鐵	6世紀中葉	SII80~90~本跡	
80	D9c9	N-20°-W	方形	7.70×7.40	8~58	平坦 全周	4	2	—	■■■	1 自然 土師器、ミニチュア土器、土製品、鐵	6世紀後葉	SII90~92~本跡~S179	
81	C9j8	N-47°-W	方形	4.55×4.42	24~66	平坦 全周	4	2	—	■■■	1 人為 土師器、手捏土器、土製品	6世紀中葉	SII84~本跡	
84	D9e8	N-62°-E	不明	(3.10×2.20)	—	平坦	—	—	—	■■■	自然 土師器、土製品、鐵	6世紀後葉	本跡~S181	
86	C9i5	N-46°-W	方形	6.68×6.96	24~66	平坦 全周	4	1	2	■■■	自然 土師器、土製品、石器、鐵	6世紀後葉		
93	D9b6	N-44°-W	方形	5.70×5.54	30~78	平坦 全周	4	1	—	■■■	自然 土師器、土製品、銘石	6世紀後葉	SII92~本跡	
97	D9g0	N-18°-W	方形	4.90×4.70	25~52	平坦 全周	4	1	1	■■■	自然 土師器、ミニチュア土器、土製品、鐵	6世紀後葉	SII88~本跡	
98	D9f9	N-34°-W	方形	5.26×5.16	18~24	平坦 全周	4	1	—	■■■	1 人為 土師器	6世紀後葉	本跡~S177~97	
99	D9e5	N-44°-W	方形	5.26×5.15	35~60	平坦 全周	4	1	1	■■■	自然 土師器、手捏土器、土製品、鉄製品、鐵	7世紀前半	SII100~137~本跡~S191~95~S21~S27	
101	D9d4	N-30°-W	方形	5.36×5.14	38~90	平坦 全周	4	1	—	■■■	自然 土師器、手捏土器、土製品、石器、鉄製品、鐵	7世紀前半	SII137~本跡~S104~S83~S91	
106	D9c1	N-49°-E	方形	4.56×4.47	23~46	平坦	—	5	—	■■■	自然 土師器、土製品、鉄洋	6世紀後葉	SII104~本跡~S81~S21~S10	
116	C8j0	N-21°-W	方形	4.58×4.26	20~32	平坦	—	4	1	—	■■■	自然 土師器、土製品、鐵	7世紀後半	SII119~本跡~S118
119	C8j0	N-10°-E	〔長方形〕	4.95×[4.30]	60	平坦	—	4	1	■■■	自然 土師器、土製品、鐵	4世紀代		
122	D8a7	N-39°-W	方形	5.24×5.05	14~30	平坦 全周	4	1	—	■■■	自然 土師器、須恵器、土製品、鐵	7世紀前半	SII124~125~126~本跡~第12号室~22号室	
123	C8j7	N-47°-W	〔方形〕	[4.80×4.76]	13~29	平坦一部	4	1	—	■■■	1 人為 土師器、鐵製品、鐵	6世紀後葉	SII125~本跡	
124	C8j7	N-44°-W	〔方形〕	[5.98×5.69]	6~29	平坦	—	4	—	—	—	1 人為 土師器、土製品、鐵	4世紀代	本跡~S1121~122~123
125	D8a6	N-55°-W	長方形	4.60×3.80	20	平坦一部	4	1	—	■■■	1 人為 土師器、手捏土器、土製品、鐵	6世紀後葉	本跡~S1122~S106~S109	
136	D8b7	N-8°-W	方形	4.50×4.40	—	平坦	—	—	—	■■■	不明	5世紀以前	本跡~S1122~127	
127	D8c7	N-37°-W	方形・長方形	5.20×(2.56)	50	平坦 全周	1	—	—	—	—	1 人為 土師器、土製品、石器、鐵	6世紀後葉	SII126~本跡~S8~9
128	C9h1	N-48°-W	〔長方形〕	3.80×[3.40]	8	平坦	—	—	—	■■■	1 不明 土師器	4世紀代		
130	C8i4	N-35°-W	〔方形・長方形〕	6.82×(5.40)	40~44	平坦 全周	4	—	—	■■■	自然 土師器、土製品、石器、鉄洋、鐵	6世紀前葉		
132	D9f2	N-42°-W	〔方形・長方形〕	(5.80)×(4.48)	39~78	平坦 全周	1	—	—	■■■	1 人為 土師器、須恵器、手捏土器、土製品、鐵	6世紀後葉		
133	D8e9	N-38°-W	〔方形〕	6.70×6.60	38~37	平坦 全周	3	1	3	■■■	1 人為 土師器、手捏土器、土製品、鐵	6世紀中葉	SII134~本跡~S96	
136	C8i8	N-34°-E	〔方形〕	[5.80]×[5.80]	50~80	平坦	—	3	—	—	不明 土師器、鐵	6世紀代	本跡~S1120	
138	D10e9	N-7°-W	方形	3.23×3.18	23	平坦	—	—	—	■■■	自然 土師器	7世紀前半	本跡~S98	
139	D10e6	N-21°-W	方形	3.42×3.30	4~26	平坦 全周	—	1	—	■■■	自然 土師器、土製品、鐵	7世紀前半		
140	D11d1	N-7°-W	長方形	3.52×3.16	10~20	平坦	—	1	—	■■■	1 人為 土師器	7世紀前半		
142	D10f0	N-97°-E	〔方形〕	3.50×[2.30]	6~15	平坦 全周	—	—	1	—	自然 土師器、鐵	7世紀前半	SII141~本跡~S97	
144	D11e3	N-26°-W	方形	6.00×6.00	41~45	平坦 全周	4	2	—	■■■	自然 土師器、土製品、鐵	6世紀中葉		
145	D11e6	N-23°-W	〔方形・長方形〕	5.50×(5.00)	32~40	平坦 全周	4	1	3	■■■	1 人為 土師器、鐵	6世紀中葉		
146	D11i8	N-12°-W	方形	5.96×5.70	42~52	平坦一部	4	1	—	■■■	自然 土師器、須恵器、土製品、鉄洋、鐵	6世紀代	SII148~149~本跡	
147	E11a9	N-42°-W	〔方形・長方形〕	4.90×(3.82)	40~62	平坦 全周	3	2	—	■■■	1 人為 土師器、ミニチュア土器、土製品、鐵	6世紀後葉		
150	D11d6	N-26°-W	方形・長方形	5.40×(2.60)	16	平坦	—	2	—	■■■	自然 土師器、鐵	6世紀代		
151	D11e8	N-39°-W	方形	5.50×5.40	12~28	平坦 全周	4	2	—	■■■	自然 土師器	6世紀中葉		
157	D12f0	N-17°-W	〔鍋丸形・鍋丸長方形〕	9.60×(4.50)	12~38	平坦	—	3	1	—	伊I	自然 土師器、石器	4世紀代	

4 奈良時代・平安時代の遺構と遺物

今回の調査では、中位段丘上から奈良時代・平安時代の住居跡11軒と掘立柱建物跡3棟が確認された。

以下、遺構と遺物について記載する。

(1) 堪穴住居跡

第74号住居跡（第147図）

位置 調査区西部のD10f2区で、標高16.2mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 耕作による擾乱のため床面の一部が削平された状態であり、長軸3.10m、短軸2.50mほどが確認された。遺存している壁や検出された竈の位置などから判断して、N-120°-Eを主軸方向とする方形と推定される。遺存している壁高は4cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前付近が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで74cmである。袖部幅は79cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を若干皿状に掘りくぼめて使用している。煙道部は、壁外へ23cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

堆土層解説

- | | | | | | |
|---------|----------|--------------|--------|----------|---------------|
| 1 墓赤褐色 | 燒土粒子中量 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 4 墓赤褐色 | 燒土ブロック中量 | 炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 2 にごり褐色 | 燒土ブロック中量 | 炭化粒子少量 | 5 小石微量 | | |
| 3 墓赤褐色 | 燒土粒子中量 | 炭化粒子少量 | 6 墓赤褐色 | 燒土粒子少量 | ローム粒子・炭化粒子微量 |

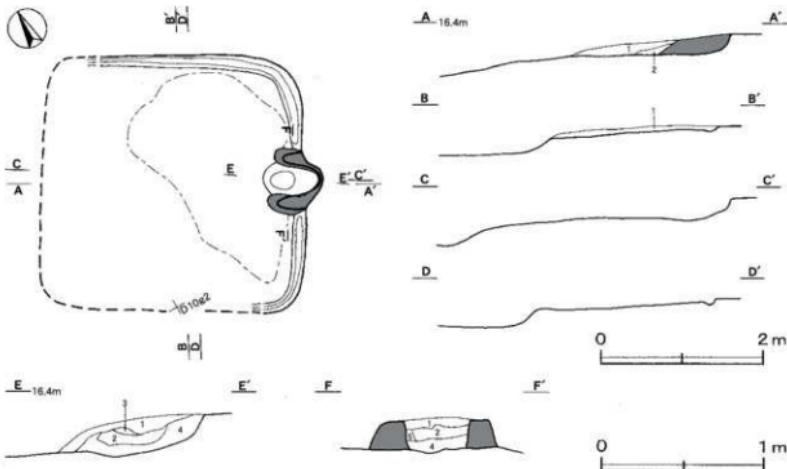
覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|-------|---------------|-----------|--------|--------------------------|-----|
| 1 墓褐色 | 炭化粒子・砂質粘土粒子少量 | ローム粒子・燒土粒 | 2 植暗褐色 | ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 子微量 |
|-------|---------------|-----------|--------|--------------------------|-----|

遺物出土状況 土師器片9点（壺3、甕6）の他に、流れ込んだ弥生土器片6点も出土しているが、細片のため図示することはできない。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器から9世紀代と考えられる。



第147図 第74号住居跡実測図

第76号住居跡（第148・149図）

位置 調査区西部のD10e1区で、標高15.8mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 耕作による擾乱のため床面の一部が削平された状態であり、長軸3.24m、短軸3.08mほどが確認された。遺存している壁や検出された竈の位置などから判断して、N=0°を主軸方向とする方形と推定される。遺存している壁高は11~30cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで103cmである。袖部幅は110cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用している。煙道部は、壁外へ50cm掘り込まれ。火床面から外傾して立ち上がっている。

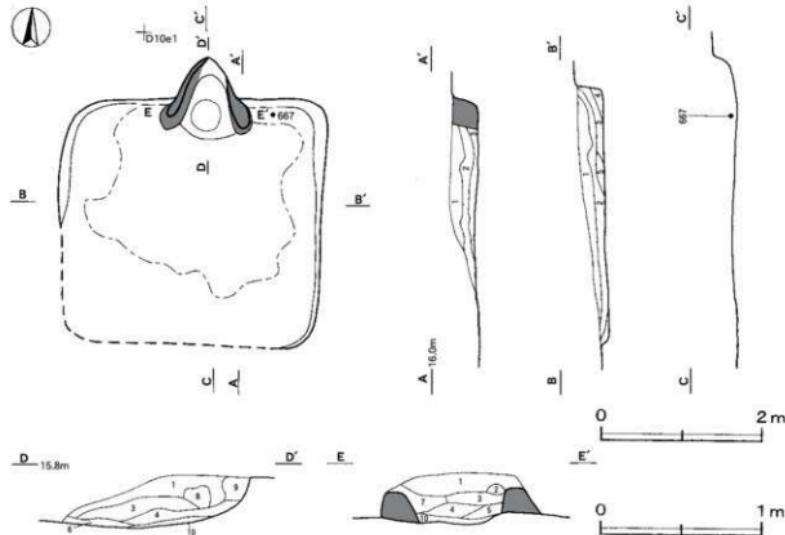
土壤層解説

1	暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量。砂質粘土ブロック微量	5	暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量
2	暗赤褐色	砂質粘土ブロック・燒土粒子・炭化粒子少量	6	黒色	炭化粒子少量、燒土粒子微量
3	暗赤褐色	燒土ブロック・炭化物中量。ローム粒子・砂質粘土粒子微量	7	暗赤褐色	燒土ブロック・炭化物少量。砂質粘土粒子微量
4	暗赤褐色	粒子微量	8	暗赤褐色	砂質粘土ブロック中量、燒土ブロック・炭化物少量
		燒土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量	9	暗褐色	砂質粘土ブロック・燒土粒子・炭化粒子微量
			10	暗褐色	燒土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量

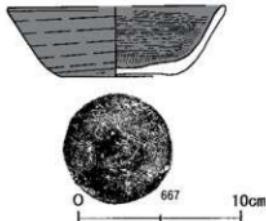
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土壤層解説

1	黒褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量	4	黒色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・燒土粒子微量	5	灰褐色	砂質粘土ブロック・燒土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
3	黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子微量			



第148図 第76号住居跡実測図



第149図 第76号住居跡出土遺物 実測図

第76号住居跡出土遺物観察表(第149図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
667	土師器	壺	[13.2]	4.2	6.7	長心石英-赤色 粒子	墨黒	普通	直筒深窓へフ切刃微張へフ削り 体部内面下端縁部へフ削り 内面へフ削り	壁下層 90%	

第78号住居跡(第150・151図)

位置 調査区西部のD 9-a0区で、標高16.7mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 長軸4.93m、短軸3.45mの長方形で、主軸方向はN-37°-Wである。壁高は10~24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前が踏み固められている。

竈 北西壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで86cmである。右袖部は遺存していないが、床面に砂質粘土がわずかに確認されたことから、袖部幅は95cmほどと推定され、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、床面と同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ57cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 暗褐色	燒土粒子少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量	7 暗赤褐色	燒土ブロック少量、炭化物・砂質粘土粒子微量
2 黒褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・燒土粒子微量	8 にじ赤褐色	燒土粒子・ローム粒子少量、砂質粘土粒子微量
3 黒褐色	燒土ブロック・砂質粘土ブロック・ローム粒子少量	9 灰褐色	燒土粒子中量、砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量
4 にじ褐色	燒土粒子中量、砂質粘土粒子少量	10 楊赤褐色	燒土粒子少量、砂質粘土粒子微量
5 灰褐色	燒土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子微量	11 暗赤褐色	ローム粒子・燒土粒子少量、砂質粘土粒子微量
6 にじ赤褐色	燒土粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量	12 黒褐色	燒土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子微量

覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量	4 黑褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・燒土粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量	5 黑褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・燒土粒子・炭化粒子少量	6 黑褐色	ロームブロック・燒土粒子・炭化粒子微量

貯藏穴 東側コーナー部に位置し、長径94cm、短径80cmほどの楕円形で、深さは38cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

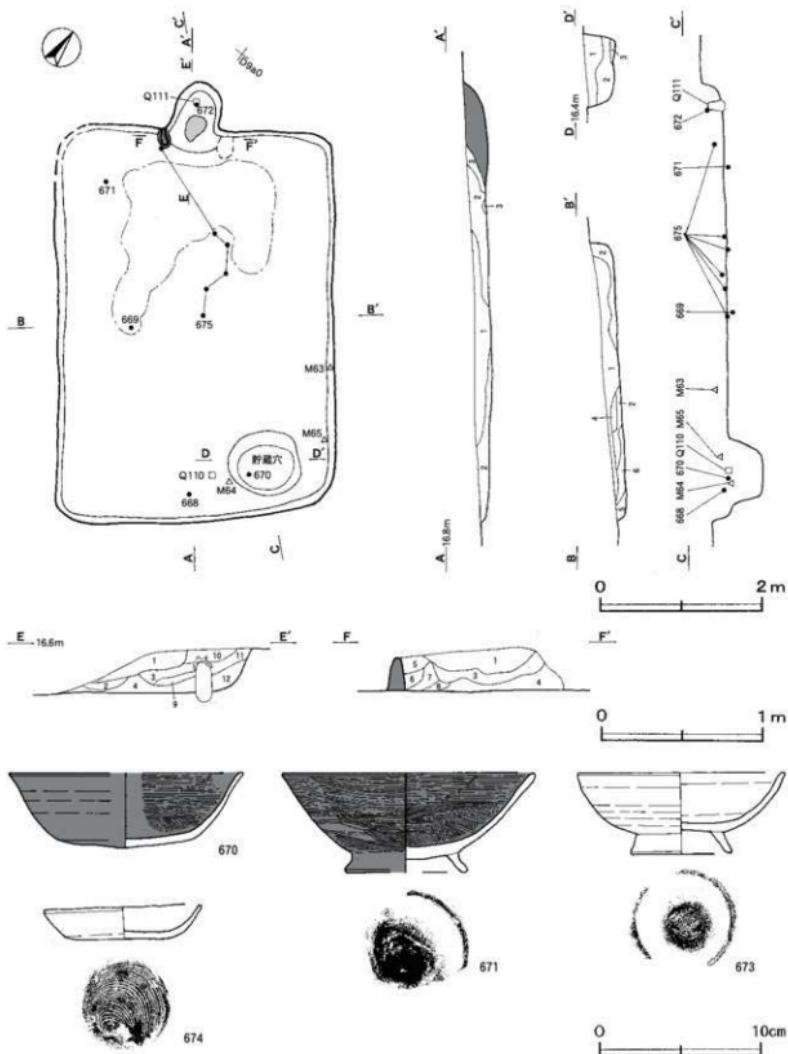
貯藏穴土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	3 にじ褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 黒褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量		

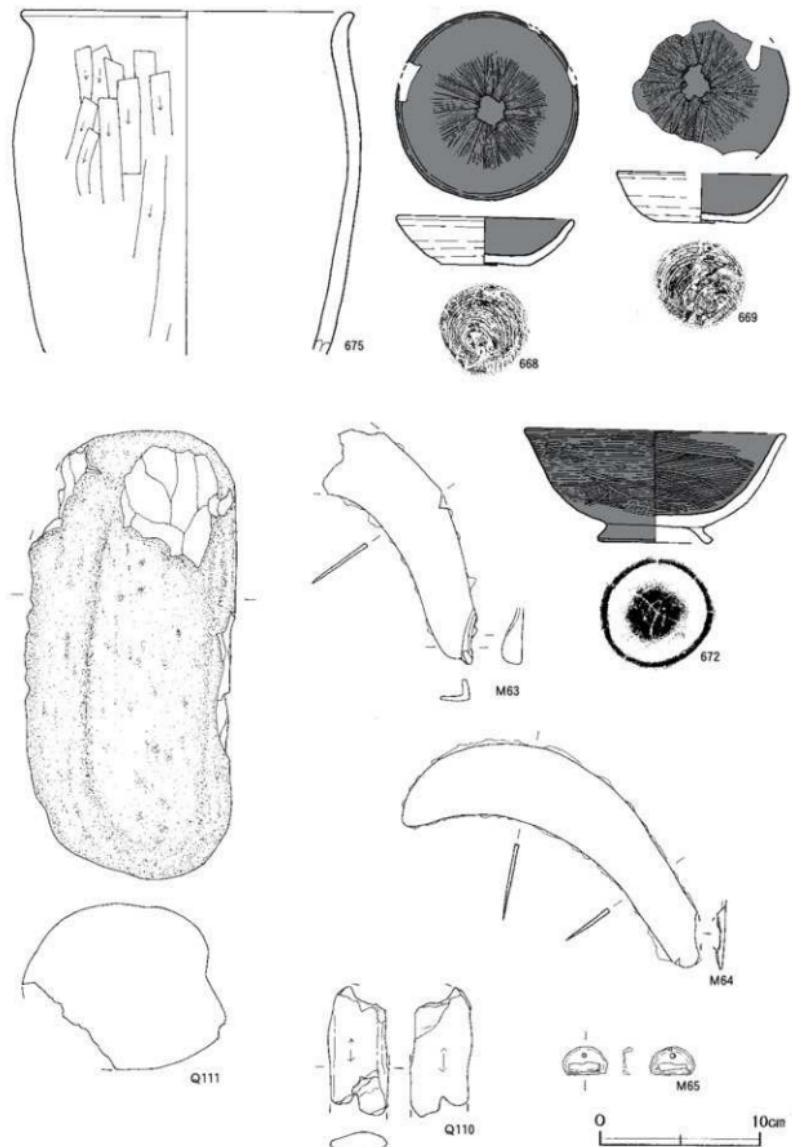
遺物出土状況 土師器片144点(壺52、高台付壺5、甕87)、土師質土器1点(小皿)、鉄製品2点(鎌)、銅製品1点(帶金具)、石器1点(砥石)、礫10点の他に、流れ込んだ弥生土器片35点、須恵器片34点も出土している。668は南東壁寄りの床面、669は中央部の床面、671は西コーナー寄りの床面からそれぞれ出土している。672は竈内の出土で、Q111の上から逆位で出土し、二次焼成も受けているため支脚として使用されていた可能性がある。

高い。M63・M65は東壁際の覆土中層、M64は貯蔵穴付近の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第150図 第78号住居跡・出土遺物実測図



第151図 第78号住居跡出土遺物実測図

第78号住居跡出土遺物観察表(第150・151図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 標	出土位置	備 考
668	土鍋器	坪	10.8	3.0	5.5	長石・石英・雲母 赤色粒子	にごり褐色	普通	底部削除・手切り 内面放射線焼成なしナダ	床面	100% PL36
669	土鍋器	坪	[10.6]	3.1	5.6	長石・石英・雲母 赤色粒子	にごり褐色	普通	底部削除・手切り 内面放射線焼成なしナダ	床面	50%
670	土鍋器	坪	[14.4]	4.7	—	長石・石英・赤色 粒子	にごり・黄褐色	普通	底部削除・手切り後ナダ 内面へラ磨き	窓櫛穴	40%
671	土鍋器	高台付陶	15.7	6.1	[7.6]	長石・石英・雲母 赤色粒子	黒褐色	普通	底部削除・手切り後高台付け 側部内・外面へラ磨き	床面	90% PL36
672	土鍋器	高台付陶	16.0	7.0	6.6	長石・石英・雲母 赤色粒子	にごり褐色	普通	底部削除・手切り後高台付け 側部内・外面へラ磨き	窓内	85% PL36
673	土鍋器	高台付陶	12.6	5.1	6.0	長石・石英・雲母 赤色粒子	にごり・黄褐色	不良	底部削除・手切り後高台付け 内・外面摩拭調整不明	覆土中	70% PL36
674	土質土器	小皿	9.7	2.2	5.4	長石・石英・赤色 粒子	浅黄褐色	普通	底部削除・手切り後高台付け	覆土中	85% PL36
675	土鍋器	便	20.3	(21.5)	—	長石・石英・雲母 赤色粒子	にごり・黄褐色	普通	口部内・外模様ナダ 体部外へラ削り 内面ナダ	覆土下	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 標	出土位置	備 考
Q110	砾石	(8.0)	3.7	1.2	(73.7)	凝灰岩	底面2面 斜面有り	床面	
Q111	支脚	28.0	13.0	10.3	(326.2)	凝灰岩	熱による鉄錆痕有り	窓内	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 標	出土位置	備 考
M63	鍼	(9.6)	(14.9)	0.3	(81.2)	鐵	弓弦に彫曲 斜面斜三角一部欠損	覆土中筋	
M64	鍼	13.9	(18.6)	0.25	(118.0)	鐵	弓弦に彫曲 斜面斜三角一部欠損	床面	PL43

第104号住居跡（第152図）

位置 調査区西部のD 9 d3区で、標高14.2mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第101号住居跡を掘り込み、第173号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.00m、短軸3.30mの長方形で、主軸方向はN-157°Eである。壁高は18~42cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 南壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで101cmである。袖部幅は90cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ38cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第4・9・14層は、天井部の崩落層と考えられる。

竈土荷解説

1 黒褐色	炭化粒子・砂質粘土粒子少量、燒土粒子微量	8 晴赤褐色	燒土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量
2 晴赤褐色	燒土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	9 黄褐色	砂質粘土粒子多量、燒土粒子・炭化粒子微量
3 墓褐色	砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量	10 赤黒色	燒土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
4 にごり褐色	砂質粘土粒子多量、燒土粒子・炭化粒子微量	11 にごり褐色	燒土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子少量
5 暗赤褐色	燒土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	12 黑褐色	燒土ブロック・炭化粒子・ローム粒子微量
6 暗赤褐色	燒土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	13 明赤褐色	燒土ブロック多量、炭化粒子微量
7 黑褐色	燒土ブロック・炭化粒子微量	14 明黄褐色	砂質粘土粒子多量、炭化粒子微量
8 にごり褐色	燒土ブロック少量、炭化粒子微量	15 黑褐色	炭化粒子少量、燒土粒子微量

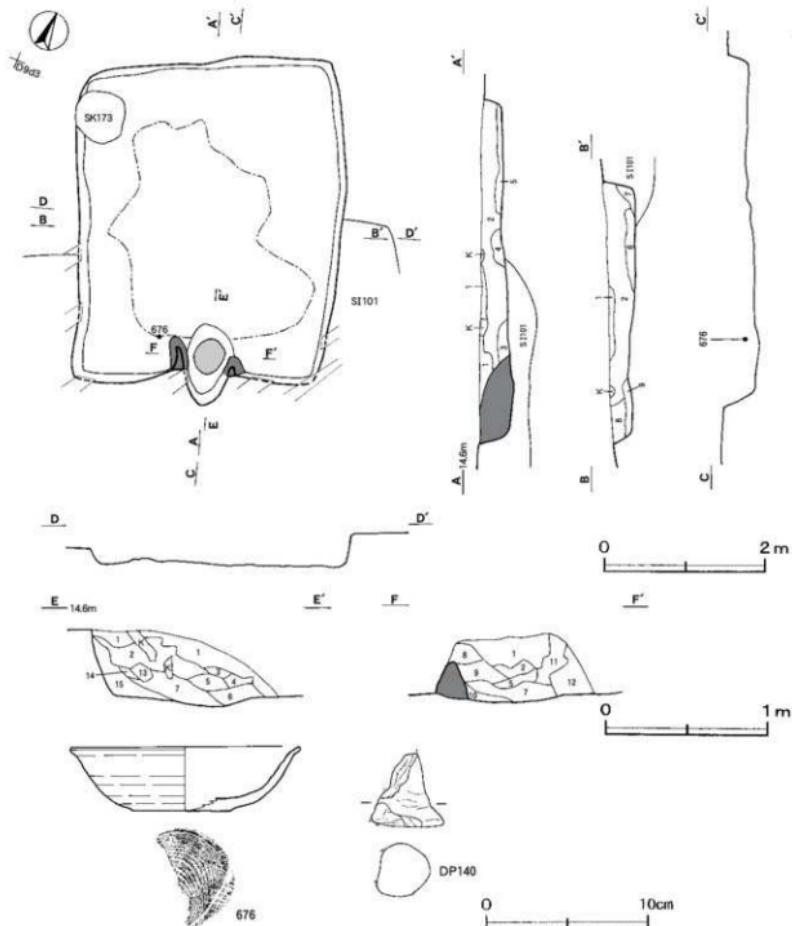
覆土 9層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量	5 極暗褐色	ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量	6 黑褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 黑褐色	燒土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	7 黑褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
4 極暗褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量	8 極暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量
9 黑褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量	9 黑褐色	炭化粒子少量、ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片97点（坏45, 高台付坏1, 頸51）の他に、流れ込んだ弥生土器片36点、須恵器片24点も出土しているが、遺物の大半は細片のため図示することはできない。676は竈右袖近くの床面から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器から10世紀前半と考えられる。



第152図 第104号住居跡・出土遺物実測図

第104号住居跡出土遺物観察表(第152図)

番号	種別	器種	口径	器高	直徑	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
676	土師器	坏	14.2	3.9	4.2	長石・石英・漂母	淡黃褐色	普通	近底部削み切 内外面ナデ	覆土下層	70%

番号	部種	長さ	幅	重量	材質	特徴	出土位置	備考
SI110	支脚	(4.5)	(4.5)	(82.6)	土(長石・石英・雲母)	全面ナメ	覆土中	

第107号住居跡（第153・154図）

位置 調査区西部のD 8 b0区で、標高14.2mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第109・110号住居跡を掘り込み、第6号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による搅乱のため床面の一部が削平された状態であり、長軸2.55m、短軸2.50mほどが確認された。遺存している壁や検出された甌の位置などから判断して、N-71°-Eを主軸方向とする方形と推定される。遺存している壁高は12cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から甌前部分が踏み固められている。

甌 東壁の南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで73cmである。袖部は遺存していないが床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されていたと推定される。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ58cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

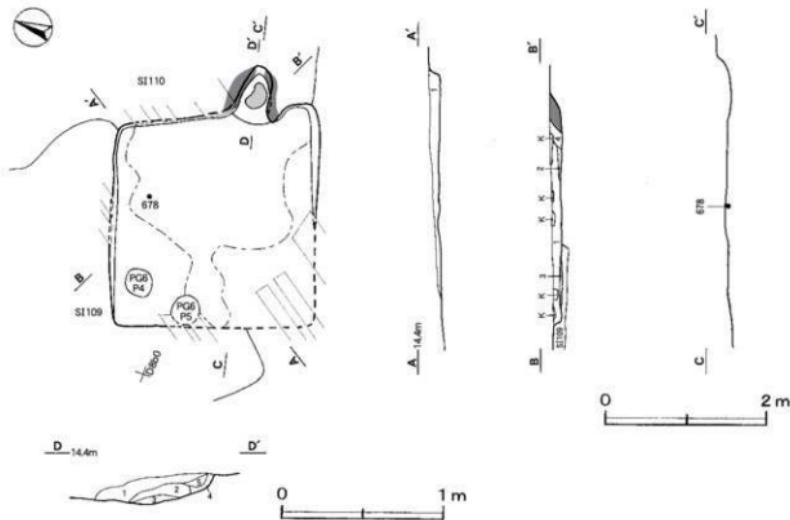
土壤層解説

- | | | | |
|---------|-----------------|--------|------------------|
| 1 にじ赤褐色 | 後土粒子・砂質粘土粒子中量 | 4 黒褐色 | 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 晴赤褐色 | 後土ブロック・砂質粘土粒子少量 | 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量 |
| 3 赤褐色 | 後土粒子多量、砂質粘土粒子微量 | | |

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

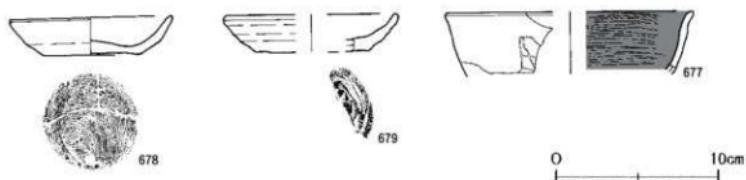
土壤層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |



遺物出土状況 土師器片96点（坏10, 高台付坏1, 壺85）, 土師質土器2点（小皿）の他に、流れ込んだ弥生土器片4点。須恵器片24点も出土しているが、遺物の大半は細片のため図示することはできない。678は北壁寄りの床面から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第154図 第107号住居跡出土遺物実測図

第107号住居跡出土遺物観察表(第154図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
677	土師器	片	[15.0]	[3.0]	—	長石・實母	黒褐色	普通	内面へラ起き	覆土中	5% 焼者「口」
678	土師質土器	小皿	10.0	2.4	6.0	長石・砂質・赤色 有茎	青白	底面深窪・未焼	内・外面ナデ	灰面	100% PL36
679	土師質土器	小皿	[10.8]	2.2	[7.0]	長石・砂質・赤色 有茎	灰褐色	底面深窪・未焼 金粉粒子	内・外面ナデ	覆土中	20%

第109号住居跡（第155・156図）

位置 調査区西部のD 8 a0区で、標高14.2mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第110号住居跡を掘り込み、第107号住居、第6号ビット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.72m、短軸3.22mの長方形で、主軸方向はN-46°-Eである。壁高は9~14cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北東壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで85cmである。袖部幅は92cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されており、左袖部には土師器壺、右袖部には須恵器壺がそれぞれ竈材として転用されていた。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ29cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

遺土層解説

- | | | | | | |
|---|------|----------------------|----|-------|------------------------|
| 1 | 暗赤褐色 | 燒土粒子中量、砂質粘土粒子微量 | 7 | 灰褐色 | 砂質粘土粒子中量、燒土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 | 灰褐色 | 燒土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 8 | 褐暗赤褐色 | 燒土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 | 褐暗褐色 | 燒土粒子・砂質粘土粒子微量 | 9 | 褐暗赤褐色 | 燒土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 | 暗赤褐色 | 燒土粒子少量、炭化粒子微量 | 10 | 灰褐色 | 砂質粘土粒子中量、燒土粒子少量 |
| 5 | 黑褐色 | 燒土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 11 | 褐灰色 | 燒土粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 6 | 褐暗褐色 | ローム粒子・燒土粒子・砂質粘土粒子微量 | | | |

覆土 4層に分層される。燒土ブロックや炭化材を含む人為堆積と考えられる。

土層解説

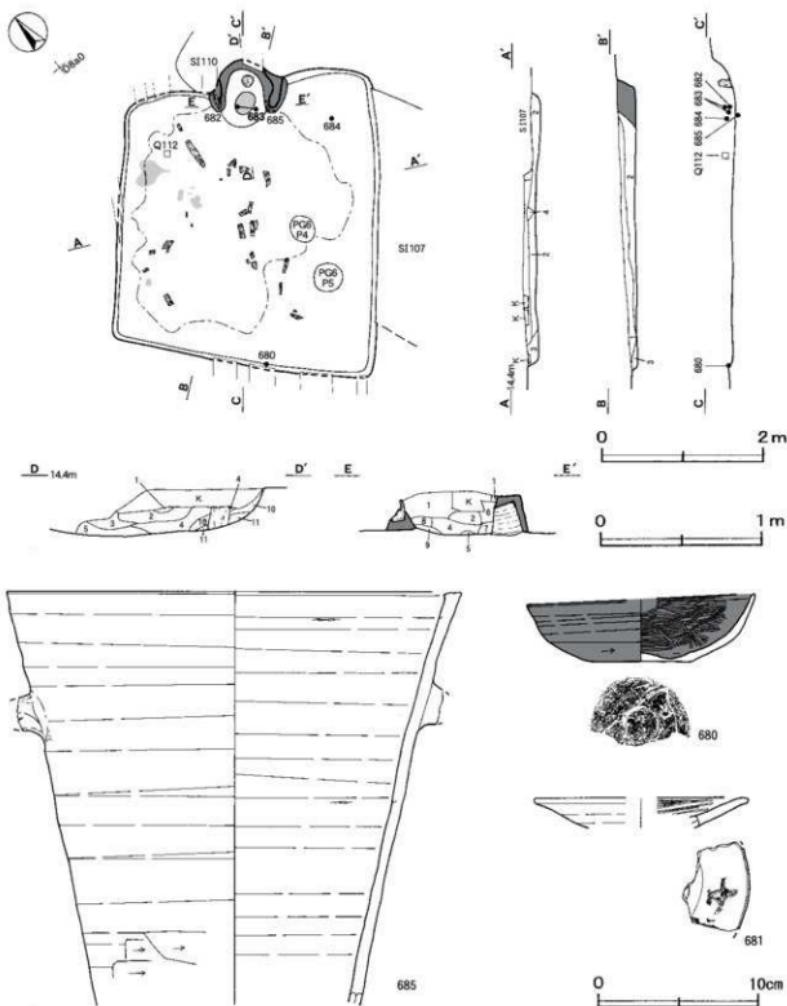
- | | | | | | |
|---|-----|----------------------|---|------|-----------------|
| 1 | 黒褐色 | 炭化物・ローム粒子・燒土粒子微量 | 3 | 褐暗褐色 | 燒土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | 燒土ブロック・炭化物少量・ローム粒子微量 | 4 | 黒褐色 | 炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片267点（坏29, 高台付坏1, 壺237）、須恵器片7点（坏5, 短頭壺1, 壺1）、灰釉陶器1点（瓶類）、石器1点（砥石）、鐵製品1点（不明）の他に、混入した弥生土器片16点も出土している。

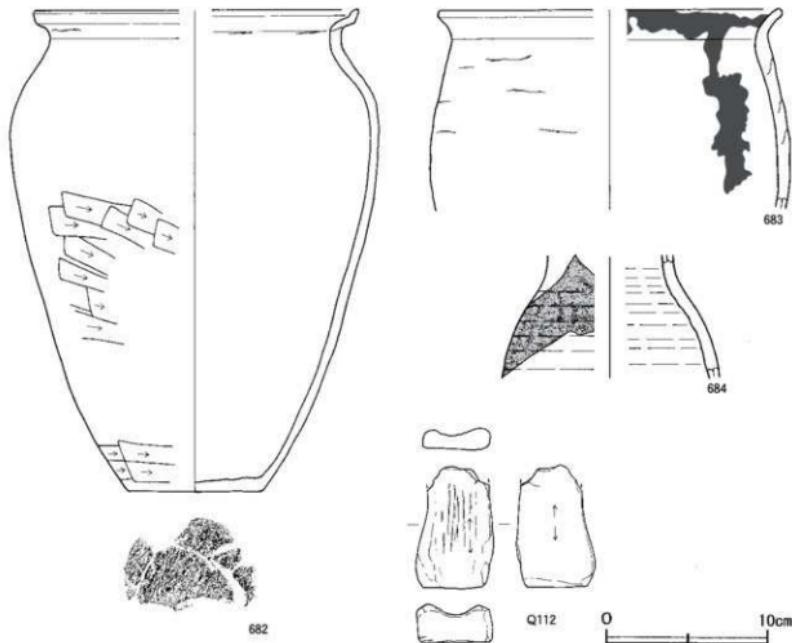
680は南西壁際の覆土上層から出土している。682は竈左袖部、685は竈右袖部からそれぞれ逆位で出土しており、

袖部の補強材として転用されたものである。また、多量の炭化材と焼土が出土していることから焼失住居と考えられるが、火を受けて赤変した床面を確認できなかった。

所見 時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。焼失時期は、焼土や炭化材が床面から検出されていることから廃絶後間もない時期と考えられる。



第155図 第109号住居跡・出土遺物実測図



第156図 第109号住居跡出土遺物実測図

第109号住居跡出土遺物観察表(第156図)

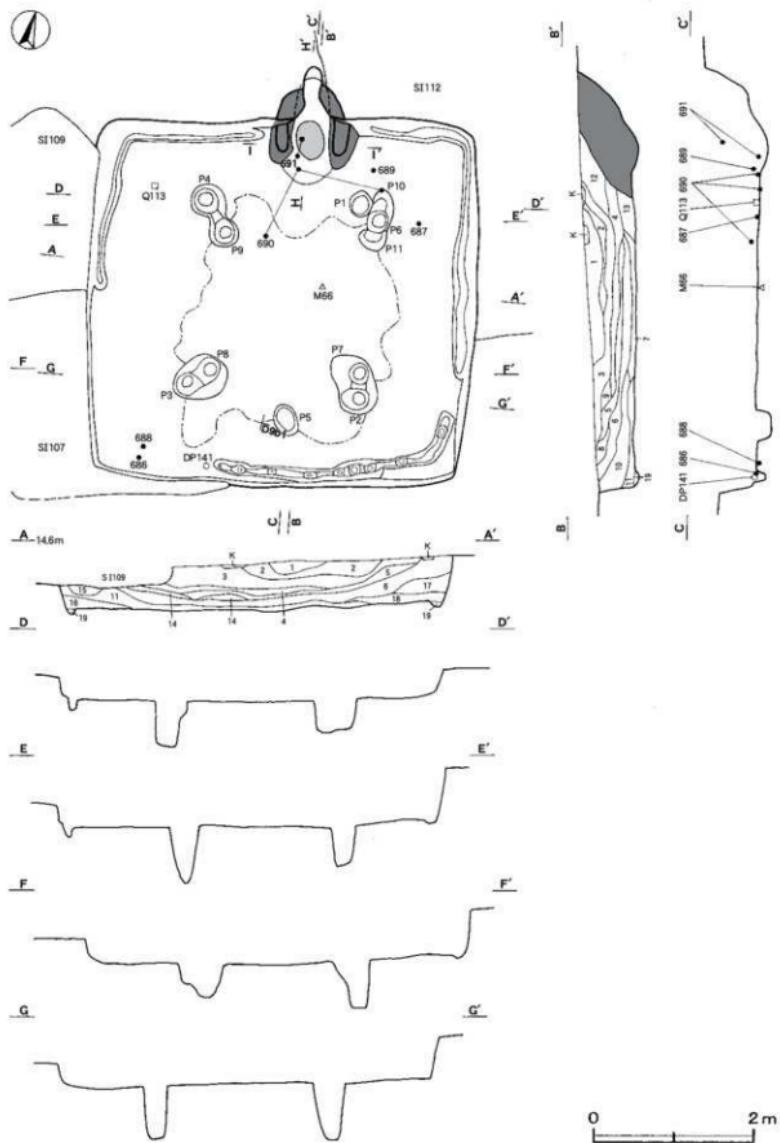
番号	種別	器種	口径	器高	底径	新 土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
680	土師器	壺	[14.2]	4.2	6.2	長芯・薄唇・赤色 粒子	褐	普通 内面二つ裂き	近底部へ少しきりぬき跡へ少割り 体部外下面縦溝へ少割り	覆土中層	50%
681	土師器	高台付壺	[18.2]	(1.8)	—	長芯・石英	に凹・櫛	普通 内面二つ裂き	口沿部内・外曲横ナデ 体部外面へ少割り箇ナデ 内底ナデ	覆土中層	10% 墓室[中口] M27
682	土師器	壺	[19.8]	29.7	8.4	長芯・石英・赤色 粒子	褐	普通 輪廻旋	口沿部内・外曲横ナデ 体部外面へ少割り箇ナデ	竈左袖部	40%
683	土師器	壺	[21.0]	(12.2)	—	長芯・石英・雲母	に凹・櫛	普通 輪廻旋	口沿部内・外曲横ナデ 体部外面ナデ	竈内	10% 内面撲付
684	灰陶器	瓶	—	(7.6)	—	長芯・石英	灰白	良好 体部外面ロクロナデ	—	覆土中層	10%
685	更衣器	瓶	28.0	(25.9)	—	長芯・石英・雲母 針状物	灰黄褐	良好 体部外下面下端へ少割り 把手斜縫窓 内面ナデ	輪右袖部	40%	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
Q112	砾石	17.9	5.0	2.4	173.7	燧灰岩	粗面2面	覆土中層	—

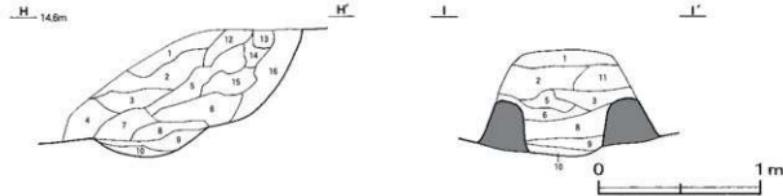
第110号住居跡 (第157~160図)

位置 調査区西部のD 8 a0区で、標高14.3mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第112号住居跡を掘り込み、第107・109号住居に掘り込まれている。



第157図 第110号住居跡実測図(1)



第158図 第110号住居跡実測図(2)

規模と形状 長軸4.70m、短軸4.61mの方形で、主軸方向はN-8°-Wである。壁高は45~65cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、南西コーナー及び竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁のほぼ中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで147cmである。袖部幅は108cmほどで、床面と同じ高さの地山面を掘り込んでから砂質粘土で構築している。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ64cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第5層は天井部の崩落層と考えられる。

竈土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	9 にら青褐色	燒土粒子中量、ローム粒子・砂質粘土粒子少量
2 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	10 單赤褐色	燒土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
3 極暗褐色	燒土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	11 單赤褐色	燒土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
4 極暗褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量	12 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
5 灰黄褐色	砂質粘土粒子多量、炭化粒子微量	13 にら青褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量
6 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量	14 にら青褐色	砂質粘土粒子少量、燒土粒子微量
7 黑褐色	燒土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量	15 黒褐色	ローム粒子・燒土粒子微量
8 單赤褐色	燒土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子少量	16 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 11か所。P 1~P 4は深さ42~73cmで、配置から柱穴と考えられる。P 5は深さ21cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6~P 9は深さ42~72cmで、柱建て替え以前の柱穴と考えられる。P 10・P 11の性格は不明であるが、柱建て替え時の掘り方の可能性も想定できる。

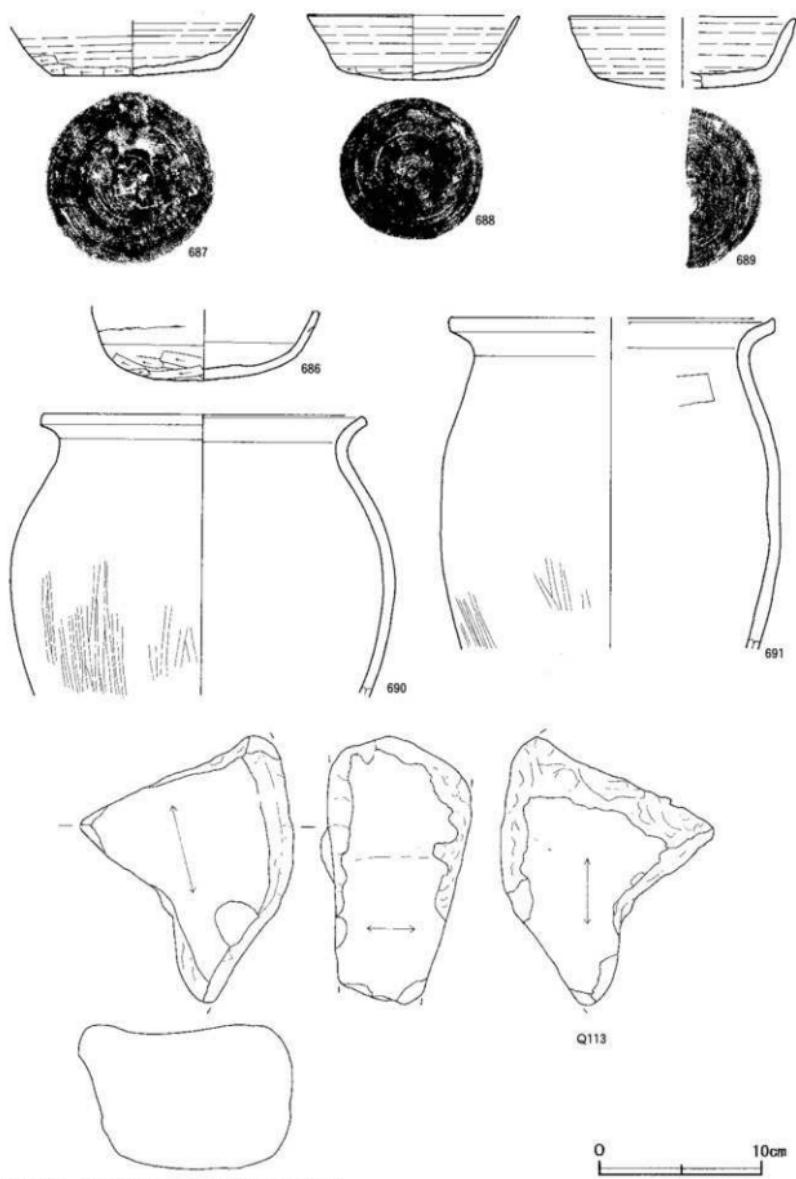
覆土 19層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

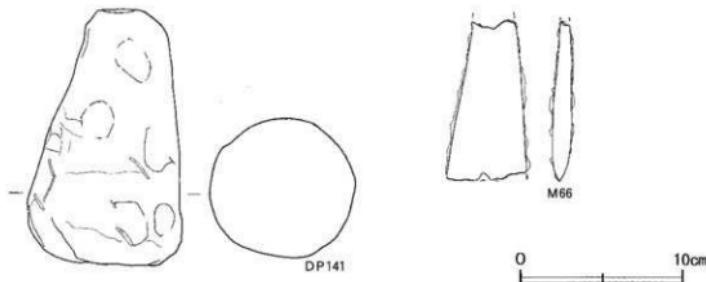
1 黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量	11 極暗褐色	ロームブロック微量
2 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	12 極暗褐色	ローム粒子少量、燒土ブロック・炭化粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、燒土粒子微量	13 單褐色	ローム粒子少量、燒土ブロック・炭化粒子微量
4 單褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	14 黑褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・燒土粒子微量
5 黑褐色	炭化粒子中量、ローム粒子・燒土粒子微量	15 黑褐色	燒土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
6 黑褐色	炭化粒子少量、ローム粒子微量	16 黑褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
7 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	17 黑褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
8 黑褐色	ロームブロック微量、炭化粒子微量	18 極暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
9 黑褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	19 黑褐色	ロームブロック微量
10 黑褐色	ローム粒子微量		

遺物出土状況 土器片570点(坪50、高窓1、器台1、甕518)、須恵器片28点(坪25、蓋1、甕2)、土製品1点(支脚)、石器1点(砾石)、鐵製品3点(鐵鏃、刀子、鐵斧)の他に、流れ込んだ縄文土器片2点、弥生土器片102点も出土している。686・688は南西コーナー部の床面、687は北東コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀後半と考えられる。



第159図 第110号住居跡出土遺物実測図(1)



第160図 第110号住居跡出土遺物実測図(2)

第110号住居跡出土遺物観察表(第159・160図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
686	土師器	环	—	[4.3]	—	長石・石英・雲母・金剛石粒子	褐	普通	口切跡内・外面横ナデ 体部外面へフ削り 内面ナデ 編織低	表面	85% 二次利用 PL36
687	須恵器	环	—	[3.7]	10.3	長石・石英・斜方輝石	灰	普通	底面横へフ削り 刃面へフ削り後一方刃面へフ削り 体高ナデ 繩目打ちナデ削り	表面	99%
688	須恵器	环	13.0	3.9	8.6	長石・石英・斜方輝石	灰黒褐色	良好	底面横へフ削りの複数箇所へフ削り 体部外面下端横へフ削り	表面	99% PL34
689	須恵器	环	[13.7]	4.4	[10.0]	長石・石英・斜方輝石	褐灰	良好	底面横へフ削り複数箇所へフ削り	覆土下層	40%
690	土師器	甕	19.6	[17.1]	—	長石・石英・雲母・金剛石粒子	灰・白	普通	口切跡内・外面横ナデ 体部外面へフ削り後へフ削き 内面ナデ	覆土下層	20%
691	土師器	甕	[19.6]	[20.2]	—	長石・石英・雲母・金剛石粒子	灰・白	普通	口切跡内・外面横ナデ 体部外面へフ削り後へフ削き 内面へ ナナダ	表面	20%

番号	器種	長さ	幅	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP141	支脚	15.7	5.0~(9.4)	(1655.5)	土(長石・石英・雲母)	ナナダ 指彫痕	表面	PL41

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
QH13	砥石	[16.0]	(13.0)	9.2	(1835.2)	碧岩	砥面3面	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M66	鉄斧	19.8	(4.9)	1.1	(181.6)	鉄	刃部1や2幅広	表面	PL43

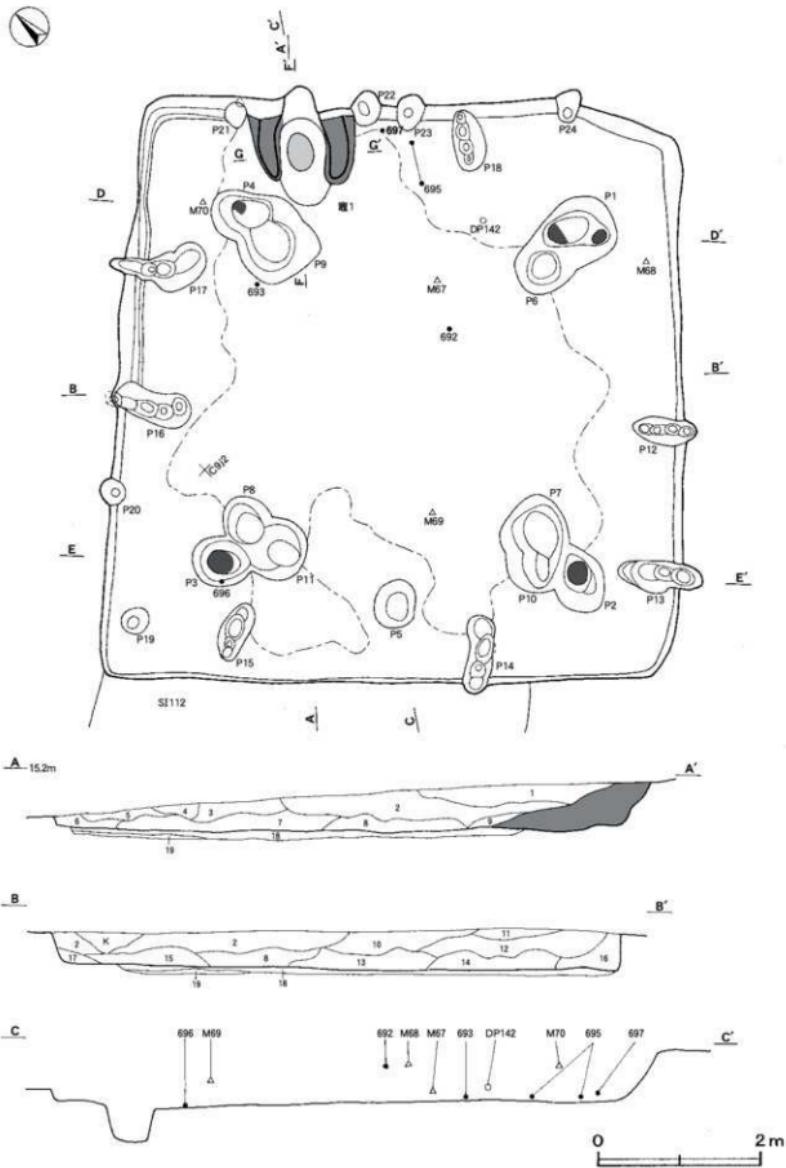
第111号住居跡 (第161~164図)

位置 調査区西部のC 9 J2区で、標高15.0mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

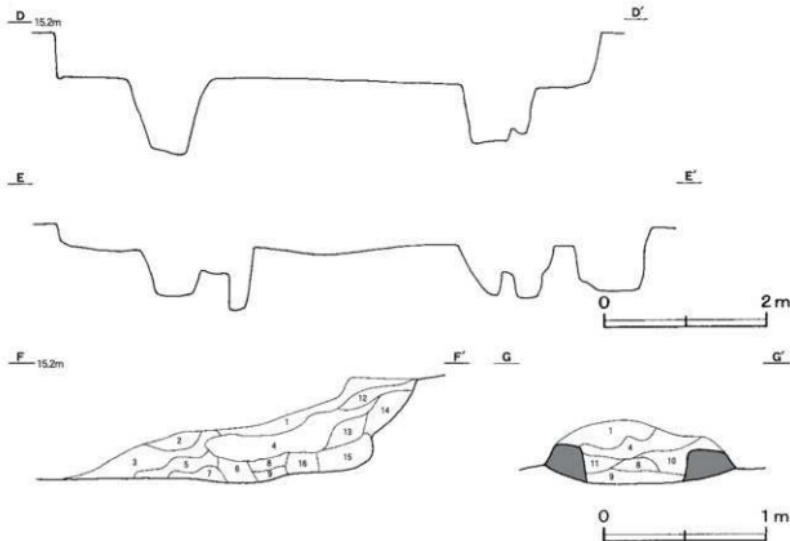
重複関係 第112号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸7.08m、短軸6.88mの方形で、主軸方向はN-49°-Eである。壁高は18~65cmで、外傾して立ち上がっている。また、掘り方調査の結果、竈痕跡が検出され、柱穴も対角線上に移動していることから本跡は四壁が拡張されている。拡張以前の長軸は6.50mほど、短軸6.20mほどの方形と想定される。

床 掘り方を調査した結果、床面は2面あることが確認された。廃絶時の床面(第2次面)はほぼ平坦で、中央部と竈前付近が踏み固められており、第1次面上に覆土土層第18・19層を客土して構築している。第1次面は拡張以前の床面で、中央部と竈前付近が踏み固められている。



第161図 第111号住居跡実測図(1)



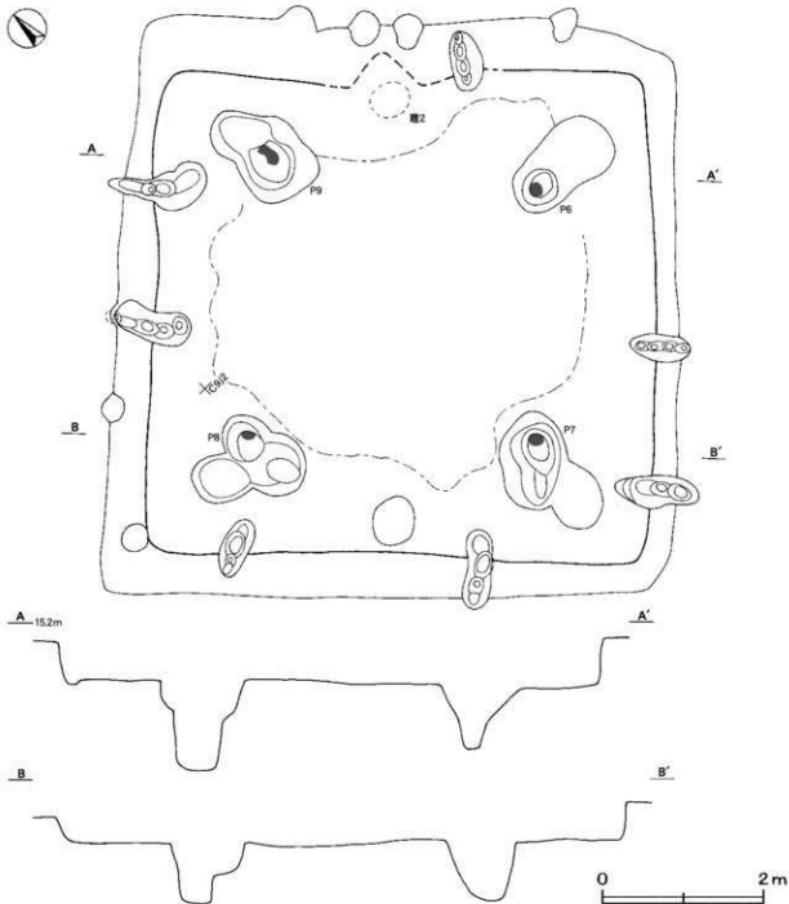
第162図 第111号住居跡実測図(2)

竈 拡張後の竈は、北東壁の左寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで148cmである。袖部幅は127cmほどで、床面と同じ高さの地山面を掘り込んでから砂質粘土で構築している。火床部は、床面と同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ18cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。拡張以前の竈は、北東壁の中央部に付設されており、火床部が遺存しているだけで、袖部の痕跡は確認できなかった。

竈1 土層解説

1	暗褐色	燒土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	9	赤褐色	燒土粒子中量、砂質粘土粒子少量、炭化物微量
2	暗褐色	砂質粘土粒子少量、燒土ブロック・炭化粒子微量	10	褐色	砂質粘土ブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量
3	暗赤褐色	燒土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量	11	灰褐色	砂質粘土粒子中量、燒土粒子少量、炭化粒子微量
4	暗赤褐色	燒土粒子中量、炭化粒子・砂質粘土粒子少量	12	黒褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・燒土粒子微量
5	暗赤褐色	燒土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	13	暗赤褐色	燒土ブロック・砂質粘土粒子少量
6	灰褐色	砂質粘土粒子中量、燒土粒子少量、炭化粒子微量	14	黒褐色	砂質粘土粒子少量、燒土粒子微量
7	黒色	炭化粒子多量、ロームブロック・燒土粒子微量	15	暗赤褐色	燒土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化物微量
8	にじむ褐色	砂質粘土ブロック中量、燒土粒子少量、炭化物微量	16	明赤褐色	燒土ブロック多量、砂質粘土粒子微量

ピット 24か所。P 1～P 4は深さ58～95cmで、配置から廃絶時の主柱穴と考えられる。P 5は深さ37cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、P 6～P 11は深さ75～113cmで、配置から拡張以前の主柱穴と想定される。P 12～P 24は深さ46～116cmで、住居を取り囲むように壁際に配置されていることから壁柱穴と考えられ、中でもP 12～P 18は、拡張に伴って柱を移動したと想定される。また、P 21・P 22は、竈を挟むように北東壁際に位置していることから、竈の付属施設の柱穴と考えられる。

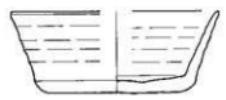


第163図 第111号住居跡実測図(3)

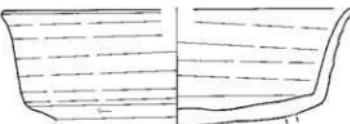
覆土 17層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。第18・19層は第2次面の床である。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	10	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量	11	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	12	黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
4	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量	13	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
5	極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	14	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
6	極暗褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量	15	極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
7	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量	16	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
8	黒褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量	17	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・砂質粘土粒子微量
9	黒褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・砂質粘土ブロック微量	18	黒褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量
19	極暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量			



693



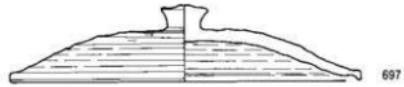
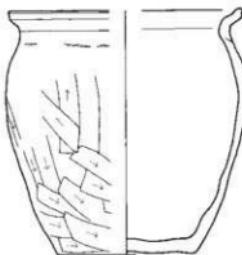
695



694



696



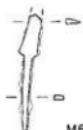
697



692



M67



M68



DP142



M69



M71



O

10cm

第164図 第111号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土器器片1412点（坏124、高坏8、堆1、甕1274、瓶5）、須恵器片113点（坏35、高台付坏4、盤26、高盤3、蓋45）、土製品12（筋錐車1、支脚11）、鉄製品5点（刀子4、不明1）、鉄滓1点、礪62点の他に、流れ込んだ繩文土器片5点、弥生土器片211点も出土している。693はP4付近の覆土下層、695・697は北東壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。いずれの遺物も覆土下層より上から出土しており、住居に伴わない」と判断される。

所見 廃絶時期は、出土土器から8世紀後半と考えられる。また、拡張以前の時期については、1次面の床面調査や掘り方調査でも遺物が出土していないため明確ではないが、廃絶時期からはそれほど遅ないと考えられる。

第111号住居跡出土遺物観察表(第164図)

番号	種別	器種	口径	深高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
693	須恵器	坏	[12.8]	5.0	9.0	長石-6英-針状 鉄滓	二元-黄褐色	良好	底面彫刻へラ削り	覆土下層	60%	
694	須恵器	坏	-	(1.8)	[7.8]	長石-石英	灰	黄褐色	良好	底面彫刻へラ削り 番縁彫刻へラ削り	覆土中 △□△△△PL35	
695	須恵器	高台付坏	[21.5]	(7.2)	-	長石-6英-針状 鉄滓	灰	良好	底面彫刻へラ削り 番縁彫刻へラ削り 高台付付け 体部外下面 「縦溝」の特徴	覆土下層	70% PL35	
696	須恵器	瓶	[21.4]	4.0	[14.6]	長石-石英	灰	閑灰	良好	底面彫刻へラ削り 番縁彫刻へラ削り	覆土下層	20%
697	須恵器	甕	21.6	4.7	-	長石-6英-針状 鉄滓	灰	普通	天井部底面へラ削り	覆土下層	60% PL35	
692	土鍋	小型甕	[14.2]	15.0	8.4	長石-黒斑-赤色 粒子	明赤褐色	普通	口沿部内・外面横ナメ 体部外下面へラ削り 内面ナメ 菊彫刻	覆土下層	50%	

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP142	筋錐車	3.7	0.6	3.6	(36.5)	土(長石-石英-雲母-赤色粒子)	全面ナメ	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M88	鉄錐	(7.2)	1.4	0.3	(6.3)	鉄	長頸錐群 繊身部片刃形	覆土上層	PL43
M87	刀子	(8.5)	1.4	0.4~0.5	(8.0)	鉄	刀身の一部 刃先・茎尻欠損 素の一部に本質遺存	覆土下層	PL43
M89	刀子	(11.8)	1.0	0.3	(12.0)	鉄	刀身の一部 刃先・茎尻欠損 素の一部に本質遺存	覆土中層	
M90	刀子	(6.2)	1.0	0.3	(6.1)	鉄	刀身の一部 刃先・茎欠損	覆土上層	
M71	鉄滓	4.2	5.1	2.7	39.2	鉄	表面は暗赤褐色 四角有り	覆土中	

第118号住居跡（第165～172図）

位置 調査区西部のC8-i9区で、標高14.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第116・119号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.40m、短軸5.18mの方形で、主軸方向はN-38°-Wである。壁高は35～60cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、南東壁側が踏み固められている。

竈 北西壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで148cmである。袖部幅は138cmほどで、床の上に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を15cm前後掘り込み、竈土層第13～15層に相当する土を入れて使用していたと考えられるが、赤変硬化部分は検出されなかった。煙道部は、壁外へ42cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。第3層は、天井部の崩落層と考えられる。第16層～19層は床構築材、第20層～26層はP4・P8の覆土である。

竈土層解説

1	暗褐色	燒土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量	15	褐色	ローム粒子中量、燒土ブロック微量
2	暗褐色	燒土粒子少量、ローム粒子微量	16	明褐色	ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量
3	灰黃褐色	砂質粘土ブロック中量、燒土ブロック・炭化粒子微量	17	暗褐色	ロームブロック少量、砂質粘土粒子微量
4	黒褐色	ローム粒子・燒土粒子少量、炭化粒子微量	18	暗褐色	ロームブロック少量、燒土ブロック・砂質粘土粒子微量
5	褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・燒土粒子微量	19	暗褐色	ロームブロック少量、燒土粒子・砂質粘土粒子微量
6	黒褐色	燒土ブロック・ローム粒子微量	20	褐色	ロームブロック中量、燒土ブロック・砂質粘土ブロック微量
7	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	21	暗褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック・燒土粒子微量
8	黒褐色	砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・燒土粒子微量	22	褐色	ロームブロック少量、砂質粘土ブロック・燒土粒子微量
9	暗褐色	燒土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	23	暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・砂質粘土粒子微量
10	褐色	砂質粘土ブロック少量、燒土粒子微量	24	褐色	ローム粒子少量、砂質粘土ブロック・燒土粒子微量
11	黒褐色	ローム粒子・燒土粒子・砂質粘土粒子微量	25	暗褐色	ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
12	灰黃褐色	砂質粘土粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量	26	褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子・燒土粒子微量
13	黒褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量			
14	明褐色	ロームブロック少量、燒土ブロック・炭化粒子微量			

ピット 8か所。P 1～P 4は深さ72～89cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5・P 6は深さ89～99cmで、壁柱穴の可能性も考えられるが明確ではない。P 7・P 8は深さは27～34cmで、竈袖部の断ち割りの際、両袖部下の貼り床をはがした時点で検出されている。竈の作り替え以前の竈に関わる付属施設の柱穴と考えられるが明確ではない。また、検出状況から床の張り替えが想定される。

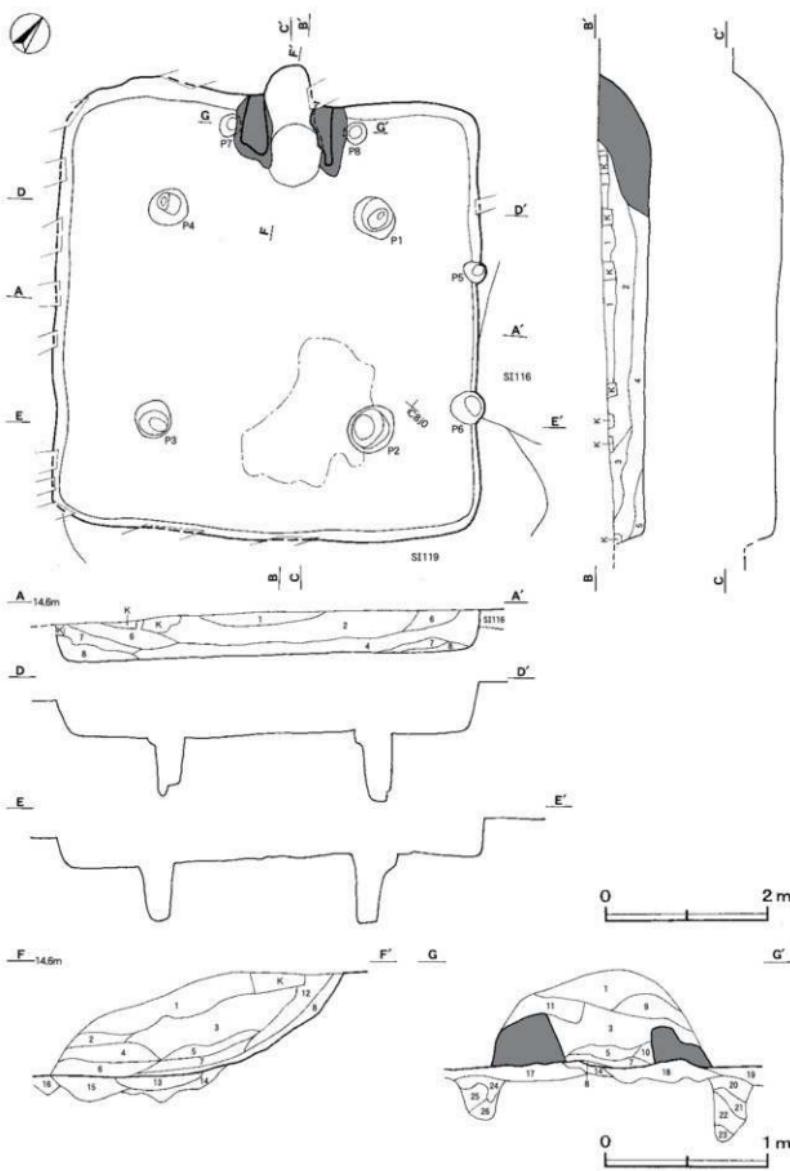
覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示しているが、遺物の出土状況などから人為堆積と考えられる。

土層解説

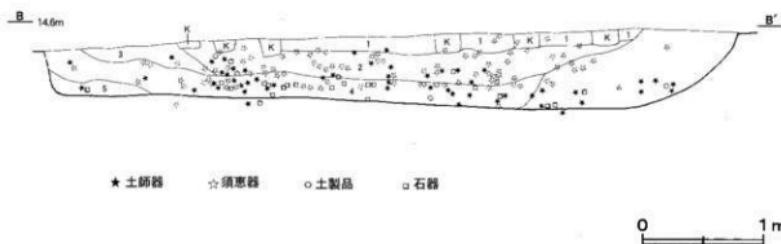
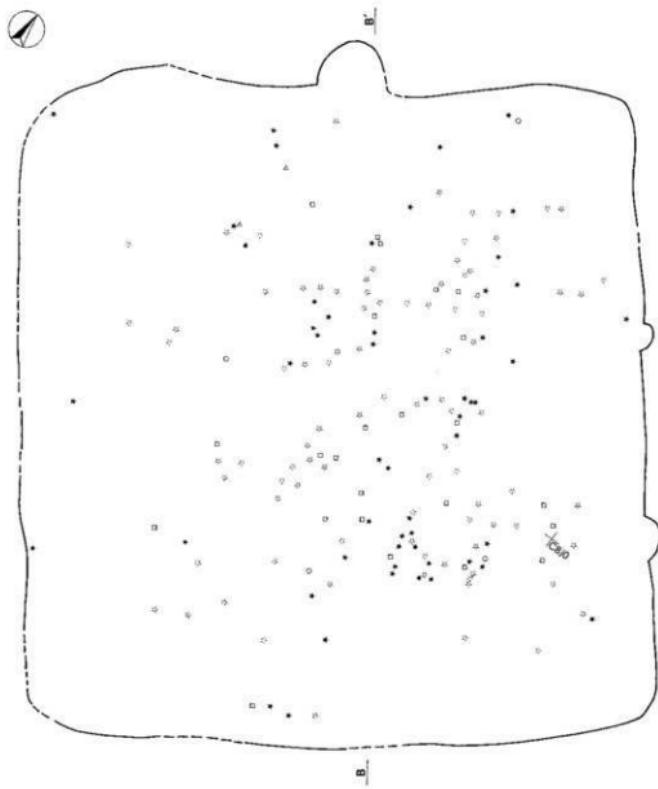
1	黒褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量	5	黒褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量
2	黒褐色	炭化粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量	6	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
3	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	7	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	8	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片2190点（坪570、高坪9、器台1、甕1610）、須恵器片771点（坪490、高台付坪33、盤15、高盤7、蓋59、短頸壺35、長頸壺11、有耳壺1、壺頸9、甕110、円面鏡1）、手捏土器2点、土製品6点（支脚2、不明4）、石器2点（砥石）、鉄製品2点（刀子）、鉄滓2点、礫55点の他に、流れ込んだ弥生土器片166点や古墳時代の土師器も出土しており、埋没の過程で流れ込んだものと考えられる。土師器片は、覆土上層からの出土ではなく、すべてが覆土中層以下からの出土で、特に覆土下層からの出土割合が高く、住居が廃絶された後の早い段階から投棄され始めたものと想定される。中でも、竈付近から北コーナー一部にかけて出土している土師器片は、散在はしているが、須恵器片より下層から出土しているものが多く、始めの段階では北側から投棄されたと考えられる。一方、南東コーナー寄りから出土している土師器片は、覆土中層・下層から須恵器片に混じて出土しており、南東コーナー側から投棄されている様子を読み取ることができるとともに、竈付近や北コーナー部からの投棄時期よりやや遅れて投棄され始めたことが想定される。須恵器片は、広範囲に散らばりが認められるが、南西壁側では比較的の出土が少ない傾向にある。土師器片同様に、竈付近を中心とする北コーナー側と南東コーナー側に集中地点が認められ、覆土第4層と第2層との層界付近から第1層にかけて出土しており、第4層が堆積した後から投棄され始めたと考えられる。土師器も須恵器のいずれも完形に復元できたものではなく、大部分の土師器や須恵器は近接する位置から出土したものが接合しているが、708・733・735・741のように比較的離れた位置から出土したものや出土層位が違うものが接合している例もあることから、覆土は土器片を投棄する過程で人為的に堆積していることを裏付けている。701は中央部の覆土中層、716はP 1付近の覆土中層、698・699・704・706はP 2付近の覆土中層、700はP 4付近の覆土中層からそれぞれ出土している。718は中央部南東壁寄りの覆土下層、744はP 3付近の覆土下層からそれぞれ出土している。Q114は中央部の床面、M72は竈左側の覆土中層から出土している。

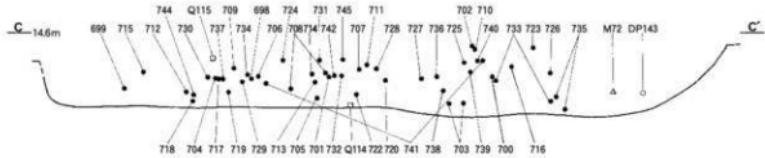
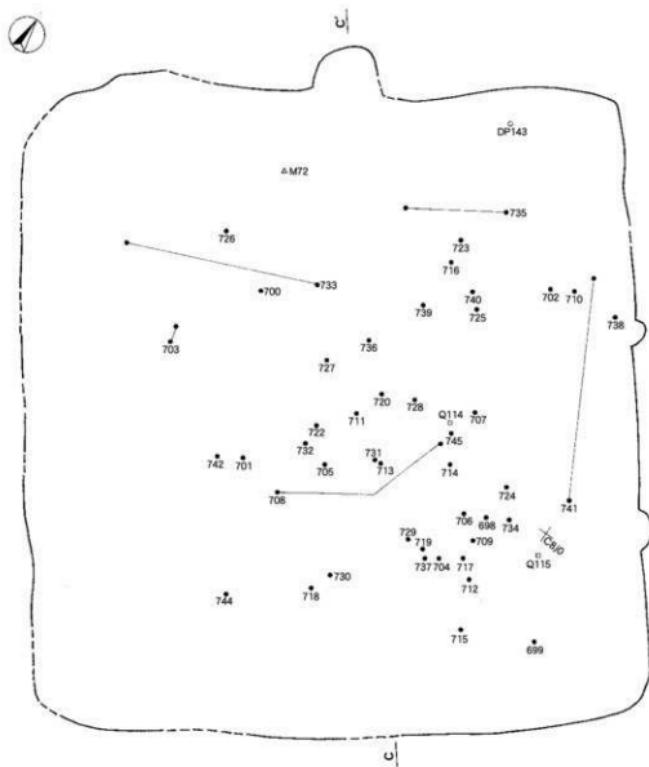
所見 出土遺物は、やや長期間にわたって投棄されたと考えられ、土師器甕は口縁部の形状から8世紀後葉から9世紀初頭の時期と考えられる。また、出土土器の大部分を占める須恵器も器形的な特徴から同時期ものと考えられ、廃絶時期は9世紀以前と考えられる。



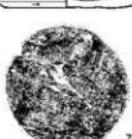
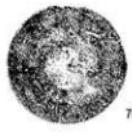
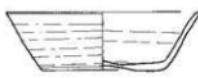
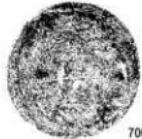
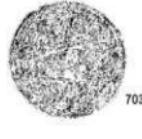
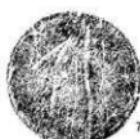
第165図 第118号住居跡実測図(1)



第166図 第118号住居跡実測図(2)

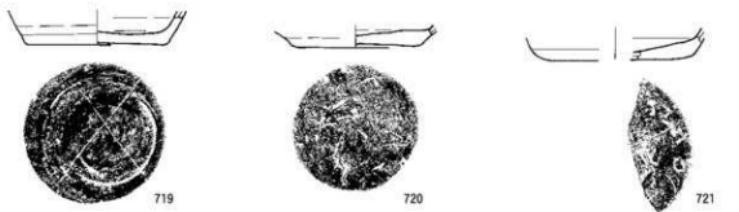
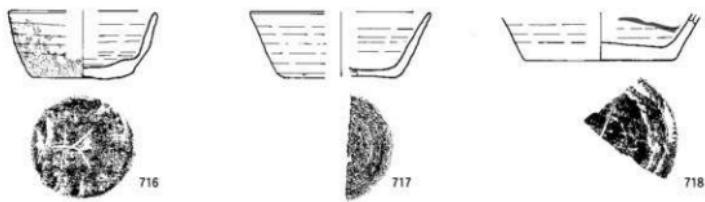
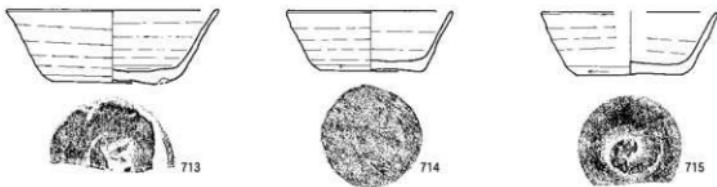
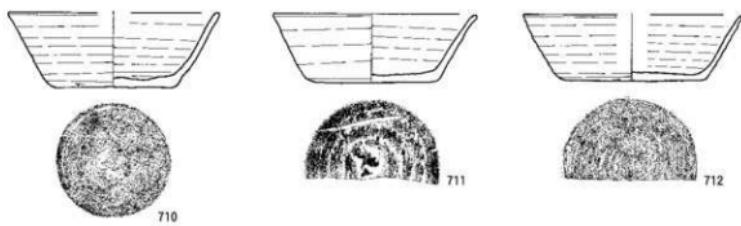


第167図 第118号住居跡実測図(3)

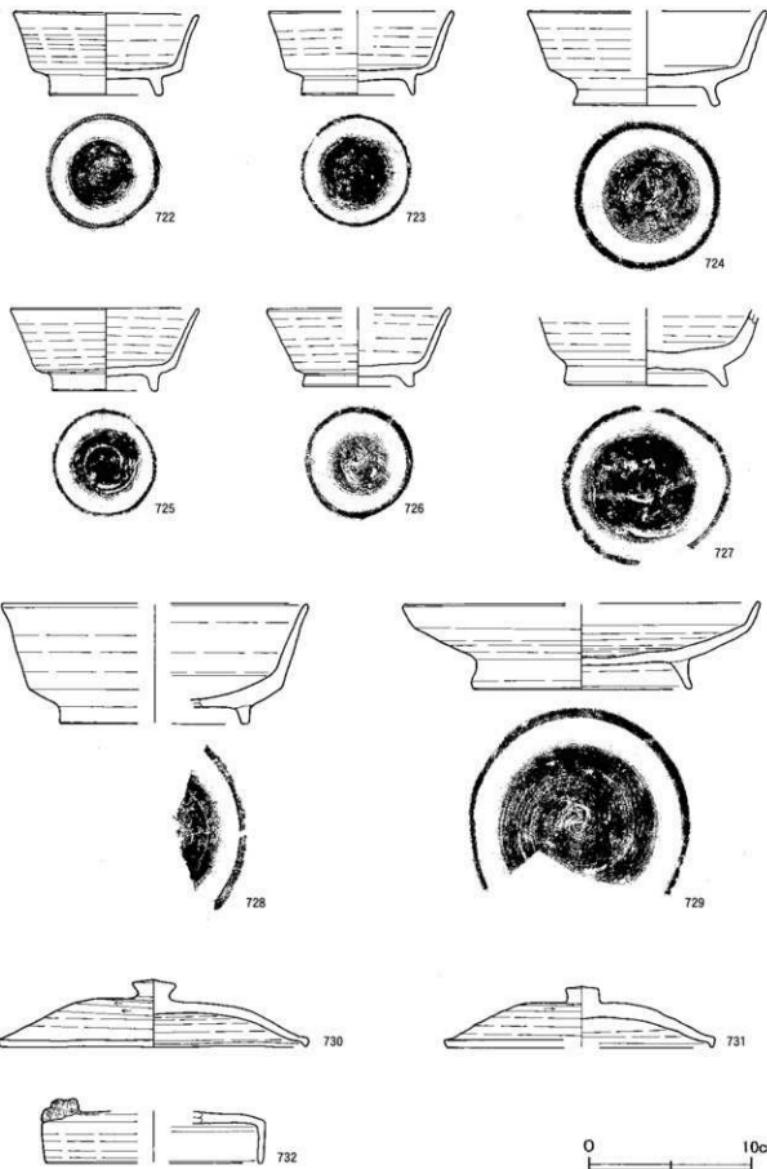


0 10cm

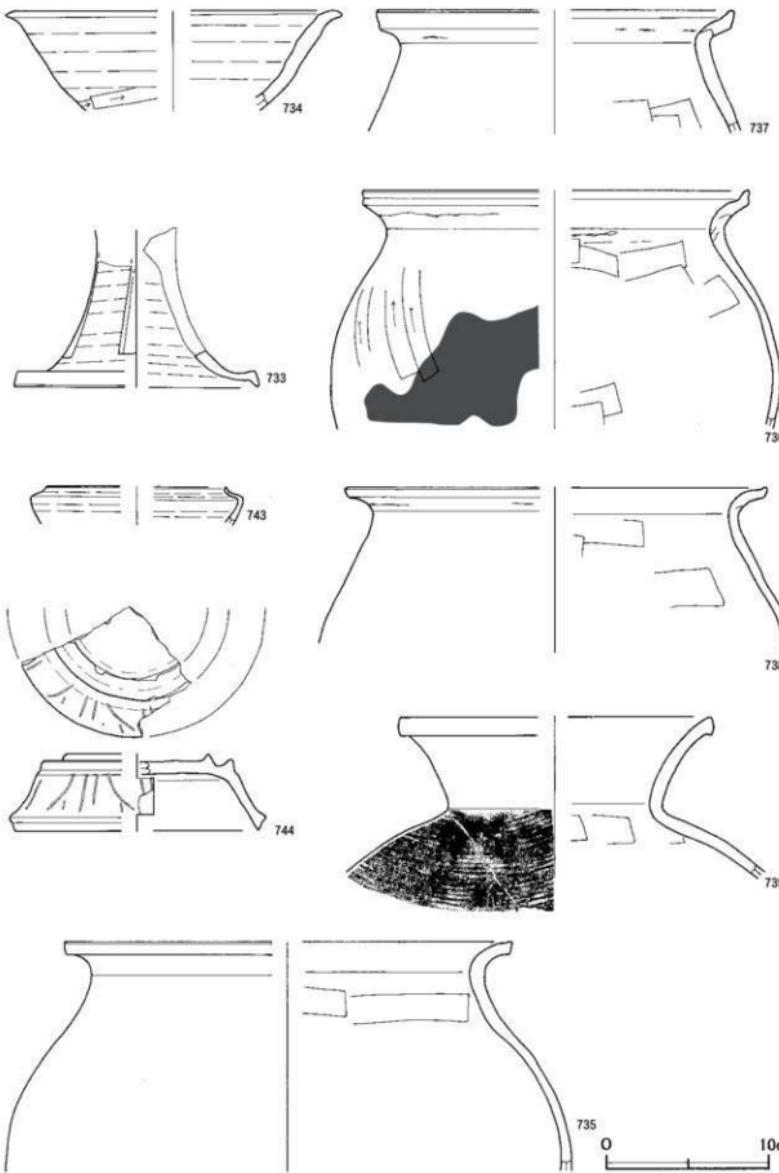
第168図 第118号住居跡出土遺物実測図(1)



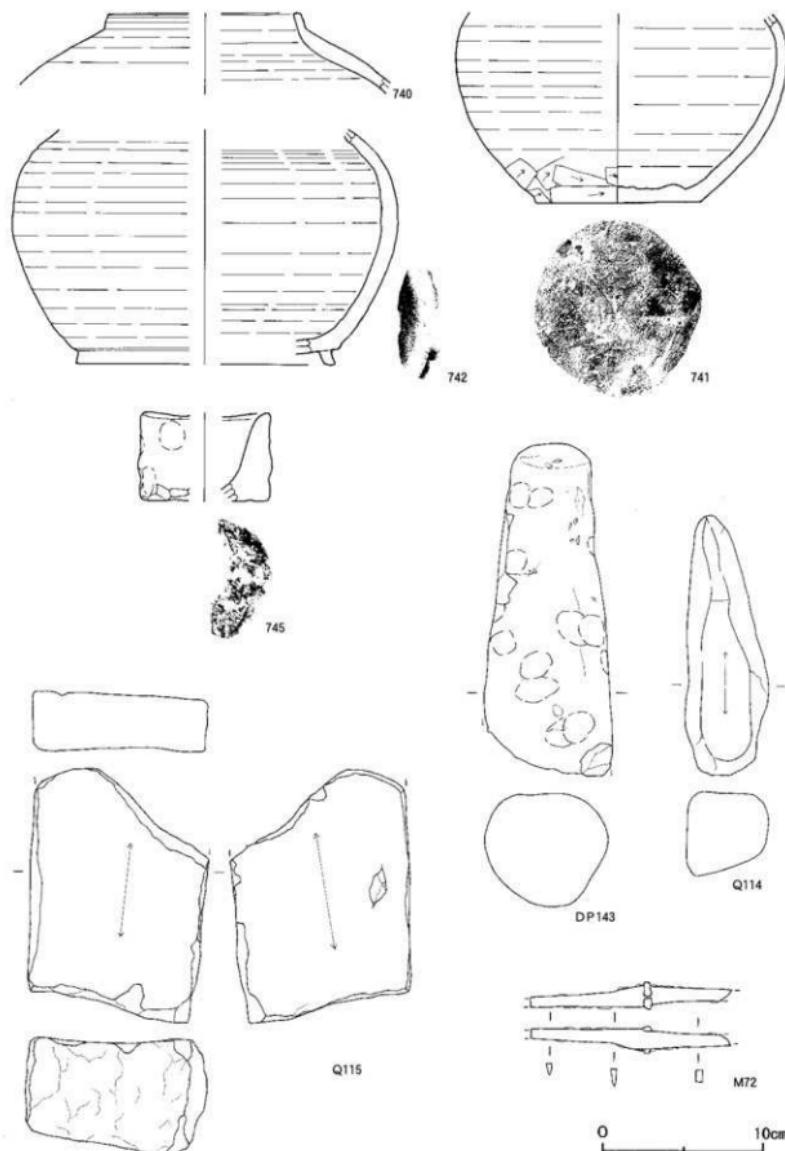
第169図 第118号住居跡出土遺物実測図(2)



第170図 第118号住居跡出土遺物実測図(3)



第171図 第118号住居跡出土遺物実測図(4)



第172図 第118号住居跡出土遺物実測図(5)

第118号住居跡出土遺物観察表(第168~172図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
688	亂毛器	坪	13.0	4.2	8.1	長石・石英・鉄状 鉱物	黄灰	良好	底面彫刻へア切り後一方向へア削り	擾上中耕	85% 貢着 ^一
699	亂毛器	坪	11.7	3.9	7.4	長石・石英・鉄状 鉱物	灰	良好	底面彫刻へア切り後一方向へア削り	擾上中耕	90% PL34
700	亂毛器	坪	11.6	4.2	6.4	長石・石英・鉄状 鉱物	褐灰	良好	底面彫刻へア切り後一方向へア削り	擾上中耕	80% PL34
701	亂毛器	坪	13.5	4.5	7.7	長石・石英・鉄状 鉱物	灰白	良好	底面彫刻へア切り後一方向へア削り	擾上中耕	80%
702	亂毛器	坪	[12.6]	4.5	8.4	長石・石英・鉄状 鉱物	灰白	良好	底面彫刻へア切り後多方向へア削り	擾上上耕	70%
703	亂毛器	坪	12.8	4.1	7.2	長石・石英	黄灰	良好	底面彫刻へア切り後多方向へア削り 体部外下面彫刻へア削り	擾上中耕	80% PL34
704	亂毛器	坪	[14.2]	5.0	8.6	長石・石英	灰	良好	底面彫刻へア切り後一方向へア削り	擾上中耕	70%
705	亂毛器	坪	13.7	5.2	7.8	長石・石英・鉄状 鉱物	黄褐	普通	底面彫刻へア切り後一方向へア削り	擾下下耕	70%
706	亂毛器	坪	13.4	4.6	8.0	長石・石英	黄灰	良好	底面彫刻へア切り後多方向へア削り	擾上中耕	70% 貢着 ^二
707	亂毛器	坪	11.9	3.6	7.4	長石・石英・鉄状 鉱物	褐灰	良好	底面彫刻へア切り後多方向へア削り	擾上中耕	70%
708	亂毛器	坪	[13.8]	4.9	7.5	長石・石英	黄灰	良好	底面彫刻へア切り後多方向へア削り 体部外下面彫刻へア削り	擾上中耕	60%
709	亂毛器	坪	[14.2]	4.2	7.2	長石・石英・鉄状 鉱物	灰	良好	底面彫刻へア切り後一方向へア削り	擾上中耕	55%
710	亂毛器	坪	[12.8]	4.7	7.2	長石・石英	灰黃	良好	底面彫刻へア切り後多方向へア削り	擾上上耕	55%
711	亂毛器	坪	12.6	4.3	8.3	長石・石英・鉄状 鉱物	灰	良好	底面彫刻へア切り後多方向へア削り	擾上上耕	50% 貢着 ^一
712	亂毛器	坪	[13.6]	4.1	8.4	長石・石英・鉄状 鉱物	灰	良好	底面彫刻へア切り後多方向へア削り 体部外下面彫刻へア削り	擾上下耕	50%
713	亂毛器	坪	13.0	4.6	7.4	長石・石英	黄灰	良好	底面彫刻へア切り後一方向へア削り	擾上中耕	50%
714	亂毛器	坪	10.1	3.8	6.2	長石・石英	灰黃	良好	底面彫刻へア切り後多方向へア削り	擾上中耕	80% PL34
715	亂毛器	坪	[10.8]	3.9	6.4	長石・石英・鉄状 鉱物	灰	良好	底面彫刻へア切り後多方向へア削り 体部外下面彫刻へア削り	擾上中耕	60%
716	亂毛器	坪	[9.0]	4.1	6.3	長石・石英	暗灰黃	良好	底面彫刻へア切り後一方向へア削り 外面凹凸による自然輪	擾上中耕	60% 貢着 ^大
717	亂毛器	坪	[11.0]	4.1	[6.6]	長石・石英	灰	良好	底面彫刻へア切り後一方向へア削り 体部外下面彫刻へア削り	擾上中耕	40%
718	亂毛器	坪	-	(2.9)	(9.2)	長石・石英	暗灰黃	良好	底面彫刻へア切り後一方向へア削り	擾下下耕	20% 貢着 ^一 内面彫刻付
719	亂毛器	坪	-	(2.1)	8.8	長石・石英	灰黃褐	良好	底面彫刻へア切り後多方向へア削り	擾上下耕	40% 同着 ^二
720	亂毛器	坪	-	(1.3)	8.1	長石・石英・鉄状 鉱物	灰	良好	底面彫刻へア切り後ナデ	擾上中耕	41% 貢着 ^山 カ ミ
721	亂毛器	坪	-	(2.0)	[9.6]	長石・石英	灰白	良好	底面彫刻へア切り後多方向へア削り	擾上中耕	20% 貢着 ^一
722	亂毛器	高台付坪	11.2	5.1	7.0	長石・石英・鉄状 鉱物	灰	良好	底面彫刻へア削り後高台面付け	擾上中耕	70% PL35
723	亂毛器	高台付坪	[11.2]	5.1	7.0	長石・石英・鉄状 鉱物	黄灰	良好	底面彫刻へア削り後高台面付け	擾上中耕	60% PL35
724	亂毛器	高台付坪	[14.6]	5.8	9.0	長石・石英・鉄状 鉱物	灰	良好	底面彫刻へア削り後高台面付け	擾上中耕	60% 貢着 ^一
725	亂毛器	高台付坪	11.4	5.1	6.4	長石・石英・鉄状 鉱物	灰白	良好	底面彫刻へア削り後高台面付け 体部外下面彫刻へア削り	擾上中耕	60% PL35
726	亂毛器	高台付坪	[11.2]	4.8	6.8	長石・石英・鉄状 鉱物	灰	良好	底面彫刻へア削り後高台面付け	擾上中耕	60% PL35
727	亂毛器	高台付坪	-	(4.7)	10.2	長石・石英・鉄状 鉱物	灰	良好	底面彫刻へア削り後高台面付け	擾上中耕	40% 貢着 ^一
728	亂毛器	高台付坪	[18.6]	7.3	[11.6]	長石・石英	褐灰	良好	底面彫刻へア削り後高台面付け	擾上中耕	40%
729	亂毛器	壺	[21.6]	5.3	13.4	長石・石英	灰	良好	底面彫刻へア削り後高台面付け	擾上中耕	50%
730	亂毛器	壺	18.7	4.2	-	長石・石英	褐灰	良好	天井部凹凸による自然輪	擾上中耕	60% PL35
731	亂毛器	壺	[16.2]	3.7	-	長石・石英・鉄状 鉱物	明褐色	良好	天井部凹凸による自然輪	擾上中耕	40%
732	亂毛器	壺	[13.2]	3.1	-	長石・石英	灰	良好	天井部凹凸による自然輪	擾上中耕	30%
733	亂毛器	高盤	-	(9.7)	[14.6]	長石・石英・鉄状 鉱物	灰	良好	脚部へア削りによる透孔L字形	擾上中耕	30%
734	亂毛器	鉢	[19.8]	6.1	-	長石・石英・鉄状 鉱物	赤灰	良好	体部外下面へア削り	擾上中耕	20%
735	土師器	壺	[27.2]	14.1	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	口沿部内・外面模ナデ 体部外下面ナデ 内面ヘナデ	擾上中耕	20%
736	土師器	壺	[23.6]	14.5	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	口沿部内・外面模ナデ 体部外下面ヘナデ 剥離ナデ 内面ヘナデ	擾上中耕	20% 外面彫刻付
737	土師器	壺	[21.6]	7.4	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	口沿部内・外面模ナデ 体部外下面ナデ 内面ヘナデ 編織痕	擾上中耕	20%
738	土師器	壺	[25.6]	10.1	-	長石・石英・雲母 赤色鉱物	灰白	良好	体部外下面ヘナデ	擾上中耕	15%
739	亂毛器	壺	[19.0]	9.8	-	長石・石英	二八・黄褐	普通	口沿部内・外面模ナデ 体部外下面ナデ 平打印記 内面ヘナデ	擾上中耕	20%
740	亂毛器	壺	[11.8]	5.0	-	長石・石英	黄灰	良好	底面彫刻へア削り後高台面付け	擾上中耕	20%
741	亂毛器	壺	-	(11.8)	10.4	長石・石英	黄灰	良好	底面彫刻へア削り後多方向へア削り 体部下端へア削り	擾上中耕	30%
742	亂毛器	壺	-	(14.5)	[15.8]	長石・石英	灰	良好	底面彫刻へア削り後高台面付け	擾上中耕	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	粘土	色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考
									横断面	縦断面		
743	須恵器	円筒壺	[11.0]	(2.3)	—	長石・石英	灰	普通	ロクロナダ		覆土中	10%
744	須恵器	円筒壺	[8.6]	4.7	[14.8]	長石・石英	オリーブ黒	良好	体部外面に刻み	自然釉	覆土下層	30% Pt.34
745	土師器	手捏土器	[7.8]	5.5	[8.0]	長石・石英・雲母 金銀粒子	にぬけ	普通	内・外表面ナラ	指捺痕	覆土上層	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	強	出土位置		備考	
									(20.7)	4.9~(7.7)	(1071.4) 土(長石・石英・雲母)	
BP143	支脚											覆土下層

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	強	出土位置		備考
									QH10	QH15	
QH10	砥石	16.1	5.2	5.3	653.4	砂岩	砥面1面				底面
QH15	砥石	(15.7)	11.3	7.2	(1306.7)	砂岩	砥面2面				覆土上層

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	強	出土位置		備考
									M62	刀子	
M62	刀子	(12.9)	1.7	0.3~0.4	(15.7)	鉄	刀身の一部 切先・茎尻欠損 鍍金具遺存				覆土下層 Pt.43

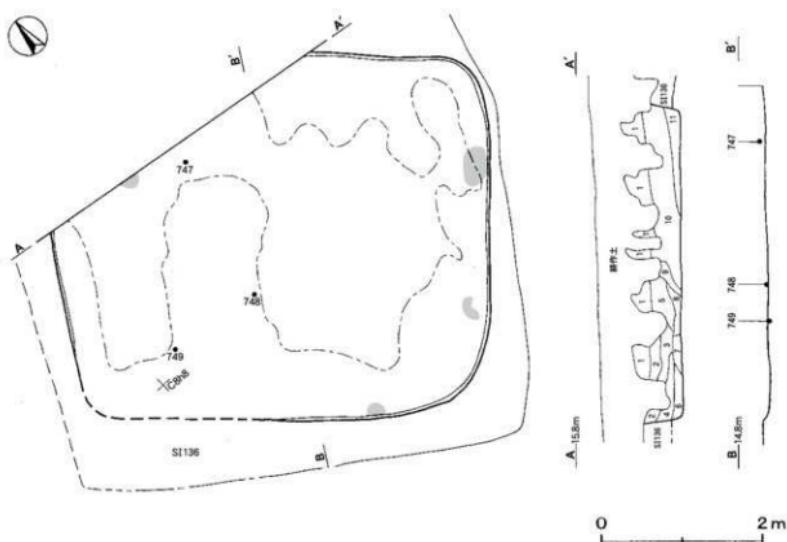
第120号住居跡（第173・174図）

位置 調査区西部のC 8 b8区で、標高15.3mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第136号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.39m、短軸4.45m長方形で、主軸方向はN-47°-Wである。壁高は10~51cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部の一部を除いて踏み固められている。



第173図 第120号住居跡実測図

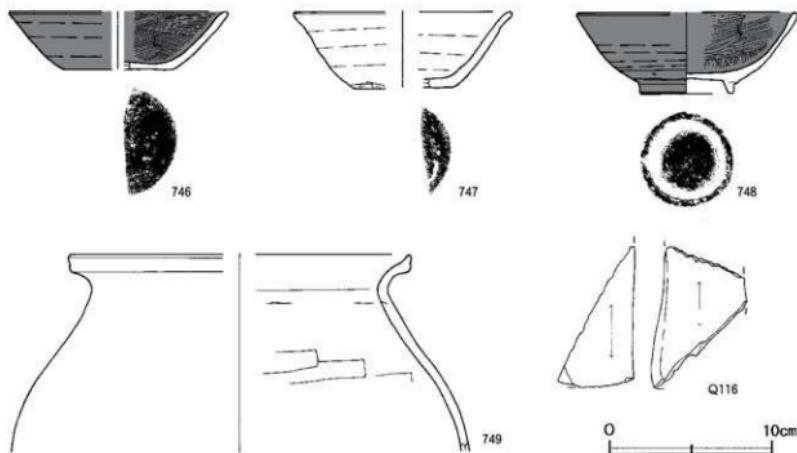
覆土 11層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量
3 暗褐色	砂質粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 暗褐色	砂質粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 黑褐色	ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量	10 黑褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
5 黑褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	11 黑褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
6 暗褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 士師器片281点(坏62、高台付坏1、高坏2、甕216点)、須恵器片28点(坏16、蓋1、甕11)、石器1点(砥石)、礫8点の他に、流れ込んだ弥生土器片54点も出土している。748は中央部の床面から出土している。北側と東側の壁際に焼土が検出され焼失住居の可能性があるが明確ではない。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第174図 第120号住居跡出土遺物実測図

第120号住居跡出土遺物観察表(第174図)

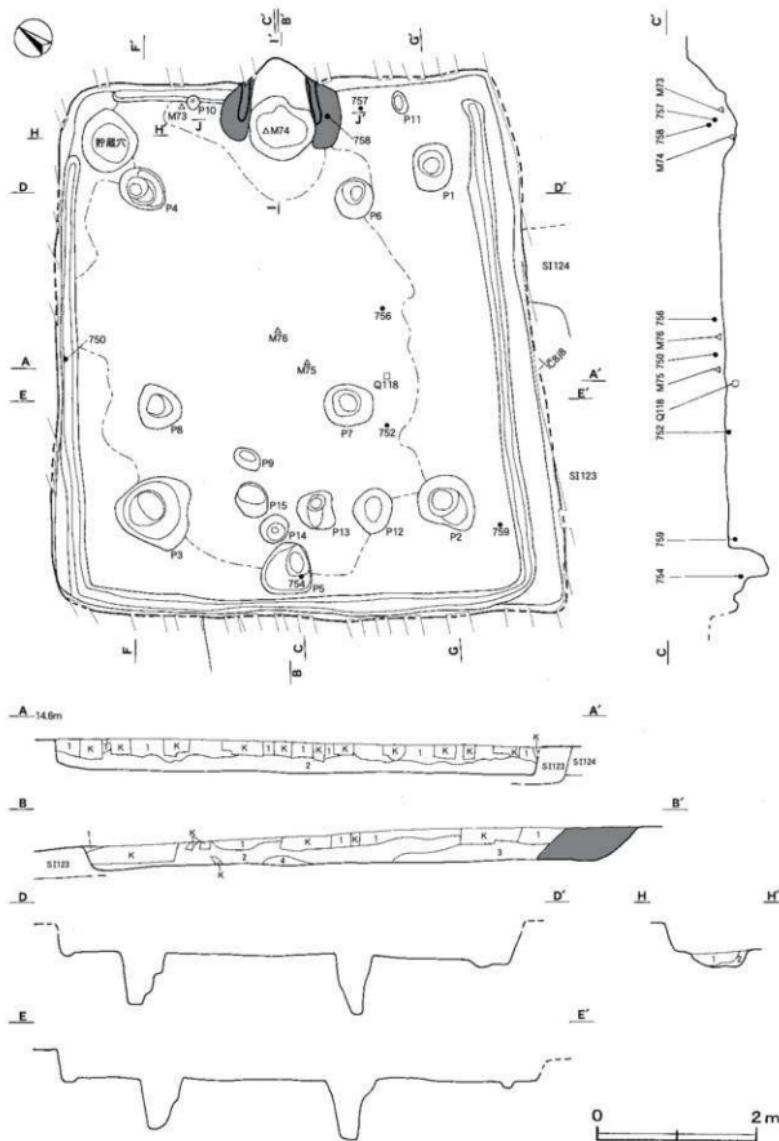
番号	種別	器種	口径	器高	底径	施土	色調	地成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
746	土師器	环	[13.2]	3.5	[6.8]	長石-石英-雲母 に二つ割れ	普通	底部削除ヘラ削り 瓶底削りヘラ削り 内面ヘラ削き	覆土中	40%	
747	須恵器	环	[13.2]	4.6	[6.0]	長石-石英-雲母 に外輪部	灰	底部削除ヘラ削り 侈部下端手引シラフ削り	覆土下層	30% 須恵器口	
748	土師器	高台付环	[13.5]	4.9	5.6	長石-石英-赤色 粒子	こぶし 黄褐色	普通 底部削除ヘラ削り後高台付 瓶底削除ヘラ削り 内面ヘラ削き	床面	50%	
749	土師器	甕	[26.6]	[12.1]	—	長石-石英-雲母 に凹-縦	普通	口沿部分・外周横ナギ 体窓外番ナギ 内面ヘラナギ 緩傾斜	床面	20%	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q116	砥石	(8.6)	(5.8)	(4.7)	(10.5)	磁灰岩	鏡面2面	覆土中	

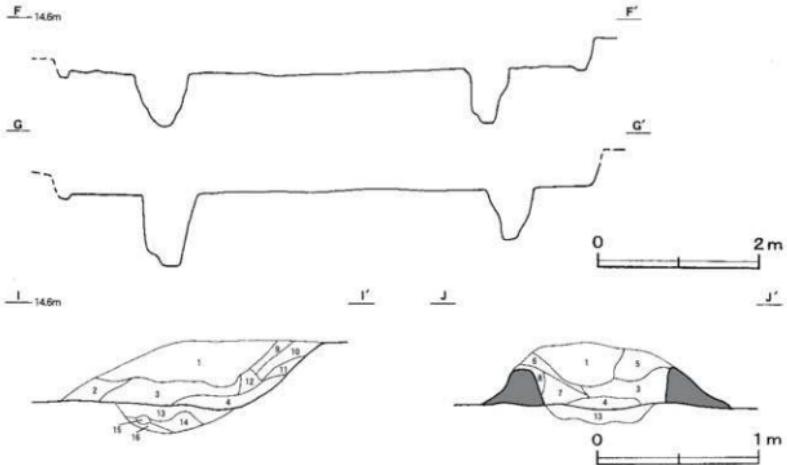
第121号住居跡(第175~178図)

位置 調査区西部のC 8 i7区で、標高14.3mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第123・124号住居跡を掘り込んでいる。



第175図 第121号住居跡実測図(1)



第176図 第121号住居跡実測図(2)

規模と形状 長軸6.74m、短軸5.90mほどの長方形で、主軸方向はN-49°-Eである。壁高は30~41cmで、外傾して立ち上がっている。また、拡張以前の柱穴が検出され、南東側と南西側の二辺が拡張されている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、壁溝はほぼ周回している。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで126cmである。袖部幅は153cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめた後、竈層第13~16層を充填して使用していたと考えられるが、赤変や硬化部分は検出されなかった。煙道部は、壁外へ28cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。

遺土層解説

1 黒褐色 砂質粘土ブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量	10 黒褐色 炭化物中量、焼土ブロック少量
2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	11 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
3 黒灰色 焼土ブロック・炭化粒子少量、砂質粘土粒子微量	12 灰褐色 焙土粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
4 にじ黒褐色 焼土粒子中量、炭化粒子微量	13 にじ黒褐色 砂質粘土ブロック多量、ロームブロック・焼土ブロ
5 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	ク・炭化粒子微量
6 黑褐色 焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	14 喧褐色 ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量、燒土粒子微量
7 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化物・砂質粘土ブロック少量	15 黄褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量
8 暗赤褐色 砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	16 黑褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量

ピット 15か所。P 1~P 4は深さ63~88cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ46cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、P 6~P 8は64~75cmで、配置から拡張以前の主柱穴と考えられる。P 9は深さ32cmで、配置から拡張以前の出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 10~P 11は深さ42~49cmで、竈を挟むように北東壁際に位置していることから、竈の付属施設の柱穴と考えられる。P 12~P 15は性格は不明である。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 后土ブロック・炭化物・ローム粒子微量	4 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
2 黑褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	
3 極暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子少量、炭化物微量	

貯藏穴 北コーナー部に位置し、長径80cm、短径69cmほどの楕円形で、深さは18cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

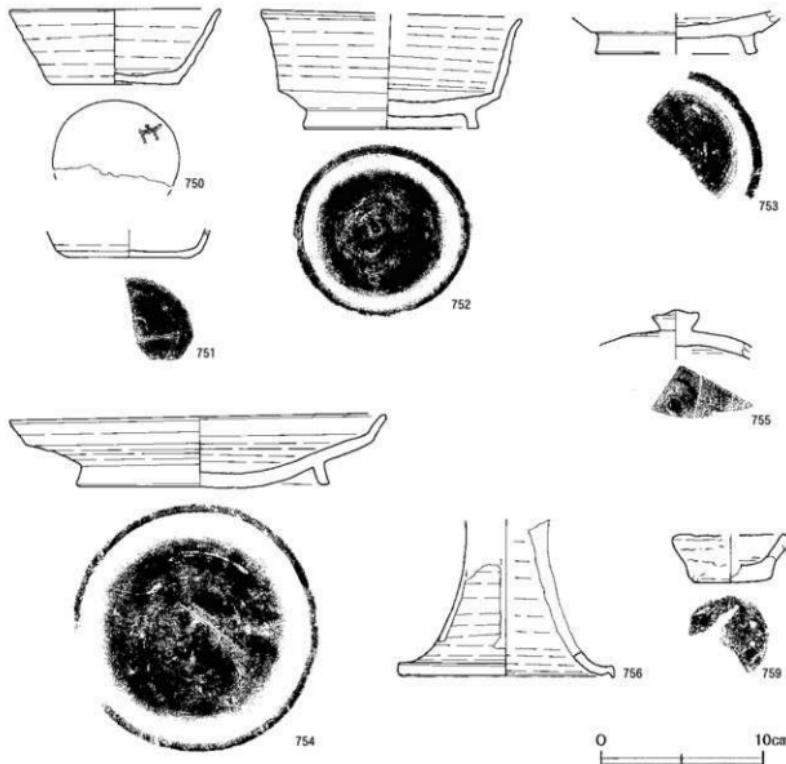
貯藏穴土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック少量

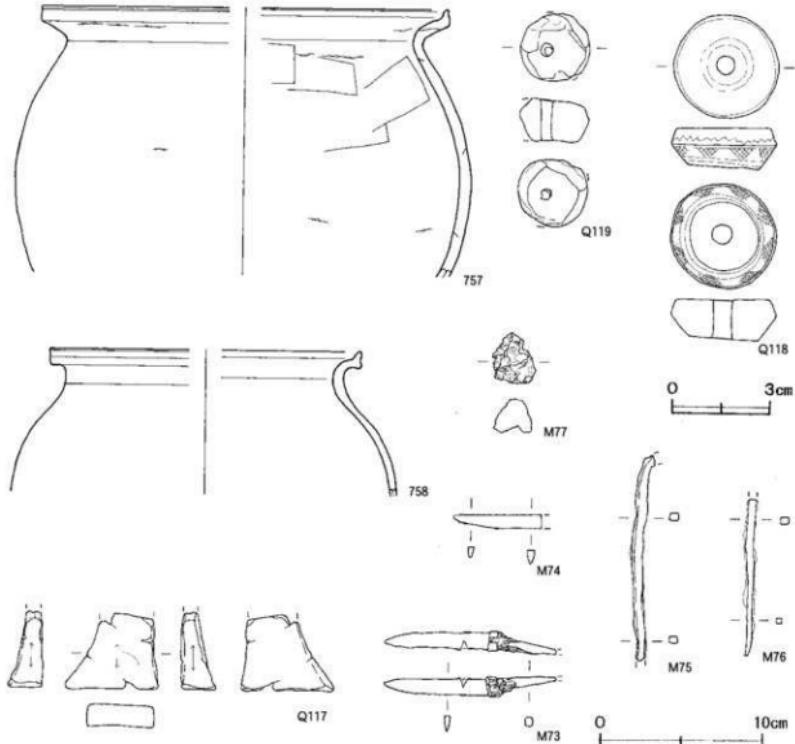
2 黒 色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片1181点(环119, 高坏3, 壺1059), 須恵器片118点(环89, 高台付坏4, 盘15, 高盤1, 蓋9), 土製品4点(紡錘車1, 支脚3), 石器1点(砥石), 石製品2点(紡錘車), 鉄製品4点(刀子2, 钉2), 鉄滓1点, 手捏土器1点, 瓦21点の他に, 流れ込んだ縄文土器片1点, 弥生土器片125点, 耕作により混入した陶器片1点も出土している。752は中央部の床面, 754はP5内からそれぞれ出土している。M73は北東壁際の床面から, M74は竈の火床面からの出土である。Q118は第123号住居跡の調査の際に本跡の掘り方から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀後半と考えられる。



第177図 第121号住居跡出土遺物実測図(1)



第178図 第121号住居跡出土遺物実測図(2)

第121号住居跡出土遺物観察表(第177・178図)

番号	種類	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
750	施恩器	环	—	12.8	4.7	7.8	長石・石英・斜長石 鉱物	灰黄褐	普通	底面彫刻へテ切削後多方向へ分削	海土下層 P1.35	30% 施恩環上部
751	施恩器	环	—	(1.8)	7.6	長石・石英	灰黄	良好	底面彫刻へテ切削	覆土中 P1.35	10% 施恩環上部	
752	施恩器	高台付环	15.9	6.8	10.5	長石・石英・斜長石 鉱物	灰	良好	底面彫刻へテ削り後高台貼付	床面 P1.35	70% 高台付环	
753	施恩器	高台付环	—	(2.5)	[9.6]	長石・石英	灰黄	普通	底面彫刻へテ切削高台貼付付け	高台面に削り	30% 高台付环	
754	施恩器	盤	23.0	4.6	15.3	長石・石英	灰黄褐	良好	底面彫刻へテ切削高台貼付付け	P1.35	40% 施恩環上部	
755	施恩器	盤	—	(3.0)	—	長石・石英	灰黄	良好	天井部粘付のへテ削り	覆土中 P1.35	5% 施恩環上部	
756	施恩器	高盤	—	(9.6)	13.2	長石・石英・斜長石 鉱物	灰	良好	脚部へテ切削による透かし4.5cm	覆土下層	30%	
757	土製器	甕	[25.0]	(16.3)	—	長石・石英・雲母	二段・褐色	普通	口沿部内・外面模様化	体部外面ナデ	10%	
758	土製器	甕	[19.2]	(8.8)	—	長石・石英・雲母 内に白粉	普通	口沿部内・外面模様化	体部内・外面ナデ	覆土下層	10%	
759	土製器	手程土器	(6.6)	2.9	4.4	長石・石英・雲母 白色粒子	灰黄褐	普通	内・外面ナデ	輪縁部	50% P1.36	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q117	砾石	(4.7)	5.8	1.4	(32.6)	褐色岩	表面3面	表面	觸り方

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q118	粘土窯	3.2	0.5	1.8	22.0	陶石	両面及び側面に複数有り、両方向の穿孔。	掘り方	PL.00
Q119	粘土窯	4.0	0.6~0.8	2.7	53.7	粘土岩	自然面を利用して加工、両方向の穿孔。	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M73	刀子	(10.0)	(1.0)	0.4~0.5	(7.0)	鉄	表瓦欠損 稲谷具遺存、茎の一部に木質遺存	床面	PL.43
M74	刀子	(5.0)	0.9	0.4~0.5	(3.0)	鉄	刀身の一部	室内	
M75	釘	(12.0)	0.8	0.5	(13.0)	鉄	断面上方部の棒状、角釘	覆土下層	
M76	釘	(9.0)	0.5	0.4	(9.0)	鉄	断面上方部の棒状、角釘	覆土下層	
M77	鉄錆	3.1	2.6	2.0	17.8	鉄	表面赤褐色、凹凸有り	覆土中	

表5 奈良時代・平安時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) 〔長軸×短軸〕	壁高 (cm)	床面 〔壁高+柱間(ビット)〕	内部施設		土	主な出土遺物	時期	新旧関係 (旧→新)	
							壁	天井					
74	D10f2	N-120°-E	〔方形〕	(3.10 × 2.50)	4	平坦	—	—	—	自然	土師器	9世紀代	
76	D10e6	N-0°	〔方形〕	3.24 × 3.08	11~30	平坦	—	—	—	自然	土師器、須恵器	9世紀中葉	
78	D9e6	N-37°-W	長方形	4.90 × 3.45	10~24	平坦	—	—	—	自然	土師器、土師質土器、鉄製品、石器、繩	10世紀後半	
104	D9d3	N-157°-W	長方形	4.00 × 3.30	18~42	平坦	—	—	—	人為	土師器	10世紀前半 SI101→本跡 →SK73	
107	D8d0	N-71°-E	〔方形〕	2.55 × 2.50	12	平坦	—	—	—	自然	土師器、土師質土器	10世紀後半 SI109→10~ 本跡→P66	
109	D8a6	N-46°-E	長方形	3.72 × 3.22	9~14	平坦	—	—	—	人為	土師器、須恵器、灰釉陶器、石器、鐵製品、土製品	9世紀後半 SI107→P66	
110	D8a6	N-8°-W	方形	4.70 × 4.61	45~65	平坦 全高	8	1	2	自然	土師器、須恵器、土製品、石器、鐵製品	8世紀後半 SI112→本跡 →SI107-109	
111	C9f2	N-49°-E	方形	7.08 × 6.88	18~65	平坦 全高	10	1	13	人為	土師器、須恵器、鉄製品、繩	8世紀後半 SI112→本跡	
118	C8i9	N-38°-W	方形	5.40 × 5.18	35~60	平坦	—	4	—	4	人為	土師器、須恵器、手挽土器、石器、鐵製品、石器、繩	9世紀以前 SI116-119→ 本跡
120	C8b6	N-47°-W	長方形	5.39 × 4.45	10~51	平坦	—	—	—	自然	土師器、須恵器、石器、繩	9世紀中葉 SI136→本跡	
121	C8i7	N-49°-E	長方形	6.74 × 5.90	30~41	平坦 全高	7	2	6	1	自然	土師器、須恵器、手挽土器、石器、石製品、鐵製品、石器、繩	8世紀後半 SI123-124→ 本跡

(2) 挖立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第179図)

位置 調査区西部のD 9 C2区で、標高14.4mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

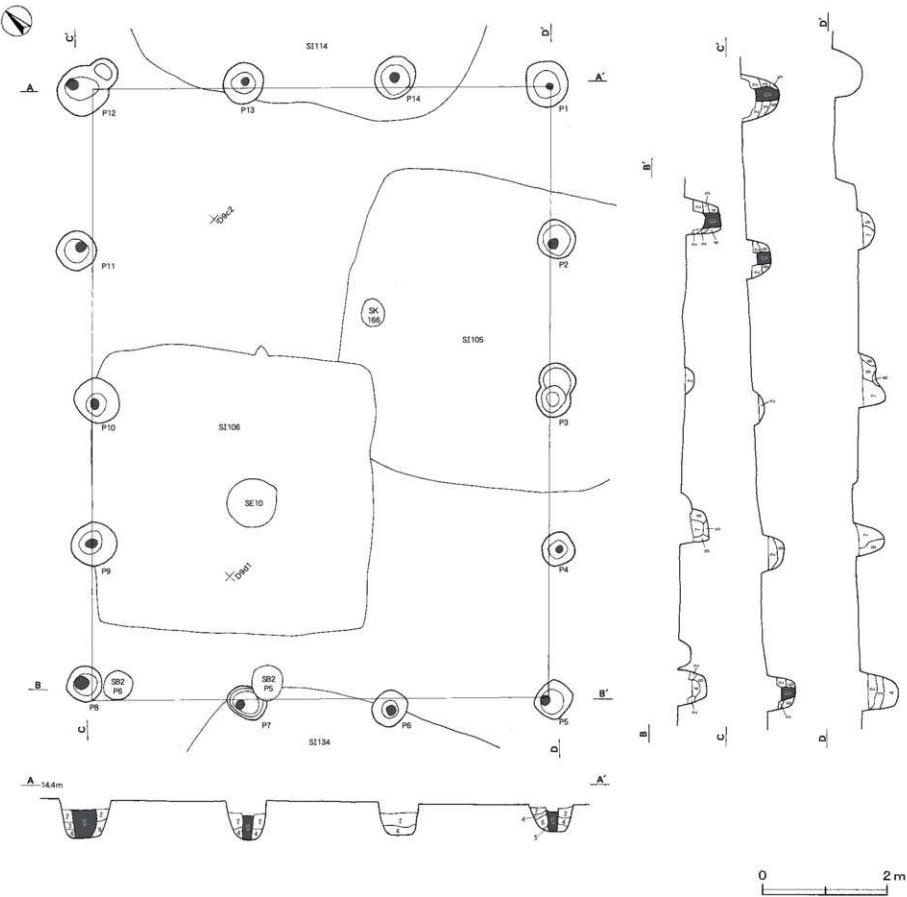
重複関係 第105・106・114・134号住居跡を掘り込み、第2号掘立柱建物、第10号井戸、第166号土坑、第6号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行4間、梁行3間の側柱建物跡で、桁行方向N-48°-Eの東西棟である。規模は、桁行9.68m(32尺)、梁行7.26m(24尺)で、柱間寸法は桁行・梁行ともに2.42m(8尺)である。なお、桁行・梁行ともに柱筋の通りが悪い。

柱穴 14か所。平面形は円形を基調とし、深さは48~64cmである。土層の第1層が柱痕跡に相当し、縦まりの弱い黒褐色土である。第2~7層は掘り方の埋土で、ローム土を主体とした褐色系の土であるが、強く突き固めた痕跡は認められない。その他の層は柱抜き取り後の覆土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 |
| 5 白色 | ロームブロック少量 | | |



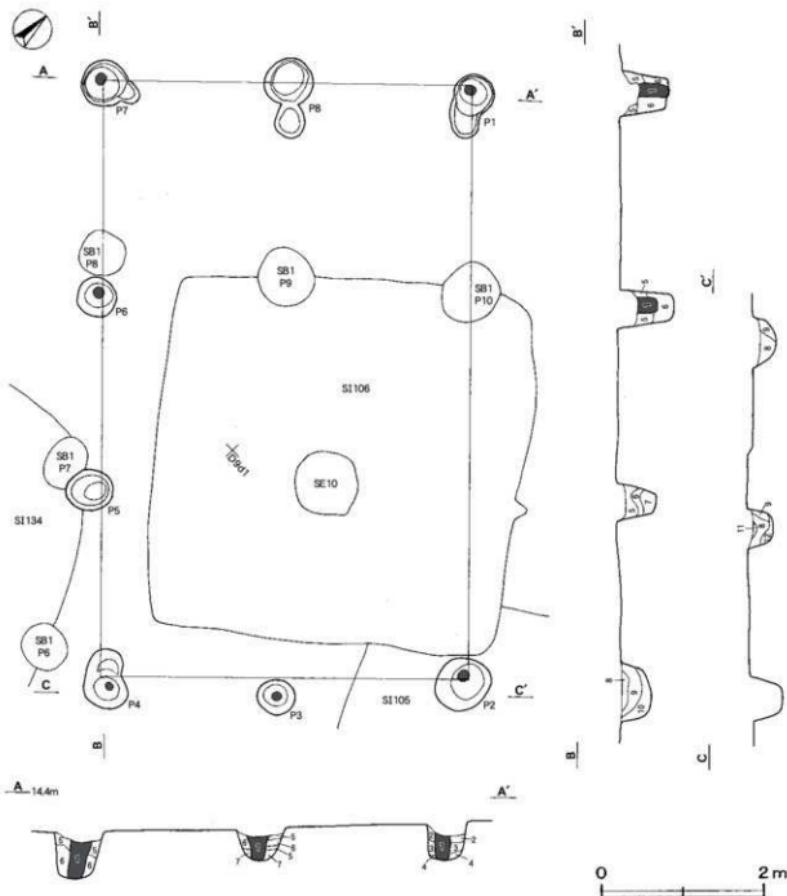
第179図 第1号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況 弥生土器片32点、土師器片53点、須恵器片5点が出土しているが、いずれも細片のため図示することはできない。

所見 第2号掘立柱建物跡に掘り込まれているが、時期判断できる遺物が出土していないため明確ではないが、8～9世紀代と想定される。

第180図 第2号掘立柱建物跡（第180図）

位置 調査区西部のD 8 c0区で、標高14.1mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。



第180図 第2号掘立柱建物跡実測図

重複関係 第105・106・134号住居跡、第1号掘立柱建物跡を掘り込み、第10号井戸、第6号ビット群に掘り込まれている。

規模と構造 柱行3間、梁行2間の側柱建物跡で、柱行方向N-46°-Wの南北棟である。規模は、柱行7.26m(24尺)、梁行4.54m(15尺)で、柱間寸法は、柱行2.42m(8尺)、梁行2.27m(7.5尺)である。南妻筋の通りが悪いが、その他はほぼ柱筋が通っている。

柱穴 8か所。平面形は円形を基調とし、深さは36~71cmである。土層は第1層が柱痕跡に相当し、締まりの弱い黒褐色土である。第2~7層は掘り方の理土で、ローム土を主体とした褐色系の土であるが、強く突き固めた痕跡は認められない。その他の層は柱抜き取り後の覆土である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量	7 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック少量	8 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色 ロームブロック少量	9 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
4 にじ褐色 ロームブロック少量	10 黒褐色 ロームブロック微量
5 褐色 ロームブロック少量	11 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量
6 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量	12 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

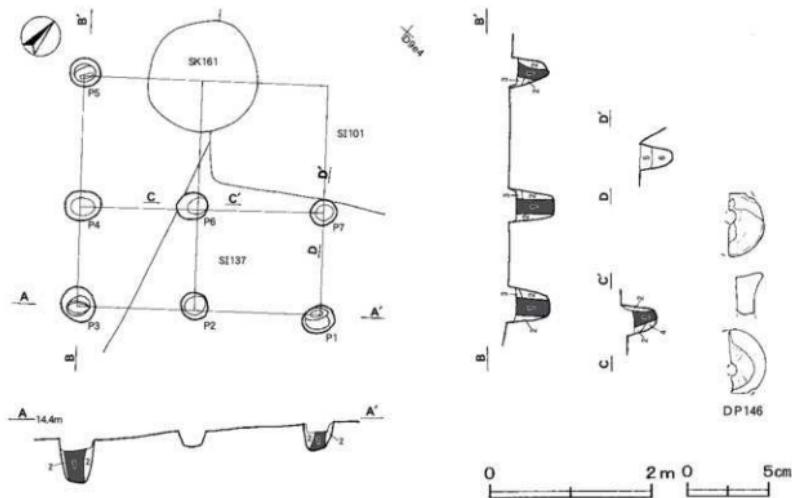
遺物出土状況 弥生土器片2点、土師器片5点、須恵器片1点が出土しているが、いずれも細片のため図示することはできない。

所見 第1号掘立柱建物跡を掘り込んでいるが、時期判断できる遺物が出土していないため明確ではないが、8~9世紀代と想定される。

第3号掘立柱建物跡（第181図）

位置 調査区西部のD 9-e3区で、標高14.4mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第101・137号住居跡を掘り込み、第161号土坑に掘り込まれている。



第181図 第3号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

規模と構造 確認できた桁行・梁行は2間の総柱建物である。桁行方向N-48°-Eの東西棟である。規模は桁行3.02m(10尺), 梁行2.87m(9.5尺)で, 柱間寸法は桁行1.51m(5尺), 梁行は南間1.21m(4尺), 北間1.51m(5尺)であり, 南の柱間が狭い。おおむね桁行・梁行ともに柱筋が通っている。

柱穴 7か所。平面形は円形を基調とし, 深さは21~59cmである。土層は第1層が柱痕跡に相当し, 締まりの弱い黒褐色土である。第2~4層は掘り方の埋土で, ローム土を主体とした褐色系の土であるが, 強く突き固めた痕跡は認められない。その他の層は, 柱抜き取り後の覆土である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック微量
2 暗褐色	ロームブロック少量	5 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
3 極暗褐色	ロームブロック微量	6 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片2点, 須恵器片1点, 土製品1点(紡錘車)が出土している。DP146はP6の埋土中から出土している。その他の土器片は細片のため図示することはできない。

所見 他の掘立柱建物跡とは異なる小形の総柱建物跡であるが, 時期判断できる遺物が出土していないため明確ではないが, 第1・2号掘立柱建物跡と時期差がない8~9世紀代と想定される。

第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第181図)

番号	形態	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP146	紡錘車	[4.4]	[0.8]	(2.5)	(14.9)	土(長芯・右突・雲母)	丁寧なナデ	P6埋土中	

表6 掘立柱建物跡一覧表

番号	位位置	桁行方向	柱間数 軸×奥行き(m)	規格 幅×奥行き(m)	面積 (m ²)	桁行寸法 (m)	梁行寸法 (m)	柱穴(cm)			主な出土遺物	備考 (新井跡跡明瞭なし)	
								構造	穴数	平面形	深さ		
1	D9e2	N-48°-E	4×3	9.68×7.36	70.27	2.42	2.42	側柱	14	円形	80~60	須生土器, 土師器, 瓦	SI05-090-114-031→本跡→SI05-090-030-066-056
2	D8e0	N-46°-W	3×2	7.26×4.54	32.96	2.42	2.27	側柱	8	円形	36~71	須生土器, 土師器, 瓦	SI05-090-131-031→本跡→SI05-090-066
3	D9e3	N-48°-E	(2×2)	(3.02×2.87)	(8.66)	1.51	1.21(南) 1.31(北)	総柱	7	円形	31~39	土師器, 須生器, 土製品	SI01-037→本跡→SI00

5 近世の遺構と遺物

今回の調査では, 中位段丘上から近世の墓坑2基の他に井戸跡4基が確認された。以下, 遺構と遺物について記載する。

なお, 墓坑については既に報告されている『茨城県教育財團文化財調査報告書第216集 大戸下郷遺跡』(以下,『大戸下郷遺跡1』と略す)の判断基準に従い「底面や壁面に粘土が貼られているもの, 土層中に粘土を多く含んでいるもの」を墓坑と判断した。

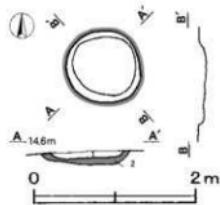
(1) 墓坑

第21号墓坑 (第182図)

位置 調査区西部のD 9f4区で, 標高14.5mほどの中位段丘上の南北緩斜面部に位置している。

重複関係 第99・137号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.96m, 短径0.90mの円形で, 深さは8cmである。壁は外傾して立ち上がっており, 底面は平坦で, 粘土が貼り付けられている。



第182図 第21号墓坑実測図

覆土 単一層であるため、堆積状況は不明である。第2層は貼り付けられた粘土層である。

土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子微量 硫化物微量
- 2 にふく黄色 粘土ブロック多量、ローム粒子微量

所見 底面に粘土が貼り付けられていることから墓坑の可能性がある。時期は、遺物が出土していないため明確ではないが、『大戸下郷遺跡1』で報告されている墓坑と特徴が似ていることから近世以降と考えられる。

第22号墓坑（第183図）

位置 調査区西部のD 8 a7区で、標高14.0mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第122号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.10m、短径1.09mの円形で、深さは35cmである。壁は外傾して立ち上がっており、底面は中央部が緩やかにくぼみ粘土が貼り付けられている。

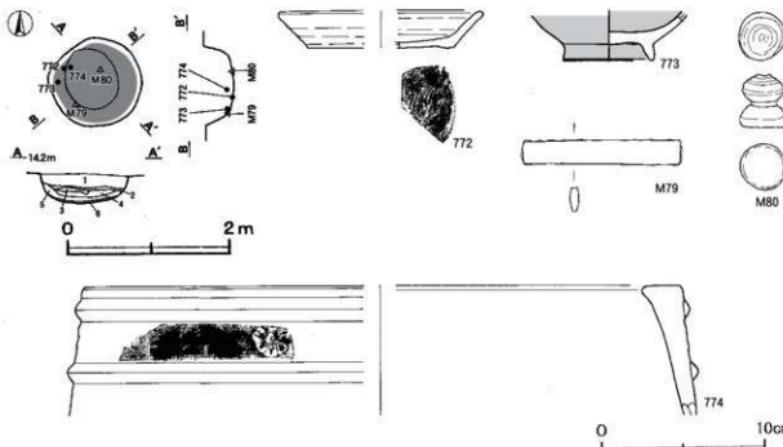
覆土 6層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。第6層は底面に貼り付けられた粘土層である。

土層解説

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・桃土粒子・炭化粒子微量 | 4 喙褐色 炭化物・ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量 | 5 黒褐色 ロームブロック・桃土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 にふく褐色 焼土ブロック中量、炭化物・ローム粒子少量 | 6 灰褐色 粘土多量、砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 陶器片1点（丸碗）、土師質土器片2点（小皿）、瓦質土器片7点（火舎）、銅製品2点（小柄、分銅）、

骨片2点（部位不明）、礫66点の他に、混入した土師器片5点、須恵器片2点も出土している。772・774、M



第183図 第22号墓坑・出土遺物実測図

80はやや北寄り、773はやや西寄り、M79は南寄りからそれぞれ出土しており、いずれも底面に密着した状態で出土している。骨片も同様でやや南寄りの位置から出土しているが、細片のため図示することはできない。骨粉も中央部から検出されている。

所見 底面に粘土が貼られており、また骨片や骨粉が検出されたことから墓坑と判断した。時期は、出土陶器が17世紀後半に位置づけられることから、それ以降と考えられる。

第22号墓坑出土遺物観察表(第183図)

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
772	土師質土器	小皿	[12.4]	2.3	[8.8]	黄褐色 赤色斑点	普通	底面素焼き切り 内・外面ナデ	覆土中	13%
774	瓦質土器	火鉢	[36.8]	0.0	-	長石・石英質	悪灰	普通 2条の縁垂 瓦唐間に花文彫り	底面	10%
773	陶器	瓶	-	0.1	5.5	砂粒	淡黄	良好 器付以外全面に透明釉 硬い質入	底面	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M29	小柄	9.6	1.6	0.5	24.4	銅	調整不明	底面	

番号	器種	高さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M80	分隔	3.3	3.0	2.9	96.6	銅	上面に3条の波線	底面	PL43

表7 墓坑一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	概面	底面	覆土	出土遺物	備考
21	D9f4	N-0°	円形	0.96×0.90	8	外傾	平坦	人為	-	SII9-L27→本跡
22	D8a7	N-0°	円形	1.10×1.09	35	外傾	平坦	人為	陶器、土師質土器、瓦質土器、小柄 分隔	SI122→本跡

(2) 井戸跡

第7号井戸跡(第184図)

位置 調査区西部のD 9 f 5区で、標高14.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第99号住居跡を掘り込んでいる。

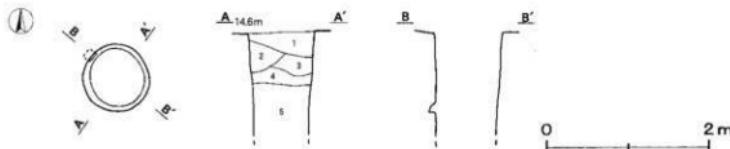
規模と形状 長径0.83m、短径0.80mの円形の素掘り井戸で、確認された深さは125cmであるが底面までは調査できなかった。壁は直立しており、壁面に足場穴が1か所確認された。

覆土 5層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 細纖維少量。ロームブロック微量
- 2 暗褐色 細纖維少量。ローム粒子微量
- 3 黑褐色 ロームブロック微量。細纖維微量

- 4 黒褐色 ロームブロック・細纖維微量
- 5 暗褐色 細纖維中量。ロームブロック・砂粒少量



第184図 第7号井戸跡実測図

所見 遺物が出土していないため、時期は不明であるが、規模や形状がほぼ同じである第10号井戸跡が近世であることから、同時期と考えられる。

第8号井戸跡（第185図）

位置 調査区西部のD 9 a2区で、標高14.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

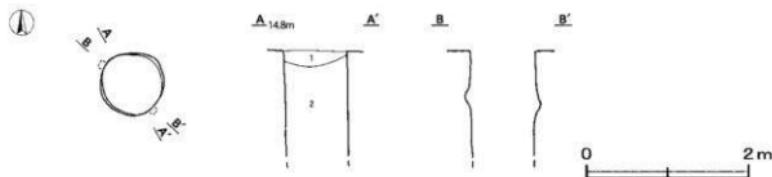
規模と形状 長径0.80m、短径0.78mの円形の素掘り井戸で、確認された深さは126cmであるが底面までは調査できなかった。壁は直立しており、足場穴が2か所確認された。

覆土 2層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック・細繊維土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック・粘土ブロック・小繊維少量、炭化粒子微量

所見 遺物が出土していないため、時期及び性格は不明であるが、規模や形状がほぼ同じである第10号井戸跡が近世であることから、同時期と考えられる。



第185図 第8号井戸跡実測図

第9号井戸跡（第186図）

位置 調査区西部のD 8 c7区で、標高13.7mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第127号住居跡を掘り込んでいる。

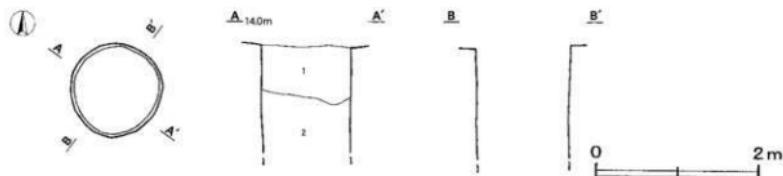
規模と形状 長径1.14m、短径1.10mの円形の素掘り井戸で、確認された深さは135cmほどであるが底面までは調査できなかった。壁は直立して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。ロームブロックや粘土ブロックを含む人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物・細繊維量
2 暗褐色 砂粒多量、細繊維中量、ロームブロック少量、粘土ブロック微量

所見 遺物が出土していないため、時期及び性格は不明であるが、形状がほぼ同じである第10号井戸跡が近世であることから、同時期と考えられる。



第186図 第9号井戸跡実測図

第10号井戸跡（第187・188図）

位置 調査区西部のD 9 c1区で、標高14.1mほどの中位段丘上の南西斜面部に位置している。

重複関係 第106号住居跡、第1・2号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.80m、短径0.78mの円形の素掘り井戸で、確認された深さは190cmほどであるが底面まで調査できなかった。壁は直立しており、足場穴が2か所確認された。

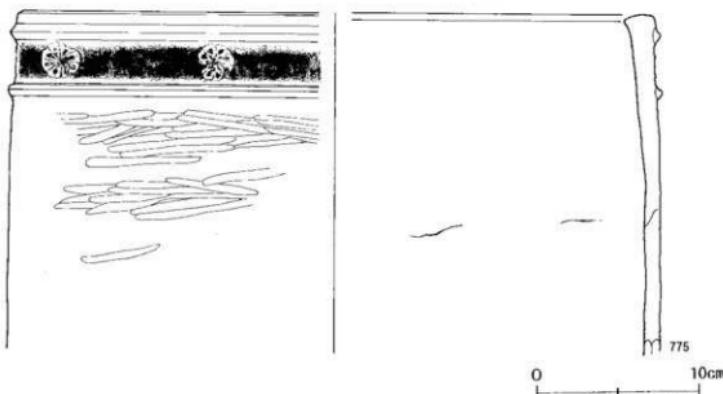
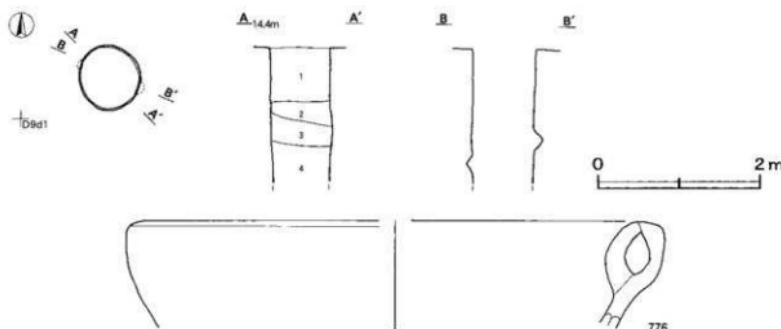
覆土 4層に分層される。ロームブロックや粘土ブロックを含む人為堆積と考えられる。

土層解説

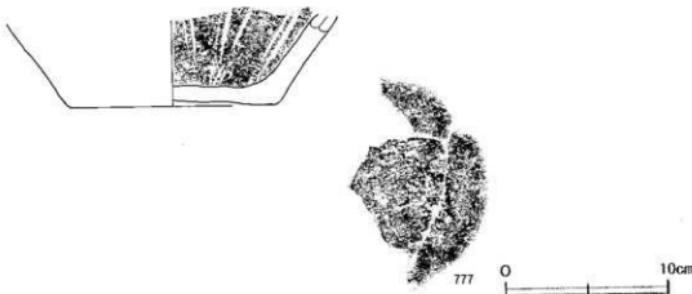
1 黒 極 色	ロームブロック少量	3 黒 色	ローム粒子微量
2 に赤・褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量。焼土	4 極 色	砂粒多量。粘土ブロック・ローム粒子少量。炭化粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片2点（内耳鍋）、瓦質土器片4点（擂鉢1、火舎3）、礫1点の他に、混入した土師器片6点も出土している。いずれの遺物も覆土中からの出土である。

所見 時期は、出土土器から近世と考えられる。



第187図 第10号井戸跡・出土遺物実測図



第188図 第10号井戸跡出土遺物実測図

第10号井戸跡出土遺物観察表(第187・188図)

番号	種別	器種	口径	都高	底径	底土	色調	施成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
776	土師質土器	内底鍋	[30.6]	[6.7]	—	長芯・石芯・雲母	淡黄橙	普通	1内耳残存 内面から口縁部外側幾十デ	覆土中	10%
775	瓦質土器	火舟	[38.0]	[21.0]	—	長芯・石芯・雲母 ・羽状織物	灰	普通	2条の隣接 陸帯間に花文錦印 外面へフ型き	覆土中	15%
777	瓦質土器	瓶鉢	—	(5.4)	[12.6]	長芯・石英	灰	普通	4条1単位の握り目	覆土中	10%

表8 井戸跡一覧表

番号	位置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考
7	D9f5	N-0°	円形	0.83×0.80	(125.0)	垂直	不明	人為	—	S199→本跡
8	D9g2	N-0°	円形	0.80×0.78	(126.0)	垂直	不明	人為	—	
9	D8e7	N-0°	円形	1.14×1.10	(135.0)	垂直	不明	人為	—	S1127→本跡
10	D9c1	N-0°	円形	0.80×0.78	(190.0)	垂直	不明	人為	土師質土器、瓦質土器、罐	S1106, SB 1・2→本跡

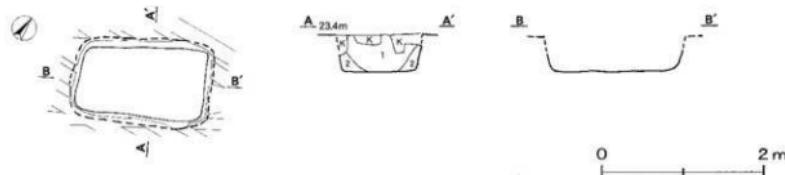
6 その他の遺構と遺物

今回の調査では、時期及び性格を判断することができなかった方形堅穴遺構2基、土坑25基、溝跡4条、ピット群3か所が確認されている。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 方形堅穴遺構

第1号方形堅穴遺構 (第189図)

位置 調査区東部のD12f6区で、標高23.3mほどの台地平坦部に位置している



第189図 第1号方形堅穴遺構実測図

規模と形状 長軸1.74m、短軸1.10mの隅丸長方形である。深さは44cmで、主軸方向はN-60°-Eある。壁は外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

覆土 2層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック中量

2 黒褐色 ロームブロック少量

所見 遺物が出土していないため、時期は不明であるが、隣接する第2号方形竪穴遺構と規模や主軸方向がほぼ同じであることから、同時期に機能していた可能性が高い。

第2号方形竪穴遺構（第190図）

位置 調査区東部のD12f6区で、標高23.3mほどの台地平坦部に位置している

規模と形状 長軸2.03m、短軸1.10mの隅丸長方形である。深さは55cmで、主軸方向はN-57°-Eある。壁は外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

覆土 5層に分層される。ロームブロックを含む人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ローム小ブロック少量

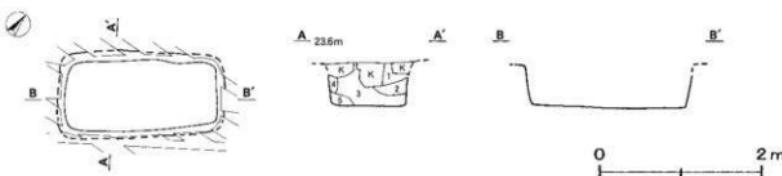
4 黒褐色 ローム粒子少量

2 黒褐色 ローム小ブロック中量

5 黒褐色 ロームブロック微量

3 黒褐色 ローム中ブロック少量

所見 遺物が出土していないため、時期は不明であるが、隣接する第1号方形竪穴遺構と規模や主軸方向がほぼ同じであることから、同時期に機能していた可能性が高い。



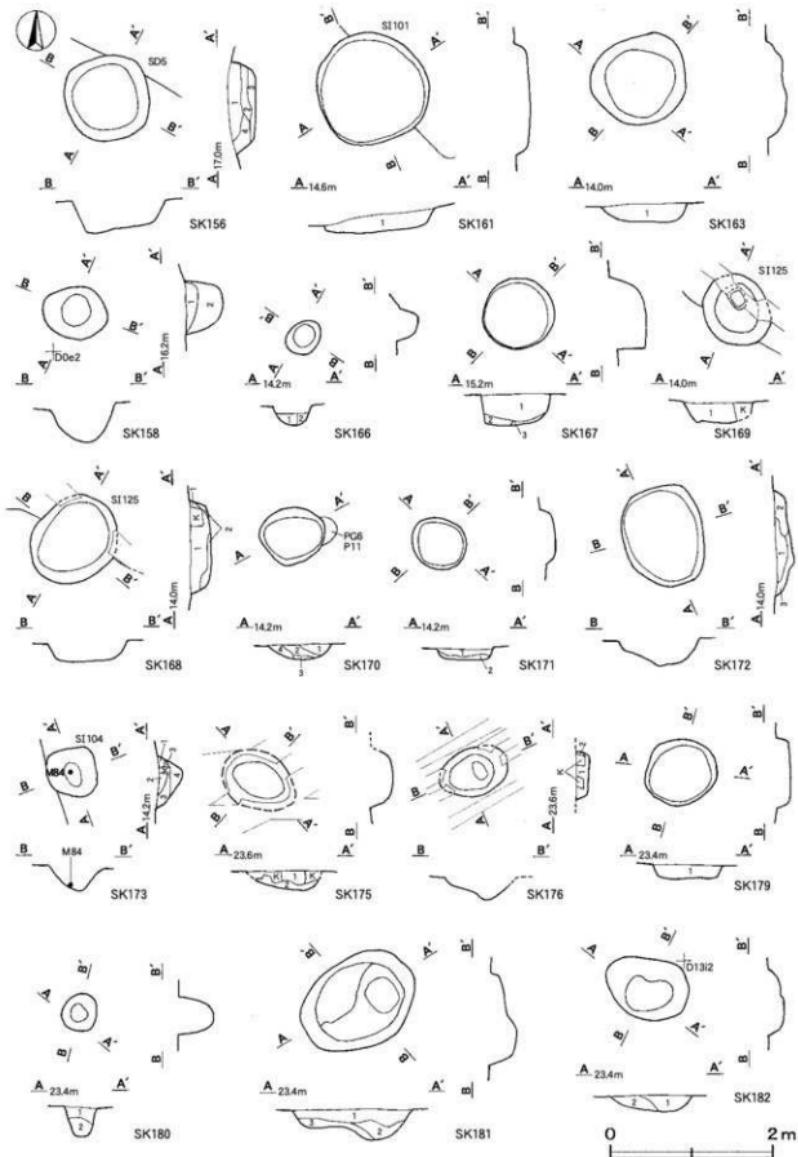
第190図 第2号方形竪穴遺構実測図

表9 方形竪穴遺構一覧表

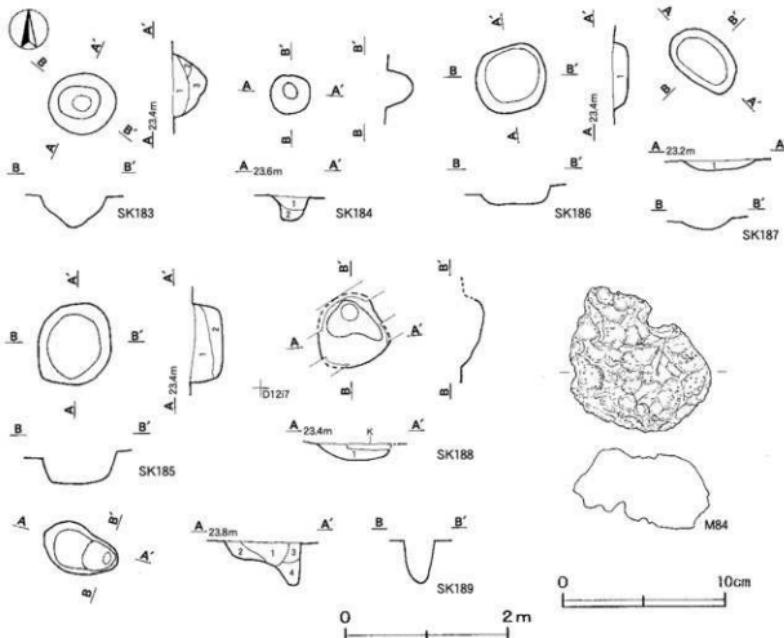
番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
1	D12f6	N-60°-E	隅丸長方形	1.74×1.10	44	垂直	平坦	人為	—	新旧関係(旧→新)
2	D12f6	N-57°-E	隅丸長方形	2.03×1.10	55	垂直	平坦	人為	—	

(2) 土坑

ここでは、時期及び性格が不明な土坑について実測図と一覧表で示し、併せて土層解説と遺物の実測図を記載する。



第191図 その他の土坑実測図



第192図 その他の土坑・出土遺物実測図

第156号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量

第157号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 炭化物・ローム粒子微量

第161号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

第163号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量・炭化物微量

第166号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第167号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 極暗褐色 ローム粒子微量

第168号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・埴土ブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第169号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量・炭化粒子微量

第170号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量・炭化粒子微量
- 4 極暗褐色 ローム粒子微量

第171号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黑褐色 ローム粒子少量

第172号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第173号土坑土層解説

- 1 桂色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 桂色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

第175号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第176号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
2 黒褐色 ローム粒子少量

第179号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

第180号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
2 黑褐色 ロームブロック微量

第181号土坑土層解説

- 1 細褐色 ローム粒子少量
2 細褐色 ロームブロック微量
3 褐色 ロームブロック少量

第182号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量
2 暗褐色 ロームブロック少量

第183号土坑土層解説

- 1 細褐色 ロームブロック・炭化物微量
2 褐色 ロームブロック少量
3 細褐色 ロームブロック少量

第184号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子少量
2 黑褐色 ロームブロック微量

第185号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
2 暗褐色 塵泥バミス少量、ロームブロック微量

第186号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・塵泥バミス少量、炭化物微量

第187号土坑土層解説

- 1 细褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
2 黑褐色 ロームブロック微量

第188号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック微量

第189号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量
3 褐色 ロームブロック少量
4 暗褐色 ロームブロック少量

第173号土坑出土遺物観察表(第192図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M61	鉢	8.9	8.8	4.9	319.1	鉄	表面赤褐色 凸凹有り	鉢	

表10 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新Ⅱ回帰(旧→新)
156	C 9.9	N-0°	円形	1.13	27~38	緩斜	皿状	人為	縄文土器、弥生土器、土師器、 羽虫器	SD5→本跡
158	D10e2	N-72°-W	椭円形	0.80×0.67	44	緩斜	平坦	自然	—	
161	D 9e3	N-0°	円形	1.38	18	緩斜	皿状	不明	弥生土器、土師器、須恵器	S1101+S83→本跡
163	D 8e6	N-0°	円形	1.18	22	緩斜	皿状	不明	土師器、須恵器	
166	D 9e2	N-52°-E	椭円形	0.46×0.38	25	緩斜	皿状	人為	—	S1105+SB1→本跡
167	D 9e5	N-0°	円形	0.88	45	垂直	皿状	自然	弥生土器、土師器、罐	S188→本跡
168	D 8e6	N-45°-E	椭円形	1.17×0.98	23	緩斜	皿状	自然	弥生土器、土師器、須恵器、罐	S1125→本跡
169	D 8e6	N-41°-W	椭円形	1.00×0.90	24	緩斜	皿状	不明	弥生土器、土師器、須恵器	S1125→本跡
170	D 8e6	N-13°-W	(椭円形)	(0.80)×0.70	16	緩斜	皿状	人為	—	P66→本跡
171	D 8e8	N-0°	円形	0.70×0.64	14	緩斜	皿状	自然	土師器、須恵器、罐	
172	D 8e9	N-17°-W	椭円形	1.26×1.00	34	緩斜	皿状	人為	—	
173	D 9d3	N-51°-W	円形	0.70×0.65	28	緩斜	平坦	人為	鉢	S1104→本跡
175	D12g4	N-57°-W	(椭円形)	(0.97)×0.73	32~50	緩斜	皿状	自然	—	
176	D12h5	N-67°-E	椭円形	(0.86)×0.62	10~23	緩斜	皿状	人為	—	
179	D12i6	N-57°-E	円形	0.90×0.84	16	緩斜	皿状	不明	—	
180	D12j7	N-40°-E	円形	0.48×0.42	42	外傾	平坦	人為	—	
181	D12g9	N-55°-E	椭円形	1.48×1.10	14~32	緩斜	皿状	人為	—	
182	D13h1	N-67°-W	椭円形	1.06×0.78	18	緩斜	皿状	人為	—	
183	D13h1	N-80°-W	円形	0.84×0.74	34	緩斜	平坦	人為	—	
184	D12g6	N-0°	円形	(0.48)	30	緩斜	平坦	人為	—	
185	D10g9	N-30°-E	円形	1.04×0.91	37	緩斜	皿状	人為	—	
186	D10e9	N-0°	円形	0.92	19	緩斜	皿状	不明	—	S1141→本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
187	D10e0	N-50°-W	梢円形	0.90×0.61	11	緩斜	平坦	不明	—	S1141→本跡
188	D12h7	N-29°-E	不整円形	(0.98×0.92)	26	緩斜	皿状	不明	—	
189	D11h7	N-70°-W	梢円形	0.97×0.60	20~50	外傾	平坦	人為	—	

(3) 溝跡

第5号溝跡 (第193図)

位置 調査区西部のC 9 i9～D 10c4区で、標高17.2mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第156号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北西側と南東側が調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、D 10c4区から北西方向(N-48°-W)へほぼ直線的に延びている。確認された長さは25.70mで、上幅0.40～1.80m、下幅0.21～0.62m、深さ19～44cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

覆土 2層に分層される。ロームブロックや粘土ブロックを含んでいるがレンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 喧褐色 ローム粒子少量

2 喧褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片1点、土師器片6点、須恵器片1点、繩1点が出土しているが、細片のため図示することはできない。

所見 時期判断できる遺物が出土していないため時期は不明である。また、軸方向が傾斜に沿っていることから排水溝と考えられるが明確ではない。



第193図 第5号溝跡実測図

第6号溝跡 (第194図)

位置 調査区中央部のD 10c7～D 10c8区で、標高21.7mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

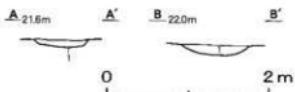
規模と形状 東西方向(N-86°-W)へほぼ直線的に延びている。確認された長さは5.35mで、上幅0.60～0.92m、下幅0.50～0.84m、最深部は12cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

覆土 単一層で、堆積状況は不明である。

土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量

所見 遺物が出土していないため時期は不明である。また、軸方向が傾斜に沿っていることから排水溝と考えられるが明確ではない。



第194図 第6号溝跡実測図

第7号溝跡（第195図）

位置 調査区中央部のD10f0～D11d4区で、標高23.8mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第141・142号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北東側が調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、D11d4区から南北方向（N-117°-W）へほぼ直線的に延びている。確認された長さは20.01mで、上幅0.75～1.60m、下幅0.60～1.32m、最深部は16cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

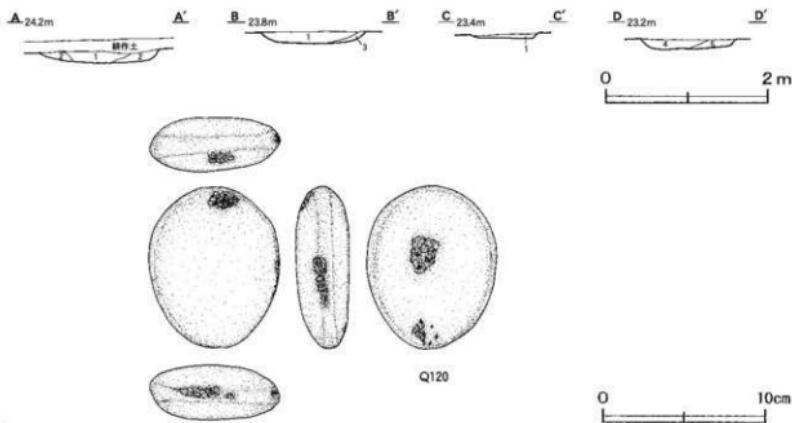
土層解説

- | | |
|----------------------|----------------------------|
| 1 極暗褐色 ロームブロック・炭化物微量 | 4 暗褐色 烧土ブロック・ローム粒子・鹿沼バミス微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量 | 5 黒褐色 ロームブロック・鹿沼バミス少量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量 | |

遺物出土状況 弥生土器片3点、土師器片2点、須恵器片8点、石器1点（鐵石）、礫22点が出土している。

Q120は覆土中から出土している。その他の土器片は細片のため図示することはできない。

所見 時期判断できる遺物が出土していないため時期は不明である。また、軸方向が傾斜に沿っていることから排水溝と考えられるが明確ではない。



第195図 第7号溝跡・出土遺物実測図

第7号溝跡出土遺物観察表(第195図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q120	鐵石	9.9	8.0	3.3	382.8	砂岩	鉄打頭5.5m	覆土中	

第8号溝跡（第196図）

位置 調査区西部のD10h9～D10e9区で、標高22.5mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第138号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北側が調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかつたが、D10b9区から南方向(N-172°-E)へほぼ直線的に延びている。確認された長さは13.80mで、上幅0.34~0.58m、下幅0.23~0.38m、深さ12~18cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

覆土 3層に分層される。ロームブロックや鹿沼バミスブロックを含む人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|--------|-----------|-------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック | 鹿沼バミスブロック微量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック微量 | |
| 3 黑褐色 | ロームブロック少量 | 鹿沼バミスブロック微量 |



遺物出土状況 碓2点しか出土していない。

所見 時期判断できる遺物が出土していないため時期は不明である。また、軸方向が傾斜に沿っていることから排水溝と考えられるが明確ではない。

第9号溝跡（第197図）

位置 調査区東部のD1415~E14c7区で、標高22.2mほどの台地縁辺部の東斜面部に位置している。

規模と形状 北側と南側が調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかつたが、D14i5区から南南東方向(N-160°-E)へほぼ直線的に延びている。確認された長さは19.00mで、上幅2.00~3.20m、下幅0.42~1.76m、深さ20~104cmである。壁は外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

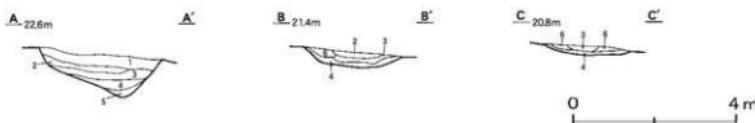
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------|-------|---------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 |
| 2 單褐色 | ローム粒子少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック少量 | 6 單褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 繩文土器片1点、弥生土器片16点、土師器片20点、須恵器片4点、土製品1点、鉄滓1点、礫6点が出土しているが、細片のため図示することはできない。

所見 時期判断できる遺物が出土していないため時期は不明である。また、軸方向が傾斜に沿っていることから排水溝と考えられるが明確ではない。



第197図 第9号溝跡実測図

表11 時期不明溝一覧表

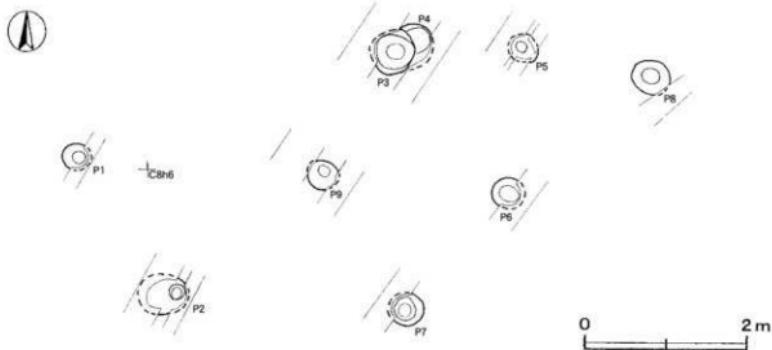
番号	位置	方向	形状	規模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				確認長(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
5	C9i9~D10e4	N-48°-W	直線状	25.70	0.40~1.800	0.21~0.62	19~44	緩斜	平坦	自然	弥生土器、土師器、須恵器、礫	本跡→SK156
6	D10c7~D10e8	N-86°-W	直線状	5.35	0.60~0.920	0.50~0.84	12	緩斜	平坦	不明	—	
7	D10f0~D11d4	N-117°-W	直線状	20.01	0.75~1.600	0.60~1.32	16	緩斜	平坦	自然	弥生土器、土師器、須恵器、石器、礫	SI141+142→本跡

番号	位置	方向	形状	規模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				確認長(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
8	D10b6～D10d9	N-172°-E	直線状	13.8	0.34～0.580	23～0.38	12～18	緩斜	平坦	人為	礪	SI138→本跡
9	D14b5～E14c7	N-160°-E	直線状	19.00	2.00～3.200	42～1.76	20～104	外傾	平坦	自然	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土製品、鉄滓、縄	

(4) ピット群

第5号ピット群（第198図）

調査区西側のC 8 b6区付近から9か所のピットが検出された。平面形は径36～62cmほどの円形または橢円形と推定され、深さは25～62cmである。P 1～P 3, P 6からは土師器片（壺類）が、P 7からは弥生土器片と土師器片が出土しているがいすれも細片である。時期判断できる遺物が出土していないため時期は不明である。また、ピットの配置に掘立柱建物跡などの規則性を見つけることができないためピット群として扱った。以下、各ピットの一覧表を記載する。



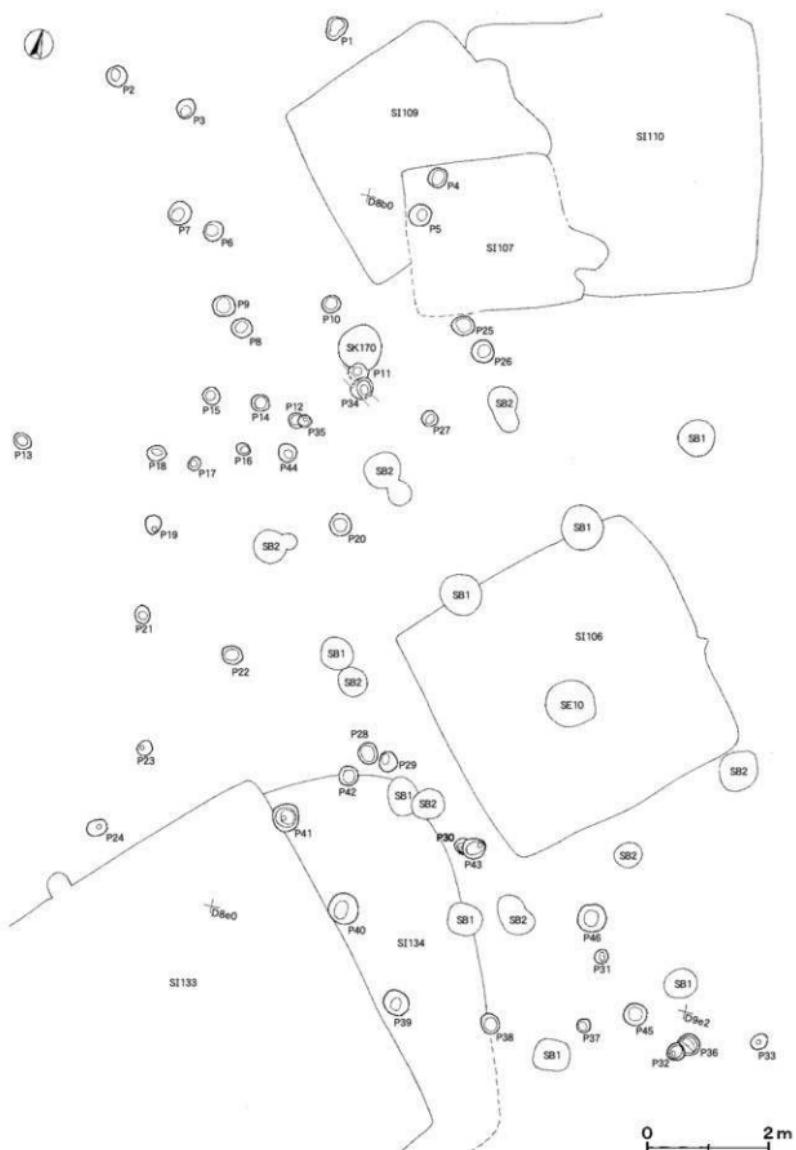
第198図 第5号ピット群実測図

第5号ピット群ピット計測表（第198図）

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)												
1	[38]	32	38	4	[52]	[48]	32	6	[40]	37	48	8	49	42	30
2	[62]	[51]	35	5	[36]	34	25	7	[44]	41	31	9	[38]	33	33
3	54	[52]	62												

第6号ピット群（第199図）

調査区西側のD 8 a8～D 9 e2区から46か所のピットが検出された。平面形は径22～53cmほどの円形または橢円形で、深さは7～54cmである。P 24, P 30からは弥生土器片（壺類）が、P 40・P 41からは弥生土器片と土師器片が、P 3, P 6, P 9～P 11, P 34からは土師器片が、P 7からは土師器片と須恵器片が出土しているがいすれも細片である。時期判断できる遺物が出土していないため時期は不明である。また、ピットの配置に掘立柱建物跡などの規則性を見つけることができないためピット群として扱った。以下、各ピットの一覧表を記載する。



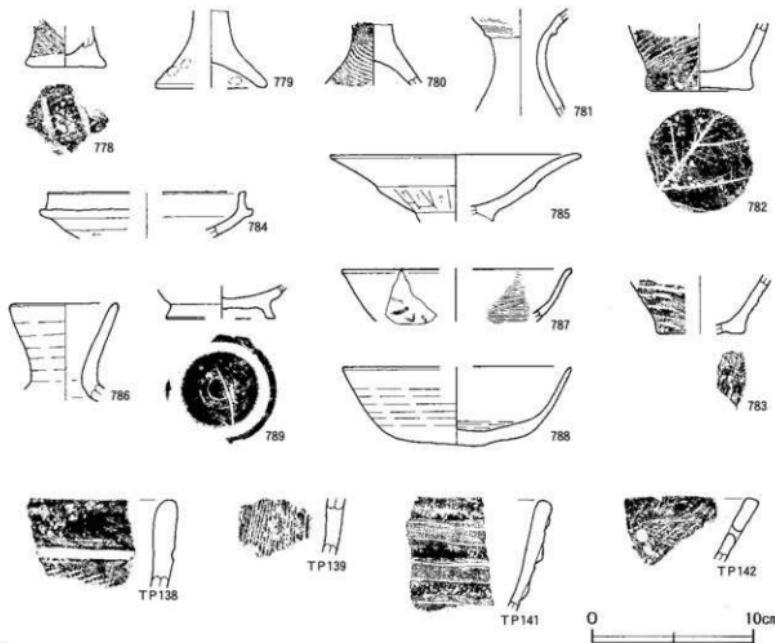
第199図 第6号ビット群実測図

第6号ピット群ピット計測表(第199図)

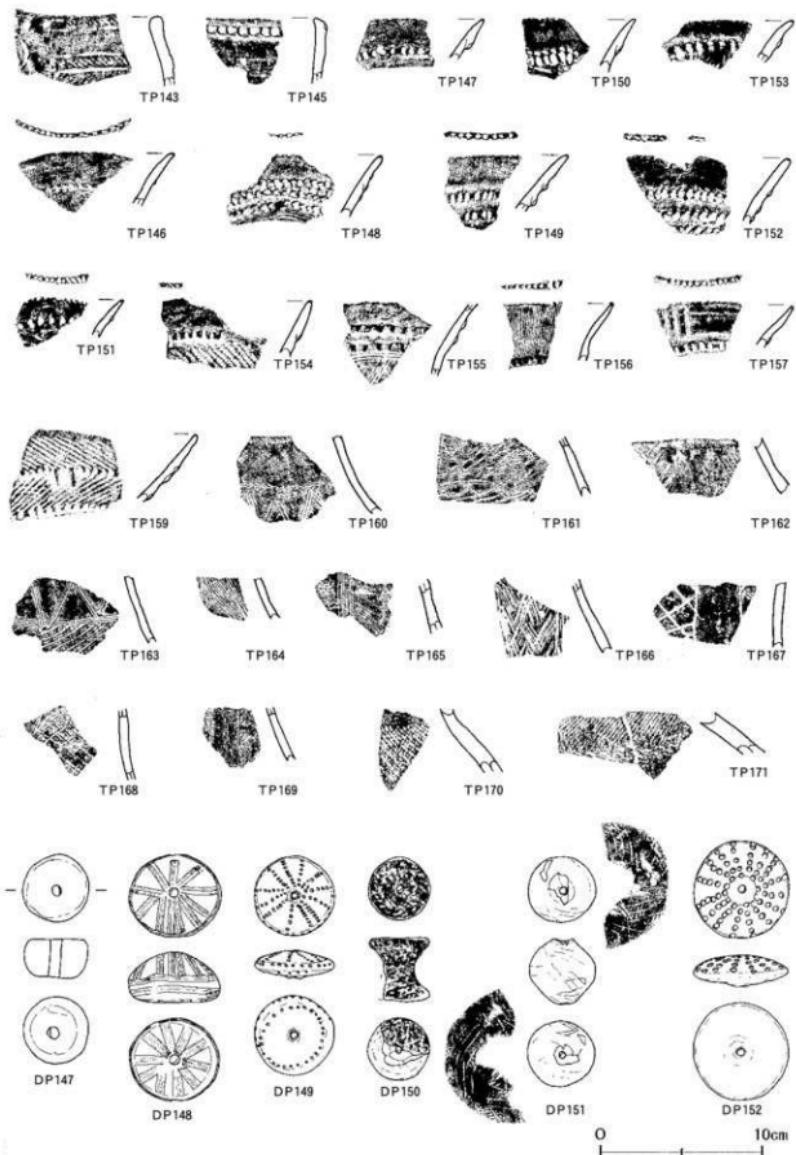
番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)												
1	42	35	25	13	30	23	14	25	40	32	28	37	23	22	28
2	35	33	32	14	30	30	30	26	39	37	34	38	35	29	17
3	33	31	24	15	29	27	10	27	27	24	14	39	43	38	30
4	34	32	16	16	23	19	32	28	35	32	30	40	53	50	30
5	37	35	28	17	24	20	38	29	35	30	41	41	45	40	44
6	36	33	32	18	31	28	17	30	28	[36]	54	42	34	30	24
7	40	36	26	19	30	23	31	31	24	22	20	43	38	32	30
8	32	31	38	20	37	35	30	32	30	27	26	44	32	31	7
9	36	35	24	21	30	23	26	33	29	23	24	45	39	37	28
10	30	29	22	22	31	30	27	34	[34]	32	38	46	52	47	23
11	[38]	30	36	23	26	24	26	35	22	21	35				
12	26	[26]	24	24	34	24	24	36	35	[31]	21				

(5) 遺構外出土遺物

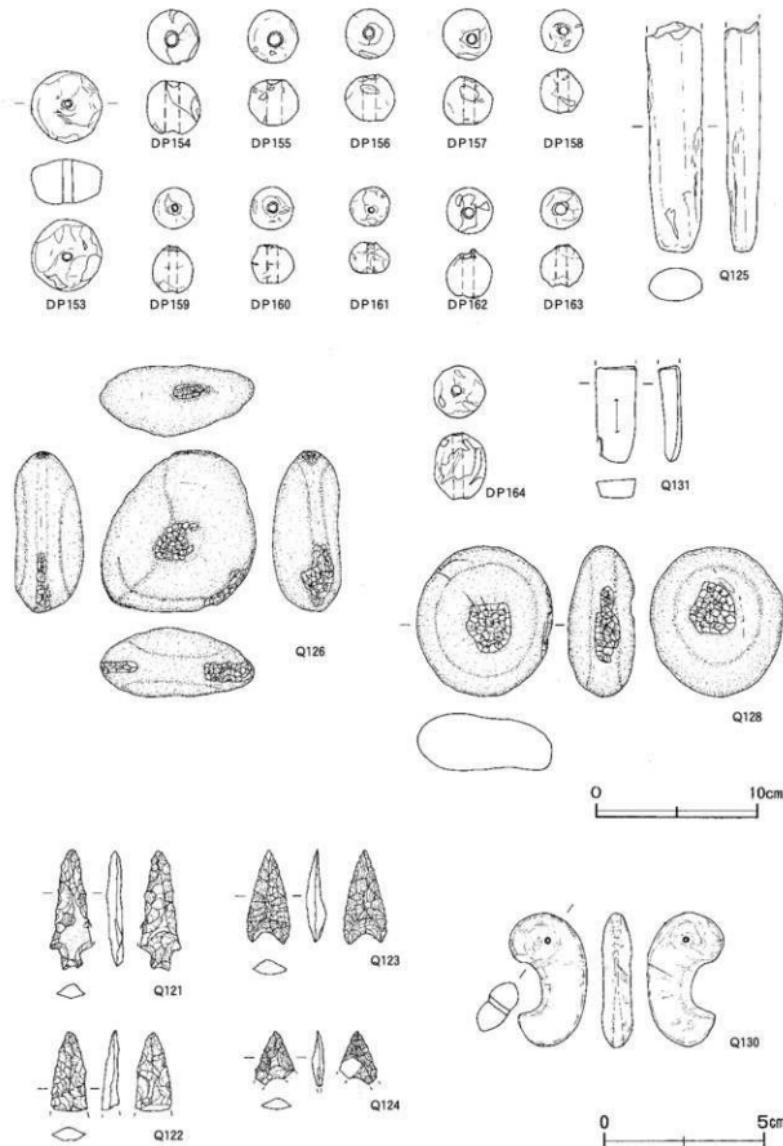
当遺構から出土した遺構に伴わない遺物について、実測図及び出土遺物観察表で記載する。



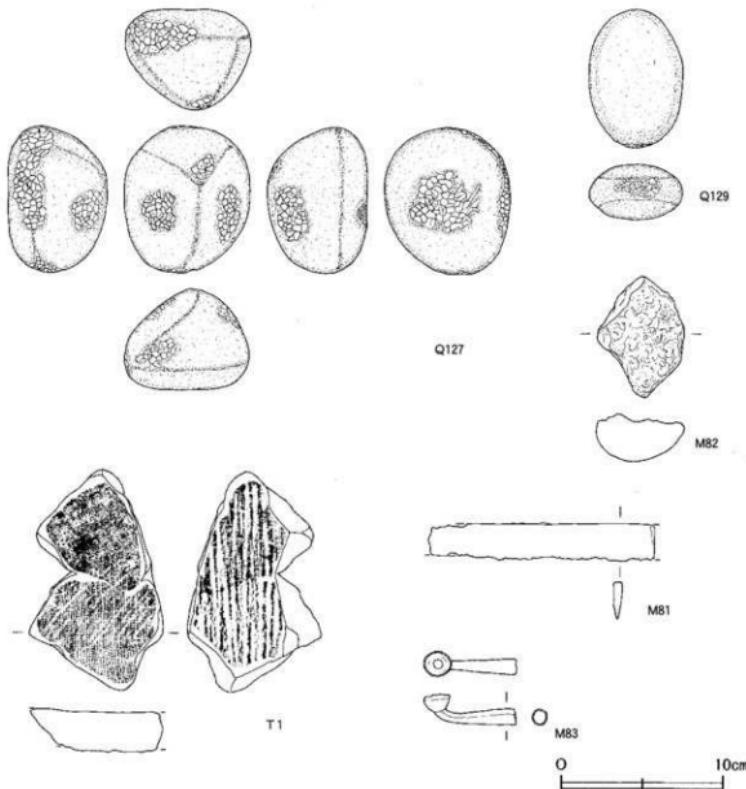
第200図 遺構外出土遺物実測図(1)



第201図 造構外出土遺物実測図(2)



第202図 遺構外出土遺物実測図(3)



第203図 遺構外出土遺物実測図(4)

遺構外出土遺物観察表(第200~203図)

番号	種別	寸法	口径	器高	直径	新土	色調	地塊	文様・手法の特徴	出土位置	備考
778	卯生土器	高环カ	—	(2.9)	4.5	長石・石英・雲母	根	普通	脚部に附加条一種(附加2条)の溝文	近部木葉版	D9aIK 10%
779	卯生土器	高环カ	—	(4.7)	[6.6]	長石・石英・雲母	灰黄	普通	脚部に、外表面滑痕	D11bIK 30%	
780	卯生土器	高环カ	—	(3.7)	—	長石・石英・雲母	に似・根	普通	脚部外面に附加条一種(附加2条)の溝文	D9aIK 20%	
781	卯生土器	片口盤カ	—	9.6	9.7	長石・石英・雲母・赤色粒子	二・三・黄	普通	口縁部下端に彫刻状工具(4本)による波状文	脚部無文	D9bIK 20%
782	卯生土器	片口直	—	(4.1)	6.6	長石・石英・雲母	二・三・黄	普通	脚部に附加条一種(附加2条)の溝文	近部木葉版	D10bIK 10%
783	卯生土器	直口蓋	—	(3.9)	[7.4]	長石・石英・雲母	二・三・赤	普通	脚部に附加条二種(附加1条)の溝文	近部に相接	D8aIK 5%
785	土師器	高环	15.3	(4.1)	—	長石・石英・赤色粒子	根	普通	環部1周面・外表面ナデ	体部外表面へラ削り	D9bIK 50%
784	亂器器	环	[12.6]	(2.8)	—	長石・石英・雲母	明褐色	普通	口沿部内外・外表面ナデ	体部外表面へラ削り	D9aIK 10%
786	亂器器	握板	6.4	(6.0)	—	長石・石英・雲母	黄灰	普通	口沿部外表面クロナデ	C9JK 10%	
787	土師器	环	[14.2]	(3.2)	—	長石・石英	根	普通	体部外表面クロナデ	内面へラ削り	C9JK 5% 墓「本」カ

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
788	須恵器	环	[14.0]	4.8	8.0	長石・石英	灰黄	良好	底部断面へца切り削鉗跡へца倒け	C89区	60%
789	須恵器	高台付环	—	[2.0]	[6.8]	長石・石英	赤褐	良好	底部断面へца切り削鉗跡付け	D86区	30% 鎏書(一)
TP138	陶文土器	罐	—	(5.5)	—	長石・石英・雲母	にじみ・黒	普通	AS-次高による底部内にLRの半周彫文施文	D96区	5% PL38
TP139	陶文土器	罐	—	(3.5)	—	長石・石英	にじみ・黄褐	普通	横断面にJ字による部位の状觀文	D95区	5% PL38
TP141	陶文土器	罐	—	(6.9)	—	長石・石英・雲母	にじみ・黒	普通	周縁文をへら剥離	D97区	5% PL38
TP142	陶文土器	罐	—	(3.9)	—	長石・石英	黒褐	普通	LRの半周彫文施文 植孔1孔付	D94区	5% PL38
TP143	陶文土器	罐	—	(4.8)	—	長石・石英・雲母	黒	普通	周縁文・球状文 空起孔付け	C96区	5% PL38
TP145	陶文土器	罐	—	(3.9)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口沿上位に押捺のあら巻き・絵文	D36区	5% PL38
TP146	生土器	広口壺	—	(3.3)	—	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口沿部に原体押捺・原体押捺・原体押捺で口辺部と底面 彫刻工具(4本)による底面彫文施文	C88区	5% PL38
TP147	生土器	広口壺	—	(2.5)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口沿部に複合工具(複合工具による押捺) 原体に 彫刻工具(1本)による文施文	D117区	5%
TP148	生土器	広口壺	—	(3.8)	—	長石・石英・雲母	淡黄褐	普通	口沿部に原体押捺・口沿部原体・頭部上位に原体押捺のある 彫刻工具(2本)・原体押捺(1本)による文施文	E16区	5%
TP149	生土器	広口壺	—	(3.4)	—	長石・石英・雲母	にじみ・黒	普通	口沿部に原体押捺・原体押捺(1本)による無文	D16区	5% PL38
TP150	生土器	広口壺	—	(3.2)	—	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口沿部に原体押捺のあら巻き・絵文	D18区	5%
TP151	生土器	広口壺	—	(2.3)	—	長石・石英・雲母	にじみ・黒	普通	口沿部に原体押捺による押捺・口沿部に原体 押捺(2本)による文施文	D116区	5% PL38
TP152	生土器	広口壺	—	(1.9)	—	長石・石英・雲母	赤褐	普通	口沿部に原体押捺・口沿部原体・頭部上位に原体押捺のある 彫刻工具(2本)による文施文	D118区	5% PL38
TP153	生土器	広口壺	—	(2.6)	—	長石・石英・雲母	にじみ・黒	普通	口沿部に原体押捺・原体押捺(1本)による文施文	D15区	5%
TP154	生土器	広口壺	—	(3.4)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口沿部に原体押捺・原体押捺(1本)による文施文	D118区	5%
TP155	生土器	広口壺	—	(4.9)	—	長石・石英・雲母	淡黄褐	普通	口沿部に原体押捺(2本)による文施文	D118区	5% PL38
TP156	生土器	広口壺	—	(3.9)	—	長石・石英・雲母	明かる	普通	口沿部に原体押捺による押捺・小突起 口沿部に彫刻工具 (6本)による文施文	D94区	5% PL38
TP157	生土器	広口壺	—	(2.6)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口沿部に原体押捺・口沿部原体状(4本)による文施文	E1区	5%
TP158	生土器	広口壺	—	(4.1)	—	長石・石英・雲母	にじみ・黒	普通	2段の複合工具(2段の原体押捺(2本)による文施文)	E14区	5% PL38
TP160	生土器	広口壺	—	(4.7)	—	長石・石英・雲母	明快	普通	頭部下位に原体押捺(1本)による文施文	D117区	5% PL39
TP161	生土器	広口壺	—	(3.7)	—	長石・石英・雲母	にじみ・黒	普通	頭部下位に原体押捺(1本)による文施文	D98区	5% PL39
TP162	生土器	広口壺	—	(3.4)	—	長石・石英・雲母	にじみ・黒	普通	頭部下位に原体押捺(1本)による文施文	D118区	5% PL39
TP163	生土器	広口壺	—	(4.0)	—	長石・石英・雲母	桜	普通	頭部下位に原体押捺(4本)による文施文	D94区	5% PL38
TP164	生土器	広口壺	—	(2.5)	—	長石・石英・雲母・赤鉄鉱	にじみ・黒	普通	頭部下位に原体押捺(4本)による文施文	D118区	5%
TP165	生土器	広口壺	—	(3.4)	—	長石・石英・雲母	にじみ・黒	普通	頭部下位に原体押捺(4本)による文施文	C89区	5%
TP166	生土器	広口壺	—	(4.4)	—	長石・石英・雲母	にじみ・黒	普通	頭部下位に原体押捺(4本)による文施文	D118区	5% PL39
TP167	生土器	広口壺	—	(3.8)	—	長石・石英・雲母	にじみ・黒	普通	ヘラ式工具により頭部に施文される格子状文施文	D94区	5% PL39
TP168	生土器	広口壺	—	(4.4)	—	長石・石英・雲母	にじみ・黒	普通	彫刻工具(4本)による頭部に施文される格子状文施文	D103区	5% PL39
TP169	生土器	広口壺	—	(3.1)	—	長石・石英・雲母	にじみ・黒	普通	ヘラ式工具により頭部に施文される格子状文施文	D103区	5%
TP170	生土器	壺	—	(3.8)	—	長石・石英・黑色鉄	黒	普通	頭部下位に原体押捺(2本)の頭文	D94区	5% 赤茶 PL39
TP171	生土器	壺	—	(2.5)	—	長石・石英・赤色鉄	桜	普通	頭部下位に原体押捺(2本)の頭文 S字状細部文で文様帯を区画	D94区	5% 赤茶 PL39

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出上位置	備考
TP147	鋸切奉	4.0	0.7	2.5	49.2	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方孔のもの	D19区	PL40
TP148	鋸切奉	5.6	0.6	3.0	81.7	土(長石・石英・雲母)	表面彫刻工具(本数不明)による放射状の彫文 頭部に工具による横筋文(2条) 一方孔のもの	D19区	PL40
TP149	鋸切奉	4.9	0.5	1.7	36.4	土(長石・石英・雲母)	片端ツバ付工具による放射状の彫文 構造から武山 表面に施文を記載する工具による横筋文(2条)	D117区	PL40
TP150	鋸切奉	4.8	0.5	4.9	34.2	土(長石・石英・雲母)	表面及び側面に半截竹管による刻痕	D117区	PL40
TP151	鋸切奉	4.2	0.5	4.0	61.2	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方孔のもの	D86区	PL40
TP152	鋸切奉	5.9	0.5	2.0	61.9	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方孔のもの	C87区	PL40
TP153	鋸切奉	4.5	0.6	2.8	54.1	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方孔のもの	C17区	PL40
TP154	環状土拂	2.2	0.8	3.3	35.2	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方孔のもの	D16区	PL39
TP155	環状土拂	3.1	0.9	2.8	28.0	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方孔のもの	D94区	PL39
TP156	環状土拂	3.1	0.8	2.8	27.0	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方孔のもの	C93区	PL39
TP157	環状土拂	3.0	0.7	3.0	28.8	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方孔のもの	C93区	PL39

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
							ナメ 一方向からのみの穿孔		
IP158	環状土鍤	2.7	0.7	2.8	(19.1)	土(長石・石英・雲母)	ナメ 一方向からのみの穿孔	D9aE区	
IP159	環状土鍤	2.5	0.5	2.9	(16.6)	土(長石・石英・雲母)	ナメ 一方向からのみの穿孔	D9aF区	
IP160	環状土鍤	2.7	0.7	2.4	(19.2)	土(長石・石英・雲母)	ナメ 一方向からのみの穿孔	C7JEE区	
IP161	環状土鍤	2.5	0.4	1.9	11.6	土(長石・石英・雲母)	ナメ 一方向からのみの穿孔	C9JEE区	
IP162	環状土鍤	2.9	0.7	3.1	(22.9)	土(長石・石英・雲母)	ナメ 一方向からのみの穿孔	D8dE区	
IP163	環状土鍤	2.7	0.7	2.7	(16.8)	土(長石・石英・雲母)	ナメ 一方向からのみの穿孔	D8dF区	
IP164	環状土鍤	3.2	0.6	4.1	(42.9)	土(長石・石英・雲母)	ナメ 一方向からのみの穿孔	C7JEE区	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q121	有茎壳海螺	3.6	(1.3)	0.5	(1.8)	チャート	両面削離調整 一部自然面を残す	D9fE区	PL42
Q122	石墨	(2.5)	(1.1)	(0.5)	(1.2)	安山岩	両面削離調整	D9fE区	天然資源 PL42
Q123	石墨	2.9	1.3	0.6	1.5	チャート	加熱無基盤 両面削離調整 摧圧削離	C8JEE区	PL42
Q124	石墨	(1.7)	(1.2)	0.4	(0.4)	真君	加熱無基盤 両面削離調整 摧圧削離	D9fE区	PL42
Q125	石棒	(14.3)	3.5	2.1	(177.6)	粘板岩	丁寧な研磨成形	D9gE区	
Q126	巖石	9.9	10.0	4.4	589.9	砂岩	敲打痕4か所	D1HfE区	PL42
Q127	巖石	10.0	7.8	6.2	577.1	砂岩	敲打痕7か所	D9aE区	
Q128	巖石	9.3	8.5	3.5	433.0	砂岩	敲打痕3か所	D1HfE区	PL42
Q129	巖石	8.5	5.8	3.4	282.8	砂岩	敲打痕1か所	C7fE区	PL42
Q130	勾玉	4.2	2.4	0.9	12.5	滑石	一方向からのみの穿孔 孔径約15mm	D9aE区	PL42
Q131	桃石	(6.0)	2.5	1.3	(26.7)	燧灰岩	両面15か所	D8aE区	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M81	小刀	(14.0)	2.2	0.5	(61.0)	鉄	刃身の一部 平接手造り	E14aE区	
M83	縦管	5.8	1.6	1.9	6.1	銅	薄且 縦反し急	D10fE区	
M82	胸吹淨	(7.4)	(5.3)	2.9	(127.0)	鉄	表面に赤錆付着	C9E区	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	断土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
T1	平瓦	(13.5)	(8.4)	2.7	(2.5)	長石・石英	灰オリーブ	普通	凹面布目模 口面彫印記	D9cE区	10%

第4節 ま　　と　　め

1 はじめに

大戸下郷遺跡は、平成13・14年度に一次調査として6,418m²が調査され、『茨城県教育財団文化財調査報告書第216集 大戸下郷遺跡』¹⁾として報告されている（以下、『大戸下郷遺跡1』と略す）。平成16年度の二次調査では6,208m²の調査（本報告分を『大戸下郷遺跡2』と略す）が行われ、延べ12,626m²が調査された。

一次調査では、竪穴住居跡62軒（縄文5、弥生8、古墳39、奈良6、平安4）、墓坑20基（古墳1、近世19）、土坑106基（弥生2、平安1、中世1、近世7、時期不明95）、井戸跡6基（近世）、溝跡3条（時期不明）、ピット群4か所が検出されている。二次調査では、竪穴住居跡69軒（弥生21、古墳37、奈良4、平安7）、掘立柱建物跡3棟（奈良時代～平安時代）、墓坑2基（近世）、土坑26基（弥生1、時期不明25）、井戸跡4基（近世）、方形竪穴造構2基（時期不明）、溝跡5条（時期不明）、ピット群2か所が検出されている。

ここでは、二次にわたる調査で検出された遺構について時代順に概略を述べ、簡単な考察を加えてまとめたい。

※ 調査区域概念

『大戸下郷遺跡1』では、調査区を8区に分けているが、調査1区から3区（遺構確認面の標高が13m以下）を「低位段丘部」、調査4区から8区（遺構確認面の標高が13～15m）を「中位段丘部」とする。それをふまえ、『大戸下郷遺跡2』での遺構確認面の標高13～18mを「中位段丘部」に加え、遺構確認面の標高が20m以上を「台地上」とする。

2 縄文時代

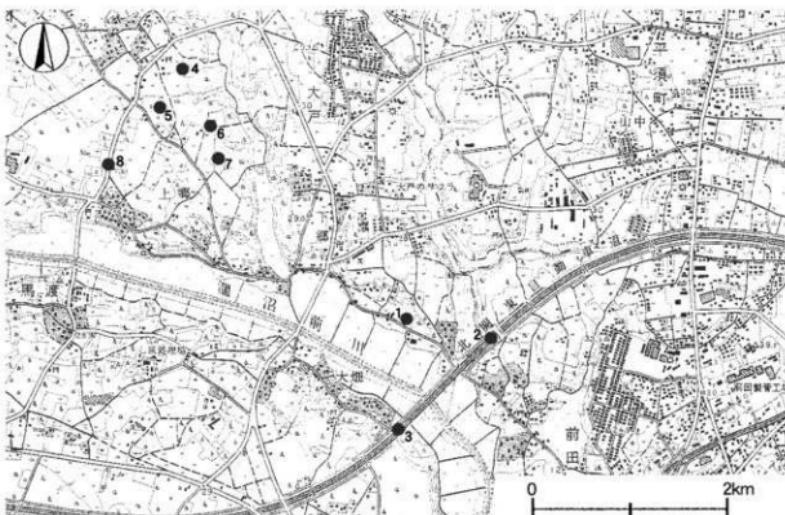
二次にわたる調査の結果、縄文時代の住居跡5軒、陥し穴8基が確認されている。5軒の住居跡は、いずれも「低位段丘部」で確認されており、それ以外の場所では検出されていない。「中位段丘上」から「台地上」にかけて行われた今回の二次調査では該期の住居跡は検出されず、「低位段丘上に当遺跡における縄文時代の集落が存在した可能性が考えられる。」という『大戸下郷遺跡1』の指摘の通り、潤沼前川という水場へ比較的近い場所が選地されて集落が営まれていたと考えられる。また、土器片についても「低位段丘上の表面採集や後世の遺構内からも、流れ込みや混入と考えられる前期前葉（関山期）の破片が出土している。（中略）中央部から東側に至る3区から8区の中位段丘上の住居跡などからの縄文土器片の検出は少なくなる」とあり、『大戸下郷遺跡2』でも後世の住居跡への流れ込みや表土中などから少數の確認しかできず、土器片の出土も『大戸下郷遺跡1』と同様の傾向を示している。

「台地上」に位置している陥し穴8基は、第8号陥し穴が南東側にやや離れて位置しているものの、その他の7基は10mほどの範囲内に分布しており、特に、第2・3・5・6号陥し穴は標高23.1mラインにほぼ同間隔で直行して並んでいる。遺構の形態から縄文時代の陥し穴と判断したが、いずれも遺物が出土しておらず、明確な時期は特定できなかった。

遺跡周辺の地形を考え合わせると、低位段丘上に集落を形成した場合、遺跡南部を東流する潤沼前川を水場及び内水性漁業として利用し、集落の後背地となる台地上は植物質食料の採集及び狩猟が可能となる森林として利用されていた事を想定したい。

3 弥生時代

瀬沼前川流域に分布する多くの遺跡は「大戸遺跡群」²⁾(第205図参照)と呼ばれ、当遺跡を含む大畠遺跡³⁾(10軒)、矢倉遺跡⁴⁾(31軒)、その支群である「桜の郷遺跡群」⁵⁾の宮後遺跡⁶⁾(5軒の内、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭⁷⁾4軒)、大塚遺跡¹⁾・大塚遺跡²⁾(28軒の内、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭12軒)、綱山遺跡⁸⁾(弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭12軒)、石原遺跡¹¹⁾(23軒の内、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭6軒)、木戸遺跡¹²⁾(2軒)の8遺跡が報告または調査されており、該期及び後続する時期の良好な資料を提供している。



第204図 大戸遺跡群遺跡分布図
1 大戸下郷遺跡 2 矢倉遺跡 3 大畠遺跡 4 宮後遺跡
5 大塚遺跡 6 綱山遺跡 7 石原遺跡 8 木戸遺跡

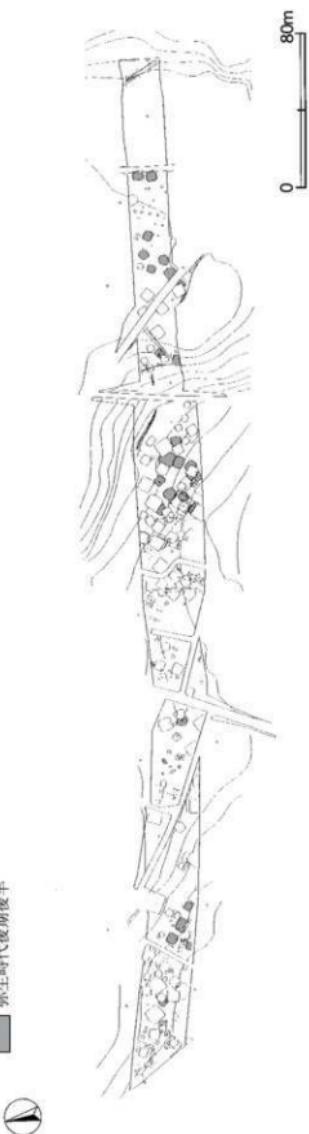
(1) 遺構と遺物について

『大戸下郷遺跡1』での該期の遺構は竪穴住居跡8軒(他に十王台式土器と土師器が共伴している古墳時代初頭の住居跡1軒と第1号墓坑が検出されている)の他に、土坑2基が報告されている。『大戸下郷遺跡2』の竪穴住居跡21軒、土坑1基を合わせると、竪穴住居跡29軒、土坑3基が確認されたことになる。

住居跡は、「低位段丘部」に5軒、「中位段丘部」に13軒、「台地上」では11軒が確認され、調査区全体に分布しており、出土土器(十王台式土器)から弥生時代後期後半と捉えた。

以下、「低位段丘部」、「中位段丘部」、「台地上」の3か所に分けて遺構と遺物について概観する。

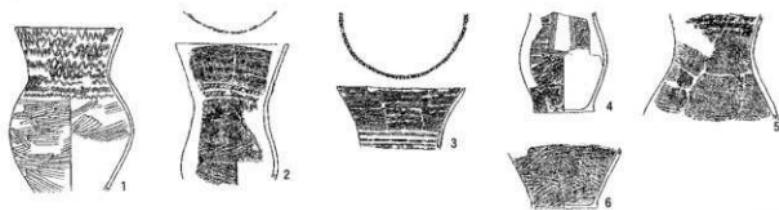
まず、「低位段丘部」の5軒(第14・28・33・35・37号住居跡)は、標高11~12mの南西緩斜面に位置しており、斜面地のため後世の耕作の影響を受けていずれも遺存状態が悪く、覆土も薄い。形状は隅丸方形あるいは隅丸長方形で、主軸方向は北から西へ37~47°の範囲に収まっている。規模は4~5mが多いが、



第205図 弥生時代遺構配置図

第33号住居跡は長軸6.67m、短軸5.32mで、「低位段丘部」の中では最大である。5軒の住居跡の中で、比較的多く遺物が包蔵されていたのは第28・33・37号住居跡である。第28号住居跡からは、群馬県方面を中心に分布する樽式土器（第206図1）が覆土下層から出土しており、『大戸下郷遺跡1』では「廉状文がなく胸部が球胴化しており、Ⅲ期またはⅣ期に該当するものと推定される」と報告されている。第33号住居跡からは、口辺部に附加条二種（附加1条）を施文して頭部上位に2条の隆帯を表出し、頭部には縦区画充填波状文を施した広口壺（第206図7）が出土しているが、口辺部に附加条二種（附加1条）を施文したものや縦区画充填波状文を施した土器の出土は少ない傾向にある。第37号住居跡からは、広口壺（第206図13）と小形広口壺（第206図15）が出土している。15は第33号住居跡から出土した7と同様に口辺部は附加条二種（附加1条）の施文であり、この土器の頭部文様帯の施文が難くなっていることを認めることができる。また、茨城県において該期を代表する十王台式土器と上稲吉式土器の文化圏においては、炉跡に炉石を伴う例が比較的多いという指摘¹³⁾がなされており、第14号住居跡は安山岩が、第33号住居跡は粘土塊がそれぞれ火床面から検出されている。

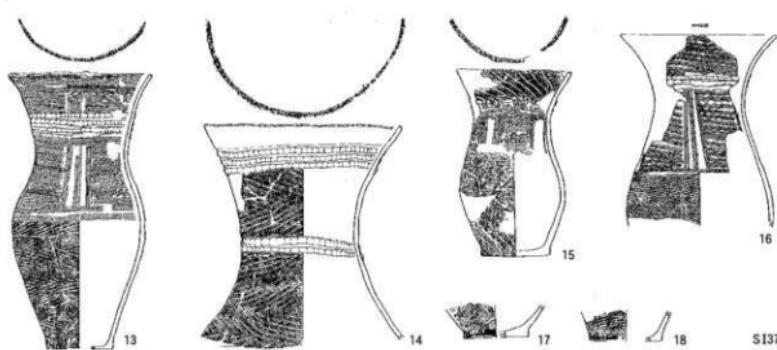
次に「中位段丘部」の13軒（第61・63・70・88・90・92・96・100・105・112・114・134・137号住居跡）について述べる。これら13軒の中の、第61号住居跡は大部分が調査区域外であり、第70号住居跡は後世の住居跡に掘り込まれているため、遺構は一部しか確認されていない。それらを除く11軒の形状は、第92号住居跡が円形であり、他の10軒が隅丸方形と隅丸長方形である。主軸方向は北から西へ2~62°の範囲にあり、このことは「中位段丘部」では長い期間にわたって主軸方向を変えながら集落が營まれてきたことを物語っているのではないだろうか。規模は、長軸が6mを超える住居跡が5軒検出され、「低位段丘部」とは異なる様相を示している。第92号住居跡は、長径8.30m、短径7.90mの円形で、該期の中では最大規模である。水戸市二の沢B遺跡（古墳群）¹⁴⁾でも同様な形状を示すものや八角形の形状を示す住居跡が複数報告されており、単なる住居ではなくそれ以外の性格を



S128



S129

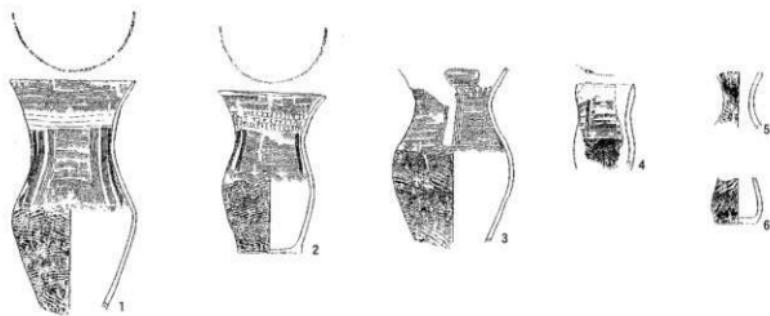


S133

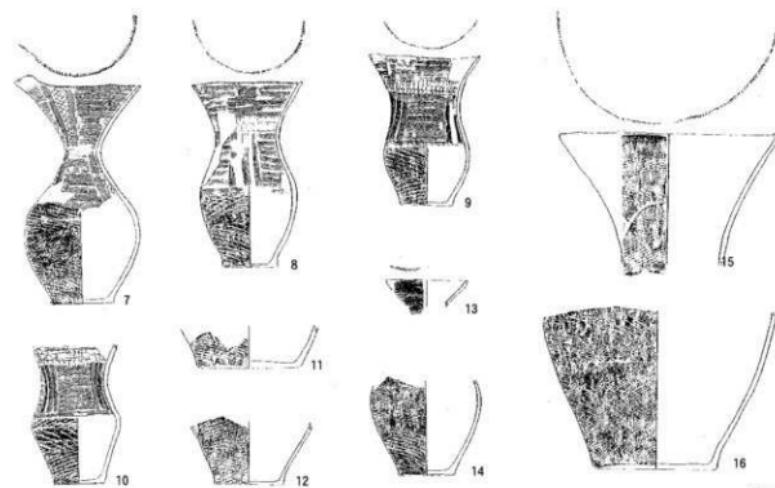
第206図 第28・33・37号住跡出土土器

考慮する必要もあるが、調査例が少ないため不鮮明な部分も多く、今後の類例の増加を待ちたい。

「中位段丘部」の13軒の住居の中で、比較的良好な状態で弥生土器が出土している住跡は、第88・90・96・100・105・112・114・134号住跡である。第92・134号住跡からは完形の小形広口壺（第208図8、第209図26）が出土しており、頭部下端に廉状文が施され胸部に附加条一種（附加2条）が施されていることから、栃木県東部や茨城県西部を中心に分布する二軒屋式土器と考えられる。また、第100号住跡からは口辺部から頭部の大部分を欠損しているものの、胸部に附加条一種（附加2条）の縄文が施されている広口壺（第208



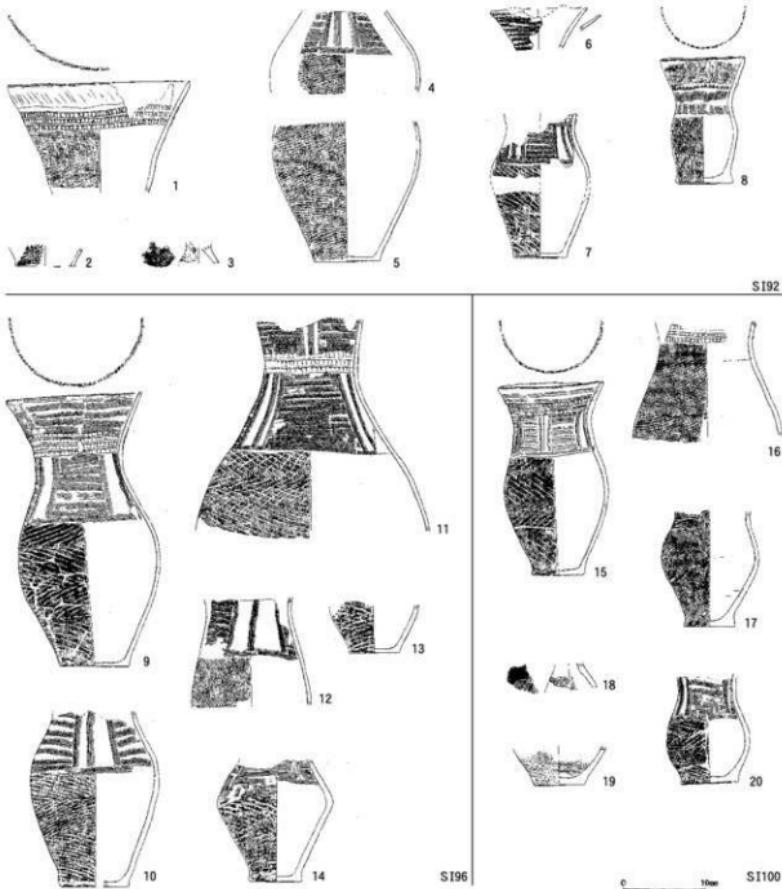
SI88



SI90

第207図 第88・90号住居跡出土土器

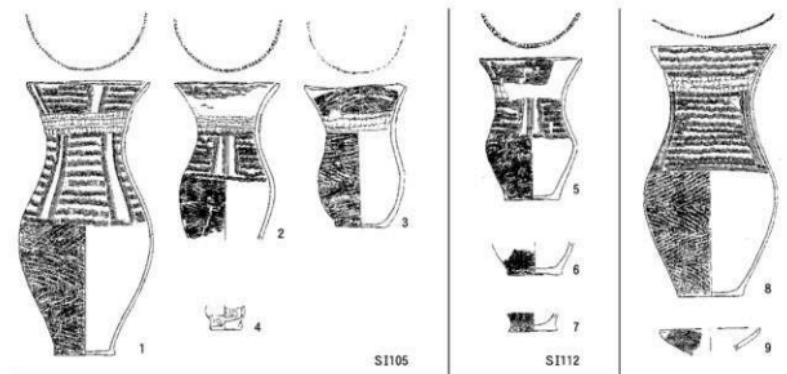
図17) が出土しており、これも二軒屋式土器と考えられる。同様の特徴を備える破片は、第90・112・114号住居跡からも出土している。第100号住居跡からは、樽式と思われる体部内・外面及び底部がヘラ磨きされた土器(第208図19)が出土しているが、底部近くのわずかな部位のため明確ではない。第114・134号住居跡からは、埼玉県北部や群馬県東部、栃木県南西部に分布する吉ヶ谷式土器⁽¹⁾(第209図21・25)が出土している。21は口縁部片で、口唇部に繩文原体による押圧、口辺部には意図的に輪積痕を残しR Lの単節繩文が施されている。25は口唇部にR Lの単節繩文を回転押圧し、口辺部上位は輪積痕を残したうえで丁寧にナデが施されている。さらに、口辺部中位から頸部にかけては3段に分けて帯状の指頭痕が認められ、口辺部中位から胴部上位にかけて口唇部と同じR Lの単節繩文が施されている。また、第134号住居跡から出土している22・23(第



第208図 第92・96・100号住居跡出土土器

209図)の文様構成や器形は十王台式土器と同様であるが、胸部に附加条一種(附加2条)の縞文が施されている。23は複合口縁であることから他地域の影響を受けていると考えられる。『大戸下郷遺跡1』では、当区域の第100号土坑から「2段の複合口縁を有し、胸部に羽状構成をとる附加条一種(附加2条)の縞文が施された上稲吉式土器が出土している」と報告されている。

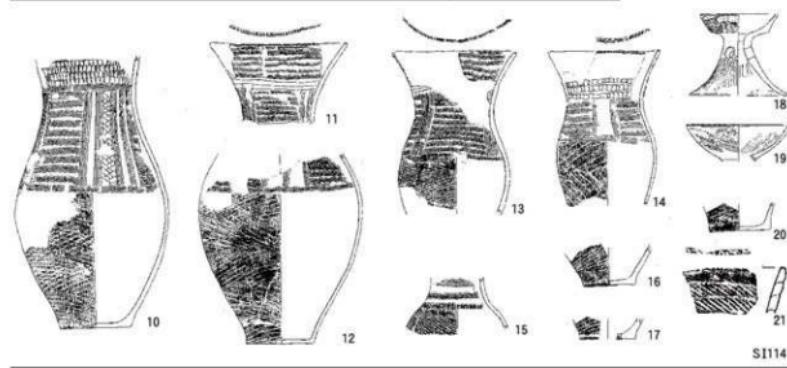
以上、「中位段丘部」の住居から出土した他地域の土器について述べてきたが、十王台式土器についても良好な遺存状態を示している。第88(第207図1~6)・96(第208図9~14)・105(第209図1~4)・112(第209図5~7)・134号住居跡(第209図22~27)は、文様構成や施文の特徴などから同時期のものと考えられる。また、第100号住居跡からも良好な資料(第208図15)が出土しているが、前述の時期より一段階古いものと判断され



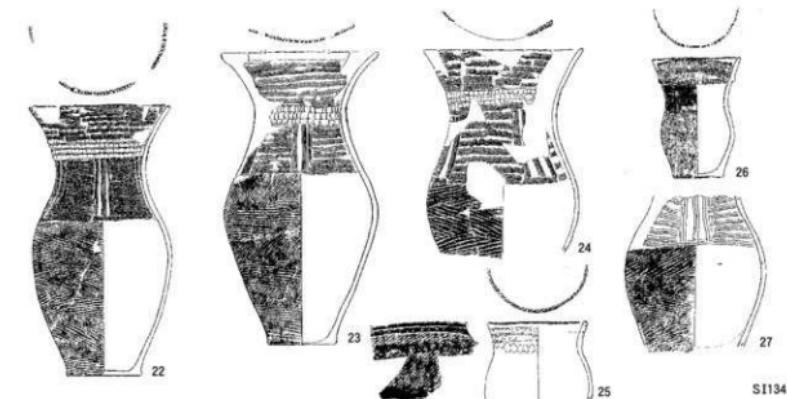
SI105

SI112

8
9



SI114



0 10cm

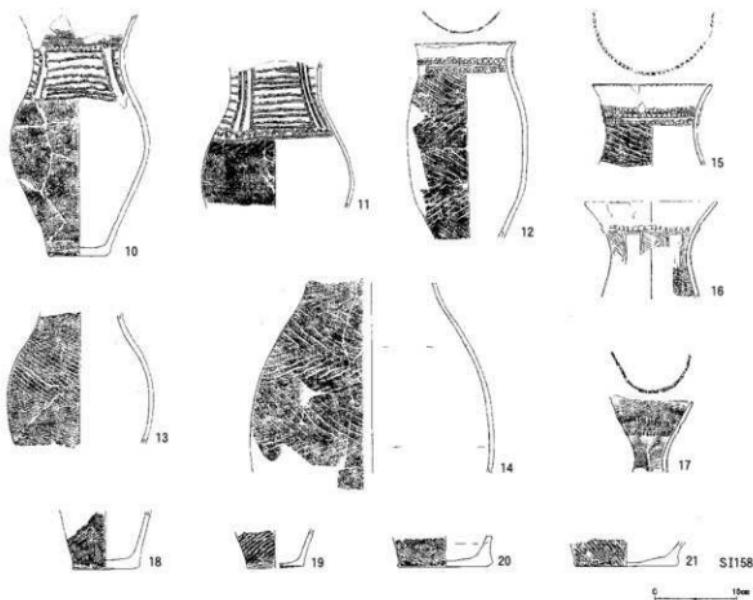
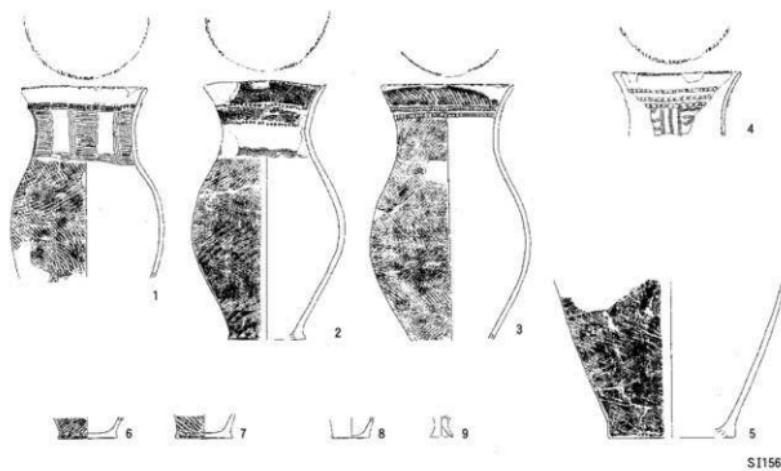
第209図 第105・112・114・134号住居跡出土土器

る。第114号住居跡の覆土中層からは「帯状に刺突された区画文」を有する土器（第209図10）が出土しており、投棄されたと判断できる。この土器は、中位段丘部の十王台式土器の中では最新段階¹⁶⁾に属するものと考えられ、同じ覆土中層からは土師器高杯（第209図19）も出土している。特徴的な土器は、頸部文様帶と胴部文様帶を区画する下向きの連弧文が施文された土器である。第88号住居跡からは小形広口壺（第207図2）、第90号住居跡からは片口壺（第207図7）がそれぞれ出土しており、久慈川流域の影響を受けている可能性が高い¹⁷⁾。炉跡に炉石が据えられていた住居跡は第88号住居跡（粘土塊）と第96号住居跡（凝灰岩）の2軒である。

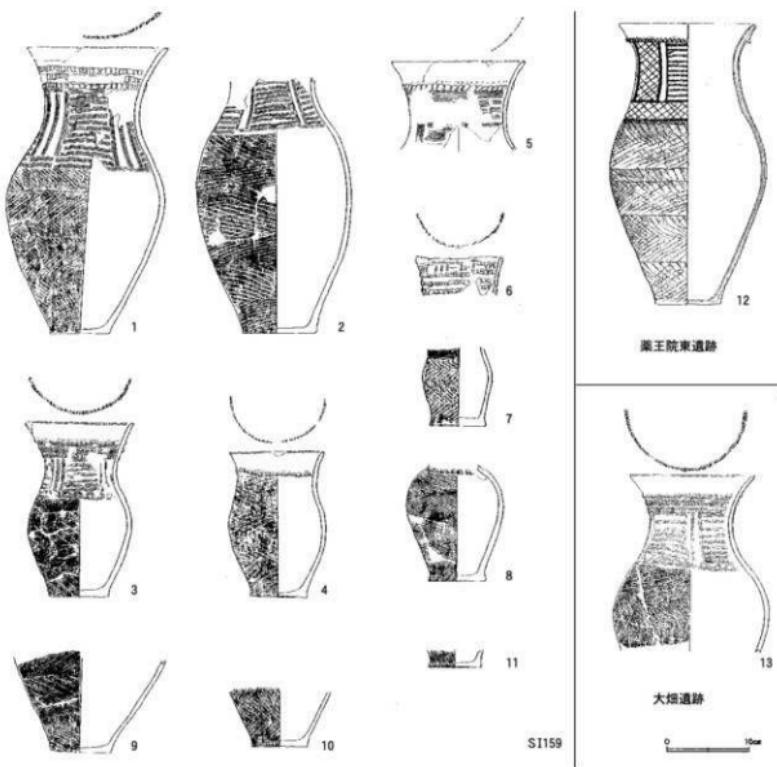
「台地上」では、前述したように11軒（第141・143・148・149・152～156・158・159号住居跡）が検出されている。その中で第141～155号住居跡は耕作による擾乱を受けていたり、大部分が調査区外のものもあり、遺存状態が良くない。形状は、隅丸方形あるいは隅丸長方形で、主軸方向は、第141・149号住居跡が北から西へ20°未満、第143・148・149・153・156号住居跡が北から西へ40～55°の範囲に收まり、第154・155・158・159は東寄りであり、3パターンが認められる。規模は、ほぼすべての住居跡が当遺跡内での平均的な大きさを示している。

「台地上」の11軒の住居群の中で、特徴的な遺物が出土しているのは第156（第210図1～9）・158（第210図10～21）・159（第211図1～11）号住居跡である。第156号住居跡では口辺部が無文の土器が出土している。1は、口辺部が無文で繩文原体による刺突のある隆帯が1条巡り、頸部文様帶の施文幅が狭い。類似する土器は水戸市薬王院東遺跡¹⁸⁾（第211図12）から出土している。また、2・3は文様構成から粗製土器と考えられ、2は口辺部及び頸部と胴部に付加条二種（付加1条）が施文され、頸部上位には繩文原体による刺突列が2条、頸部下端には無文帯を有し、頸部と胴部を櫛歯状工具による波状文で区画している。全体的な器形は十王台式土器と思われるが、施文の手法は上稲吉式土器の様相を示している。しかし、口辺部上位に貼瘤が無いこと、頸部下端の無文帯に櫛描文を有していること、付加条二種（付加1条）が施文されていることが上稲吉式土器との違いとしてあげられる。同様の土器は土浦市根鹿北遺跡¹⁹⁾や大洗町長峯遺跡²⁰⁾からも出土しており、十王台式文化圏と上稲吉式文化圏の交流を示す好資料と考える。第158号住居跡から出土した11は、頸部と胴部の文様帶を波状文と直状文で分割している。同様の土器は洞沼前川を挟んで南に位置する大畑遺跡²¹⁾（第211図13）からも出土している。また、10は口辺部が無文で、隆帯には棒状工具による押圧、隆帯間に櫛歯状工具による横走文が施されており、頸部文様帶の施文幅が狭く古い段階の様相を示している。第159号住居跡から出土した2も口辺部を欠損するものの第158号住居跡の10と同様の文様構成で、古い様相を示している。口辺部が無文の土器は、第159号住居跡からも数個帯が出土しており、1には古い段階から新しい段階への過渡期の様相を認めることができる。3は小形の広口壺で、口辺部は無文、隆帯間に櫛歯状工具による横走文を有している点は第158号住居跡の11と共通し、頸部文様帶の文様構成は第158号住居跡の11と共通している。

「台地上」においても他地域の弥生土器は検出されている。第158号住居跡からは、胴部下端に付加条一種（付加2条）が施文された底部片（第210図20・21）、口唇部は繩文原体押圧で、2段の複合口縁下端には原体による刺突、頸部には櫛歯状工具による下向きの連弧文が施文された片口壺の口辺部片（第210図17）。第159号住居跡からは頸部が無文帯で胴部に付加条一種（付加2条）が施文された小型広口壺（第211図7）、頸部下端に連状文、胴部には付加条一種（付加2条）が施文された壺（第211図8）、胴部下端に付加条一種（付加2条）が施文された底部片（第211図11）などが出土しており、二軒屋式土器の様相を示している。炉跡に炉石が据えられていたのは、第154・159号住居跡でいずれも砂岩である。第154号住居跡の炉石は、後世の耕作機械の影響を受けている可能性がある。また、第159号住居跡では「L字状」に設置されており、当遺跡における唯一の例である。



第210図 第156・158号住居跡出土土器



第211図 第159号住居跡・薬王院東遺跡・大仏遺跡出土土器

(2) 集落の変遷

ここでは、出土遺物から該期の時期分けを行い、集落の変遷についてまとめてみたい。

「台地上」では、第156号住居跡から出土した1(第210図参照)は、口辺部幅が無文で狭く、隆帯が1条であり、頸部の文様帯幅が狭いなどの特徴から薬王院東遺跡(第211図12)と時期が同じかそれに後続する時期への過渡期の土器と考えられ、当遺跡における該期の中でもっとも古い段階の大戸下郷Ⅰ期とする。

第158・159号住居跡から出土している土器では10(第210図参照)・1・3(第211図参照)が特徴的で、いずれも口辺部幅が狭く無文であり、頸部の文様帯幅も狭い。中でも、3は小形広口壺で、大仏遺跡の第1号住居跡から出土した土器(第211図13)と大きさが違うが、同様の文様構成が認められ、第158号住居跡の11(第210図参照)も同様である。大仏遺跡の土器(第211図13)は、十王台式土器群の中で第2段階にあることがすでに明らかになっており²²⁾、同様の文様構成を示す第158・159号住居跡の出土土器を大戸下郷Ⅱ期とする。

「中位段丘部」では「台地上」に続く段階の土器が見られる。第100号住居跡の出土土器では、15や20(第208図参照)が時期判断の対象となろう。15は、粗いながらも口辺部に櫛齒状工具による波状文が施文されており、大戸下郷II期とは違った様相を示している。また、頸部の文様帯幅が狭いことも特徴といえよう。20は口辺部が欠損しているため明確ではないが、15同様に頸部の文様帯幅が狭いことが時期判断の対象となり、第100号住居跡から出土した土器を大戸下郷III期とする。第92号住居跡の出土土器もこの時期に含まれると考える。

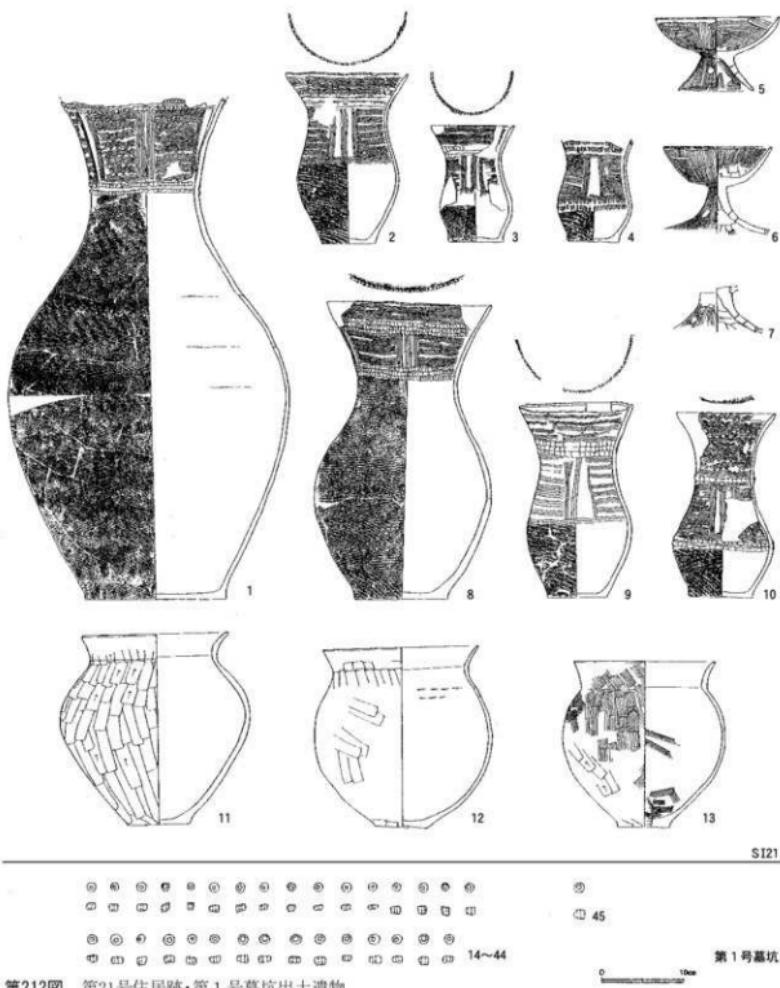
次いで第88・90・96・105・112・114・134号住居跡からの出土土器であるが、第88号住居跡では1と2(第207図参照)が注目される。1は底部を欠損する中型の広口壺であるが、頸部の文様帯幅が大戸下郷III期より広くなり、小形の広口壺の2も文様構成は1と同様である。このような傾向は、第114号住居跡から出土した8や13(第209図参照)、第112号住居跡から出土した5(第209図参照)にも同様の傾向を認めることができる。次いで第90号住居跡から出土した8・9・10(第207図参照)は、頸部の文様帯幅がさらに広がり、下端が胴部最大径近くまで広がっている。第96号住居跡から出土した9(第208図参照)は口辺部幅も頸部文様帯の幅も広くなり、第134号住居跡から出土した22・23・24(第209図参照)も同様である。さらに、第105号住居跡から出土した1(第209図参照)は、頸部の文様帯幅がより広がる傾向が認められる。また、第105号住居跡から出土した3(第209図参照)の文様構成から粗製土器と考えられるが、施文の退化傾向が認められる。これらの中の住居跡から出土した土器は、文様構成の特徴などから大戸下郷IV期とする。

最後に「低位段丘部」について概観してみる。「低位段丘部」では、明確な時期を特定できる住居跡が少ないが、第28・33・37号住居跡の遺物を抽出してみる。第33号住居跡から出土した7(第206図参照)は、隆帯に押圧が認められないため退化傾向にあると考えられ、9(第206図参照)は頸部の文様帯幅が胴部最大径近くまで広がっている。同様の傾向は第28号住居跡から出土した4(第206図参照)や第37号住居跡から出土した13(第206図参照)にも認められ、頸部文様帯の下端が胴部最大径まで確実に拡大している。さらに、第37号住居跡から出土した15(第206図参照)には、頸部文様帯の施文に粗さが目立ち、これも退化傾向の一つと捉えることができる。これら3軒の土器群は、前述した特徴から「中位段丘部」の第88・90・96・105・112・114・134号住居跡と同時期と考えられ、大戸下郷IV期に含むことにする。

この「低位段丘部」では第21号住居跡²⁰が検出されている。第21号住居跡は、当遺跡における土師器との唯一の共伴住居であり、「弥生土器と土師器の供伴が見られることから、弥生時代末から古墳時代初頭にかけて生活が営まれた住居であると推定される」と『大戸下郷遺跡1』で報告されている。出土土器(第212図参照)の中には、頸部と胴部に「帯状に刺突された区画文」を持つ土器(第212図4)が出土している。これらの特徴を備えた弥生土器は古墳時代前期の土師器と供伴する例が認められるとの指摘²¹もあり、第21号住居跡も同じ出土傾向を示していると考えられる。同様の土器は「桜の郷遺跡群」の網山遺跡²²や宮後遺跡²³などからも出土しており、「弥生時代後半から古墳時代前期初頭」と位置づけられている。また、10(第212図参照)のように、十王台式土器としての器形が崩れています。

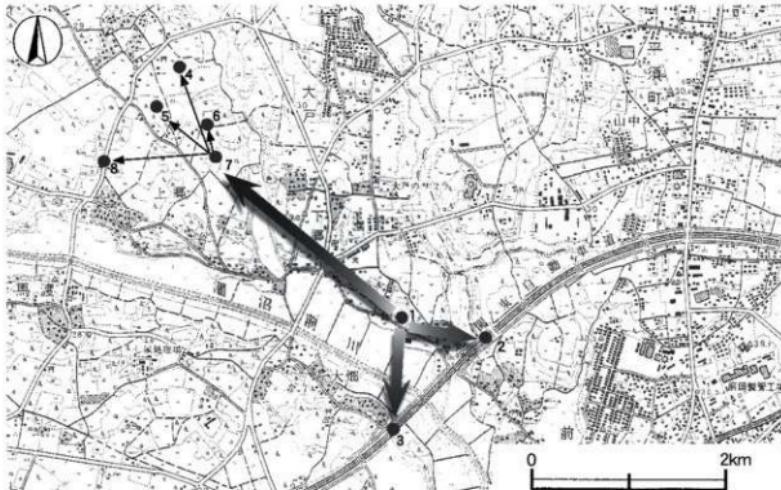
第21号住居跡を掘り込んでいる第1号墓坑については、「第21号住居の魔絶時期と埋葬時期の時間差はあまりないと考えられ、古墳時代初頭のこの集落の有力者の墓と想定される」と『大戸下郷遺跡1』で報告されている。墓坑からは威信財のガラス製小玉31点(第212図14~44)と琥珀玉1点(第212図45)が出土しており、「十王台式最後の墓壙」との指摘²⁴もあり、第21号住居跡・第1号墓坑を大戸下郷V期とする。

以上、簡単にではあるが「台地上」「中位段丘部」「低位段丘部」について出土土器から個々の住居跡の時期について概観してきた。「台地上」「中位段丘部」「低位段丘部」のいずれからも該期の住居跡が複数検出されているが、そのすべてが同時期に存在したのではなく、出土土器の時期差や遺構形状の違いなどから、小集団



第212図 第21号住居跡・第1号墓坑出土遺物

の移動や住居の建て替えが継続的に行われてきただけが想定され、大戸下郷Ⅰ～Ⅴ期に分けることが可能となる。つまり、「台地上」には古い段階の十王台式土器を持つ住居が所在し、「中位段丘部」ではそれに後続する時期、さらに、「低位段丘部」では「中位段丘部」と同じ時期かそれよりも新しい時期の住居の存在が確認され、時期が下るにつれて「台地上」から「低位段丘部」へと集落が移動する傾向を示していることが指摘できるのである。



第213図 「大戸遺跡群」集落変遷概念図 1 大戸下郷遺跡 2 矢倉遺跡 3 大畠遺跡 4 宮後遺跡
5 大塚遺跡 6 綱山遺跡 7 石原遺跡 8 木戸遺跡

(3) 「大戸遺跡群」との関わり

「大戸遺跡群」全体の様相を見ると、「大戸遺跡群」は、大戸下郷遺跡と大畠遺跡、矢倉遺跡、さらには宮後遺跡、大塚遺跡、綱山遺跡、石原遺跡、木戸遺跡（「桜の郷遺跡群」）をも含んでいる。これまでの調査結果から、「大戸遺跡群」においては「大畠遺跡→矢倉遺跡→石原遺跡→大戸下郷遺跡」という集落の変遷が想定されていた³⁹⁾が、今回の調査結果から次のような新たな想定が可能となる。つまり、第156号住居跡の弥生土器（大戸下郷Ⅰ期）は、大畠遺跡のそれよりも1段階古く、薬王院東遺跡と酷似しており、後続する時期（大戸下郷Ⅱ期）の土器は当遺跡にも大畠遺跡にも認められることから、この段階において「大戸下郷遺跡→大畠遺跡」という「集団の移動または分派」の想定が可能となる。さらに、当遺跡の東に位置する矢倉遺跡についても大畠遺跡と同様の想定が可能である。矢倉遺跡で初出する古い時期の土器は大戸下郷Ⅲ期に相当し、この段階において「大戸下郷遺跡→矢倉遺跡」という「集団の移動または分派」があったと想定される。

「桜の郷遺跡群」では、「一部の集団が支流の小橋川を遡って「桜の郷遺跡群」最初の十王台式集落である石原遺跡に至った」³⁹⁾という指摘のように、石原遺跡では大戸下郷Ⅲ期に相当する時期から集落が営まれたことが明らかになっており、この時期に「大戸下郷遺跡→石原遺跡」という「集団の移動または分派」が想定できる。その後の「桜の郷遺跡群」内での集落変遷については「石原遺跡の集落が存続している期間に大塚遺跡の該期集落が形成されたものと考えられる。（中略）そして、大塚遺跡を拠点として、宮後遺跡と綱山遺跡に集落が広がっていったものと考えられる」³⁹⁾という指摘の通りといえよう。

もちろん、大戸下郷遺跡からの「集団の移動・分派」だけではなく、各時期においては「各遺跡→大戸下郷遺跡」という想定も可能であろう。しかし、大戸下郷Ⅰ期の住居は「大戸遺跡群」の中では当遺跡だけで

大戸下郷遺跡

大畑遺跡

矢倉遺跡

石原遺跡

大塚遺跡

綱山遺跡

宮後遺跡

木戸遺跡

第214図 「大戸遺跡群」における集落変遷模式図

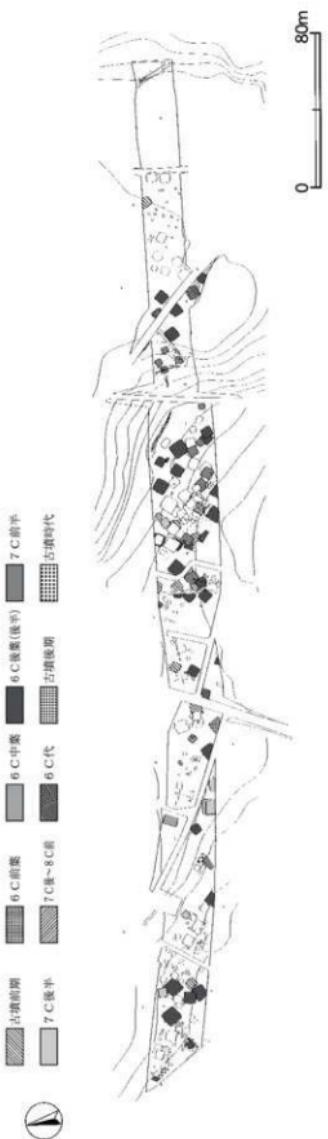
あり、それに後続する時期の集落が当遺跡も含めた周辺部にも所在したことから、該期の中心が大戸下郷遺跡であり、長期間存続した拠点的な集落であったという想定され、大戸下郷遺跡からの移動や分派により、周辺地域で同時に集落が存在したと考えられる。また、当遺跡において該期における他地域の土器（上福吉式土器、二軒屋式土器、樽式土器、吉ヶ谷式土器、南関東系の土器）が揃って出土していることも拠点的な集落であったことを裏付けていると考える。

石原遺跡への「集団の移動または分派」が想定される時期後も、当遺跡における該期の集落は、大戸下郷IV期・V期と存続してはいるものの、住居数が減少して集落の衰退傾向を読みとくことができる。「桜の郷遺跡群」では「弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭」の住居数が40軒（宮後遺跡4軒、大塚遺跡18軒、綱山遺跡12軒、石原遺跡6軒）存在し、後続する「古墳時代前期」の住居数に至っては103軒（宮後遺跡9軒、大塚遺跡25軒、綱山遺跡53軒、石原遺跡16軒）を数え、かなりの規模で集落が存続するのに對し、当遺跡では「弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭」に相当する住居跡は1軒であり、「古墳時代前期」と判断できる住居数も11軒と少ないとから、当遺跡は大戸下郷IV期からV期にかけて衰退期を迎えたと考えられる³¹⁾。

4 古墳時代

該期における住居数は76軒である。そのうち前期は11軒（14.4%）に対して後期³²⁾は62軒（81.5%）と最も多く、その他に出土遺物や重複關係から3軒（約4%）が古墳時代と判断されている。62軒の古墳時代後期の住居跡は、「低位段丘部」で11軒（17.7%）、「中位段丘部」で41軒（66.1%）であり、「台地上」では西側縁辺部に10軒（約16.1%）が確認されたに留まっている。

ここでは、当遺跡の中心時代と考えられる古墳時代の中でも、特に古墳時代後期の62軒に焦点を絞り、若干の考察を述べることにする。



第215図 古墳時代遺構配置図

古墳時代後期の住居跡は、大きく6世紀代(62.9%)と7世紀代(32.2%)に分けられ、1軒だけが7世紀後葉から8世紀前葉とされ、出土土器と遺構の形状などから5期に分けられる。内訳は、6世紀前半(前葉と中葉を含む)が2軒(I期)、6世紀後半(後葉を含む)が33軒(II期)、7世紀前半が13軒(III期)、7世紀後半(7世紀後葉から8世紀前葉を含む)は8軒(IV期)である。その他に、遺構の検出状況が悪く、遺物が少ない4軒は6世紀代とされ、残りの2軒は重複関係や出土土器などから古墳時代後期と判断している。

(1) 古墳時代後期第I期

この時期の住居跡は2軒(第46・106号住居跡)である。第46号住居跡は「中位段丘部」西寄りの標高14mのやや広がった平場に位置しており、焼失住居である。出土遺物もわずかで、6世紀前葉の特徴を示す坏2点と須恵器の壺などが出土している。『大戸下郷遺跡1』では、「壺は出土状況から投棄された」と報告されている。第106号住居跡は「中位段丘部」の中央部に位置している。主軸方向は古墳時代後期の中では数少ない東向きである。

この時期、当遺跡にはまだ大きな集落が出現していないかった可能性が想定されるが、南側の緩やかな傾斜をもつ平坦部などに集落の広がりを求めることが可能であるろう。

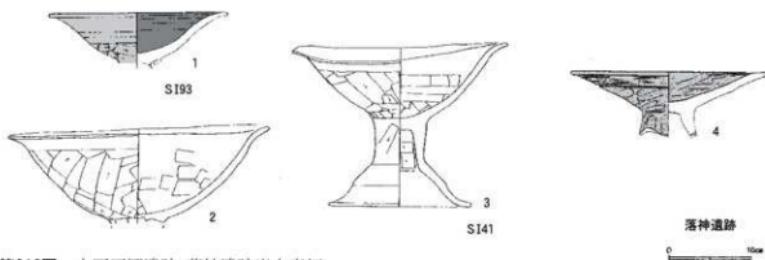
(2) 古墳時代後期第II期

この時期の住居跡は33軒(第5・9・13・16・19・22・32・41・43・53・56・57・62・65・66・80・81・84・86・93・97・98・123・125・127・130・132・133・136・144・145・147・151号住居跡)である。I期が2軒であるのに対し、住居数が増加して集落が拡大した時期と捉えられる。検出された地区も「低位段丘部」から「台地上」にわたっており、住居跡の分布は、集落が急激に拡大したことを裏付けている。該期の住居跡は、第57・84号住居跡を除いてすべてが北西方向を主軸としている。遺構全体が確認された住居跡の規模は3~8mで、「低位段丘部」では第5号住

跡が当遺跡の中での最大規模の長軸8.08m、短軸7.98mである。第16号住居跡も長軸7.60m、短軸7.43mで大型に属している。この2軒は隣り合っており、第19号住居を含めて同時期に機能していた可能性が高い。

「中位段丘部」では、第80号住居跡の長軸7.70m、短軸7.40mが大きく、出土土器や遺構の配置、主軸方向などから第97号住居跡との同時性が指摘できる。

「台地上」でも同様で、第144・145号住居跡が形状、規模、主軸方向などが同規模である。遺物が少なく、遺構の形態などから6世紀代と判断した第150号住居跡も第144・145号住居跡と形状や規模、主軸方向を同じくしており、同時に機能していた可能性が高い。その他にも第81・86・93号住居跡や第132・133号住居跡などをもまとまりとして見ることができ、「低位段丘部」から「台地上」にかけてそれぞれに2～3軒程度のまとまりがあったと考えられる。



第216図 大戸下郷遺跡・落神遺跡出土高坏

第二期住居群の中で、特徴的な遺物は第41号住居跡の高坏（第216図2・3）である。『大戸下郷遺跡1』では6世紀後葉と判断しており、「口径約32cmの県内では希な大型の高坏の坏部と口径約27cmの高坏が出土しており、当地域のこの時期の権力者の存在を窺わせる」と述べている。2・3の坏部の調整は、体部外面にヘラ削りが認められ、内面は共にナデ調整である。『大戸下郷遺跡2』でも、「中位段丘部」に位置している第93号住居跡（6世紀後葉）から口径約22cmの高坏の坏部（第216図1）が出土しており、体部外面下端にヘラ削りが認められるが内面のナデ調整は認められない。また、外面には赤彩が施され、内面は黒色処理されており、第41号住居跡の1・2とは様相を異にしている。瀬沼前川流域を含む当遺跡周辺ではこのような大型の高坏の出土例がなく、大洗町落神遺跡³³の第58号住居跡から出土した高坏の坏部（第216図4）に類例を求めることができる。落神遺跡の例は6世紀後半と判断されており、他の出土土器からも当遺跡の第41・93号住居跡と同時期と考えられる。4は口径は約24cmで、体部外面にはヘラ削りやナデ調整が認められる。また、内・外表面は赤彩されており、器形や調整など、当遺跡の第93号住居跡から出土した3との類似点が多い。落神遺跡では、4が竈東側袖部に寄り添うように逆位で出土していることから「竈祭祀」との関連性を指摘しているが、当遺跡ではそのような出土状況は認められない。しかし、このような高坏は県内でも希であることから、限られた供獻具として限定的に製作・使用されたものと考えられる。

この時期の住居群の中で、竈内から遺物が出土する住居跡が10軒（第16・32・65・66・81・86・122・130・144・147号住居跡）確認されている。第16号住居跡では2個体の甕が出土し、第32号住居跡では口辺部が欠損した甕が横位で出土している。第65号住居跡では、甕と小形甕が支脚上に並ぶような状態で出土している。第

66号住居跡では、壺・甕（2個体）・支脚の4点が出土し、「支脚上から倒れたと思われる甕がつぶれた状態で出土している」と『大戸下郷遺跡1』で報告されている。第81号住居跡では甕に壺が乗った状態で斜位で出土しており、支脚は焚き口付近から出土している。第86号住居跡でも甕が横位の状態で1個体出土している。第144・147号住居跡からはそれぞれ甕が2個体出土しており、中でも第147号住居跡は、甕が正位の状態で2個体並んで出土している。これらの住居跡では、住居の廃絶時には竈に甕が掛けられた状態で遺棄された可能性が高く、その後の崩落で位置が動いたため斜位や横位で出土したと想定される。

一方、第122号住居跡では甕が出土しており、出土状況から意図的に竈内に遺棄したものと考えられる。第130号住居跡では、竈内から赤彩された高壺が逆位で出土しており、器部が意図的に打ち欠かれていることから、支脚として転用された可能性も考えられるが、強く二次焼成を受けていないことから、住居の廃絶時に何らかの祭的な行為がなされたとも想定される。

竈に遺棄された遺物について述べてきたが、第Ⅱ期の33軒の中で、住居の廃絶時に竈に甕を掛けたまま遺棄されていたと判断できる住居跡は8軒である。後続する第Ⅲ期からも2軒確認されている。当時、律令期の竈神祭祀などのような信仰はあるものの、竈に甕を掛けたまま遺棄することが日常的に行われていたことなのか、または何らかの目的を持つ行為なのかは調査からも究明することができなかった。今後の類例の増加を待ちたい。

(3) 古墳時代後期第Ⅲ期

この時期の住居跡は13軒（第36・45・68・72・77・79・99・101・122・138・139・140・142号住居跡）であり、「低位段丘部」から「台地上」まで住居跡の広がりが認められるが、最盛期を迎えた第Ⅱ期と比べると住居の規模や構成が縮小傾向にあり、衰退期を迎えていると想定される。特に、台地縁辺部の4軒（第138・139・140・142号住居跡）と「中位段丘部」の東部の2軒（第72・77号住居跡）などは小規模のものであり、集落の中心的な存在ではないと想定される。しかし、第36号住居跡から須恵器の提瓶・壺が出土し、第68号住居跡からは須恵器の壺、第79号住居跡でも須恵器の提瓶・小形壺が出土しており、集落の衰退期の中であっても優位性をもつ集團がいたことは容易に想定できる。

この時期でも竈内から遺物が出土する住居跡が2軒確認されている。第79号住居跡では、竈内から2個体の甕が出土し、出土状況から住居廃絶時には竈に掛けられたまま遺棄されたと考えられる。第125号住居跡では、耕作機械による搅乱を受けてはいたが、竈内から甕と手握土器、支脚が出土しており、甕は住居廃絶時に竈に掛けられたまま遺棄されたと想定されるが、手握土器については竈崩落後に流れ込んだ可能性が高いと考えられる。

(4) 古墳時代後期第Ⅳ期

この時期の住居跡は8軒（第17・27・29・30³⁰⁾・38・44・67・116号住居跡）であり、第Ⅲ期に引き続き衰退傾向が続いている。住居は「低位段丘部」と「中位段丘部」に散らばっている。該期の中では、第27・29・30号住居跡の軸がほぼ同じで規模も大きく、優位性をもつ住居であると想定される。また、遺構には伴わないと判断したが、須恵器高壺（第27号住居跡）や須恵器筒型器台（第30号住居跡）が出土していることは、これらを使用できる優位性をもつ中心的な住居が付近にあったことを裏付けている。また、第116号住居跡からは羽口が出土しており、鍛冶炉や鉄滓など具体的な遺構・遺物は見つかってはいないが、この時期の前後に鐵闇連の手工業が当集落において始まっていたと想定できる。

大戸下郷遺跡の中心である古墳時代後期の住居跡62軒を4期に分け、各時期を概観した。「大戸遺跡群」の他の遺跡には、古墳時代後期の住居が極端に少ないと皆無であるなか、当遺跡だけに該期の住居数が多いことは、この時期の中心が大戸下郷遺跡であったことを示していると考えることができる。

該期の大戸下郷遺跡は、一部台地上に遺構が所在するとはいえ、その大部分は「南西緩斜面部」という傾斜地に立地している。集落を営むのに平坦地を占地するのが当然と考えられるが、あえて傾斜地を集落とした背景には、当遺跡の南側には瀬沼前川とその支流である小橋川が合流してできた氾濫原（＝可耕地）が確保できることもひとつの要因と考えられる。農業を営み、その収穫を基本にそれなりの規模で生活するためには、当遺跡は目前に可耕地を持つという絶好の立地条件を兼ね備えており、その絶頂期を古墳時代後期第Ⅱ期に迎えるのである。しかし、より大規模な集落を営むためには平坦地であることが必須条件であり、その必須条件が満たされないことから第Ⅲ～Ⅳ期にかけて衰退していくと推察できる。特に、7世紀代後半の律令期直前期には、当遺跡での生活を継続する集団と、他の地での生活を求める集団とに分かれ、分派集団は「桜の郷遺跡群」へ進出したと想定されるが、それは権力的な移住とも推察できる。彼らはそこで律令期を迎えるが、残留した集団は「桜の郷遺跡群」へ進出していった集団に主導権を奪われていくと考えられる。

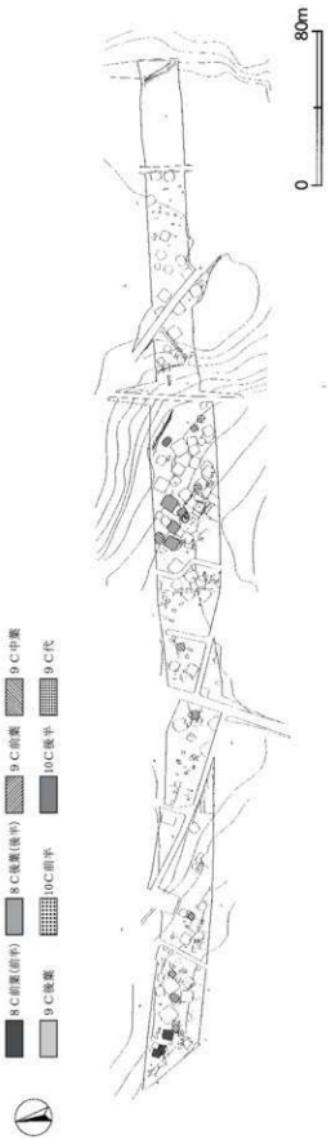
5 奈良時代・平安時代

該期の住居は21軒で、8世紀前半（前葉を含む）4軒、8世紀後半（後葉を含む）5軒、9世紀前葉1軒、9世紀中葉6軒、9世紀後葉1軒、10世紀前半1軒、10世紀後半2軒である。そのほか、出土土器が少量であり、住居の規模や主軸方向などから9世紀代と判断される住居跡が1軒である。以下、各時期ごとに概略を述べる。

8世紀前半の住居跡は4軒（第1～4号住居跡）で、「低位段丘部」の西に位置している。住居の規模は4～5mで、第4号住居跡が長軸5.25m、短軸5.15mの最大規模である。主な出土土器は須恵器坏で、これらの中には胎土に針状鉱物を含むものが多いことから、『大戸下郷遺跡1』では「木葉下窯産の可能性が考えられる」と報告されている。また、第1・2号住居跡については「出土遺物に時期差がなく、建て替えの可能性も考えられる」と指摘されているように、この時期は小規模な集落構成と想定される。

8世紀後半の住居跡は5軒（第51・110・111・118・121号住居跡）で、「中位段丘部」に位置している。第110・111・118・121号住居跡は、「中位段丘部」のやや東寄りに集中して位置しているのに対し、第51号住居跡はやや西寄りに単独で位置していることから、調査区南側の緩斜面地にも同時期の住居が分布していたと思われる。検出された中の第111・121号住居跡は、規模の違いはあるものの主軸方向が同じであり、出土土器などから判断して同時に機能していた可能性が極めて高いと考えられる。また、この2軒は建て替えが行われている。第111号住居跡は4辺が拡張され、第121号住居跡は2辺の拡張であり、拡張以前の住居は同様の規模であることが調査の結果判明している。出土遺物でも類似点が見られ、第111号住居跡からは須恵器高台付坏（口径21.5cm）・須恵器盤（口径21.4cm）・須恵器蓋（口径21.6cm）が出土しており、第121号住居跡では須恵器盤（口径23.0cm）が出土している。さらに、刀子も同様に出土していることから、この時期における中心的な住居であったと考えられる。

また、この時期の中では第118号住居跡も特徴的である。「中位段丘部」の東寄りに位置し、長軸5.40m、短軸5.18mの方形で、主軸方向はN-38°-Wであり、他の同時期の住居跡とは規模も軸方向も異なっている。住居跡からは土師器片2190点、須恵器片771点の他に、土製品、石器、鐵製品、鉄滓、手握土器などが出土



第217図 奈良時代・平安時代遺構配置図

している。土師器片は、覆土中層以下からの出土割合が多く、住居廃絶後の早い段階に北側から投棄されたものと想定される。また、南東コーナー側からも投棄されており、北側からの投棄時期よりやや遅れて投棄されたと推察できる。須恵器片については、広範囲での散在が認められ、覆土中層以上から出土するものが多く、土師器片より遅れて投棄されたと考えられる。土器片のほとんどは近接する位置から出土したものが接合する傾向にあるが、わずかに比較的離れた位置から出土したものや出土層位が違うものが接合している例もある。しかし、完形に復元できるものがないことから、土器片を投棄する過程で人為的に埋め戻しをしていると想定される。さらに、出土状況からこれらの出土遺物は住居に伴わないと判断され、これらを使用していた人々の住居跡は調査区域外にあるものと考えられる。また、「大」とヘラ書きされた小形の壺や円面鏡なども出土しており、文字を書ける人物の存在が想定される。

9世紀前葉の住居跡は1軒（第8号住居跡）で、「低位段丘部」に位置しており、竈の両脇に棚状施設を有しております。この形状を示した住居跡は当遺跡において1軒である。近隣遺跡では、宮後遺跡³⁰で5軒、大塚遺跡³¹で4軒、綱山遺跡³²で4軒、木戸遺跡³³で1軒確認されている。棚状施設を有する住居跡については、「齊一性の強い様相を呈することから、その背景には同一の集団が関わっていたものと推測され、（中略）非農業民である特定工人集団の関与を（中略）示している」³⁴という論説もあるが、当遺跡では特定工人集団に結びつくような遺構の検出は認められていない。

9世紀中葉の住居跡は6軒（7・12・39・64・76・120）である。これらは「低位段丘部」から「中位段丘部」にかけてまばらに検出されており、細々と集落が営まれていたと想定される。また、『大戸下郷遺跡1』では「第12号住居跡からは、「**ウ**」と墨書きされた土師器高台付皿や「川九万ヶ」と墨書きされた須恵器壺が出土している。第39号住居跡からも「**ウ**」と墨書きされた土師器壺が出土しており、字体も同一と考えられることから、両住居跡の同時性など密接な関係が想定される」と報告されている。

9世紀後葉の住居跡は1軒（第109号住居跡）で、多量の炭化材と焼土が出土していることから焼失住居と考えられる。竈右袖部からは須恵器瓶、左袖部からは土師器甕がそれぞれ竈袖部の補強材として出土しており、当遺跡では唯一の出土例である。また、灰釉陶器も1点（瓶類・水瓶カ）出土しており、これも唯一の出土例である。

10世紀前半の住居跡は1軒（第104号住居跡）で、当遺跡では唯一の南竈であり、底部を回転糸切りされた土師器壺が出土している。

10世紀後半の住居跡は2軒（第78・107号住居跡）である。第78号住居跡の竈からは、黒色処理でヘラ磨きされた土師器高台付壺が自然石の支脚上から逆位で出土している。貯蔵穴寄りの壁際から丸鞘の表金具が出土し、中央部上位が二次利用を目的に穿孔されており、本来の意味とは異なった使い方がされていたと想定される。また、鍵が2点出土しており、形状の特徴などから草刈り用として使用されたと考えられる。

以上、奈良時代から平安時代にかけて簡単に述べてきたが、古墳時代後期III期から始まった衰退の傾向は奈良時代・平安時代に入ってしまらなかった。その背景は、古墳時代後期第III期に「桜の郷遺跡群」方面へ移住していく集団の集落が「大戸遺跡群」の中での中心集落へと発展したことに大きく影響されていると考えられる。つまり、「桜の郷遺跡群」での大塚遺跡や宮後遺跡が行政的な主体となり、その他は周辺部の集落となつて規模が小さくなつたのではないかと考えられる。

6 終わりに

当遺跡は、繩文時代ではわずかに低位段丘部に住居が散らばるだけであったのが、弥生時代後期後半以降は集落が継続し、他の遺跡への「集団の移動または分派」が想定されるまでに充実する。その後、古墳時代前期や中期において衰退期や断絶期を迎えるが、古墳時代後期（6世紀後半）には再び隆盛期を迎え、周辺遺跡を圧倒するかのように集落が発展する。しかし、当遺跡が斜面地に立地しており、大規模集落を営めるだけの立地条件を備えていないのに対して、台地平坦部を占有する「桜の郷遺跡群」が「大戸遺跡群」の中心集落へと変わる中、当遺跡の衰退傾向は止まることはなかった。その結果、当遺跡は「桜の郷遺跡群」の衛星的な集落へと変わっていくのである。その後、大戸下郷遺跡は断絶期を経た後、中世や近世では墓域として利用されるのである。

これら「大戸遺跡群」における各遺跡の盛衰については、地理的環境が影響していることも想像できる。前述したように、当遺跡は緩斜面地に立地し、集落の立地としては決して適しているとは思えないが、立地要因のひとつに耕地の問題もあると考えられる。当遺跡の南には、潤沼前川とその支流である小橋川の合流点の広い氾濫原があり、水田耕作のための可耕地が充分に確保できる。大戸下郷の人々は、「斜面地」という“デメリット”よりも潤沼前川に面した氾濫原（＝可耕地）を利用するという“メリット”を選択したかのようであるが、その意図は不鮮明である。一方、宮後遺跡、大塚遺跡、網山遺跡、石原遺跡、木戸遺跡を含む「桜の郷遺跡群」は、大戸下郷遺跡と同様に潤沼前川に面しているとはいえ、可耕地までの距離が遠く、また、遺跡群の南東側に入り込んでいる小橋川は氾濫原が狭く可耕地を充分に確保できないという“デメリット”が考えられる。つまり、広い可耕地と狭い可耕地では、それぞれの地理的条件（可耕地や居住地の許容範囲）に見合った集落の規模が自ずと決まる。その結果として、弥生時代後期後半の拠点的な集落の出現を見、古墳時代後期第II期における大規模集落の形成につながると考えられる。しかし、それは稲作のための水田開発や經營が小規模で行われていた時期内に留まるであろう。水田耕作のための技術や労力が組織的に編成され、集団内に首長的な人物が現れるようになると、当遺跡の斜面地では可耕地や居住地の許容が不足

し、必然的に広い可耕地や居住地を求めるようになるはずである。それが「桜の郷遺跡群」であると思われる。弥生時代後期に「桜の郷遺跡群」へ「集団の移動または分派」という形で移り住んだ集団は、石原遺跡を起点に「集団の移動または分派」を繰り返し、その後わずかの間に大塚遺跡、宮後遺跡、綱山遺跡、木戸遺跡などへ集落を拡大していったのではないだろうか。「弥生時代」の項でも触れたように、「桜の郷遺跡群」では「弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭」の住居数が40軒あり、後続する「古墳時代前期」の住居数が103軒を数えるのに対して、当遺跡では「弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭」の住居跡は1軒で、「古墳時代前期」の住居数も11軒に留まることから、可耕地や居住地の許容が不足している当遺跡よりも、首長的な人物の出現に伴いより広い可耕地と居住地が確保できる「桜の郷遺跡群」が中心になっていったと考えるのである。

律令期に入ると国衙を頂点とした班田収授による効率的な税の確保を目的とした計画的な可耕地の確保とその整備がはかられ、大塚遺跡の掘立柱建物跡群が示しているように、都衙ないしは郷衙的な役割を担う建物群が建てられ隆盛を迎えていることからも、奈良時代・平安時代においても当遺跡と「桜の郷遺跡群」との優劣関係は変わらないのは明らかである。「桜の郷遺跡群」では、高盤や灰釉陶器、鉄製品、帶金具などの優位性を表す遺物が多く出土しているのに対して、当遺跡でのそれは非常に少ないとからも裏付けられるのである。

以上、大戸下郷遺跡について『大戸下郷遺跡1』と『大戸下郷遺跡2』を元に時代順に概略を述べてきたが、「大戸遺跡群」の中で当遺跡がどのような盛衰を繰り返してきたかについて、多少の光を当てることができたようと思う。しかし、事実の羅列に徹してしまったことは否めず、弥生時代後期後半や古墳時代後期第Ⅱ期のように、「大戸遺跡群」の中で当遺跡が拠点的な集落へと発展した背景の解明など不十分な点が多い。さらに、「大戸遺跡群」の中での当遺跡と周辺遺跡との関わりについては憶測の域を出でていない面も事実である。

近年、羽黒山遺跡や大戸富士山遺跡が調査されており、今回触ることはできなかったが、「桜の郷遺跡群」と当遺跡との相關関係についての新たな課題も見えてきた。今後は「大戸遺跡群」全体の歴史的な評価が行われるであろうが、今回の報告がそのための一助となれば幸いである。

註

- 1) 近藤恒重「大戸下郷遺跡 主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財團文化財調査報告』第216集 2004年3月
- 2) 鈴木素行「仙湖の辺一「武田式」以前の「十王台式」についてー」『茨城県史研究』第86号 茨城県立歴史館 2002年2月
- 3) 長谷川恵「北閉東自動車道(友部～水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大作遺跡・大塚遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第136集 1998年3月
- 4) 飯島一生「北閉東自動車道(友部～水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 矢倉遺跡・後口原遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第135集 1998年3月
- 5) 荒薛克一郎・田中幸夫「綱山遺跡 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書VI」『茨城県教育財團文化財調査報告』第243集 茨城県教育財團 2005年3月
「桜の郷遺跡群」という呼称については「茨城県最新発掘情報」(真吹歴「茨城県最新発掘情報」『考古学ジャーナル』46 2000年7月)が初出であり、「綱山遺跡」ではそれを準拠しつつ「当遺跡群は、矢倉遺跡、大畠遺跡、大戸下郷遺跡を含めた涸沼前川流域に分布する大戸遺跡群の北西端に位置する「支群」である」と述べている。
- 6) 川又清明・浅野和久「宮後遺跡3 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書IV」『茨城県教育財團文化財調査報告』第241集 2005年3月
- 7) 「桜の郷遺跡群」に関わる報告書では、十王台式土器と土師器が共伴する住居跡には「弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭」の呼称を用い、十王台式土器のみが出土している住居跡については「弥生時代後期後半」として区別している。
- 8) 長谷川恵・田中幸夫・小野克敏「大塚遺跡1 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書V」『茨城県教育財團文化財調査報告』第242集 2005年3月

- 9) 井上琢哉・小林健太郎「大塚遺跡2・木戸遺跡 主要地方道内原塙崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書V」『茨城県教育財团文化財調査報告』第258集 2006年3月刊行予定
- 10) 前掲5) に同じ
- 11) 村上和彦「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書I 石原遺跡』『茨城県教育財团文化財調査報告』第163集 2000年3月
- 12) 前掲9) に同じ
- 13) 鶴見貞雄「炉石住居発見—茨城県の弥生・古墳時代の住居例からー』『研究ノート』5号 財団法人茨城県教育財团 1996年6月
- 14) 江幡良夫・黒澤秀雄「十萬原新住宅市街地開発事業・都市計画道路十萬原東西線街路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書二の沢A遺跡・二の沢B遺跡(古墳群)・ニガサワ古墳群』『茨城県教育財团文化財調査報告』第208集 2003年3月
- 15) 植沼幹夫「関東の方形周溝墓 北開東①崎玉郡』同成社 1996年12月
- 16) 鈴木素行「武田石高遺跡における十王台式土器の編年についてー「十王台式」分析のための基礎的な作業ー』『武田石高遺跡旧石器・縄文・弥生時代編』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第15集 1998年3月
- 17) ア. 鈴木素行「武田西塙遺跡における十王台式土器の分析ー「小祝式土器」と「武田式土器」の誕生ー』『武田西塙遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第21集 2001年3月
イ. 鈴木素行「ぼんぼり山遺跡における十王台式土器の分析ー「小祝式撚巻段階」と「武田式西塙段階」の土器群ー』『ぼんぼり山遺跡・貉谷津遺跡』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第27集 2003年3月
鈴木氏は、第21集で久慈川流域の土器群を「小祝式土器」と設定した上で、第27集で「小祝式」に典型的な文様が施文されながらも、胎土・焼成・色調、他の文様などから、那珂川流域の製作と想定される土器も見受けられる。土器群の搬入、製作技法の導入として捉えられる現象は、久慈川流域からの移住がもたらしたものではないかと考えている。と述べている。第207図2も同様の観点から「久慈川流域の影響を受けている可能性が高い」という表現にとどめた。
- 18) 井上義安「薬王院東遺跡 千波中学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査広告書』水戸市薬王院東遺跡発掘調査会 1990年3月
- 19) 関口謙ほか「根鹿北遺跡・栗山窯跡 土浦市今泉塗園拡張工事事業地内埋蔵文化財調査報告書』土浦市遺跡調査会 1997年3月
- 20) 井上義安ほか「茨城県大洗町長峯遺跡』大洗町教育委員会 1973年12月
- 21) 前掲3) に同じ
- 22) 鈴木素行「遺跡群として表現される集落の移動—那珂川流域の十王台式土器と集落』『岡銚水戸・笠間の歴史』 郷土出版社 2004年4月
- 23) 前掲1) に同じ
- 第21号住居跡は十王台式土器を伴う住居跡であるが、土師器と共に作していることから『大戸下郷遺跡1』では古墳時代前期に位置づけられている。
- 24) 前掲16) に同じ
- 25) 前掲5) に同じ
- 26) 前掲6) に同じ
- 27) 飯島一生氏は、第1号墓壙からガラス玉が出土していることに着目し『十王台式最後の墓壙』であると予察している。
- 28) 前掲22) に同じ
- 29) 前掲5) に同じ
- 30) 前掲5) に同じ
- 31) 「大戸遺跡群」の各遺跡において、調査面積における各時期の住居跡の検出数を比較した。遺跡全体の何%を調査したのかによっても検出数は進ってくるであろうし、大戸下郷遺跡、矢倉遺跡、大塚遺跡は道路幅の調査、「桜の郷遺跡群」の各遺跡は面での調査であり、単純には比較できないがあえて検討材料とした。以下に表を掲載する。

表12 「大戸遺跡群」各遺跡の調査面積における住居跡検出数

遺跡名	面積(m ²)	弥生時代 後期後半(軒)	弥生時代後期後半～ 古墳時代前期初頭(軒)
大戸下郷遺跡	12,626	29	1
矢倉遺跡	9,430	31	0
大塚遺跡	10,879	10	0
宮後遺跡	39,064	1	4
大塚遺跡	26,799	16	12
鶴山遺跡	1,046	1	11
石原遺跡	10,414	17	6
木戸遺跡	3,226	1	0

- 32) 古墳時代後期の時期判別は下記によった。
- 樋村宣行・浅井哲也「常陸地域の鬼高式土器—久慈川・那珂川流域を中心として」『考古学ジャーナル』342 1992年1月
基本的には『大戸下郷遺跡1』の時期判別に従っている。しかし、『大戸下郷遺跡1』で報告されている「6世紀前半」や「6世紀後葉から7世紀前葉」の一部には、平成16年度の調査（『大戸下郷遺跡2』報告分）による類例の増加により帰属時期を再検討し、修正を加えることとなったが、その時期修正に懸かる責は本稿の筆者にある。
- 33) 井上義安ほか「落神遺跡」『大貫台地理文化財発掘調査報告書』第4冊 大洗町大貫台地理文化財発掘調査会 2001年6月
- 34) 第30号住居跡が掘り込んでいた第31号住居跡については、住居跡总数には加えたが、『大戸下郷遺跡1』で「第31号住居跡を拡張して第30号住居跡を構築したと推定され」とあることから、ここでは第30号住居跡として扱うこととする。
- 9) 井上琢哉・小林健太郎「大塚遺跡2・木戸遺跡 主要地方道内原塙崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書V」『茨城県教育財團文化財調査報告』第258集 2006年3月刊行予定
- 35) 前掲6) と同じ
- 36) 前掲8)・9) と同じ
- 37) 前掲5) と同じ
- 38) 前掲9) と同じ
- 39) 横生直彦「棚状施設をもつ堅穴建物の性格（2）—都市と農村の比較—」『國學院大學考古学資料館紀要』第18 2002年3月

参考文献

- ・今村啓爾『縄文文化の研究（2）生業』『陥穴（おとしあな）』雄山閣 1983年2月
- ・中村博信『横型陥穴研究序説』『栃木県考古学会誌』第19集 栃木県考古学会 1993年3月
- ・弥生時代研究班「茨城後期弥生土器編年の検討（I） 十王台式土器について」『研究ノート』創刊号 財団法人茨城県教育財団 1992年7月
- ・弥生時代研究班「茨城後期弥生土器編年の検討（II） 十王台式土器について」『研究ノート』2号 財団法人茨城県教育財団 1993年7月
- ・弥生時代研究班「茨城後期弥生土器編年の検討（III） 十王台式土器について」『研究ノート』3号 財団法人茨城県教育財団 1994年6月
- ・飯島一生「十王台式土器の相違を考える—矢倉遺跡と大塚遺跡の観察から」『研究ノート』8号 財団法人茨城県教育財団 1999年6月
- ・飯島一生「茨城町矢倉遺跡・大塚遺跡一調査前川を挟んで対峙する集落一」十王台式土器制定60周年記念シンポジウム『茨城県における弥生時代研究の到達点—弥生時代後期の集落構成から—』茨城県考古学協会・十王町教育委員会 1999年11月
- ・飯島一生「十王台式期における異系土器文化圏との交流—調査前川流域における十王台式土器と博式土器の出土例から—」『領域の研究』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会 2003年3月
- ・鈴木素行「半分山遺跡における十王台式土器の分析—「小祝式櫛巾段階」と「武田西墳・石高段階」の土器群—」『半分山遺跡』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第30集 2004年3月
- ・浅井哲也「茨城県における古墳時代前期の土器」『領域の研究』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会 2003年3月
- ・高橋一夫「古墳時代の研究2 集落と豪族居館」雄山閣 1994年6月
- ・鍋間正昭「武藏国における古墳時代前期の土器」『領域の研究』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会 1985年3月
- ・大木伸一郎「群馬北辺の弥生社会—後期弥生集落の分析から—」『研究紀要22—創立25周年記念論文集—』財団法人群馬県理文化財調査事業団 2004年3月

付 章

大戸下郷遺跡から出土した炭化材の樹種について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

茨城県茨城町に所在する大戸下郷遺跡では、縄文時代の陥し穴、弥生時代の土坑、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代の堅穴住居跡、近世の墓坑、時期不明の掘立柱建物跡、溝跡、土坑、井戸跡等の遺構が検出されている。このうち、弥生時代の第141号、第143号、第156号住居跡では、炭化材が良好な状態で出土している。

本報告では、各住居跡から出土した炭化材の樹種同定を実施し、弥生時代の木材利用に関する資料を得る。また、部材の形状による樹種の違いが見られるか等についても検討する。

1 試料

試料は、弥生時代の堅穴住居跡から出土した炭化材9点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

2 分析方法

木口（横断面）・杼目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3 結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、針葉樹1種類、広葉樹2種類に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

- カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晚材部への移行はやや急で、晚材部の幅は狭い。仮道管内壁には2本が対をなせばならん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型へニコ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

- ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圈部は1～2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

- キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圈部は3～4列、孔圈外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～40細胞高。

4 考察

炭化材はいずれも堅穴住居跡の床面直上から出土しており、住居構築材に由来する可能性が考えられている。第141号住居跡と第143号住居跡の炭化材は、いずれも丸材の可能性があるが、第143号住居跡で床面が赤変し、焼土が検出されているのに対し、第141号住居跡では赤変および焼土は認められない。一方、第156号住居跡の炭化材は板材の可能性が考えられている。これらの炭化材の樹種は、第143号住居跡が全点カヤ、第156号住居跡が全点ケヤキであった。一方、住居跡はカヤ、ケヤキ、キハダの3種類が認められ、住居によって種類構成が異なる。このことは、住居、部材などにより樹種利用が異なっていたことに由来する可能性もある。

本遺跡周辺では、隣接する矢倉遺跡でも弥生時代終末の堅穴住居跡から出土した炭化材の樹種同定が実施されており、クヌギ節、ケンボナシ属、モミ属、ヤマグワ、クリの5種類が確認されている（パリノ・サーゲイ株式会社、1998）。矢倉遺跡では、本遺跡で確認された種類が1種類も認められず、種類構成に違いが認められる。木材利用が異なる背景には、住居の大きさ、構造、部位の違いや、木材を伐採した場所の地形などに起因する局地的な植生の違いなどが推定される。ただし、同時期の木材利用に関する資料は少なく、今後継続した資料蓄積を行うことが望まれる。

表1. 樹種同定結果

遺構	出土位置	形状	試料番号	樹種	備考
第141号住居跡	床面直上	丸材か	①	ケヤキ	遺物取り上げNo. 8
			②	カヤ	遺物取り上げNo. 9
			③	キハダ	取り上げNo. 10
第143号住居跡	床面直上	丸材か	①	カヤ	取り上げNo. 1
			②	カヤ	取り上げNo. 2
			③	カヤ	
第156号住居跡	床面直上	板材か	①	ケヤキ	
			②	ケヤキ	
			③	ケヤキ	

引用文献

- パリノ・サーゲイ株式会社、1998、矢倉遺跡から出土した炭化材の樹種、「茨城県教育財団文化財調査報告書第135集 北関東自動車道（友部～水戸）建設地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 矢倉遺跡・後原遺跡」、日本道路公团東京第一建設局・財团法人茨城県教育財団、149-150。

写 真 図 版



調査区全景



調査区全景（西側上空から）

PL 2



遺構確認状況



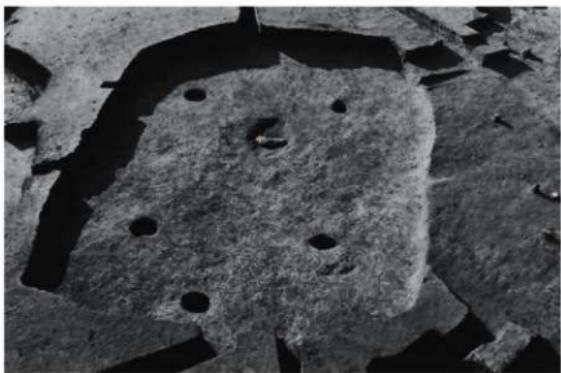
遺構完掘状況



踏し穴完掘状況

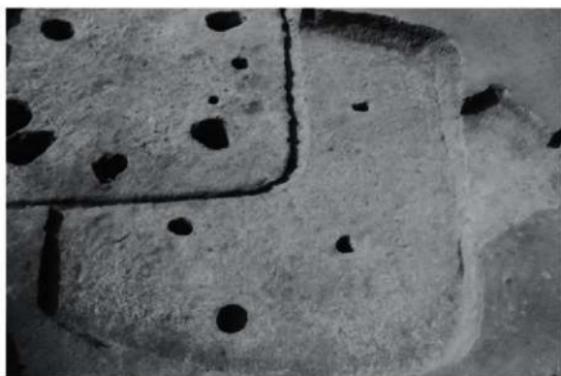


第92号住居跡
完掘状況



第96号住居跡
完掘状況

PL. 4



第 100 号 住居跡
完 挖 状 況



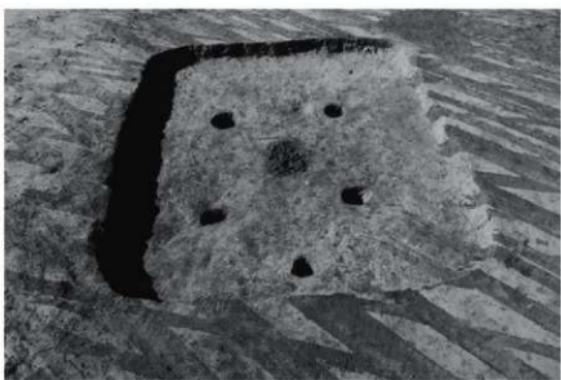
第 100 号 住居跡
遺 物 出 土 状 況



第 105 号 住居跡
完 挖 状 況



第 105 号 住 居 踪
遺 物 出 土 状 況



第 156 号 住 居 踪
完 挖 状 況



第 156 号 住 居 踪
遺 物 出 土 状 況

PL 6



第 114 号 住居跡
完 挖 状 況



第 114 号 住居跡
遺 物 出 土 状 況



第 114 号 住居跡
遺 物 出 土 状 況

第 158 号 住 居 踪
完 挖 状 況



第 159 号 住 居 踪
完 挖 状 況



第 159 号 住 居 踪
遺 物 出 土 状 況



PL 8



第 77 号 住 居 跡
完 挖 狀 況



第 79 号 住 居 跡
完 挖 狀 況



第 79 号 住 居 跡
遺 物 出 土 狀 況



第 79 号 住 居 跡
電 遺 物 出 土 狀 況



第 80 号 住 居 跡
完 据 狀 況

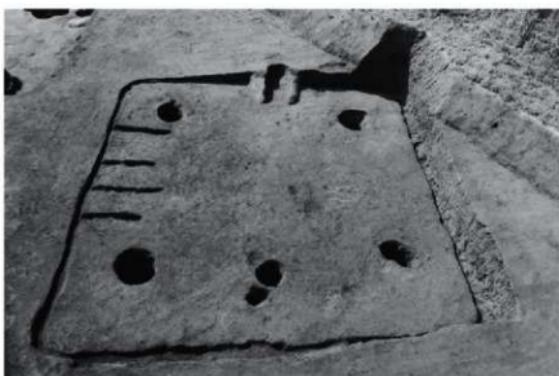


第 81 号 住 居 跡
完 据 狀 況

PL10



第 81 号 住 居 跡
遺 物 出 土 狀 況



第 86 号 住 居 跡
完 挖 狀 況



第 86 号 住 居 跡
遺 物 出 土 狀 況

第 97 号 住 居 踪 情
完 挖 状 况



第 98 号 住 居 踪 情
完 挖 状 况



第 99 号 住 居 踪 情
完 挖 状 况



PL12



第122号住居跡
完掘状況



第130号住居跡
完掘状況



第130号住居跡
竪完掘状況

第 144 号 住 居 踪
完 挖 状 況



第 144 号 住 居 踪
電 遺 物 出 土 狀 況



第 145 号 住 居 踪
完 挖 状 況



PL14



第 145 号 住居跡
遺物 出土 状況



第 146 号 住居跡
完 挖 状 況



第 147 号 住居跡
完 挖 状 況



第 147 号 住居跡
電遺物 出土状況



第 104 号 住居跡
完 据 状 況



第 110 号 住居跡
完 据 状 況

PL16



第 111 号 住居跡
完 挖 状 況



第 118 号 住居跡
遺 物 出 土 状 況



第 121 号 住居跡
完 挖 状 況



SI 88-354



SI 90-369



SI 96-380



SI 105-391

第88·90·96·105号住居跡出土土器

PL18



SI 114-399



SI 114-402



SI 134-411



SI 134-412

第96·105·114·134号住居跡出土土器



SI 158-449



SI 156-441



SI 156-439



SI 156-440

第156・158号住居跡出土土器

PL20



SI 114-404



SI 159-459



SI 159-461



SI 159-462



SI 159-458

第96·105·114·134号住居跡出土土器



SI 134-416



SI 158-454



SI 158-450



SI 96-379



SI 90-361



SI 90-362

第90·96·134·158号住居跡出土土器

PL22



SI 105-392



SI 90-367



SI 112-395



SI 88-357



SI 105-393



SI 100-385

第88·90·100·105·112号住居跡出土土器



第90・92・96・134・137・159号住居跡出土土器

PL24



SI 80-493



SI 81-509



SI 79-469



SI 79-470



SI 79-473



SI 79-474



SI 80-488



SI 84-516



SI 80-489



SI 81-507

第79·80·81·84号住居跡出土土器



第80·81·84·86·93·97·98号住居跡出土土器

PL26



SI 127-606



SI 130-610



SI 132-615



SI 97-553



SI 122-589



SI 132-613



SI 132-614



SI 132-617



SI 122-588



SI 127-607

第97·122·127·130·132号住居跡出土土器



SI 147-647



SI 147-644



SI 132-616



SI 130-611



SI 86-533



SI 86-538



SI 80-495



SI 80-496

第80·86·130·132·147号住居跡出土土器

PL28



SI 116-584



SI 116-585



SI 122-592



SI 101-573



SI 101-569



SI 106-580



SI 80-501

第80·101·106·116·122号住居跡出土土器



SI 81-511



SI 98-562



SI 145-639



SI 81-510



SI 145-638



SI 132-619



SI 86-524



SI 106-578

第81·86·98·106·132·145号住居跡出土土器

PL30



SI 86-525



SI 86-527



SI 86-526



SI 86-528



SI 130-612



SI 79-476

第79·86·130号住居跡出土土器



SI 81-512



SI 79-480



SI 79-477



SI 86-534



SI 80-499



SI 101-570

第79·80·81·86·101号住居跡出土土器

PL32



SI 144-634



SI 147-651



SI 86-540



SI 86-539



SI 79-482



SI 93-551

第79·86·93·144·147号住居跡出土土器



SI 101-576



SI 147-658



SI 80-504



SI 97-557



SI 119-587



SI 119-586



SI 80-498



SI 80-494



SI 79-481

第79・80・97・101・119・147号住居跡出土土器

PL34



第110·118号住居跡出土土器



SI 111-697



SI 118-730



SI 118-726



SI 118-722



SI 118-725



SI 118-723



SI 121-752



SI 118-724



SI 111-695



SI 121-754

第111·118·121号住居跡出土土器

PL36



SI 121-759



SI 78-668



SI 78-674



SI 107-678



SI 78-673



SI 110-686



SI 78-671



SI 78-672



SI 93-550

第78·93·107·110·121号住居跡出土土器



SI 111-694



SI 109-681



SI 121-750



SI 118-698



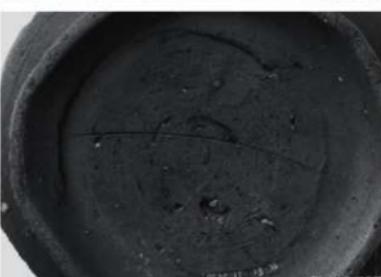
SI 118-719



SI 118-720

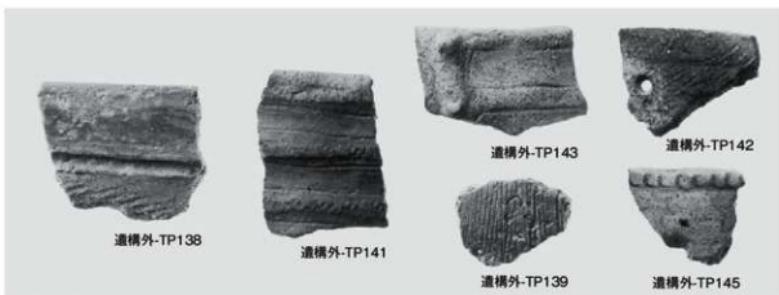


SI 118-706

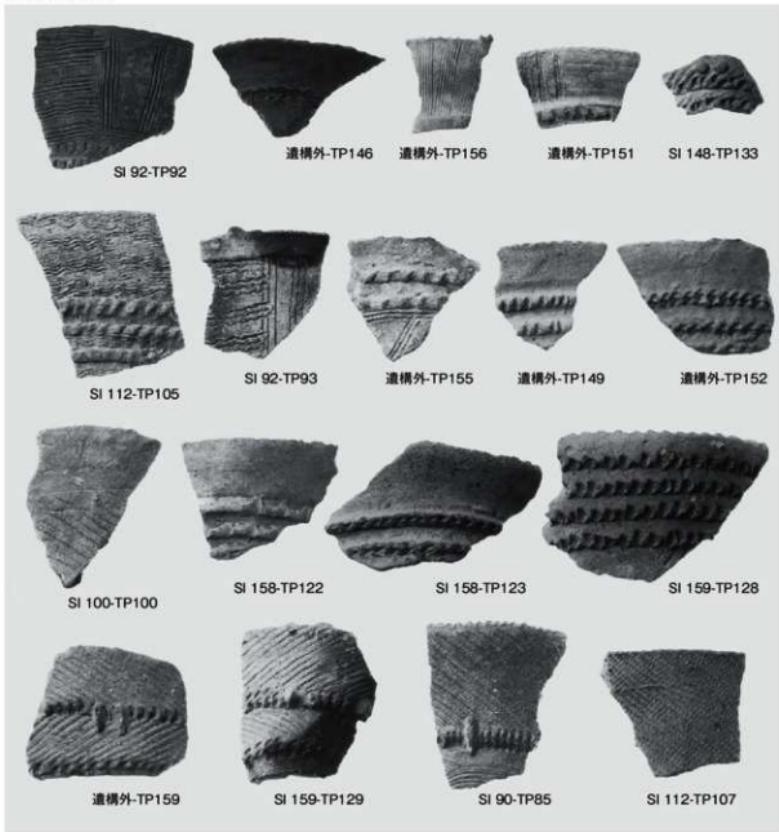


SI 118-727

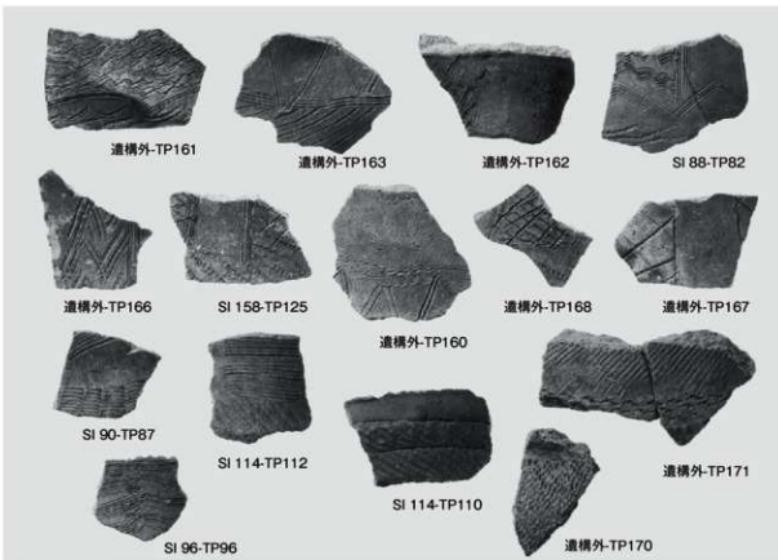
第109·111·118·121号住居跡出土土器



出土縄文土器



出土弥生土器



出土弥生土器



弥生時代住居跡、造構外出土紡錘車



SI 90-DP51



SI 156-DP69



造構外-DP150



SI 88-DP48



造構外-DP151



SI 96-DP60



造構外-DP147



SI 159-DP70



SI 159-DP71



造構外-DP149



造構外-DP152



SI 90-DP50



造構外-DP148



SI 81-DP79



SI 121-Q118





弥生～古墳時代住居跡出土球状土錘



SI 90-DP54



SI 110-DP141



SI 93-DP94



SI 144-DP134

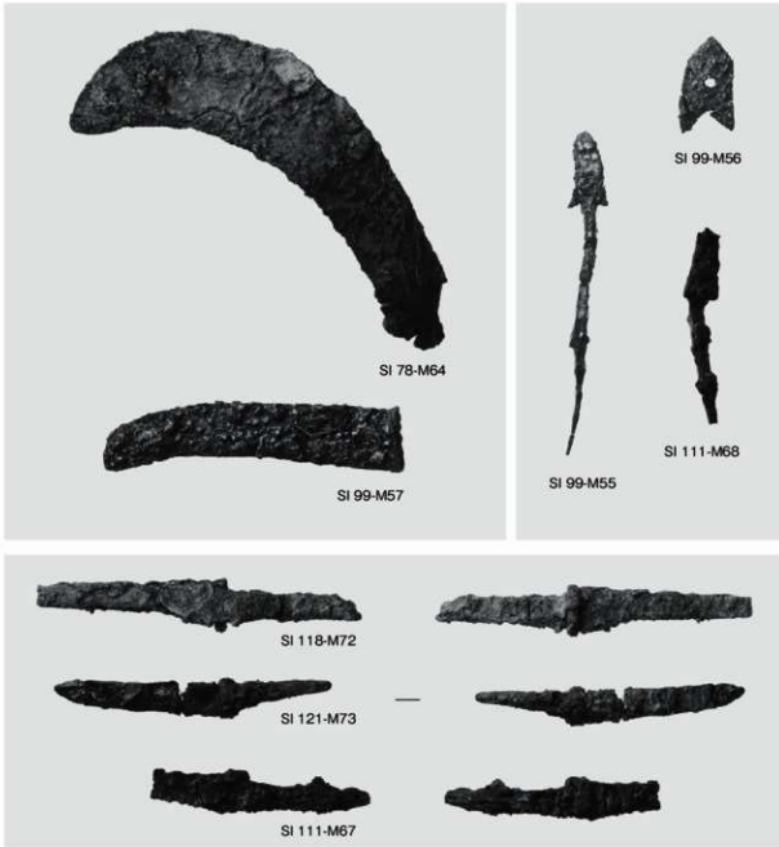


出土土製品（球状土錘・不明土製品・支脚）



住居跡・遺構外出土石器・石製品（石鏟・勾玉・磨製石斧・敲石・砥石）

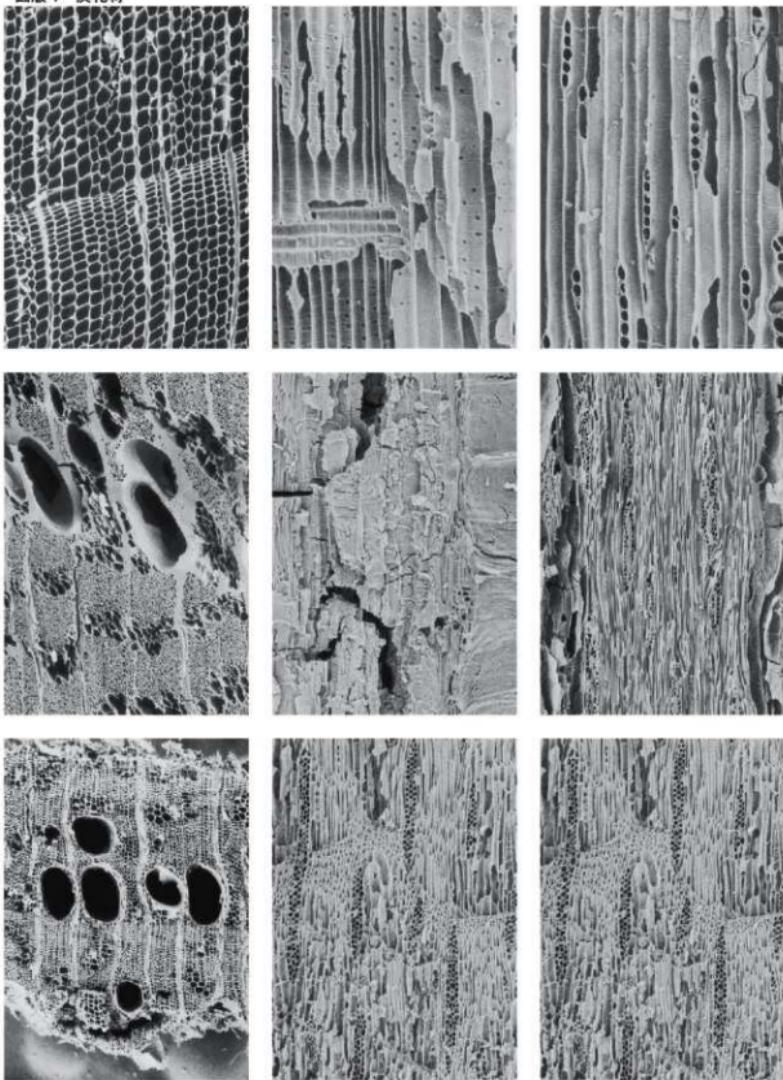
SI 128-Q128 SI 112-093 SI 92-Q85



SI 110-M66 SI 78-M65
住居跡・墓坑出土鐵製品・銅製品（鎌・鑿・刀子・鐵斧・丸柄・分銅）

第22号墓坑-M80

図版1 炭化材



1. カヤ(第143号住居跡③)
 2. ケヤキ(第156号住居跡①)
 3. キハダ(第141号住居跡③)
 a: 木口, b: 横目, c: 板目

■ 200 μm :2・3a
 ■ 200 μm :1a,2・3b,c
 ■ 100 μm :1b,c

茨城県教育財團文化財調査報告第257集

大戸下郷遺跡2

主要地方道内原塙崎線道路改良工事地内
埋蔵文化財調査報告書 IV

平成18(2006)年3月20日印刷

平成18(2006)年3月24日発行

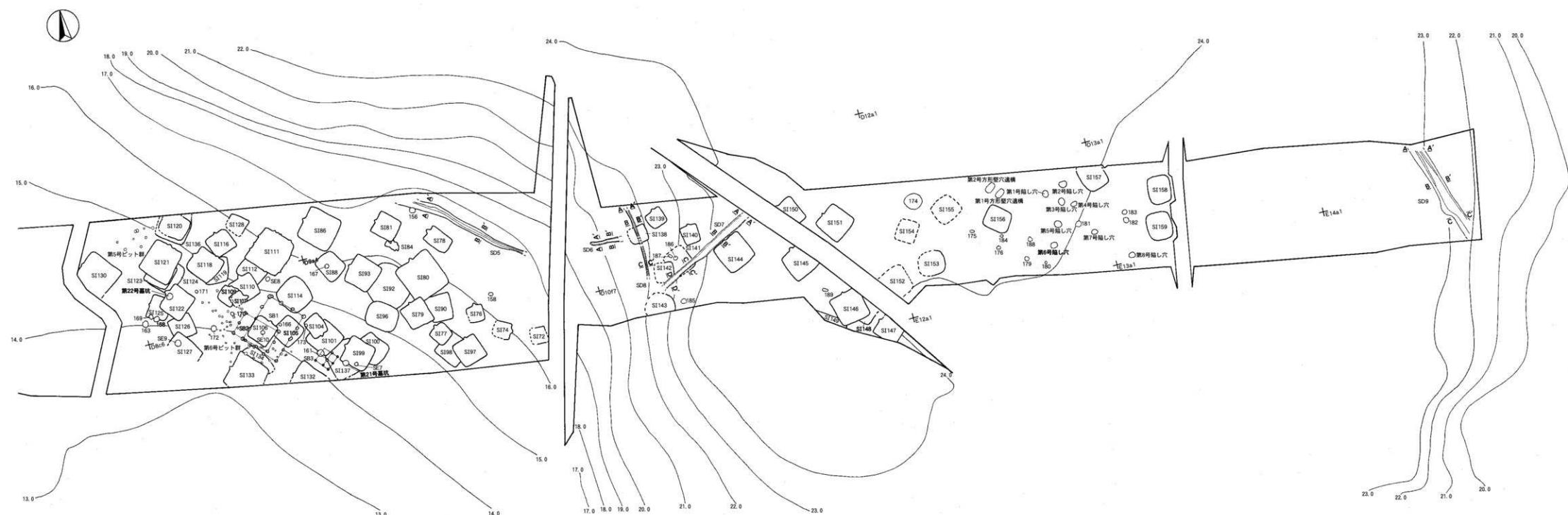
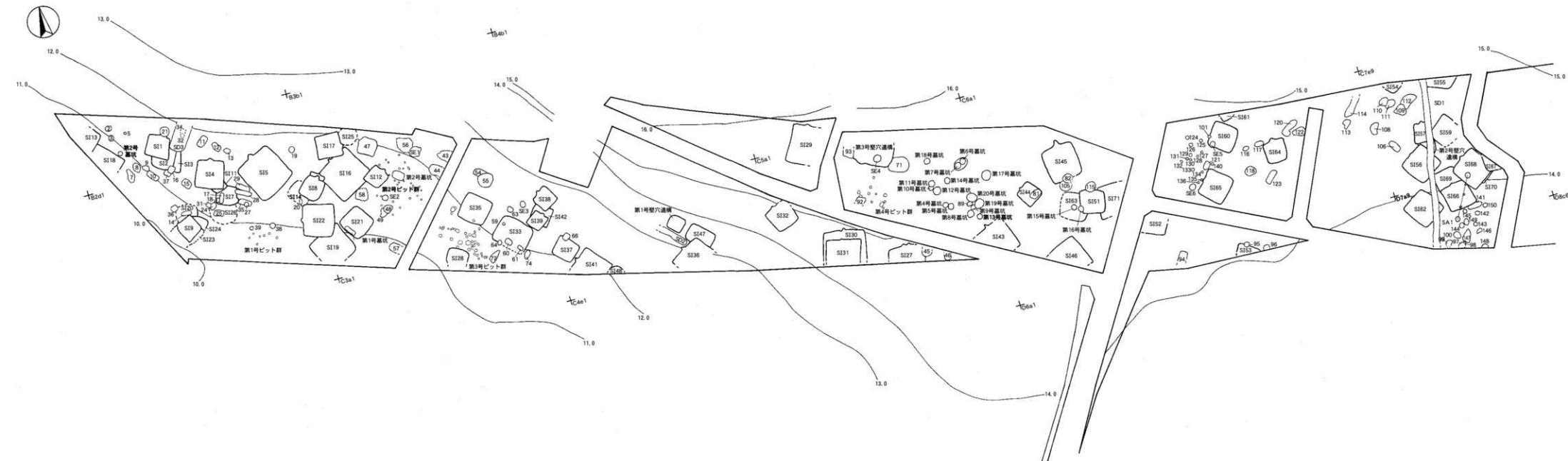
発行 財団法人 茨城県教育財團
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 山三印刷株式会社
〒311-4153 水戸市河和田町4433の33
TEL 029-252-8481

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第257集

大戸下郷遺跡 2 遺構全体図



付図 茨城県教育財団文化財調査報告書第257集 大戸下郷遺跡遺構全体図

0 40m